R281.03
082
R281.03-082
1200500766497

9
P
281.03
O82

文學博士 小西重直序
日本兒童社會學會々長 尾高豐作編

教育人名大辭典

刀江書院刊

帝國圖書館藏

263
426

序文

昔は東洋殊に日本に於ては學問と言はゞ人格修養のことであつた。教育も固より人格修養が根本で、學問と教育と人格の修養とは殆んど同一であつたのである。近代に至つては學問の理論も進み、また多様に岐れ、學問は學問としての獨自の領域を有するやうになつて來た。また教育に於ても、其の教育に使用する材料が多様になつた爲めに、動もすれば人格修養といふ軌道から離れんとする傾向さへも生じて來た。併し、學問をなすにも若し人格の根柢がしつかりしてゐなかつたら確實な學問研究は覺束ない。情意の修練の乏しい人には立派な知能が發達することは出來ない。教育に於ても眞實な立派な知であるならば、必ず情意を根底とする人格に基礎を持たねばならない。人格にとつて基礎付けられたる知識は、所謂偏知の弊を指彈さるゝ所の知ではない。夫れは眞實の知である。

小學校の教科書中に現れて居る人物の中には、我々の憎むべきものもあるが、憎むべきを憎み、景仰すべきを景仰するには、眞の人の傳記を知る必要がある。兒童少年は人格者として景仰すべき人の行蹟を偲び、そこに感激的な體驗をなす所に、彼等の感激性其のも

のが培はれるであらう。蓋し偉大な人格者ほど眞の內面に感激の泉が湧き溢れて居る。感激のない所には價値ある事業は起り得ない。偉大なる人の傳記に浸ることは、實に人間の價値生活の充實其のものであると言つてもよい。

教育上久しく渇望されてゐた教科書中の人物辭典が、尾高豐作氏の手によつて編纂され出版さるゝことになつたのは、實に斯道の爲め慶賀に値することである。私はこれによつて第二の國民が人格涵養に資することが多からんことを期待して已まないものである。彼等の感激の糸口が將來の日本を發展さすの原動力となるならば、本書出版の意義も實に深大なりといふべきである。

昭和十一年九月

洛北塔の段

小西重直

凡例

一 本書は文部省の編纂にかゝる現行の國定教科書に現れた一千有餘の人物の名號・系統・事蹟・逸話・美談などを記述し、人格教育の資料に供する爲に編纂したものである。故に教育者諸彦は、國定教科書に現れた一人物の斷片的な行爲を教材として取扱はれる場合に於ても、必ず本書を披見して、豫め其の人物の全貌に關する知識を得て後にこれをなし、取扱の完全を期せられんことを切望する。

一 本書の人物は五十音順・寫音順に排列したが、人物の姓名の振假名は、國定教科書に從ひ、すべて正しい字音假名遣を示した。但し歐米人の名は寫音假名遣を用ゐ、片假名を以て示したのである。

一 本書の人物の事蹟の記述に精疎があるのは、大體に於て國定教科書の教材の精疎に準じた爲であるが、併し教材探求の資料として相當に精しく記述したものもある。單なる傳記の外に其の人物の關係した事件をも併せ記載して居るので、一人物の項を披見すれば、それに關聯せる總ての必要事件がわかるやうになつて居る。これは手早く教材を得るのに便利なやうに計つた爲である。

一 本書はなるべく根本史料によつて編纂したけれども、既に多くの先輩の研究によつて定說となり、兒童教育の教材として江湖に許容されたものは、其のまゝ其の說を撮要したのである。併し念の爲に主要な參考書を揭げると次の通りである。

先づ歷代の天皇の御聖蹟の記述に關しては、主として大日本史を參考とし、これに古事記・日本書紀・本朝皇胤紹運錄・古事類苑・野史・大日本通史・陵墓一覽などを參照したのである。

一 神代から奈良時代に至る人物及び事件は、主として古事記・日本書紀・新撰姓氏錄・續日本紀・續日本後紀・文德實錄

・氏族志・古語拾遺・大日本史・大日本通史・大日本歴史集成・公卿補任・神祇志料・神宮大綱・日本一宮記・古事類苑・皇代記・輔世宿禰記・房總志料・日本武東征地理考・上宮聖德法王帝說・日本文學史・萬葉古義・古今和歌集・歴代勅撰和歌考・水鏡・元享釋書・扶桑名畫傳・古畫備考・稿本日本帝國美術略史・大日本繪畫史・工藝志料などを參考として記述したのである。

一　平安時代の人物及び事件は、主として大日本史・大日本通史・大日本歴史集成・新撰姓氏錄・氏族志・尊卑分脈・本朝皇胤紹運錄・皇后略傳・女院小傳・公卿補任・藤原氏系譜・榮花物語・古今著聞集・古事談・愚管抄・後拾遺集・大鏡・水鏡・菅家文章・後三年從軍記・陸奥話記・平治物語・源平盛衰記・吾妻鏡・本朝通鑑・皇年代略記・扶桑略記・神皇正統記・近江國輿地誌略・將門記・日本文學史・中古歌仙三十六人傳・百人一首一夕話・東國高僧傳・元享釋書・扶桑名畫傳・古畫備考・稿本日本帝國美術略史・大日本繪畫史・日本工業史などに據つて記述したのである。

一　鎌倉室町時代の人物及び事件は、主として大日本史・大日本史料・國史眼・讀史餘論・歴史談其折々・大日本歴史集成・東洋通史・東洋歴史集成・平家物語・源平盛衰記・野史・後鑑・武鑑・吾妻鏡・明月記・氏族志・本朝皇胤紹運錄・公卿補任・尊卑分脈・女院小傳・皇后略傳・合類大節用・言經卿記・弘長記・太平記・參考太平記・梅松論・花宮三代記・寶簡集・西征將軍宮譜・增鏡・徒然草・玉葉・八幡愚童訓・豫章記・建内記・承久記・松蔭夜話・五代帝王物語・北山殿行幸記・在盛卿記・椿葉記・東山御文庫文書・藤涼軒日錄・三條西實隆記・遺老物語・老人雜話・看聞日記・應仁記・北條記・今川記・下野國誌・川越記・甲越事蹟考・甲斐國誌・かまくら・鎌倉勝覽考・山城名勝志・雍州府志・平安通志・高野山文書・高野春秋・南山巡狩錄・日本文學史・金澤文庫由來記・連歌及び連歌史・東國高僧傳・元享釋書・日本佛教史綱・佛教各宗綱要・本化別頭佛祖統記・龍門夜話・扶桑名畫傳・本朝畫史・古畫備考・大日本繪畫史・贈位功臣言行錄

・官國幣社一覽などに據つて記述したのである。

一　安土桃山時代の人物及び事件は、主として野史・公卿補任・華族諸家傳・信長記・太閤記・豐鑑・後鑑・大日本通史・大日本歴史集成・藩翰譜・淺野文書・武術流祖錄・日本戰史・加賀藩史稿・仙臺史傳・新撰美濃志・武家事記・三河物語・常山紀談・多聞院日記・宗牧東國紀行・日本佛教史綱・耶蘇會年報・天正少年使節記・日葡交通・扶桑名畫傳・古畫備考・大日本繪畫史・日本工業史・書畫便覽・陶器考・東西偉人言行錄などを參考として記述したのである。

一　江戸時代の人物及び事件は、主として德川實紀・德川太平記・德川十五代史・野史・大日本通史・大日本歴史集成・大日本史料・親王系圖・松平家譜・藩翰譜・折焚柴の記・德川加除封錄・事實文編・槐記・慶安小史・承元遺事・水月名鑒・續々皇朝史略・武術流祖錄・武藝小傳・日本戰史・赤穗義人錄・赤穗落穗集・江戸會誌・日本商業史・幕府時代の長崎・平安通志・京華要誌・新篇常陸國誌・修史始末・近世叢語・古學小傳・玉勝間・近世三十六家集略傳・續諸家人物誌・儒學源流・先哲叢談・近世大儒列傳・塙氏和學所由來・聖堂沿革考・儒職家系・近世諸儒名姓行狀及び墓賢錄・近代名家著述目錄・群書一覽・洋學大家列傳・蘭學階梯・蘭學事始・心學の傳說・千代田大奥・墓所集覽・德川幕府吉利支丹宗門改考・原城紀事・日本西教史・日本文學史・列傳體小說史・淨瑠璃史・俳家人名錄・俳諧年表・俳家奇人談・本朝文選・ふる茶袋・近世奇跡考・近世逸人畫史・日本南畫史・扶桑名畫傳・古畫備考・大日本繪畫史・名人忌辰錄・浮世繪類考・浮世畫人傳・浮世繪百家傳・工藝遺芳・工藝志料・日本工業史・日本幽囚實記・潭海・ペルリ提督日本遠征記・文明東漸史・慷慨家列傳・懷舊記事・海國兵談・外交始末・外交史稿・開國起原・幕府衰亡論・元治夢物語・幕末小史・維新史料・贈位功臣言行錄及び個人の傳記などを參考として記述したのである。

一　東京時代の人物及び事件は、主として明治歴史・明治政史・開國五十年史・大日本通史・大日本歴史集成・維新史料・

己亥叢說・戊辰始末・西南征討史略・東洋通史・東洋歷史集成・清朝通史・日清戰史・日露戰史・世界大戰史・外交事情・華族譜・親王御系圖・法令全書・日本商業史・日本工業史・大日本繪畫史・明治の文豪・貴位功臣言行錄・東西偉人言行錄及び個人の傳記などを參考として記述したのである。

一　前記の外の參考書としては國定教科書教師用書・中等學校教科書及び教授參考書があり、編纂された辭書類では大日本人名辭書・國史大辭典・學習便覽國史辭典・逸話美談辭典・教育大辭書・哲學大辭書及び國史大系などである。雜誌類では史學雜誌・歷史教育・傳記・人情地理の類である。

一　異國人の記述に關しては、主として西洋全史・參考西洋史・東洋通史・東洋歷史集成・支那人名辭典・西洋美術史・伊太利繪畫史要・宗教名畫集・通俗繪畫百集・英文學史及び個人の傳記などを參考としたのである。

一　本書の爲に序文を賜はつた小西重直先生に對して謹んで感謝の意を表する。また編纂に當つて材料と助力と注意とを與へられた日本兒童美育會諸彥に對して謝意を表する。

昭和十一年九月

編者識

あ

亞歐堂田善……一
青木昆陽……一
青木新兵衛……二
青砥藤綱……二
赤松則村……三
赤松滿祐……三
惡源太義平……三
明智光秀……三
淺井　忠……四
阿佐太子……五
淺野長矩……五
淺野幸長……六
足利氏滿……七
足利貞氏……七
足利成氏……七
足利尊氏……七
足利直義……一〇
足利政知……一〇
足利滿兼……一一
足利持氏……一一
足利基氏……一二
足利義昭……一三
足利義詮……一三
足利義量……一四
足利義勝……一五
足利義澄……一五
足利義稙……一五
足利義維……一六
足利義輝……一六
足利義教……一七
足利義晴……一七
足利義尙……一八
足利義榮……一八
足利義政……一八
足利義視……二〇
足利義滿……二〇
足利義持……二一
足利義康……二二
足代弘訓……二二
足立右馬允……二三
阿知使主……二三
阿倉比邏夫……二三
阿閉掃部……二四
阿部忠秋……二四
安倍貞任……二四
阿倍仲麻呂……二五
阿倍比羅夫……二六
安倍宗任……二六
安倍頼時……二六
尼子經久……二七
尼子晴久……二八
天照大神……二八
天鈿女命……二九
天草四郎……二九
天野則景……二九
天忍穗耳尊……二九
天兒屋根命……二九
新井白石……二九
有栖川宮熾仁親王……三一
有馬晴信……三三
アレクサンドル……三四
晏　嬰……三五
安康天皇……三五
安閑天皇……三五
アングル……三五
安藤信正……三六
安藤廣重……三六
安德天皇……三七
安寧天皇……三七
安閑倉六……三七

い・ゐ

井伊直弼……三八
池　大雅……三九
石井十次……四〇
石田梅巖……四一
石田三成……四一
五十鈴媛命……四三
伊勢大輔……四三
伊勢屋吉兵衛……四三
イソップ……四四
板垣退助……四四
板倉重昌……四五
板倉重宗……四六
一條兼良……四六
一條天皇……四七
市邊押磐皇子……四七
伊藤右近……四七
伊藤小左衛門……四八
伊藤仁齋……四九
伊藤東涯……五一
伊藤博文……五一
伊東祐亨……五三
懿德天皇……五四
井上　馨……五四
井上　毅……五五
井上でん……五五
稻生恒軒……五六
稻生若水……五六
伊能忠敬……五六
稻生はる……五七
猪俣小平六……五七
猪山作之丞……五七
今川氏眞……五七
今川義元……五七
岩倉具視……五八
岩佐又兵衛……五九
允恭天皇……六〇
饒　元……六〇

う

ウキッテ……六一

ウイリヤム＝アダムス……六三
上杉顕定……六三
上杉景勝……六四
上杉謙信（輝虎）……六四
上杉定正……六四
上杉重顕……六五
上杉重房……六五
上杉朝定……六五
上杉憲顕……六六
上杉憲實……六六
上杉憲房……六七
上杉憲政……六七
上杉晴景……六八
上杉輝山（治憲）……六八
上杉剛重……六八
上田萬年……六九
ヴェラスケス……六九
ウェリントン……六九
鵜飼草餐不合尊……六九
宇喜多一蕙……七〇
宇佐美實政……七〇
牛島謙斎……七〇
牛若丸……七〇
歌川國芳……七〇
宇田川玄随……七一
宇多天皇……七一
宇斐王……七一
梅田雲濱……七二
浦島太郎……七二
瓜生岩……七二
運慶……七三

え・ゑ

榮西……七三
江川太郎左衛門……七四
惠心僧都……七五
エチソン……七五
江藤新平……七六
エドワード……七六
榎本武揚……七六
エル＝グレコ……七七
袁世凱……七七
エンマヌエル……七八
エンミツヒ……七八
圓融天皇……七八

お・を

大石良雄……七八
大石良金……八〇
大内義興……八〇
大内義隆……八二
大内義弘……八三
大江匡房……八三
大江廣元……八四
大岡忠相……八四
正親町天皇……八五
大國主命……八五
大久保利通……八六
大隈重信……八七
大鹽平八郎……八八
應神天皇……八八
小碓尊……八九
太田道灌（持資）……八九
大槻磐水（玄澤）……九〇
大伴家持……九〇
大友義鎮（宗麟）……九〇
太安麻呂……九三
大庭景親……九三
大彦命……九三
意富富杼王……九四
大町芳衡（桂月）……九四
大村純忠……九四
大村益次郎……九四
大山巌……九五
大和田建樹……九六
丘淺次郎……九六
岡崎正宗……九六
岡島石樂……九六
緒方洪庵……九七
尾形光琳……九七
尾形周平……九八
岡田爲恭……九八
岡部六彌太……九九
荻生徂徠……九九
大給恆……一〇〇
押坂彦人大兄皇子……一〇〇
尾崎紅葉……一〇〇
織田信雄……一〇〇
織田信孝……一〇一
織田信忠……一〇一
織田信長……一〇三
織田信秀……一〇四
織田秀信……一〇五
弟橘媛……一〇五
小野妹子……一〇五
小野篁……一〇六
小野道風……一〇七

か・くわ

開化天皇……一〇七
貝原益軒……一〇七
柿右衛門……一〇八
柿本人麻呂……一〇八
花山天皇……一〇九
賀集珉平……一〇九
春日局……一一〇
和宮……一一一
糟屋武則……一一一
片桐且元……一一一
片桐小八郎大夫……一一三
梶原景季……一一三
上總介八郎……一一三
葛飾北齋……一一三
勝安芳……一一四

桂太郎……一一五
葛原親王……一一五
加藤景正……一一五
加藤清正……一一六
加藤金兵衛……一一七
加藤友三郎……一一七
加藤弘之……一一八
加藤嘉明……一一八
金子十郎……一一八
懐良親王……一一八
狩野永徳……一一九
狩野山樂……一一〇
狩野探幽……一一〇
狩野常信……一一三
狩野芳崖……一一三
狩野正信……一一四
狩野元信……一一五
鎌倉權五郎景正……一一六
鎌田兵衛……一一六
上毛野形名……一一七
鴨山天皇……一一七
蒲生君平……一一七
賀茂眞淵……一一八
カラカラ……一一九
川上貞師……一一九
川端玉章……一一〇
川村清雄……一一〇
河村瑞賢……一一〇
閑院宮載仁親王……一一一
韓流……一一一
鑑國皇帝……一一一
鑑眞……一一一
桓武天皇……一一三

き

木口小平……一一三
菊池武重……一一四
木下藤吉郎……一一四
吉備眞備……一一六
菊池武敏……一一五
菊池武房……一一五
菊池武光……一一六
菊池時隆……一一七
菊池容齋……一一七
喜多川歌麿……一一八
北川宮能久親王……一一九
北畠顕家……一二〇
北畠顕信……一二〇
北畠顕能……一二一
北畠親房……一二一
吉川元春……一二二
吉祥天……一二二
木戸孝允……一二四
木下順庵……一二四
紀貫之……一二五
吉備津彦命……一二六
木下藤吉郎……一二六
吉備眞備……一二六
木村重成……一二七
行基……一二八
曲亭馬琴……一二八
清原武則……一二九
清原武衡……一二〇
吉良義央……一二〇
基督……一二一
金玉均……一二一
今上天皇……一二一
金原明善……一二二
欽明天皇……一二二

く

空海……一二六
クールベー……一二七
公暁……一二七
草壁皇子……一二八
楠木正成……一二八
楠木正季……一二〇
楠木正行……一二〇
楠木正時……一二一
忽必烈……一二一
熊谷直實……一二二
熊澤蕃山……一二四
栗田定之丞……一二五
栗林文兵衛……一二六
來原良蔵……一二七
グレー……一二七
グレース＝ダーリング……一二七
黒田清隆……一二七
黒田清輝……一二八
クロパトキン……一二八
鍬形蕙齋……一二九

け

慶光院清顧……一二七
景行天皇……一二七
繼體天皇……一二七
契沖……一二七
元正天皇……一二七
ゲンスボロー……一二七
顕宗天皇……一二七
元明天皇……一二七
建禮門院……一二七

こ・かう・くわう

後一條天皇……一二四
小出大助……一二四
小出榮……一二四
孝安天皇……一二四
光格天皇……一二四
ゴーガン……一二五
皇極天皇……一二五
孝謙天皇……一二六
孝元天皇……一二六
光孝天皇……一二六

光嚴院……一七七
孔　子……一七七
洪秀全……一七七
孝昭天皇……一七七
勾　踐……一七七
後宇多天皇……一七九
幸田露伴(成行)一七九
孝德天皇……一七九
光仁天皇……一八〇
幸野楳嶺……一八〇
河野通有……一八一
高　師直……一八一
弘文天皇……一八一
弘法大師……一八一
光明院……一八二
光明皇后……一八二
孝明天皇……一八二
孝靈天皇……一八二
後圓融院……一八二
古河公方……一八六
後柏原天皇……一八六
後鳥山天皇……一八六
後光嚴院……一八六
後光明天皇……一八七
後小松天皇……一八七
後西天皇……一八八
後嵯峨天皇……一八八
後櫻町天皇……一八九
後三條天皇……一八九
小式部内侍……一八九
兒島高德……一八九
小島法師……一九一
後白河天皇……一九二
後朱雀天皇……一九四
亘勢金岡……一九五
後醍醐天皇……一九五
後土御門天皇……一九八
後藤象二郎……一九九
後藤兵衛……一九九
事代主命……一九九
後鳥羽天皇……二〇〇
後奈良天皇……二〇一
小西行長……二〇二
後二條天皇……二〇二
近衛天皇……二〇二
後花園天皇……二〇三
小早川隆景……二〇四
小林一茶……二〇四
後深草天皇……二〇五
後伏見天皇……二〇六
吳　鳳……二〇七
後堀河天皇……二〇七
小松宮彰仁親王二〇七
狛　伊勢……二〇八
後水尾天皇……二〇八
後村上天皇……二〇八
小村壽太郎……二〇九
後桃園天皇……二〇九
小山正太郎……二〇九
後陽成天皇……二一〇
後冷泉天皇……二一〇
惟康親王……二一〇
コ　ロ　ー……二一一
コロンブス……二一一
コンスタンチン二一二
コンステブル……二一二
近藤重藏(守重)二一二

さ

サージェント……二一二
西園寺公望……二一三
西行法師……二一四
西鄕隆盛……二一五
西鄕從道……二一八
最　澄……二一九
齊藤龍興……二二〇
齊藤別當……二二〇
最明寺入道……二二一
齊明天皇……二二一
酒井忠清……二二一
嵯峨天皇……二二一
坂上田村麿呂……二二二
相模太郎……二二二
坂木龍馬……二二二
佐久間勉……二二四
佐久間盛政……二二五
櫻井忠温……二二五
櫻町天皇……二二六
佐々木源三……二二六
佐々木高綱……二二六
佐々木義賢……二二七
佐々成政……二二七
眞純親王……二二八
眞成親王……二二八
佐藤繼信……二二八
佐藤信淵……二二九
佐藤信季……二二九
佐野源左衛門常世……二二九
佐野常民……二二九
ザビエル……二二九
猿田彦……二二一
三條實美……二二一
三條天皇……二二二
三條西實隆……二二二

し・ち

ジェンナー……二二二
施基皇子……二二二
重富平左衛門……二二四
重仁親王……二二四
始皇帝……二二四
四道將軍……二二五
四條天皇……二二五
十返舍一九……二二五

司馬光……二二六
司馬江漢……二二七
柴田勝家……二二七
柴田勝政……二二九
柴野栗山……二二九
島津齊彬……二二九
島津久光……二二九
島津義久……二二九
島津義弘……二二一
清水宗治……二二二
シャーヴァンヌ二二二
釋迦牟尼……二二二
朱　舜　水……二二四
ジュノー……二二四
ジュピター……二二四
俊　寛……二二五
順德天皇……二二五
淳和天皇……二二六
淳仁天皇……二二六
昭憲皇太后……二二六
稱光天皇……二二七
定　朝……二二七
上東門院……二二八
聖德太子……二二八
聖德太子妃……二二八
稱德天皇……二二八
少貳頼尙……二二一
聖武天皇……二二一
諸葛孔明……二二二
舒明天皇……二二二
白河天皇……二二二
神功皇后……二二二
神武天皇……二二二
新見正興……二二四
新羅三郎義光……二二六
親　鸞……二二七

す

推古天皇……二二八
綏靖天皇……二二八
垂仁天皇……二二八
末次平藏……二二九
陶　晴賢……二二九
末吉孫左衛門……二二〇
菅原道眞……二二〇
杉浦重剛……二二〇
杉　龍子……二二〇
杉田玄白……二二〇
杉野孫七……二二〇
杉村廣太郎……二二四
杉百合之助……二二四
少彥名……二二四
典仁親王……二二五
崇光院……二二五
朱雀天皇……二二六
素盞嗚尊……二二六
崇峻天皇……二二六
崇神天皇……二二八
蓮田淳介……二二九
ステッセル……二二九
須藤刑部……二二〇
崇德天皇……二二〇
炭太祇……二二〇
角倉了以……二二一

せ

清少納言……二二一
成務天皇……二二二
清寧天皇……二二二
清和天皇……二二三
セガンチニ……二二三
關　次郎……二二三
セザンヌ……二二三
雪　舟……二二四
宣化天皇……二二五
宣　宗……二二六

そ

宗祇法師……二二六
曾　國藩……二二七
曾　參……二二八
副島種臣……二二八
蘇我石川……二二八
蘇我蘇目……二二八
蘇我入鹿……二二九
蘇我馬子……二二九
蘇我蝦夷……二二九
ソクラテス……二二一
蘇東坡……二二一

た

ダーウィン……二二一
ターナー……二二一
醍醐天皇……二二二
大正天皇……二二四
平敦盛……二二六
平清盛……二二六
平國香……二二八
平維衡……二二八
平維將……二二八
平維盛……二二八
平貞盛……二二九
平重衡……二二九
平重盛……二二〇
平高望……二二一
平忠常……二二二
平忠度……二二二
平忠盛……二二二
平師盛……二二四
平知盛……二二四
平教經……二二四
平教盛……二二五
平將門……二二五
平將平……二二六

平正盛……二九七
平宗盛……二九七
平良文……二九八
平良將……二九八
ダヴィッド……二九八
高井几董……二九九
高倉天皇……二九九
高崎正風……二九九
高島四郎太夫……三〇一
高杉晋作……三〇二
高田善右衛門……三〇三
高田屋嘉兵衛……三〇三
尊良親王……三〇四
高野長英……三〇五
高潤清……三〇七
高松凌雲……三〇七
高見王……三〇七
高向玄理……三〇七
高村光雲……三〇七
高山彦九郎……三〇八
寶井其角……三〇八
滝鶴臺……三〇九
滝川一益……三〇九
濯澤興繁……三一〇
武内宿禰……三一〇
竹崎季長……三一一
竹田出雲……三一一
武田勝頼……三一一
武田信玄(晴信)……三一三
武田信虎……三一四
武淳川別命……三一四
竹内式部……三一四
建御雷命……三一五
田崎草雲……三一五
手力男命……三一六
橘曙覽……三一六
立花北枝……三一六
立花宗茂……三一六
伊達政宗……三一七
田中義一……三一八
田中訥言……三一八
谷口藹村……三一八
谷干城……三一九
谷文晁……三二〇
谷村計介……三二一
丹波道主命……三二二
田沼意次……三二二
田能村竹田……三二二
田安宗武……三二三
達磨……三二四
俵屋宗達……三二四

ち

近松門左衛門……三二四
チシヤン……三二五
智證大師……三二五
持統天皇……三二六
茅渟王……三二六
茶々丸……三二六
仲哀天皇……三二七
仲恭天皇……三二七
デューラー……三二七
長慶天皇……三二八
張弘範……三二八
長曾我部元親……三二八
張世傑……三二九
ジョット……三二九
鐵西八郎……三二九
チントレット……三二九

つ

月岡芳年……三二九
調伊企儺……三三〇
鑓宮明仁親王……三三一
土御門天皇……三三一
恒良親王……三三一
坪内逍遙(雄藏)……三三二
鶴見祐輔……三三三

て

丁汝昌……三三三
鄭成功……三三三
鐵眼……三三四
寺内正毅……三三四
寺田寅彦……三三五
天海……三三五
傳教大師……三三六
天智天皇……三三六
天武天皇……三三六

と・たう

土井利勝……三三七
道義……三三七
道元……三三八
東郷平八郎……三三八
東福門院……三三九
徳川家定……三四〇
徳川家重……三四〇
徳川家綱……三四一
徳川家綱……三四一
徳川家齊……三四一
徳川家宣……三四二
徳川家治……三四二
徳川家光……三四二
徳川家茂……三四三
徳川家康……三四七
徳川家慶……三五一
徳川綱條……三五二
徳川綱重……三五二
徳川綱吉……三五三
徳川齊昭……三五四
徳川齊順……三五五
徳川治濟……三五六
徳川秀忠……三五六

徳川光圀……三五六
徳川光貞……三五七
徳川宗武……三五九
徳川宗尹……三五九
徳川義直……三五九
徳川慶喜……三六〇
徳川吉宗……三六一
徳川頼重……三六二
徳川頼宣……三六二
徳川頼房……三六三
徳富猪一郎……三六三
徳富健次郎……三六三
土佐光起……三六三
土佐光信……三六四
舍人親王……三六五
鳥羽僧正……三六五
鳥羽天皇……三六六
具平親王……三六六
豐受大神……三六七
豐臣秀次……三六七
豐臣秀吉……三六八
豐臣秀頼……三七三
豐仁親王……三七三
ドラクロア……三七四
鳥居元忠……三七四
鳥佛師……三七四
曇徴……三七五

な

ナイチンゲール……三七五
内藤丈草……三七六
直仁親王……三七六
中江藤樹……三七七
長尾景虎……三七八
長尾景景……三七八
長尾影虎……三七八
中川清秀……三七九
中島信行……三七九
長髓彦……三七九
中臣鎌足……三七九
中大兄皇子……三七九
中御門天皇……三七九
中村正直……三八〇
那須餘一……三八〇
夏目金之助……三八〇
鍋島直正……三八一
ナポレオン……三八一
成良親王……三八二
名和長年……三八二
名和靖……三八三

に

新島襄……三八四
二位尼……三八五
二階堂貞藤……三八五
饒速日命……三八五
ニコロ＝ボーロ……三八六
二條天皇……三八六
日蓮……三八六
新田義貞……三八七
新田義重……三八八
新田義重……三八九
新田義季……三八九
新田朝氏……三八九
新渡戸稲造……三九一
瓊瓊杵尊……三九一
二宮尊德……三九一
ニュートン……三九二
仁王……三九二
丹羽長秀……三九三
仁孝天皇……三九四
仁賢天皇……三九四
仁德天皇……三九四
仁明天皇……三九五

ね

ネルソン……三九六

の

能因……三九六
乃木希典……三九七
野口英世……三九八
誠仁親王……三九八
野矢常方……三九九
義良親王……三九九

は

バーンズ＝ジョンス……三九九
芳賀一晶……三九九
芳賀矢一……三九九
伯夷叔齊……四〇〇
羽柴秀吉……四〇〇
橋本雅邦……四〇〇
橋本左内……四〇一
長谷川辰之助……四〇二
長谷川與五左衛門……四〇二
支倉常長……四〇三
畠山重忠……四〇三
波多野次郎……四〇三
八幡太郎……四〇四
服部嵐雪……四〇四
馬頭觀世音……四〇四
花園天皇……四〇四
花房義質……四〇五
埴保己一……四〇五
濱田彌兵衛……四〇六
林子平……四〇七
林道春(羅山)……四〇八
林信篤(鳳岡)……四〇九
原田直次郎……四一〇
ハリス……四一〇
ハルス……四一一
ヴァン＝アイク……四一一
盤珪禪師……四一一
ヴァン＝ゴーグ……四一二

反正天皇……四二
ヴァン＝ダイク……四二
伴　信友……四二
范　蠡……四二

ひ

東山天皇……四二
ビクトリア……四二
彦　坐　王……四四
彦主人王……四四
彦火火出見尊……四四
久明親王……四四
菱川師宣……四四
毘沙門天……四五
ビスマーク……四五
敏達天皇……四六
左甚五郎……四六
平田篤胤……四七
平手政秀……四八
平野長泰……四八
平山武者所……四八
廣瀬武夫……四八
廣瀬淡窓……四九
裕仁親王……四九

ふ

ブーサン……四九
フェルヂナンド＝マゼラン……四九
フォンタネジー……四九
溥　儀……四〇
福澤諭吉……四一
福島正則……四一
福田行誠……四三
福　祿　壽……四三
藤岡作太郎……四三
伏見天皇……四三
藤田東湖……四三
藤原鎌足……四四
藤原兼家……四五
藤原清衡……四六
藤原定家……四六
藤原純友……四七
藤原惺窩……四八
藤原隆能……四九
藤原忠實……四九
藤原忠平……四〇
藤原忠通……四〇
藤原時平……四一
藤原俊成……四三
藤原富子……四三
藤原信實……四三
藤原信頼……四三
藤原教通……四四
藤原秀郷……四四
藤原秀衡……四五
藤原房前……四五
藤原鎌房……四六
藤原不比等……四六
藤原冬嗣……四七
藤原道長……四七
藤原通憲……四八
藤原光長……四九
藤原基經……四〇
藤原基衡……四一
藤原師輔……四一
藤原泰衡……四二
藤原行成……四二
藤原良房……四三
藤原能保……四三
藤原頼嗣……四三
藤原頼經……四四
藤原頼長……四四
藤原頼通……四五
太　玉　命……四六
フラ＝アンジェリコ……四六
フランクリン……四六
古橋源六郎……四八
武烈天皇……四八
フレデリック……四九

へ

文　宗……四九
文　天　祥……四九
平城天皇……五〇
ペートーベン……五一
ペートル……五一
ペスタロッチ……五一
ベックリン……五三
ペリー……五三
辨　慶……四五

ほ

ボアソナード……四五
ホイッスラー……四五
法均尼……四五
北條氏綱……四五
北條氏直……四五
北條氏政……四六
北條氏康……四七
北條貞時……四八
北條實時……四八
北條實政……四九
北條早雲……四九
北條高時……五〇
北條時氏……五一
北條時政……五一
北條時宗……五二
北條時行……五三
北條時頼……五四
北條政子……五五
北條政村……五六
北條泰時……五六
北條義時……五七
法　然……五八

火遠理命……四九
ホーガス……四九
朴　泳　孝……四九
穆　宗……四九
保科正之……五〇
細井平洲……五〇
細川勝元……五一
細川頼之……五一
細川持之……五一
細川勝之……五二
ボチチェリ……五三
堀田瑞松……五三
堀田正俊……五三
布　袋……五四
火　照　命……五四
堀河天皇……五四
堀越公方……五四
ホルバイン……五四
本阿彌光悦……五五
本多作左衛門……五五
凡　兆……五六

ま

前田利家……五七
前田綱紀……五七
前野良澤……五八
正岡子規……五八
マサッチョ……五九
益田時貞……五九
増田長盛……五九
マゼラン……六〇
松岡　壽……六〇
松尾芭蕉……六〇
松下加兵衛……六一
松下禪尼……六一
松下之綱……六一
松平容保……六一
松平正綱……六二
松平定信……六二
松平信綱……六六
松平廣忠……六七
松田傳十郎……六八
松永久秀……六八
マネー……六八
マフェオ＝ボーロ……六八
間宮林蔵……六八
松村月溪（臭春）……六九
松本亦太郎……六九
マルコ＝ボーロ……六九
丸橋忠彌……六九
圓山應擧……六九

み

三浦荒次郎……六九
三浦安針……六九
ミケランジェロ……六九
道　臣　命……六九
箕作阮甫……六九
小野忠邦……六九
南淵請安……六九
源　實朝……六九
源　爲朝……六九
源　爲義……六八
源　經基……六九
源　範頼……六九
源　滿仲……七〇
源　義家……七〇
源　義賢……七〇
源　義國……七〇
源　義親……七〇
源　義經……七〇
源　義朝……七〇
源　義仲……七〇
源　義平……七〇
源　義光……七〇
源　頼家……七〇
源　頼朝……七〇
源　頼信……七〇
源　頼政……七〇
源　頼光……七〇
源　頼義……七〇
源　頼基……七〇
都良香……七〇
明正天皇……七〇
三好長慶……七〇
三善康信……七〇
ミレー……七〇
晏……七〇
明　兆……七〇

む

向井去來……七〇
陸奥宗光……七〇
毛利元就……七〇
毛利吉就……七〇
毛利季光……七〇
毛利敬親……七〇
毛利隆元……七〇
毛利輝元……七〇
毛利弘元……七〇
毛利元就……七〇
毛利吉就……七〇
以仁王……七〇
本居宣長……七〇
本松平右衛門……七〇
モネー……七〇
村上義光……七〇
村上義清……七〇

め

明治天皇……七〇

も・まう

紫式部……七〇
室鳩巣……七〇

物部尼興……五〇
物部守屋……五〇
桃園天皇……五一
森　鷗外……五一
守邦親王……五二
守貞親王……五二
護良親王……五二
森　蘭丸……五三
文德天皇……五四
文武天皇……五四

や

柳生宗矩……五四
安松金右衛門……五五
柳澤吉保……五五
山内豐信……五六
山岡鐵太郎……五七
山鹿素行……五七
山縣大貳……五八
山崎闇齋……五九
山崎宗鑑……五九
山下助左衛門……五九
山背大兄王……五九
山田顯義……五一
山田長政……五一
山路正國……五二
日本武尊……五三
倭姫命……五五
山名氏清……五五
山中鹿之助……五四
山名貫義……五四
山名宗全……五四
山部赤人……五五
山本芳翠……五五
ヤン＝ヨーステン……五六

ゆ

由井正雪……五六
結城秀康……五六
有　若……五七
雄略天皇……五七
弓月君……五八
由利八郎……五九

よ・やう

陽成天皇……五九
用明天皇……五九
吉田松陰……六〇
嘉仁親王……六一
榮仁親王……六一
與謝蕪村……六一
淀　君……六一

ら

賴杏坪……六二
賴山陽……六二
賴春水……六三
賴春風……六三
ラファエル……六三

り

リーパーマン……六四
劉　備……六四
李　熙……六四
李鴻章……六四
李成桂……六五
李　坦……六六
履中天皇……六六
リヤ……六七
龍造寺隆信……六七
リンカーン……六七

る

ルーズベルト……六八
ルーベンス……六八
ルノアール……六九

れ

レーノルヅ……六九
靈元天皇……六九
冷泉天皇……七〇
レオナルド＝ダ＝ウインチ……七〇
レマン……七一
蓮　如……七一
レンブラント……七二

ろ

ローラン……七二
ロックフェラー……七三
ロビンソン＝クルーソー……七三
六條忠顯……七三
六條天皇……七三
ロゼッチ……七四

わ

若槻禮次郎……七四
雅野毛二派皇子……七四
雅　郎　子……七四
脇坂安治……七五
和氣清麻呂……七五
和氣廣虫……七六
ワシントン……七六
渡邊崋山(登)……七七
和田義盛……七九
ワトー……八一
王　仁……八一

あ

あおうだうでんぜん

亞歐堂田善

名號　通稱を永田善右といひ、約して田善ともいふ。名を可大といひ、後に太仲と改めたが、亞歐堂の號で知られて居る。

事蹟　岩代國岩瀬郡須賀川の紺屋に生れた。父昆山は花鳥・山水・人物を巧に描いたので、田善も父に就いて畫道を修め、畫家を志して江戸に出て、松平定信の援助によつて谷文晁の門に入つた。田善は一種種を出さうと思ひ、寫生に熱中して居る中に、寫生畫には油繪が適して居る事を知り、司馬江漢に油繪を學び、兼ねて西洋銅版術をも覗んだ。これは享保年代の事で、彼が五十餘歳の時である。當時、和蘭人が日耳曼の都市・公園などを寫した銅版畫數種を松平定信に獻じたが、定信は其の精巧に感じ、我が國でも此の術を興さうと思ひ、これを田善に謀つて公費を支出したので、田善は愈々銅版術を研究する事になつた。彼の技術が眞に精妙の域に達したのは、長崎に遊學して直接に和蘭人の指導を受けた後の事である。彼は自家の彫刻用として、丹礬で腐蝕藥を製造したり、一種の劃線器械を發明したりしたので、其の苦心は一通りでなかつた。油繪に於ては、江漢に劣つて居たけれども、銅版術の精巧な點に於ては、遙かに江漢を凌駕し、また和蘭銅版畫に匹敵するものがある。

田善の遺作には油繪もあるが、銅版畫に精巧なのが多い。松平定信の爲に銅刻した淺草觀音堂圖・高橋景保(作左衛門)の爲に銅刻した萬國全圖・邊海略圖は頗る精巧である。彼が淺草觀音堂及び江戸名所の銅版畫を和蘭人に贈つたのは、定信の意志に出たのであらう。文化五年三月に刊行された宇田川榕齋の醫薬提綱の内象圖も田善の銅刻で、また絹帛類に銅版畫を摺つて衣服・袱紗の料にしたのもある。田善は老いて岩代に歸つたが、其の際、松平定信は彼を士班に列し、祿を與へる事にしたが、文政五年五月七日、七十二歳で歿した。

あをきこんやう

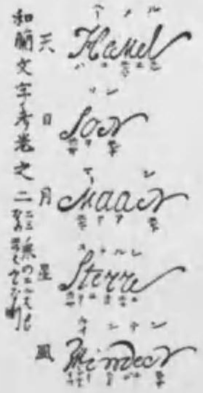
青木昆陽

名號　名を敦書といひ、字を厚甫といひ、通稱を文藏といひ、昆陽と號し、法名を本立院通譽生心といふ。世に甘藷先生と稱する。

系統　或は近江の商人といひ、或は伊勢の人といひ、先哲叢談には武藏の人と記し、蘭學事始の註には江戸に生れたと記してある。父は佃屋半右衛門である。

事蹟　京都の堀川塾に遊び伊藤東涯に學んだが、其の學は堀川の徒と趣を異にし、經義文章に拘泥せず、專ら實用を主とした。享保二十年、大岡忠相の知遇を得て、官庫の書を見ることを許された。元文四年、命を受けて幕府の典籍を管し、寛保年間には屢々諸國に赴き、寺社民屋に出入し、其の舊記・古文書などを探索し、國家の事を徵するに足るものを集めて進呈し、また其の著書をも上つた。延享元年、將軍吉宗保護の下に、長崎に往つて蘭學を研究し、歸つてから蘭學を講じた。此の年、紅葉山火番に擧げられ、ついで評定衆儒者に列し、明和四年、終に書物奉行となり、同六年十月十二日、七十二歳で歿した。武藏國荏原郡目黑村龍泉寺に葬る。後世、碑を建て甘藷先生之墓といふ。

昆陽は蘭學の大いに用ふべきを



信じ、忠相の推擧により將軍吉宗の保護の下に、率先して蘭學研究に從つた。當時、未だ泰西の學問は開けず、學ぶ者は少く、蘭語の通解は容易でなかつた。最初、野呂元丈と共に江戸例參の和蘭甲必丹に學んだが、延享元年には官暇を得て長崎に遊學し、和蘭人に就き、譯者に尋ね、書に據り、苦心して常用蘭語四百餘言を習得し、文字の體制、言語の呼法、語路の意味をほゞ了解したといふ。大槻玄澤は昆陽を稱して、蘭學中興の祖といつて居る。

昆陽は遠島流罪の人々の往々餓死することあるを聞いて嘆息し、「また内地と雖も凶年には民菜色を呈するは必定なり、五穀の外、常食とすべきは薯蕷に如くはなし」といひ、幕府に請うて種苗を薩摩に求め、藥苑に試植したが、繁殖が甚だ速かであつたから、薯蕷考を著述して培養法を說き、それを印刷に附し、種苗と併せて諸國に配布した。これから數年を出でない中に、甘藷は諸國に植ゑられ、凶年にも饑餓を免かれる民が多いのは、實に昆陽の賜である。

昆陽は著書が多いが、經濟藝要・國食貨略・刑法國字譯・職原抄注・國家金銀錢譜・明官略記・官職略記・奉使小錄・答問小錄・夜話小錄・對客夜話・一夕話・郡名考・草廬雜談・昆陽漫錄・甘藷記・長崎聞書・和蘭語譯・和蘭文譯・和蘭文字略考・和蘭貨幣考・和蘭勸酒哥解などがある。抑國の和蘭文字考は昆陽の筆で、京都帝國大學所藏である。

あをきしんべゑ
青木新兵衛

「あとぢかもん・阿閉藩部」の項を參照されたい。

あをとふちつな
青砥藤綱

事蹟　太平記に據れば、青砥左衞門は夜間出仕した時、燒袋に入れて居た錢十文を取りはずして滑川に落した。よつて附近の町屋へ人を走らし、錢五十文で續松十把を買ひ、これを燃して遂に十文を求め得た。後に人が此の話を聞いて、「十文の錢を求めんとて、五十文にて續松を買ひ燃したるは小利大損かな」と笑つた。時に彼は眉を顰めて、「さればこそ、御邊達は、愚にて世の費をも知らず、民を惠む心無き人なれ。錢十文は唯今求めずば、滑川の底に沈みて永く失せぬ可し。某が續松を買はせつる五十文の錢は、商人の家に止まりて、永く失す可らず。我が損は商人の利なり。彼と我と何の差別かある。彼此の六十文の錢、一をも失はず。豈、天下の利に非ずや」といつたので、笑つた人々も感じたといふ。また或る夜、物に映る我が影を見て悟り、主君・家來・傭人などに映る我が心の影は如何にあらうかと反省し、己の身を顧み、而して後に世人に對することにし、天地の正道に向つたといふ。此の外にも種々の話が傳はつて居る。

青砥左衞門藤綱の有無に關しては諸說がある。弘長記には實名藤綱を揭げ、「先祖伊豆の住人大場十郎近郷、永久の役、宇治の手に向つて功あり。上總國青砥庄を給はり、父を左衞門尉藤滿といひ、藤綱は其の妾腹の末子にて、幼時僧となり、後ち還俗し、二階堂信濃入道の口入にて、時頼に仕へて評定衆の末班に列し、終に評定頭となる」とある。然るに吾妻鏡に據れば、永久の役に宇治の手に向つて功を立てた者(二百五十人)、手負の者(百三十人)、戰死の者などの姓名を見るに、大場十郎近郷といふ人はない。また上總青砥庄の所在も詳かでない。また青砥左衞門尉も載せてない。また時宗・貞時二代間の引付衆の姓名中にもない。星野恒氏の說では、青砥藤綱は實在の人物でないといふ。大森金五郎氏の說では、滑川の錢拾物語は、支那の「二程粹言」といふ書から出た假作であらうといふ。要するに藤綱の存在は疑問の中にある。

あかまつのりむら
赤松則村

名號　次郎と稱し、薙髮して圓心といひ、また月潭と號した。法名を法雲寺といふ。

系統　赤松茂則の子である

事蹟　元弘二年、護良親王の令旨を奉じ、播磨國佐用莊苔縄山城に義兵を擧げ、山陰・山陽の二道を絶つた。三年、北條仲時が來攻したので、則村はこれを擊退した。既にして後醍醐天皇は、隱岐を脫して船上山に幸されたが、此の時、則村は源忠顯・足利尊氏らと三面から六波羅を攻めたが、仲時は光嚴院を奉じて走り、途中で誅せられた。則村の軍功は大である。

天皇は京師に還幸されてから、勅語及び錦の直垂を賜はり、ついで播磨國の守護職に任ぜられた。間もなく職を奪はれ、僅に佐用莊を食むに過ぎなくなつたので、則村は不平を抱き、足利尊氏の叛するに及んで、之に從つた。延元元年、尊氏は則村を播磨守護職に任じた。尊氏が兵庫に敗走したので、則村は說いて再擧を謀らせ、且つ持明院上皇の院宣を請はせ、また錦旗を乞はせたので、尊氏は此の言に從ひ、やがて九州に下つた。則村は醫國して白旗城に籠つたが新田義貞はこれを攻めて拔く事が出來なかつた。既にして義貞の黨兒島(三宅)範長を那和に攻め殺し九州から東上する尊氏と室津に會し、足利直義に從つて之を破つた。正平五年正月十一日、七十四歲で歿した。

あかまつみつすけ
赤松滿祐

名號　入道して性具といふ

系統　赤松則村の曾孫で、大膳大夫赤松義則の長子である。

事蹟　左京大夫に任じ、父、義則の歿後、播磨の守護職を繼いだ。時に叔父貞範の孫持貞は、將軍義持の寵を得て、備・作二州の守護に任ぜられ、更に播磨の守護職を奪はうとして、屢々將軍に請うたが、義持は心中これを許したけれども、未だ發しなかつた。

應永三十四年十月、滿祐は大いに怒り、播磨の白旗城に據つて叛したので、義持はこれを討つた。時に諸侯は持貞の非禮を惡み、幕府に請う所があつたので、義持は持貞に自殺を命じ、滿祐を許すことにした。

永享元年、將軍義教が繼ぎ、滿祐は故の通り幕府に仕へ、備・播・作三州の守護職となつた。四年八月、事によつて滿祐を禁錮に處するに及び、滿祐は憤怨して亂を起し、やがて降りを乞ふた。

時に貞範の嫡孫貞村は、美貌を以て義教に嬖幸された。義教は滿祐の三州を割いて貞村に與へ、滿祐の勢力を減殺しようとしたが、滿祐は之を聞いて憤り、嘉吉元年六月、宴席を設けて義教を招き、宴の半に伏兵を起し、滿祐の臣安積行秀は義教を刺殺した。滿祐は義教の第に火を放ち、弟義雅以下三百八十餘人を從へて醫國した。よつて細川持之・赤松貞村・武田信賢・山名持豐らは、軍を率ゐて白旗城を包圍したが、九月、滿祐は力盡きて自殺し、一族六十九人も從死した。

あくげんだよしひら
惡源太義平

「みなもとのよしひら・源義平」を參照されたい。

あけちみつひで
明智光秀

名號　通稱を十兵衞といふ

系統　美濃の土岐氏の支族で、父を明智光綱といふ。一說には、若狹小濱の鍛上冬廣の二子であるといふ。

事蹟 十六歳の時に元服したが、弘治二年四月、齋藤義龍が其の父を弑した時に、叔父光安は明智城に拒いで死んだ。此の時、光秀も殉しようとしたが、光安は之を諫めて、宗家を興す必要を論し、子光春を托したので、光秀は越前に逃れた。

爾來、諸國を流浪し、朝倉義景・長岡義季らに仕へたが、再び諸國を遍歴した。永祿九年に始めて織田信長に仕へ、拔擢されて士隊長となつた。翌十年には瀧川一益に從つて北國を征し、ついで丹波・若狹の諸城を拔き、功によつて近江滋賀郡を賜はり、坂本城に居し、采邑十萬石を食んだ。天正元年には高島郡及び木戸・田中の二城を賜はり、滋賀の郡領を併せ、二年には從五位下日向守となり、三年には信長の命により、族を惟任と改め、丹波の龜山に封ぜられた。

天正五年には、織田信忠に從つて片岡城を陷れ、七年には波多野秀治を八上城に攻めたが、秀治が容易に下らなかつたから、光秀は己の母を質として媾和し、秀治兄弟を捕へて安土に送つた。然るに信長は秀治兄弟を殺させたので、秀治の部下は光秀の母を斬つた。よつて光秀は八上城を屠り、頗る慘酷を極めたといふ。

光秀は己の母の償らないのに先立つて、信長が秀治を弑したので、つひに母を屠られるに至つたから、深く信長を恨む樣になつた。また信長は性急で、少しも假借せず、屢々光秀を辱めたので、益々不平を抱いた。十年三月、德川家康は安土に信長を訪ふた。信長は光秀に命じて饗遇を司らせたので、光秀は其の準備に汲々として居たが、忽ち備中出征の先鋒を命じたので、光秀は大いに怒り、「享禮いまだ終らず、而して遠征の命あり、讐覆何ぞ此に至るや」といひ、饗具を湖水に投じ、多年の積鬱が一時に發し、馳せて本國丹波龜山に歸り、密に信長を謀らうとした。

天正十年、信長は備中高松城攻擊中の秀吉を援けようとして安土を發し、京都に入つて本能寺に館した。光秀は龜山に歸つて兵を整へ、六月二日の早曉、本能寺を襲つた。時に信長は遙に兵馬の聲を聞き、森蘭丸に命じて探偵させ、光秀の來襲を知り、直ちに結束して起ち、弓を執つて防戰し、蘭丸及び蘭丸の二弟坊丸・力丸以下奮戰したけれども、從兵が僅か百六十餘人に過ぎなかつたので、衆寡敵せず、信長は天野源左衞門の爲に刺され、從兵も悉く戰死した。光秀はまた部將を遣はし、信長の子信忠を二條城に攻め斃し、自ら任じて將軍を氣取り、洛中の人心收攬に力めたが、間もなく秀吉が中國から東上したので、これを山崎に要擊して利あらず、近江の坂本に逃れようとして、小栗栖で土民の爲に殺された。時に年五十七歳である。光秀は才學があり、また歌道及び茶道に通じた。「おだのぶなが・織田信長」の項を參照されたい。

あさゐちゆう

淺井忠

名號 號を默語といふ。

事蹟 安政三年江戸に生れたが、父は佐倉藩士である。明治五年東京の巽作塾で英語を學び、ついで國澤新九郎の彰技堂に入つて西洋畫を修めたが、九年に工學寮美術學校に入學して、伊太利畫家フォンタネジーの薫陶を受けた。フォンタネジーの歸國後は、其の後任教師フェレッチの凡庸畫技に滿足せず、十一年に同志と連袂退學した。二十二年には同志と謀つて明治美術會を創立し、後進の敎養に盡力した。三十一年には東京美術學校教授に任ぜられたが、三十三年には巴里萬國大博覽會開催を機として、二個年間佛蘭西留學を命ぜられた。三十五年に歸朝してからは、轉じて京都高等工藝學校教授となり、或は關西美術會を創立し、或は漆工・陶工をも指導

し、京阪地方に於ける洋風美術の振興に盡瘁したが、四十年十二月十六日、五十二歳で歿した。都鳥英喜・渡邊審也・倉田白羊・石井柏亭・津田青楓・安井曾太郎・梅原龍三郎らは、其の門に出た畫家である。

あさたいし

阿佐太子

事蹟 百濟の王子で、推古天皇の五年四月に、我が國に來朝して、聖德太子の肖像を描いたといふ。この聖德太子畫像は、大和の法隆寺に傳はつたが、今は帝室御物となつて居る。これはかつて本邦最古の繪畫と稱せられたが、其の服飾や畫風から見て、推古期の作品ではなく、後代の作品である。黑川眞頼の考證に據れば、笏は孝德天皇の大化の新制に創り、大化三年の服制改革後に之を用ひて居る。また御像には、朱華色の御袍を着せてあるが、皇族が朱華衣を用ひたのは、天武天皇の十四年から持統天皇の朝までの制で、文武天皇の朝には深紫色に改められて居る。また太子の戴く漆紗冠は、天武天皇の十一年の創始で、推古朝には未だ斯樣なものはなかつた。隨つて是等の諸點から推考して、此の肖像畫は、天武天皇の十四年頃から持統天皇の朝までの間に描かれたものと見做される。推古期の遺品でないことは、其の筆致から見ても分る。筆致は古拙であるけれども、色調が溫雅で、描線に沿つて隈取りをつけ、陰影を示してある。聖德太子傳私記には、「左方山背大兄王、右方殖栗王、此二人也」とある。山背大兄王が聖德太子の御子である事には異論はないが、殖栗王には異論がある。また其の左右といふのは、太子の左右であるか、畫面に向つて左右であるか詳でない。また左右の二童子が果して聖德太子の二王子であるか否かも明瞭でない。「しやうとくたいし・聖德太子」の項を參照されたい。

あさのながのり

淺野長矩

名號 小字を又一郎といひ内匠頭と稱し、法名を冷光院吹毛元利居士といふ。

系統 淺野長政の三男長重は、常陸の笠間城を治したが、其の子内匠頭長直は、正保二年三月、播磨の赤穗に封ぜられ、六月、城主格を賜はり、新に城を築いて治した。長直の子を長友といひ、長友の子は卽ち長矩である。

事蹟 赤穗五萬三千石の城主で、延寶八年十二月從五位下に叙せられた。東山天皇の元祿十四年三月、勅使の江戸參向に際し、幕府は長矩及び伊達宗春（伊豫吉田城主）に接待の事を掌らせた。長矩は舊儀に習はないのを理由として辭退したけれども許されず、已むを得ず命を拜し、典禮を高家吉良義央（よしなか）に諮詢しようとした。因に幕府は名族の裔孫の國を失ふ者を招いて江戸に置き、爵位を貴くして儀禮を掌らせたが、これを高家といふ。時に義央は高家の首班に居り、勅使の來る毎に總陪し、頗る儀禮を諳んじ、常に之を以て人に驕つた。よつて從來義央と事を共にした人々は、みな賄賂を贈つて指南を仰いだが、長矩は人と爲り剛直强硬で、未だ曾て賄賂を行はなかつたので、義央はこれを含み、儀禮を敎へない許りでなく、往々屈辱を加へたので、長矩は深く憤つたけれども、强ひて忍んで居た。

斯くて三月十四日に至り、勅使は辭見の爲に登城する事になり、老中以下は元日の樣に朝服して登營した。長矩らは白木書院の廊下に集つて會議したが、偶々長矩は義央に向つて「今日、勅使を何方まで出迎ふべきか」と問ふと、義央は口を開き、「斯の如き小事をも辨ぜずして、俄に期に臨みて之を質すは不心得ならずや」といつて答へなかつた。のみならず、左右

の人々を顧みて、「野人禮に慣はずして、屢々其の任を曠くす。斯くては館伴の運みに違はん」と語つた。長矩は此の言を聞いて憤慨に堪へず、義央の後方から「宿意あり」と叫び、小刀を拔いて切り附け、義央が驚いて振り向ふ處を、また重ねて眉間を傷けた。留守居番の梶川與惣兵衛頼照は、傍から長矩を抱いて制し、大友義孝らは義央を扶けて去り、遂に長矩は志を達することが出來なかつた。

將軍綱吉は大いに怒り、其の日に長矩を田村建顯の邸に幽し、其の夜に自盡を命じ、翌日其の封を奪ひ、其の弟大學（長廣）をも閉門に處した。長矩は三十五歲で自盡したが、遺臣大石良雄らは淺野氏の祀を存しようとし、屢々幕府に請ふて許されなかつたので、遂に元祿十五年十二月十四日の夜、四十七義士は江戸本所の吉良邸を襲つて復讐した。幕府は義士の忠節に感じ、大學（長廣）に五百石を與へて旗本に列し、淺野家の祀を保たせた。「おほいしよしを・大石良雄」の項を參照されたい。

あさのよしなが
淺野幸長

名號 初名を長慶といふ。左京大夫と稱し、後に紀伊守と改めた。法名を清光院春翁宗雲といふ。

系統 姓は清和源氏で、攝津守頼光七世の孫光衡から出て居る。光衡の二男光時は、始めて淺野氏を稱し、代々尾張國に住した。四代長勝は織田信長に仕へたが、長勝の養子長政は、豐臣秀吉の妻高臺院の妹を娶り、甲斐國府中二十二萬五千石を領した。長政の長子は卽ち幸長である。

事蹟 幼時から秀吉の近侍となり、天正十七年四月、叙爵して左京大夫と稱した。同四月、兵三千を率ゐて小田原征伐に從ひ、五月、武藏の岩槻城を攻めた時には、本多忠勝と共に先登し、大手口を破つたが、時に年十五歲であつた。

文祿元年、征韓の役に際しては、先づ名古屋に滯陣し、翌二年、渡鮮して西生浦に城き、頻りに敵城を陷れたが、四年和議が成るに及んで一旦歸朝した。慶長二年、和議が破れて再び渡鮮したが、始め幸長の出征する時、父長政は加藤清正に向ひ、「幸長、未だ若年なれば、御後見を頼み申す」といつた。十二月、幸長が蔚山城で敵に包圍された時には、清正は蔚山を距る約七里の機張に在つたが、直ちに兵を發して海路から進み、闇みを衝いて蔚山城に入り、籠城の辛苦を共にした。「かとうきよまさ・加藤清正」の項を參照されたい。

慶長三年八月、秀吉が歿して征韓の軍を收めたので、十月、幸長は諸將と共に歸國した。既にして石田三成らは、德川家康を圖らうとして擧兵したが、幸長は清正と行動を共にし、あへて西軍に加擔せず、德川氏に恭順の意を表した。時に幸長は家康に從つて小山の陣中にあつたが、急に先鋒の命を蒙つて西上し、八月二十五日、諸將と共に木曾川を渡り、織田氏の軍と戰ひ、ついで岐阜城を攻めて瑞龍寺の寨を敗つた。九月十五日の關ヶ原の役には、池田輝政と同じく南宮山を壓迫した。役後、功によつて紀伊國和歌山城三十七萬六千石に封ぜられ、翌年、紀伊守と改稱し、從四位下に叙した。十八年八月二十五日、三十八歲で歿した。

幸長は人と爲り敬神・誠忠の念に篤く、伊勢神宮の神領として永世祿米を寄進したことがある。また德川氏に恭順の意を表したが、而も豐臣氏の舊恩を忘れず、家康が秀頼を二條城に招いた時には、清正と共に死を決して秀頼を保護した。また文敎民治に心を注ぎ、藤原惺窩を召して講說を聞き、領內傳法川を開鑿して和歌川の運漕を便にするなど、其の事蹟の見るべきものがあつた。

あしかがうぢみつ
足利氏滿

系統 關東管領足利基氏の子である。

事蹟 後村上天皇の正平二十二年、基氏は歿する臨み、執事上杉憲顯に氏滿の事を託し、謹んで京都の命を守り、永く背かない樣に遺命した。時に氏滿は九歲であつたが、憲顯がよく輔佐したので、關東はよく治まつた。氏滿は長じて稍々心が驕つた。長慶天皇の天授五年、將軍義滿が土岐頼康を討伐しようとして兵を諸國に召した時、氏滿は上杉憲方に兵を授けて赴かせ、機に乘じて義滿を弑し、これに代らうと思ひ、上杉憲春（憲顯の子）に謀つたが、憲春は固より之を非とし、苦諫しても聽かなかつたので、遂に上書して自殺した。氏滿は驚いて其の計畫を中止したけれども、野心はなほやまず、後龜山天皇の元中八年十二月、山名氏清が義滿と戰つた時には、出兵して氏清を援けようとしたが、氏清が敗死したのを聞いて止めた。ついで義滿は陸奥・出羽の二國を關東管領の管轄に屬したが、氏滿は應永五年十一月、四十二歲で歿し、子滿兼が關東管領の職をついだ。

あしかがさだうぢ
足利貞氏

系統 足利家時の子で、足利尊氏の父である。

事蹟 下野國の豪族で、鎌倉の北條氏に屬し、父祖に繼いで足利城に居し、足利郡を治めた。國史上顯著な事蹟はないが、其の子尊氏が足利初代の將軍となるに及んで、始めて名聲が揚つた。いま其の系圖を示すと次の通りである。「みなもとのよしくに・源義國」「あしかがよしやす・足利義康」の項を參照されたい。

源義家・義國―
- 新田義重・義俊・義房・政義・政氏・基氏・朝氏・義貞
- 足利義康・義兼・義氏・泰氏・頼氏・家時・貞氏・尊氏

あしかがしげうぢ
足利成氏

名號 古河公方と稱する。幼名を永壽といひ、法名を乾亨院道昌久山といふ。

系統 足利持氏の第四子で初代の古河公方である。

事蹟 永享十一年には父持氏が亂を起して斃れ、嘉吉元年には結城合戰が起つたが、成氏は此の兩度の戰に逃れて信濃に入り、母鶴大井氏に據つた。後に長尾昌賢らが相議し、幕府に請うて鎌倉に迎へ、奉じて其の主とした。よつて名を成氏と改めた。結城成朝も陸奥から來て仕へた。

後花園天皇の寶德二年、上杉憲實の子憲忠を殺さうとし、謀が顯はれてこれと和解したが、三年、遂に憲忠を殺したので、上杉氏の一族は怒つて成氏に叛き、憲忠の弟上杉房顯を立てゝ管領とし、扇谷定昌と協力して成氏と戰つた。房顯・定昌は京師に請ひ、將軍義政の弟政知を關東に下し、成氏に抗する事にしたが、關東の將士は成氏に心を寄せ、政知に從ふ者がなかつたので、政知は留つて伊豆の堀越に居た。これを堀越公方といふ。房顯が歿してから、其の子顯定・定正は政知を奉じて屢々成氏を攻めた。成氏は古河城に走つたが、顯定は古河城を攻むること數年にして陷れた。成氏は千葉に走り、文明四年に古河城を復し、明應六年九月、六十四歲で歿した。

あしかがたかうぢ
足利尊氏

名號 通稱を又太郎といふ初名を高氏といつたが、後醍醐天

皇は御諱「尊治」の尊を賜はつたので、尊氏と改めた。法名を仁山妙義といひ、世に等持院・長壽院と稱する。

系統 源義家の裔である。卽ち義家の子に義國があつたが、義國の長子義重は、上野國新田に在つて新田氏を稱し、義國の次子義康は、上野國足利に在つて足利氏を稱した。代々北條氏の女を娶つて族勢が盛んであつたが、尊氏の父は名を貞氏といふ。世に足利初代將軍と稱する。

（足利尊氏）

事蹟 後醍醐天皇が北條氏を滅ぼさうと謀られたので、元弘三年、高氏は名越高家と共に北條高時の命を受け、兵を率ゐて西上した。途上、密に使を船上山の行宮に遣つて綸旨を乞ふた。四月十六日、京都に着き、高家と共に船上山を犯さうとして伯耆に向つたが、高家は赤松則村と戰つて敗死し、高氏は綸旨を部將に示して歸順し、赤松則村・六條忠顯と協力して、俄に探題北條仲時・北條時益を討つて六波羅を陷れた。時に元弘三年五月七日である。

高氏は歸順の際に尊氏と改名したが、事に處して頗る機敏で、六波羅陷落後、早くも京都に奉行所を設けて諸國に號令し、從來の六波羅探題の政務を司つた。建武元年、天皇は恢復の功を追論し、尊氏を第一となし、鎭守府將軍に補し、ついで正三位參議に任じ、武藏・常陸・下總の三國を賜はつた。

尊氏はかねて武家政治再興の大望があつた。建武中興の新政が世に喜ばれないのに乘じて、巧に私恩を施し、不平の武士の心を收攬した。而して新田義貞を忌み、また護良親王の才武を恐れ、殊に親王が尊氏の野心を看破し、これを除かうと謀られたので、尊氏は天皇の寵姫藤原廉子（新待賢門院）と結んで讒奏し、遂に親王を鎌倉東光寺の塗籠に幽閉させた。「もりながしんわう・護良親王」の項を參照されたい。

建武二年七月、北條高時の子北條時行が、父の遺志をついで鎌倉を恢復しようとし、兵を信濃に擧げて鎌倉を襲つた。時に尊氏の弟足利直義は、皇子成良親王を奉じ、鎌倉に居て東國を始めて居たが、時行の兵を拒ぐことが出來ず、護良親王を殺させ、自ら成良親王を奉じて西奔した。尊氏は之を機として時行討伐を請ひ、勅許を待たず、東下して時行を破り、斯くて鎌倉に據つて叛し、自ら征夷大將軍と稱し、義貞を除くを名として兵を進めたが、中興の國策に不平を抱く武士が、爭つて之に從つた。

（東國）

天皇は大いに怒り、尊氏の官爵を奪ひ、義貞・尊良親王・北畠顯家に命じて討たせられた。尊氏は前軍を三河まで進めたが、駿河の手越河原に大敗して退き、直義は箱根（相模）で義貞に破られた。然るに尊氏は竹下（駿河）で尊良親王・脇屋義助の軍を破つた。時に大友貞載・鹽冶高貞を首め、官軍の將士の尊氏に應ずる者が多かつたので、義貞は止むを得ず、兵を收めて西に還つた。間もなく尊氏は直義と共に軍を進めて京都を犯した。天皇は比叡山に行幸されたが、偶々顯家は皇子義良親王を奉じて陸奥より來り、義貞・長年・正成と協力して尊氏と戰つた。尊氏は紀河原に破れて丹波に奔り、やがて大内長弘の援を受けて正成と打出浜に會戰したが、京都の恢復維きを知り、直義と共に兵庫から九州に航した。時に延元元年正月である。

尊氏は九州に入り、筑前の多々良濱に菊池武敏を破り、九州・四國・中國の諸族を服し、四月、二十萬の大軍と、七千隻の舟師とを率ゐ、直義は陸路から、尊氏は海路から、相並んで進み、遂に湊川に正成を殺し、義貞を破り、やがて京都を犯したので、天皇は比叡山の延暦寺に幸された。尊氏は賊名を雪ける爲に、光嚴院の御弟光明院（豐仁親王）を立てゝ天皇と呼稱した。ついで比叡山に遣使して僞り降つて還幸を請うたので、天皇は假にこれを許し、京都に還幸されたが、尊氏は直ちに天皇を花山院に幽閉し、公卿の官爵を奪ひ、神器を光明院に傳へられんことを要請した。仍て天皇は僞器を授けられ、ひそかに吉野に幸し、行宮を立てゝ政を執られた。時に延元元年十二月である。これから吉野の朝廷を南朝と呼び、尊氏の擅に立てたのを北朝といふ。

ついで尊氏は、高師直を遣つて顯家を播津の阿部野に破り、足利高經を遣つて義貞を越前の足羽に破つた。時に延元三年八月である。この年、尊氏は光明院に請うて征夷大將軍と稱し、始めて京都に幕府を開き、建武式目に據つて將士を賞賜し、遂に武家政治を再興した。延元四年八月、後醍醐天皇が崩ぜられ、後村上天皇が卽位されたが、楠木正行は父の遺志を承け、一族を率ゐて吉野の行宮を守つたので、正平三年、尊氏は高師直を遣つて吉野を攻め、正行を河内の四條畷に破つた。斯くて南朝は振はず、天下の政權は尊氏に歸した。關東を鎭める爲には、最初、長子義詮を鎌倉に派したが、正平四年九月、次子基氏を遣つて管領させ、上杉氏を其の執事とした。これが關東管領の起源である。

尊氏は先に幕府を開いて自ら將軍と稱し、政務は弟直義に委ねて居たが、やがて直義は、尊氏の執事高師直と權力を爭つて之を殺した。直義・師直の爭は、ついで尊氏・直義の爭となつた。尊氏は終に直義を追討し、これを鎌倉に幽閉して殺した。時に正平七年二月である。

尊氏と直義とが隙を生じた時、尊氏の庶長子足利直冬は、密に策を通じて直義を援けたが、間もなく折原利孝と戰つて敗れ、肥後に奔つて少貳頼尙の女を妻とし、九州の諸將を服して勢を振ひ、天下は官軍・尊氏・直冬の三派に分れ、鼎立の勢を爲したが、直冬は正平九年南朝に降り、十二月に山名時氏と協力して尊氏を破つたので、尊氏は後光嚴院を奉じて近江に走つた。十年二月、直冬と京都に戰つてこれを破り、三月、後光嚴院を迎へて入京した。十三年四月に病んで歿した。時に五十四歳である。

尊氏は人と爲り、度量が恢弘で、規略が遠大で、事をなす場合には、豫め能く計畫して、それを人に任せて疑はず、士を愛して施與を好み、賞罰が嚴明で、能く人心を長服したといふ。

建武三年、文章博士日野藤範・二階堂是圓・僧玄惠・僧惠らに命じて、憲令十七條を作らせたが、これが建式武目であつて、後世武家の法律として、貞永式目と並び稱せられたものである。

尊氏は平生和歌を詠み、繪畫を好み、自ら信仰する地藏菩薩の像を描いたといふ。

あしかがただよし

足利直義

名號 初名を高國といふ。また忠義ともいひ、薙髪して慧源と號し、法名を大休寺といふ。世に錦小路殿と稱した。

系統 足利貞氏の子で、足利尊氏の同母弟である。

事蹟 後醍醐天皇の嘉暦中に兵部大輔となつた。元弘元年九月、北條氏の命を受け、足利尊氏に從つて後醍醐天皇を笠置山に攻めたが、尊氏と共に歸順し、功を以て左馬頭正五位下に叙し、相模守を兼ねた。天皇が皇子成良親王に命じて、東國を鎮めさせられたので、直義は其の執權となり、鎌倉に居て東國を治め、建武元年に遠江の守護に任じた。同年十一月、護良親王が鎌倉に流されられた時には、騎兵を遣つて迎護し、親王を二階堂ヶ谷東光寺に幽閉した。

建武二年七月、北條高時の子北條時行は、父の遺志をついで鎌倉を恢復しようとし、兵を信濃に擧げて鎌倉を襲つた。直義は之を拒ぐことが出來ず、淵邊義博を遣つて護良親王を殺し、成良親王を奉じて西走した。途中で屢々北條黨の襲撃を受けて進んだが、駿河の安倍川で進退きはまり、將に自刄せんとして今川範國に諫められ、三河の矢矧に至つて軍を駐め、尊氏に急報して援を求めた。成良親王は使者と共に京都に還られた。偶々尊氏が東下して來たので、これと協力して、時行を鎌倉に破つた。時に天皇は尊氏に班軍を命ぜられたが、直義は尊氏に說いて、天皇の命を拒み、此のまゝ鎌倉に居ることを勸めたので、遂に尊氏は謀叛の志を固め、鎌倉に府第を造り、諸國の將士を招き、新田義貞を除くを名として、兵を西に進めた。

天皇は大いに怒り、義貞・尊良親王・北畠顯家に命じて、尊氏・直義を討たせられた。建武二年十二月、義貞が弟脇屋義助と東進して來たので、尊氏・直義は、これと竹下（駿河）・箱根（相模）に戰つた。直義は箱根で義貞に破られたが、併し尊氏が竹下で尊良親王・脇屋義助を破り、且つ官軍の尊氏に應ずる者が多かつたので、延元元年正月、尊氏と共に西上して京都を犯した。ついで顯家・義貞・正成・長年の軍と京都に戰ひ、糺河原に大敗し、尊氏と共に九州に走り、筑前の多々良濱に菊池武敏を破り、進んで太宰府に入り、やがて九州・四國・中國の新設を事ゐ、同年四月、大擧して京都に向ひ、尊氏は海路から、直義は陸路から、相並んで武庫に至つた。時に直義は湊川で正成と戰つて、將に敗れようとしたが、尊氏の援を得て正成を破り、尊氏と軍を合せて京都に侵入した。時に延元元年五月である。

尊氏は賊名を避ける爲に光明院を確立したが、直義は延元三年に光明院に請うて左兵衛佐征夷副將軍となり、興國六年には光明院から從三位を授けられ、爾來、數年の間執權となつて威を振ひ、尊氏と相並んで兩御所と稱せられた。やがて尊氏の執事高師直と權を爭ひ、正平四年師直を殺さうとして謀が漏れ、尊氏の爲に政務を罷められ、薙髪して慧源と號した。五年十二月、直義は師直に攻められ、逃げて大和に入り、請うて南朝に降り、六年二月に兵を擧げて尊氏の軍を京都に破り、ついで和を媾じ、再び政務を司つた。併し內心融和せず、桃井直常・石塔頼房の勸めによつて北國に入り、尊氏に攻められて各地に轉戰したが、遂に鎌倉に往き、尊氏の爲に幽閉され、七年二月二十六日に殺害された。同十三年、後光嚴院から從二位を贈られた。「あしかがたかうぢ・足利尊氏」の項を參照されたい。

あしかがまさとも

足利政知

名號 法名を勝鑁院九山といひ、世に堀越御所と稱する。政知を政智・政氏に作つたものがある。

系統 足利義政の第三子である。

事蹟 はじめ僧侶となり、天龍寺の香嚴院に居た。關東管領足利成氏が執事上杉憲忠を殺し、上杉氏に攻められて下總の古河に遁走してから、關東には主がなくなつたので、上杉氏は將軍義政に請ひ、其の弟政知を遣俗させて關東の主とした。時に後花園天皇の長祿元年十二月で、政知は二十三歲であつた。義政は書を東海・東山の將士に下し、政知を奉じて古河公方成氏を討たせたが、東國の將士が服しなかつたので、政知は鎌倉に入る事が出來ず、やむを得ず伊豆の堀越に居たので、世にこれを堀越公方といふ。上杉房顯らは、陽に尊敬したので、政知は虛號を擁するに過ぎなかつた。

政知は長子の茶々丸を疎んじ、後妻の生んだ義遐を後嗣になさうと欲し、茶々丸を幽閉したが、或る人は其の幽廢を憫んで、茶々丸に匕首を授けたので、茶々丸は繼母を殺した。政知は後土門天皇の延德三年四月、五十七歲で病歿した。

あしかがみつかね

足利滿兼

名號 法名を勝光院道安といひ、世に鎌倉御所と稱する。

系統 足別氏滿の長子である。

事蹟 從四位下左馬頭に任じ、後小松天皇の應永五年十二月管領職を繼ぎ、左兵衛佐に遷つたが、足利義滿と調和しなかつた。六年十月、大內義弘が和泉の堺浦で兵を擧げたので、滿兼は遙にこれに應じて、足利幕府を倒さうとし、軍を發して武藏に至り、假に義滿を授けることを揚言したが、先鋒は美濃に入つた。既にして義弘が誅せらるゝに及び、滿兼は兵を進めず、七年二月、義滿は下野國足利莊を滿兼に與へて和解したので、滿兼は鎌倉に引き揚げた。九年、陸奥の伊達鎌宗を擊つて平げ、十六年七月二十七日、三十三歲で歿した。

あしかがもちうぢ

足利持氏

名號 幼名を幸王丸といひ薙髪して道鑠と稱した。法名を長春院道鑠揚山といふ。

系統 關東管領足利滿兼の子である。

事蹟 後小松天皇の應永十六年に管領となり、十七年に左馬頭となつた。時に叔父足利滿隆は、密に管領を望み、持氏を除かうと考へ、二十三年、上杉氏憲と謀つて兵を擧げ、俄に持氏の邸を圍んだ。持氏は駿河に遁れ、今川範政に賴り、急を京師に告げた。將軍足利義持は、書を山東の諸州に下し、持氏を援けるやうに命じた。二十四年正月、持氏は範政と共に兵を督し、滿隆・氏憲を討平し、再び鎌倉に入り、上杉憲基を執事とした。二十六年、憲基は職を辭し、其の子上杉憲實が執事となつた。二十七年、持氏は從三位に叙し、左兵衛督に任じた。

稱光天皇の正長元年、將軍義持が歿して嗣がなかつた。これよりさき、持氏は義持の養子となつて居たので、密に將軍職を志望して居た。然るに義教が天祿座主から還俗して將軍になつたので、大いに不平を抱き、「我れ尊氏の胄を以て管領の職を享け、また曾て義持と父子の契約あり、今の時、征夷の任に居るべきもの、我れを措きて果して誰ぞ、爰ぞ膝を靑蓮院の僧に屈せんや」と稱し、漸く抗衡の念を起し、翌二年、永享と改元したけれども、持氏は鎌倉に居て正長の舊號を用ひ、家臣の諫めにより、三年八月、始めて永享の新號を用ひた。從つて京都・鎌倉の

關係は圓滑を缺き、四年九月、將軍義敎は富士遊覽に托して駿河の今川邸に赴き、暗に鎌倉の動靜を窺ひ、且つ示威を試みるに至つた。

永享八年、村上頼淸は信濃守護小笠原政康と境界を爭ひ、持氏に援を求めた。持氏は頼淸を援けようとしたが、執事上杉憲實は「信濃は鎌倉管領の分國に非ざるが故に、私に兵を動かすは宜しからず」と諫めたが、持氏はこれから憲實を疎ずるに至つた。翌九年、持氏は頼淸を援くるを名とし、上杉憲直・一色直兼に兵を授け、密に憲實を討たうとして謀が洩れた。よつて持氏は、罪を憲直・直兼に歸して二人を追ひ、自ら憲實の邸を訪うて面謁し、漸く事なきを得た。

永享十年、持氏は源義家の故事に從ひ、鶴岡八幡の廟前で嫡子賢王丸の元服式を擧げようとした。時に憲實は持氏を諫め、「先君氏滿以來皆幕府に請ひ、將軍の偏諱を受けて冠すること恒例たり、宜しく使を京都に遣りて諱字を請ふべし」と言つた。持氏は聞き入れず、六月、廟前で元服式を擧行して義久と命名した。諸將の來賀する者が多かつたが、偶々「憲實の入賀に乘じて、之を殺さんとす」との流言が起つたので、憲實は病と稱して入賀せず、事が益々紛糾し、鎌倉は騷然たるものがあり、持氏は密に兵を發して憲實の邸を襲はうと謀つた。八月、憲實は領邑上野國白井に走り、豫め變に備へ、急使を京師に派して事情を訴へた。持氏は兵を率ゐて武藏の高安寺に至り、別に一色直兼・一色時家に兵を授けて上野國白井を襲はせ、三浦時高に鎌倉を留守させた。

永享十年九月、將軍義敎は勅を奉じ、持氏征討の命を山東諸州に下し、上杉持房を將として鎌倉に向はせた。將士は多く持房に應じた。持氏は箱根山に迎へ討ち、大いに持房を破つたけれども、足柄山に向つた上杉憲直が早川尻の戰に敗れたので、持氏は退いて相模海老名の道場に陣した。偶々上野國白井に向つた直兼・時家もやぶれて海老名に歸つた。憲實は白井を發し、武藏の分陪河原に陣したが、關東の將士の應ずる者が多かつた。

既にして三浦時高は、持氏に背いて火を鎌倉に放ち、また府下を掠略し、管領の營を襲つたので、義久は扇ヶ谷に遁れ、留衞の將士の戰死する者が多かつた。持氏は益々窮し、永享十年十一月、長尾芳傳をして憲實と和を請はせたが、芳傳は伴つて持氏を迎へ、金澤の稱名寺に幽閉した。持氏は遂に薙髮して道繼と改めた。憲實は之を永安寺に移し、上杉持朝・千葉胤直・大石憲儀に護衞させ、憲直・直兼を金澤に誅し、また京師に遣使して、持氏の死を宥さんことを請うたが、將軍義敎が宥さなかつたので、十一年二月十日、持氏は永安寺で自殺した。時に年四十二歲である。これを永享の亂といふ。

あしかがもとうぢ
足利基氏

名號 幼名を龜若といひ、法名を瑞泉寺同所といふ。

系統 足利尊氏の第四子である。足利義詮の弟で、初代の關東管領である。

事蹟 後村上天皇の正平四年に、はじめて關東管領に補せられたが、まだ幼弱であつたから、執事上杉憲顯がこれを輔佐した。七年、父尊氏と共に新田義興・脇屋義治を破つた。八年、尊氏は京都に歸るに及び、畠山國淸を留めて執事とした。

正平十三年、尊氏が歿するに及び、義興らは喪に乘じて鎌倉を襲はうとした。基氏は之を探知し、國淸に命じて義興を武藏國六郷川矢口渡に誘殺させた。時に兄義詮は將軍職を繼いで日尙ほ淺かつたが、然るに基氏は久しく關東にあつて兵權を握つて居たから、將士は基氏が將軍の疑忌に觸れはしないかと心配した。よつて基氏は國淸と謀り、兵を擧げて吉野を襲はん事を義詮に請うた。義詮は大いに悅び、共に軍を合して行宮を陷れた。

これよりさき、執事の上杉憲顯は、故あつて南朝に屬したが、基氏は其の舊誼を思ひ、罪を宥めて之を招き、舊領越後を與へて其の守護とした。時に越後の守であつた芳賀禪可は、自分が捕められたのを怒つて兵を擧げた。基氏はこれを征して降し、正平二十二年四月、二十八歲で歿した。

あしかがよしあき
足利義昭

名號 南都一乘院に入つて覺慶と號したが、永祿八年に還俗して義秋と稱し、十年に元服して義昭と改め、天正三年に薙髮して昌山と號した。法名を靈陽院道住昌山大居士といふ。

系統 足利義晴の第三子で足利義輝の同母弟で、足利十五代の將軍である。但し足利義滿を初代將軍とすれば、義昭は十三代將軍である。

事蹟 永祿八年五月、三好義繼・松永久秀は將軍義輝を殺し、且つ覺慶をも殺さうとした。時に覺慶は細川幽齋（藤孝）に伴はれて近江に走り、佐々木義賢に據つて復讐を謀らうとし、還俗して義昭と改めた。然るに義賢が變心したので、十年に越前に轉じ、朝倉義景に據つて元服したが、義景も恢復の師を擧げるのに躊躇したので、十一年に幽齋は美濃に往き、織田信長に恢復の事を託した。信長は大いに喜び、越前から義昭を迎へ、ついで京都に入り、義昭を征夷大將軍にした。また義昭は參議兼左近衞中將に任ぜられた。

信長は京都にある三好黨の邸宅を毀ち、且つ諸將に課して、將軍の第を二條に營み、結構善美を盡した。當時、義昭と信長との間は離しかつたが、其の後、次第に圓滿を缺いだ。義昭は才略があり、信長を倒さうと欲し、密に諸國の豪傑と結び、且つ失行が多かつたので、元龜三年九月、信長は上書して義昭を諫めたが、義昭は固より之を懌ばず、進んで信長討滅の計畫をなし、天正元年正月、上杉謙信・武田信玄と謀つて信長夾擊を約し、毛利輝元を後援とし、また京畿の三好・淺井・朝倉の黨と結び石山・堅田に城き、將に事を擧げようとしたが、信長の部將柴田勝家・明智光秀の爲に破られ、遂に河內に追はれ、信長から官爵を削られた。時に天正元年七月で、足利氏は義滿が將軍となつてから、實に十三代約百八十年で滅んだ。

義昭は河內から紀伊の宮崎に移り、天正三年三月、中國に落ちて毛利輝元に據つた。輝元は大いに喜び、義昭を鞆津に置いて禮遇した。信長は羽柴秀吉を遣つて中國を討たせ、毛利氏の部將淸水宗治を備中の高松城に圍んだが、十年六月本能寺の變が起り、秀吉は輝元と和したので、義昭は再び世に出ることが出來ず、十六年正月、薙髮して昌山と號し、詔によつて准三后となり、後に京都に還り、室町の舊邸に居つたが、慶長二年八月十八日、大阪で歿した。時に六十一歲である。

あしかがよしあきら
足利義詮

名號 幼名を千壽王といひ法名を法華院道惟瑞山大居士といふ。晩年、坊門第に居たから、世に坊門殿と稱する。

系統 足利尊氏の第三子で世に足利二代將軍と稱する。

事蹟 元弘三年、北條高時の命により、父高氏が兵を率ゐて西上した時には、義詮は母赤松氏と共に、質として鎌倉に置かれた。四月、高氏が後醍醐天皇に歸順したので、家人は義詮を抱いて下野に走つた。五月、偶々新田義貞が

鎌倉を陷れ、北條氏を滅ぼしたので、家人二百餘名は義詮を奉じて鎌倉に入つた。尊氏は細川和氏・細川頼春・細川師氏を鎌倉に遣り、義詮を輔佐させることにした。關東の將士中には、義貞の麾下を離れ、義詮に屬する者が尠少でなかつた。建武二年には從五位下に叙せられた。

延元二年九月、鎮守府將軍北畠顯家が、奥羽から來攻した時には、義詮はこれを利根河畔に防いで敗れ、鎌倉を棄てゝ逃走したが、三年正月、顯家が鎌倉を發して京師に向つたので、義詮は再び鎌倉に歸つた。興國五年には左馬頭に任じ、正平元年には從四位下に進み、ついで參議に任じ、左中將を兼ねた。

正平五年十月、義詮は鎌倉から京都に還つた。當時、足利直義は尊氏・高師直と仲が惡かつたが、十二月、直義は師直に攻められて大和に逃れ、南朝に降つて尊氏討伐の命を受け、官軍を率ゐて北上し、自ら男山に陣し、桃井直常を坂本に屯させ、將に京都を攻めようとした。時に尊氏は足利直冬討伐の爲に九州に赴いて居たので、京都には兵が寡かつた。よつて義詮は細川清氏らの議を用ひ、京都を出て西走したが、偶々變を聞いて歸京する尊氏と會し、共に京都に入つた。ところが直義の爲に破られ、尊氏は西走し、義詮は丹波に入つた。時に正平六年二月である。

間もなく尊氏と直義は媾和し、義詮は丹波から召還された。併し直義は內心融和せず、尊氏に攻められて各地に轉戰し、遂に鎌倉に逃れたので、尊氏は鎌倉に往つて直義を討たうとし、僞つて南朝に降り、正平六年十二月、義詮に命じて北朝の崇光院及び皇太子直仁親王を廢した。七年閏二月、南朝との媾和が破れたので、義詮は細川清氏・赤松則祐（圓心）らを率ゐて官軍を破り、進んで男山の行宮に迫つた。後村上天皇は甲冑を被り、馬に御して圍を脱し、南下して賀名生（あなふ）に還幸された。よつて義詮は後光嚴院を擁立した。時に正平七年八月である。

翌八年、山名時氏は事によつて義詮に背き、南朝に降つたが、六月、楠木正儀・和田正武らの援を受け、兵を率ゐて京都に迫つた。義詮は拒ぎ戰つて敗れ、後光嚴院を奉じて美濃に走り、七月、東海・東山・北陸三道の兵を率ゐて西上し、時氏を追ひ出して京都に入つたが、八月には尊氏も鎌倉から歸京した。十三年四月に尊氏が歿し、十二月に義詮が嗣いで征夷大將軍となつた。

義詮は正平十四年に武藏守を兼ね、細川清氏を執事とした。十六年には佐々木高氏と謀り、清氏を誅しようとしたので、清氏は南朝に降り、官軍の諸將を率ゐて來攻した。義詮は敵することが出來ず、後光嚴院を奉じて近江に走り、ついで諸道から京に迫り、別に赤松氏を遣つて吉野を犯させ、官軍の退くのを見て京都に入つた。十八年には從二位權大納言に叙し、十九年には大內弘世が來降し、山名時氏もまた降つた。二十二年には正二位に進み、間もなく病臥したが、子義滿が幼少であつたから、細川頼之を執事とし、其の補佐を託し、十二月に歿した。時に三十八歳である。

あしかがよしかず
足利義量

名號 法名を長得院鞏山道基大居士といふ。

系統 足利義持の子で、足利五代の將軍である。但し足利義滿を初代の將軍とすれば、義量は三代將軍である。

事蹟 後小松天皇の應永十四年に生れ、十歳の時に正五位下右近衛中將に任じた。三十年三月に義持が將軍職を辭したので、義量は之に代つて征夷大將軍に拜せられたが、時に年十七歳である。

翌三十一年十月、參議に任ぜられ、三十二年二月二十四日、十九歳で病歿した。けだし酒を好み、濫飲が甚だしかつたからであるといふ。

あしかがよしかつ
足利義勝

名號 法名を慶雲院榮山道春大居士といふ。

系統 足利義教の子で、足利七代の將軍である。但し足利義滿を初代の將軍とすれば、義勝は五代將軍である。

事蹟 後花園天皇の永享六年に生れた。寛吉元年六月、父義教が赤松滿祐に弑せられ、幕府に主がなくなつたので、諸將は相議して義勝を擁立した。時に年八歳である。ついで從五位下に叙し、滿祐追討の綸旨を請ひ、九月、山名持豐（宗全）らを播磨に遣はして滿祐を討伐した。これを嘉吉の亂といふ。閏九月に德政（とくせい）を行つたが、良民の怨訴する者が日に繁しかつた。二年十一月に征夷大將軍に補せられ、左近衛中將に任じたが、三年七月二十一日、年僅か十歳で歿した。

義勝は馬を好んだが、偶々出雲國から駿馬を献ずるに及び、大いに喜んで之に乘り、落馬して絕命したといふ。併し建內記・公名公記などに據れば、嘉吉三年七月十二日に痢病を發し、二十一日に歿したとあるから、落馬絕命說は信じ難い。

あしかがよしすみ
足利義澄

名號 初名を義遐といひ、後に義高といひ、勅命によつて義澄と改めた。法名を法住院清晃旭山大居士といふ。世に阿波御所と稱する。

系統 堀越公方足利政知の第二子で、足利義政の養子となつた。足利十一代の將軍である。但し足利義滿を初代の將軍とすれば、義澄は九代將軍となる。

事蹟 後土御門天皇の文明十一年に生れた。延德三年四月、父政知が病歿し、兄の茶々丸が母を殺して堀越家が亂れたので、義澄は近侍にたすけられて今川氏親に寄つた。氏親はこれを細川政元（勝元の子）に致したが、政元は請うて天龍寺の喝食とした。

明應二年、政元は將軍義稙を廢し、義澄を迎立して政權を握つたが、三年、義澄は正五位下左馬頭に進み、征夷大將軍に任ぜられ、後柏原天皇の文龜二年、更に從四位下參議に進み、左中將を兼ねた。永正五年六月、周防の大內義興は前將軍義稙を奉じて、大擧して京都に入つたが、これに先立つて、義澄は義興・義稙らの入京を避けて近江に走つた。七月、義稙は將軍に重任し、義澄は官職を褫められた。七年二月、義稙は兵を發して義澄を討つたが、義澄はこれを近江の岡山城に迎へて擊ち破つた。八年八月、義澄は細川澄元と共に兵を率ゐて入洛したが、再び近江に還り、同月十四日、岡山城で病歿した。時に三十二歳である。

あしかがよしたね
足利義稙

名號 初名を義材といひ、後に義尹と改め、更に義稙と改めた。法名を惠林院道舜嚴山居士といふ。世に島公方と稱する。

系統 足利義視の子で、足利義政の養子となる。足利十代の將軍である。但し足利義滿を初代の將軍とすれば、義稙は八代將軍となる。

事蹟 後土御門天皇の文正元年に生れたが、幼時は武田信賢に據り、後には山名持豐（宗全）に歸した。延德元年三月、將軍義尙が歿して嗣がなかつたので、義政が養つて子とした。同二年、從四位下に叙せられ、征夷大將軍を

拜し、參議に任ぜられた。

明應二年、義稙は畠山政長の爲に畠山義豐を討つたが、義豐は細川政元（勝元の子）の援を得て義稙を破つた。政元は義稙の官爵を削つて周防に逐ひ、足利政知の子義澄を迎へて將軍とした。義稙は周防の大内義興に據つたが、既にして政元は殺し、細川家に家督相續の爭が起つたので、永正五年六月、義興は義稙を奉じて入京し、七月、義稙は將軍に重任し、官爵を復活し、更に從二位に進んだ。後柏原天皇の永正七年には、義澄を近江に討つて敗北したが、翌八年八月に義澄は歿した。義興の在留十一年間は、京都も稍々平穩であつたが、義興が歸國してからは、細川高國（政元の養子）が權を專らにしたので、四方は益々亂れた。義稙は鶴の身に及ばん事を恐れて、大永元年三月、淡路に逃れたので、高國は奏して義稙の官職を褫め、十一月、義澄の子義晴を迎へて將軍とした。義稙は大永三年四月、阿波で歿したが、時に年五十八歳であつた。義稙は繪畫に長じ、殊に墨繪の達磨を巧に描いた。

あしかがよしつな
足利義維

名號 足利義澄の子で、足利義晴の弟である。

事蹟 細川高國が將軍義晴を擁立して政權を握つた頃、高國の部下に内訌を生じた。高國の敵方の三好元長は、此の機に乘じて阿波に兵を擧げ、後柏原天皇の大永七年二月、京都に侵入して高國を破つたので、高國は義晴を奉じて近江に走つた。三月、元長は義維及び細川晴元を擁して和泉に入つた。よつて義維は元長の保護を受けて堺の顯本寺に居した。後に元長は叔父三好長政と隙を生じたが、長政は晴元及び本願寺主光敎（證如）と協力し、天文元年六月、元長を堺の南庄に圍んだので、元長は逃れて顯本寺で自殺した。此の時、義維は長政に捕へられて河内に送られた。後鑑の說に據れば、義維は天文七年代には阿波に居たものと見えて、阿波で義堅を生んで居る。

あしかがよしてる
足利義輝

名號 幼字を菊童といひ、元服して義藤と稱し、後に義輝と改めた。法名を光源院道圓融山大居士といふ。

系統 足利義晴の長子で、足利十三代の將軍である。但し義滿を初代の將軍とすれば、義輝は十一代將軍である。

事蹟 天文十五年十二月、義晴は義藤に加冠させようとしたが、京都が亂れて禮が行はれなかつたので、近江の坂本に赴き、日吉社祠官木下成保の宅で式を擧げ、ついで征夷大將軍となり、從四位下に叙せられた。十六年には參議兼左中將となり、十七年には京都に歸り、細川晴元を管領とし、二條の第に移り住んだ。

天文十八年六月には、また亂を避けて坂本常在寺に入り、十九年に穴生山中に移つたが、五月義晴が歿したので、轉じて比叡山の寶泉寺に宿した。二十一年正月、三好長慶は細川氏綱と和を結び、且つ義輝に向つて、「臣、もと上を凌ぐ意なし、たゞ晴元に恨ありて、氏綱を立てんとするのみ、故に晴元をして禿髮せしめ、氏綱を立つるを許さば、臣、謹んで將軍を迎へん」と言ひ、義輝に歸洛を請うたので、義輝は再び京都に歸り、氏綱を管領とした。

然るに晴元は、かねて氏綱・長慶と隙を生じて居たので、近江の堅田に奔つて薙髮した。當時、既に幕府も管領も實權がなく、長慶及び其の家臣松永久秀が邪權を振つて居た。天文二十二年、義藤は晴元を憫み、密にこれを召したが、長慶はこれを聞き、大いに怒つて

京都に亂入した。よつて義藤は晴元と共に近江の朽木に逃れたが、八月、改名して義輝と稱した。

永祿元年、義輝は長慶と和し、十二月、京都に歸つて二條本覺寺に入り、また氏綱を管領にした。七年七月、長慶は歿したが、久秀は喪を祕して、長く權を弄した。義輝はこれを惡み、且つ己を廢して足利義榮を立てようと謀つたのを聞き、密に備へる處があつた。八年五月、久秀は之を探知し、三好義繼を擁して京都に入り、十九日、急に二條第を圍んだ。義輝は宿直の士と共に奮戰し、火を放つて自殺した。時に三十歳である。

あしかがよしのり
足利義敎

名號 薙髮して義圓と稱し還俗の後に義宣といひ、また義敎と改めた。法名を普廣院道詮顯山大居士といふ。

系統 足利義滿の第四子で足利六代の將軍である。但し義滿を足利初代の將軍とすれば、義敎は四代將軍となる。

事蹟 後小松天皇の應永十年、十歳にして青蓮院に入り、十五年に薙髮して義圓と號し、ついで大僧正に任じ、三后に准じ、二十六年に天臺座主に補せられた。稱光天皇の正長元年正月、將軍義持が病に罹つたので、管領畠山滿家は諸將と議して、義圓を栗田口に迎へた。義持が歿するに及んで家を嗣ぎ、還俗して義宣と稱し、左馬頭に任じ、やがて從四位下に叙せられ、二年には參議兼中將となり、征夷大將軍に任ぜられ、ついで從三位權大納言となり、名を義敎と改め、永享二年に從一位に進み、三年に内大臣に任じ、やがて左大臣に遷つた。

これよりさき、鎌倉管領足利持氏は、密に將軍職を望んで義敎に反抗し、執事上杉憲實の諫言をきかなかつた。永享四年九月、義敎は駿河に赴き、今川範政の亭に寓して富士山を眺めたが、これは鎌倉管領を壓するためであつた。同十年、持氏は憲實と隙を生じ、兵を集めて之を殺さうとし、關東が大いに騷擾した。憲實は事を幕府に訴へたので、義敎は詔を奉じて兵を諸將に授け、持氏を討たせたので、持氏父子は敗走して自殺した。時に永享十一年三月である。

義敎は性質が果斷で、大いに幕政をひきしめようとし、また頻りに强族の勢を殺がうとした。赤松滿祐は己の所領の削られようとするのを聞いて驚き、嘉吉元年六月、義敎を自邸に招いて殺し、本國の播磨に歸つて叛いた。時に義敎は四十九歳であつた。

あしかがよしはる
足利義晴

名號 幼名を龍王丸といひ大永元年十一月、勅により義晴と改めた。法名を萬松院曄山道照大居士といふ。

系統 足利義澄の長子で、足利十二代の將軍である。但し足利義滿を初代の將軍とすれば、義晴は十代將軍である。

事蹟 後柏原天皇の永正八年に近江で生れた。十七年に細川澄元は義晴を奉じて細川高國と戰ひ、一旦勝利を得たけれども、後に敗れて播磨に走り、間もなく阿波で歿した。將軍義稙は高國の横暴を憎み、大永元年に淡路に避けたので、幕府には主がなくなつた。よつて高國は、義晴を播磨から迎立し、自ら管領となつたが、時に大永元年十一月である。義晴は此の月に正五位下左馬頭に任ぜられ十二月に元服して征夷大將軍に任ぜられた。

大永二年、從四位下に叙せられ、參議兼左中將となつた。後奈良天皇の享祿元年五月、三好長慶が京都を犯すに及び、義晴は亂を避けて、高國と共に近江に走り、朽木稙綱に寄つた。四年六月、高國が斃れてからは、細川晴元に賴り、

天文元年正月、再び京都に歸り、晴元を管領に任じた。既にして三好黨及び凶徒が京畿を横行し、政令が行はれず、用度が給しなかつたので、八年に子義輝と共に八瀬に遁れ、ついで坂本に寓した。十五年に右大將を兼ねたが、同年十二月に將軍職を義輝に讓つて老を養つた。十七年六月に義輝と共に歸京したが、十八年六月、細川氏綱・三好長慶が細川晴元と權を爭ふに及び、再び近江に走り、坂本の常在寺に入り、十九年穴生に移り、五月四日、四十歳で歿した。義晴は繪畫に達し、曾て描いた觀音像に對しては、勅書を賜はつた事がある。

あしかがよしひさ　足利義尙

名號　初名を義熙といひ、後に義尙と改めた。法名を悅山・道治・常總院などといふ。

系統　足利義政の長子で、足利九代の將軍である。但し足利義滿を初代將軍とすれば、義尙は七代將軍となる。

事蹟　將軍義政は、三十歳に及んでも子がなく、且つ稍々政事に倦んだので、弟義視を還俗させて嗣とした。ところが寛正六年に義熙が生れたので、夫人富子は義熙を山名宗全に托し、義視を廢して義熙を後嗣に立てようと謀つたので、義視と義政との不和を生じ、引いて應仁の大亂を醸すに至つた。應仁の亂に就いては「あしかがよしまさ・足利義政」の項を參照されたい。

よつて義政は義熙を嗣と定め、文明五年十二月、正五位に叙し、左中將に任じ、征夷大將軍に任じたが、尙ほ幼弱であつたから、義政が政事を親た。七年に正四位下參議に任じ、それから次第に累進して、十一年には從二位に陞り、始めて政を聽いたが、時に年十五歳である。十二年には更に權大納言に進んだ。

長享元年、近江の佐々木高頼が命を拒んだので、義熙は自ら軍を率ゐて之を征した。二年、軍中にあつて內大臣に任じ、名を義尙と改めた。延德元年三月二十六日、二十五歳で歿した。義尙は資性溫厚で、文武兩道に練達し、前途有爲であつたが、不幸にして早世したので、天下はこれを惜んだ。

あしかがよしひで　足利義榮

名號　道號を國山といひ、光德院と稱する。

系統　足利義澄の孫で、足利義維の子である。足利十四代の將軍である。但し足利義滿を初代の將軍とすれば、義榮は十二代將軍である。

事蹟　後奈良天皇の天文七年阿波に生れた。永祿八年五月、三好・松永の黨は將軍義輝を殺し、幕府に主がなくなつたので、義榮を阿波から迎へて主とした。義榮は十年に左馬頭に任ぜられ、十一年二月に征夷大將軍に任ぜられたが、此の年の九月、織田信長が足利義昭を奉じ、大擧して京都に迫るに及び、風を望んで恐れ、職はないで阿波に走り、十月八日疔を發して歿した。時に年三十一歳である。一說には二十九歳であるともいふ。

あしかがよしまさ　足利義政

名號　幼名を三寅といふ。勅によつて義成といひ、また義政と改めた。法名を慈照院喜山道慶といひ、世に東山殿といふ。

系統　足利義敎の二男で、足利義勝の弟で、足利八代の將軍である。但し足利義滿を初代將軍とすれば、義政は六代將軍となる。

事蹟　嘉吉三年七月、將軍義勝が歿して嗣がなかつたので、管領畠山持國は諸將と相議し、三寅を迎へて嗣とした。時に年僅か

に八歳である。文安三年には從五位下に叙せられ、後花園天皇の勅により、名を義成と賜はつた。四年には正五位下に移り、寶德元年四月には征夷大將軍に任ぜられ、參議兼左中將に進み、從四位下に叙し、二年には權大納言に轉じ、

（足利義政）

從二位に累進し、享德二年には從一位に進み、名を義政と改めた。應仁の大亂は義政の時に起つたので、いま其の原因を述べよう。

（一）義政の惡政＝義政は幼少で職を繼いだから、畠山持國・細川勝元・山名宗全らが互に權勢を擅にした。されど義政は長じても政治を見ず、日夜奢侈を事とし、國民には重稅を課し、また屢々德政を行ひ、其の苦を顧みなかつた。蓋し德政とは仁政のことで、人民の窮乏を救ふ爲に、租稅を免じたり、物品を惠んだり、或る期限內に於ける貸借などの契約を破棄したりする事であつた。併し當時の德政は、幕府自身が財政困難の爲に、從來の負債を免れようとして、屢々行つたものである。

（二）權臣の反目＝細川勝元は、最初、山名宗全の子是豐を養子として居たが、實子が生れると是豐を廢したから、兩家は互に反目した。此の頃、畠山持國の家に於ても、養子政長と實子義就との間に相續爭ひを生じ、斯波氏の家に於ても、養子義敏と義廉との間に相續爭ひがあつた。

（三）將軍家の相續爭ひ＝義政は三十歳に達しても子がなかつたから、弟義視を還俗させ、「他日、我、男子を生まば、則ち僧となすべし」と約して世嗣とし、勝元に其の後見を賴んだ。然るに寛正六年に義尙が生れたが、夫人富子は僧となすに忍びず、これを宗全に托し、密に義視を廢して義尙を立てようと謀つた。

斯樣に義政の惡政、權臣の反目、將軍家の相續爭ひなどが原因となり、應仁の亂が起つた。先づ後土御門天皇の應仁元年に、政長と義就とが京都の御靈林に戰つた。勝元は政長を援け、義敏を招き、兵十六萬を率ゐて幕府の東方に陣し、宗全は義就を援け、義廉を招き、兵十一萬を率ゐて西方に陣し、兩軍が京都の內外で相戰つた。開戰後六年の後に、宗全・勝元は相ついで卒し、義政は職を義尙に讓り、諸將は職に倦み、文明九年に各々兵を收めて、領國に歸つたので、戰はやんだ。此の亂は交戰十一年に及んだが、其の結果、京都は幕府・社寺・邸宅・民家など兵火に罹つて荒野と化した。飯尾彥六左衞門尉は、「汝や知る都は野べの夕雲雀、あがるを見ても落つる淚は」と詠んだ。また朝廷の式微は其の極に達し、公卿は地方に離散し、幕府の威信は全く地に墜ち、豪族は各地に割據して、世は戰國時代の姿となつた。

義政は戰亂の中にあり、人民の苦を思はず、花見・猿樂・參詣などに驕奢を極め、盛んに土木を起して室町殿を修めた。後花園天皇は此の有樣を見て、大いに叡慮を惱まされ、「殘民爭採百陽蕨、處處閉レ爐鎖二竹扉一、詩興吟酸春二月、滿城紅綠爲レ誰肥」の御製を賜ひ、これを戒められたので、義政は大いに恐懼して、暫し工事を中止したといふ。

文明五年十二月、將軍職を義尙に讓つて後には、京都の東山の麓に別第慈照院を營み、邸內に一閣を構へ、北山の金閣に倣つて精巧を盡した。最初、閣內に金箔を塗らうとし、費用がなかつたので銀箔に代へようとしたが、遂に其の事も出來なかつた。併し銀箔を塗

らうとしたので、世人はこれを銀閣と稱した。閣は四阿檜皮葺で、下層を潮音閣といひ、上層を心空殿といふ。全部の構造が高雅奇古で、林泉は相阿彌の作になり、當時の諸侯伯から物を寄進させて築營したもので、一草一木皆名品を選び、一石一竹も來歴があり、優に園藝の模範とするに足るものである。文明十五年六月に成就したので、義政はこゝに住み、和漢の古器書畫を蒐集し、屢々茶會を催し、風流の遊に耽つた。世に義政を東山殿といふ。此の時代を美術史上東山時代といひ、美術工藝が發達したが、それは禪宗の感化を受け、淡泊で、味の深い、趣に富んだものであつた。延德元年三月、將軍義尙が歿してからは、義政は再び起つて政を聽いたが、二年正月七日、五十六歳で歿した。

あしかがよしみ

足利義視

名號 本名を義躬といひ、僧名を義尋といひ、還俗して義視と改め、また薙髪して道存といつた。道號を久山といひ、また大智院と號したが、今出川の第に居たので、世に今出川殿・今出川公方などと稱した。

系統 足利義教の第四子で足利義政の弟である。

事蹟 幼少の頃、淨土寺に入つて義尋と稱した。寛正五年、將軍義政は稍々政事に倦み、且つ未だ嗣子がなかつたので、義尋を還俗させて、將軍職を讓らうとした。義尋が固辭したので、義政はこれを諭し、「他日、我、男子を生まば、則ち嗣となすべし」と誓ひ、髪を貯へさせて讓視と改め、以て世嗣となし、細川勝元に其の後見を頼んだ。時に年十七歳である。ついで左馬頭に任じ、從五位下に叙し、六年從四位に進み、參議兼左中將になり、ついで權大納言に轉じ、從三位に陞り、應仁元年、正二位に累進した。

これよりさき、義政の夫人富子は、寛正六年に義尚を生んだが、僧となすに忍びず、これを山名宗全に托し、密に義視を廢しようと謀り、遂に應仁の大亂を起すに至つた。應仁の亂に就いては、「あしかがよしまさ・足利義政」の項を參照されたい。

應仁二年、義視は伊勢に走り、北畠教具に據つたが、間もなく義政は書を贈つて、更に京都に迎へた。然るに義視が京都に入ると、「細川勝元は義政を廢して義視を立てようとして居る」といふ流言があつた。勝元はこれを聞き、義視を叡山に登らせて疑を避けしめた。ところが山名宗全は、急に人を叡山に遣り、義視を斯波義廉の第に迎へて幕府に擬へ、其の黨は皆臣と稱した。義政は之を聞いて大いに怒り、奏して義視の官爵を削つたので、文明九年、義視は土岐成頼に伴はれて美濃に往つた。

延德元年、將軍義尙が歿したので、義政は嗣を亡つたのを悔歎し、遂に義視と和し、義視の子義稙を容れて嗣とした。義視は義稙を伴つて美濃から歸り、京都の通賢寺に館し、ついで薙髪して道存と號した。二年、三宮に準じ、三年正月七日、五十三歳で歿した。

あしかがよしみつ

足利義滿

名號 幼名を春王といひ、薙髪して道有・道義・天山と號した。世に鹿苑院・北山殿といふ。

系統 足利義詮の子で、足利初代の將軍である。世に足利三代將軍と稱する。

事蹟 正平十六年、楠木正儀らが京都を襲つた際には、家人は義滿を抱擁し逃れ、播磨の赤松氏に據つたが、十七年に京都に歸り、二十一年には從五位下に叙した。二十二年十二月、父義詮が歿したので、義滿は家を嗣いだが、時に年僅か十歳であつた。二十三年十二月に征夷大將軍に任ぜられ

たが、義詮の遺命により、細川頼之がこれを輔佐した。文中二年には參議左中將に任じ、從四位に叙せられた。

文中三年には、自ら兵十七萬を率ゐ、九州に菊池武政を攻めた。武政は泰成親王を奉じて太宰府に次し、菊池武敎に兵二萬を授けて長門を守らせた。義滿は武敎と戰つて敗れたので、九州の諸豪族を誘致したが、大友・島津・松浦・秋月の諸氏が降つたので、義滿は長驅して豐後に入り、且つ細川頼之の說を用ひ、菊池氏の封境を全くする條件の下に和し、翌年京都に還つた。

義滿は新に華麗な室町殿を營み、天授四年三月に落成したが、庭に多くの美しい花樹を植ゑたので、時人はこれを花の御所といつた。

義滿は此の月に權大納言に轉じたが、弘和元年には後圓融院を花の御所に迎へ、遊宴數日に及んだ。二年には左大臣に任じ、三年には久我氏の職を奪つて淳和・奬學兩院の別當を兼ね、源氏の長者となり、また三宮に準じた。

義滿は室町殿で政治を執つたから、世にこれを室町幕府といふ。其の組織は鎌倉幕府に倣つたもので、卽ち將軍の下に管領を置き、

（足利義滿）

將軍を輔佐させたが、細川・畠山・斯波の三氏が相代つて之に任ぜられたので、これを三管領（三職）といふ。管領の下に政所・侍所・問注所があり、侍所の長官を所司といつて、赤松・一色・山名・京極の四氏がこれに任ぜられ、權力は管領に次き、世に四職といつた。此の外に評定衆・引付衆があつて政務に參與し、奉行があつて諸事を分掌した。地方には、鎌倉に關東管領を置いて東國を治めさせ、足利基氏の子孫が之を世襲した。九州・陸奥・出羽などの重要地方には探題を置き、諸國には守護地頭を置いた。

元中八年十二月、臣山名氏清が叛して兵を擧げたので、義滿は諸將を督し、大いに内野に戰つて氏清を斬り、山名氏の故地を收めて戰功の諸將に分與した。九年閏十月、大内義弘・六角滿高を南朝に遣はして和を議せしめ、兩統の迭立を約したので、玆に始めて南北兩朝が合一し、後龜山天皇は京都に還幸され、神器を後小松天皇に傳へられ、南北朝約六十年間の爭亂がやんだが、室町幕府の基礎が確立したのはこれからである。

義滿は應永元年十二月、將軍職を子義持に讓つたが、義持は僅か九歳であつたから、なほ政治を執つた。而して自ら奏請して太政大臣に任ぜられたが、武人で太政大臣に任ぜられたのは、平清盛以後絶えてなかつた所である。二年六月にこれを辭し、薙髪して道義・天山などと號した。四年には西園寺家の領を得て、三層四阿柿葺の別莊を衣笠山の麓に營み、四月十六日に上棟式を行つた。春の夜の夢には、「唐の大和の珍らしき材木を集め、色々の工みを盡して營み、黄金を以てちりばめ、美を盡せり。されば人皆之を金閣となんいひける」とある庭園は規模が廣大で、池を鏡湖と稱し、中に島を築き、銀河泉・龍門瀑などが背後の山に懸り、且つ衣笠山を利用して自然の美を集め、それに奇石・怪松・名花・異草を配した。其の地が北山にあつたから、これを北山亭と名づけたが、柱・壁・戸・障子などに金箔を施したので、世人は金閣と稱した。また庭内に鹿を放つたので、世人は鹿苑院ともいつた。義滿は室町殿を義持に讓り、金閣

に移り住み、こゝで政を聽いたので、世に彼を北山殿とも呼んだ。

應永六年、大内義弘は義滿に對する不滿から、遂に叛くに至つた。義弘は南北朝合一・九州平定・山名氏討伐などに功があり、周防・長門・安藝・豐前・紀伊・和泉の六國を併領し、兵強く、明國と通商して富有であつた。義滿は之に北山別莊建築の役をたすけさせたが、義弘は難して、「我が士卒は弓矢を以て業とす。これを土木に役す可らず」といつた。義滿は大いに怒つたが、義弘も安んぜず、遂に鎌倉管領足利滿兼と謀り、東西呼應して兵を擧げた。義滿は兵三萬を發して、義弘を和泉の堺浦に攻め、十二月にこれを斃し、ついで滿兼と和した。これを應永の亂といふ。

義滿は前後して驕臣山名・大内の兩氏を滅ぼし、世が漸く鎭まると、心が自ら驕つて奢奢を極め、其の振舞は鹿原道長・平清盛にも過ぎ、出入の儀衞を上皇の御幸に擬し、朝臣を家臣の樣に取扱つた。世にこれを公方といふ。而して贅澤の結果國費が窮乏したので、九州の商人肥富某の說を信じ、貿易の利得を以て之を補はうと欲し、應永八年五月、肥富及び僧祖阿を明に派遣し、多くの方物を獻じ、同時に明人の漂着した者を送還し、以て通好を求めた。九年八月、明使が來朝したが、明國の書に「爾、日本國王道義、心、王室に存し、君を愛するの誠を懷く」の語があつた。義滿は大いに悅び、十年二月、明に遣使して表文を致し、自ら「日本國王臣源道義」と稱し、臣禮を以て明に答へ、國辱的外交を弄した。

應永十五年三月、後小松天皇は北山の別莊に行幸されたが、義滿は大いに悅び迎へ、遊宴が旬日に亘つた。古來、行幸の遊宴としては、此の時が最も盛んであつたといふ。五月六日、義滿は五十一歲で歿した。天皇は三日間朝を廢し詔して太上皇の號を贈られたが、義持は固辭して受けなかつた。明の成祖は義滿の訃を聞き、これに恭獻王と謚した。

あしかがよしもち
足利義持

名裝 薙髮して道詮・顯山といひ、また勝定院と稱する。

系統 足利義滿の長子で、足利四代の將軍である。但し義滿を初代將軍とすれば、義持は二代將軍である。

事蹟 應永元年十二月、父義滿の讓を受けて征夷大將軍に拜せられ、正五位下左中將に任じたが、時に年僅に九歲であつた。爾來、頻に累進して、九年には正二位に叙し、やがて從一位に進み、十六年には內大臣に移つた。十九年八月、稱光天皇が卽位された時、後龜山天皇は兩統迭立の約に背いたのを憤り、義持に勅して小倉宮を立てようとされたが、義持は命を奉じなかつたので、上皇は院宣を發して兵を募られた。仍て南朝の遺臣は各地で兵を擧げたが、義持は擊つて之を平げた。二十六年には內大臣を辭し、三十年三月には將軍職を子義量に讓り、薙髮して道詮と號したけれども、三十二年二月に義量が歿したので、再び政を聽いたが、稱光天皇の正長元年正月、四十三歲で歿した。義持は書技に秀でたが、杜子美騎驢圖の如きは、氣品が頗る高く、明兆に師事したといふ事で、畫上には自贊を加へ、多くの花押を畧し、

（足利義持）

全く素人離れがして居る。

あしかがよしやす
足利義康

名號 源義家の孫で、源義國の子である。足利氏は義康を始祖とする。

事蹟 兄の義重は、上野國の新田を領し、新田氏の祖となつたが、義康は下野國の足利を領し、始めて氏を足利と稱し、足利氏の祖となつた。卽ち義康から義兼・義氏・泰氏・頼氏・家時・貞氏を經て尊氏に至り、足利幕府を創立するに至つた。義康は早く歿したが、其の子義兼は、源頼朝の夫人政子の妹を娶り、夙に頼朝に昵近して厚遇を受けた。また義兼の子孫は世々北條氏と相婚したので、北條氏からも厚遇された。出所を同じうする新田氏よりも、足利氏が世々重視された所以は玆にある。

あしろひろのり
足代弘訓

名號 初名を慶太郎といひ、通稱を式部・權太夫と呼び、寬居と號した。

事蹟 天明四年十一月二十六日、伊勢國度會郡山田に生れた。足代家は世々伊勢神宮の權禰宜であつたが、弘訓は長じて本居氏に學び、神道・國史・國文・國語に精通し、塙保己一・香川景樹・大鹽平八郎らと交際し、學者たると同時に經世に志し、屢々人民を救ひ、勤王の志に厚かつた。安政三年十一月五日七十三歲で歿した。古典に關する著述が多い。

あだちうまのじょう
足立右馬允

「みなもとのよしひら・源義平」の項を參照されたい。

あちのおみ
阿知使主

名號 後漢の靈帝の子延王の孫であるといふ。

事蹟 漢が魏に禪るに及び、神牛の敎に因つて國を出で、帶方郡（朝鮮の西北部）に赴き、國邑を建て其の民衆を保つた。旣にして東方海中にある我が王化を慕ひ、其の子都加使主と共に、七姓十七縣の民を率ゐて歸化した。時に應神天皇卽位の二十年である。

天皇は詔して、阿知使主に大和國高市郡檜前邑の地を賜はり、此處に居らしめられた。時に阿知使主は奏上して、「帶方の男女才藝あり、近頃、百濟・高麗の間に寓し、心懷安からず、希は天恩に浴することを得ん」と言つた。同三十七年、天皇は詔して、吳から縫工を招聘しようとされた。阿知使主は都加使主と共に詔を奉じ、高麗に入つて嚮導を求めたが、高麗王は使者を發して之を導かせたので、進んで吳（楊子江以南をいふ）に入り、兄媛・弟媛・吳織・穴織の四女工を求め、四十一年に筑紫に歸着し、兄媛を此の地に留め、三女を伴つて攝津の武庫港に來た時、偶々應神天皇が崩ぜられたので、三女を仁德天皇に獻じた。

履中天皇の未だ皇太子であらせられた時、住吉仲皇子が謀叛されたが、阿知使主は平群木菟と共に變を告げ、太子を扶けて石上神宮に走つた。皇太子が卽位されてから、阿知使主を擧げて藏職と爲し、食邑を賜はつた。

阿知使主父子の一族は、漸次に繁榮して攝津・三河・近江・播磨・阿波などの諸國に分布したが、雄略天皇の朝には其の族を集めて伴造を定め、漢直の姓を賜はつたが、これが東文氏で、王仁の後裔たる西文氏と共に、朝廷に仕へて文事を世襲した。坂上田村麻呂は其の裔である。

あづみのひらぶ
阿曇比羅夫

系統 阿曇(安曇)氏は、海神綿積豐玉彦命の子穗高見命に出で、海人を掌る氏である。河内・信濃・淡路・阿波・隱岐・豐後・肥前に住し、連・宿彌を稱する神別で、世々諸の職に奉仕した。

事蹟 齊明天皇の朝、新羅は唐と同盟して百濟を討滅したが百濟は我が國に救ひを求めた。天智天皇の元年、阿曇比羅夫・阿部百枝を前將軍とし、阿倍比羅夫・物部熊・守大石を後將軍とし、百濟を救はせられた。百濟の遺臣鬼室福信は、先に我が國に質となつて來て居た王子豐璋を百濟王に迎へようと請うたので、朝廷は豐璋を送還し、五月、比羅夫は舟師百五十艘を率ゐて百濟に至り、詔を奉じて豐璋を百濟王とし、且つ福信の勤勞を賞して金策を贈つた。豐璋は都を泗城に遷したが、翌年二月、新羅兵に攻められて舊都州柔に還つた。我が軍は新羅を討つて二城を陷れたが、新羅兵は更に州柔を圍み、唐將劉仁軌は舟師百七十艘を以て白村江(錦江)に陣した。八月、我が舟師は唐軍と會戰して利を失ひ、其の挾擊にあひ、溺死する者が甚だ多く、我が將朴市秦田來津は天を仰いで切齒し、奮戰して死んだ。州柔もまた陷り、百濟は遂に滅び、其の國人の我が軍に投ずる者が多かつたので、比羅夫以下の諸將は軍を收め、これを率ゐて歸朝したのである。

あどちかもん 阿閉掃部

事蹟 結城秀康の家臣狛伊勢は、嫡子に鎧の着初めをさせ、其の祝の席に、武功の譽の高い阿閉掃部を招待して、武功物語をして貰つた。掃部は曾て江州賤ヶ嶽の戰の際に、余呉湖畔で青木新兵衛といふ敵の侍と戰ひ、新兵衛の武者振の見事なことに感心して居たので、其の時の試合を物語り、「これ程見事なる武士は遂に見侍らず、如何に成果て候にや」といつた。其の頃、伊勢の許に心安く出入する青木方齋といふ浪人があり、此の祝の席にも招待されて居たが、これが青木新兵衛其の人であつたので、今更昔を思ひ出して懷しく語り合つた。此の事が秀康の耳に入り、青木も掃部と同祿で秀康に抱えられる事になつたといふ。此の話は室直清(鳩巣)の「駿台雜話」に出て居る。

あべただあき 阿部忠秋

名號 幼字は小平次、法名は透玄院蔭譽天朗空烟である。

系統 三河の人で、阿部正吉の子である。

事蹟 慶長十五年、九歲の時に德川家光の近侍となり、元和九年、小姓組番頭となり、ついで從五位下に叙し、豐後守と稱した。寛永元年、家を繼いで六千石を領し、三年、更に四千石を加へて始めて萬石に列し、同年、近習小姓の頭に轉じ、六年、更に五千石を加へ、再び小姓組番頭に復し、十年、若年寄に任ぜられ、十二年、野州壬生の城を賜ひ、加祿して二萬五千石となり、同年十月、老中に補せられ、土井利勝・松平信綱・酒井忠勝らと共に、幕府の大政に參與するに至つた。

寛永十六年、武州忍城に轉封して五萬石となり、正保四年、更に一萬石を加へ、正安四年、西丸老中となつて、家綱の傅を命ぜられたが、慶安四年、家綱が將軍となるに及び、再び本丸老中に轉じ、侍從に任じた。明暦三年、大火の爲に江戸の大半が燒失し、延ひて江戸城に及んだ。時に家光は薨し、將軍家綱はまだ幼弱で、幕府の基礎が安固でなかつたから、世人は此の大火を囚徒の所爲であると臆測し、人心惶々たるものがあつた。老中も之を疑ひ、密に將軍を城外に移して、兵備を整へようと議した。忠秋は其の不可を論じ、其の議を論止したので、風說は自ら消え、人心は漸く沈靜した。

寛文三年、二萬石を加增して八萬石となり、六年に老中を辭し、十一年に家を養子正能に讓り、延寶三年五月三日、七十四歲で歿した。忠秋は人と爲り廉直敦厚で、器識があり、よく人を愛し、弓馬の故實に達し、政治に明通したので、利勝・信綱・忠勝と共に名臣の稱が高かつた。

あべのさだたふ 安倍貞任

名號 陸奥國厨川邑に居たので、厨川二郎と稱する。

系統 陸奥國の俘囚長安倍頼時の子である。

事蹟 後冷泉天皇の天喜四年、父頼時・弟宗任と共に陸奥を押領して、朝命に從はなかつた。陸奥守兼鎮守府將軍源頼義及び義家が來攻したので、同年十一月、精兵四千を以て河碕柵に迎へ擊ち、大吹雪に乘じて、大いに官軍を敗り、勢が益々盛んで、人民を劫略し、私符を用ひて官を徵發した。

康平五年七月、頼義・義家が清原武則と協力して來攻したので、貞任は衣川關に據り、夜に乘じて官軍を襲つたが、敗れて鳥海柵に據り、轉じて厨川柵を保ち、守備を嚴にして固守し、城中に櫓を構へて矢石を放ち、大いに官軍を惱ました。頼義が火を放つて攻めたので、城中は大いに混亂した。貞任は自ら陣頭に立つて奮戰したが遂に傷いて倒れた。未だ死にいたらなかつたので、官軍は貞任を大楯に載せて頼義の前に運んだ。よつて頼義は其の罪を責めたが、貞任は默して答へず、ついで死んだ。時に四十六歲である。六年二月、首を京師に送つた。貞任は容貌が魁偉で、皮膚が肥白で、身長は六尺に餘り、腰圍は七尺四寸あつたといふ。「あべのよりとき・安倍頼時」、「みなもとのよしいへ・源義家」の項を參照されたい。

あべのなかまろ 阿倍仲麻呂

名號 一に仲滿にも作る。

系統 中務大輔阿倍船守の子である。

事蹟 幼時から聰敏で、好んで讀書をなした。從八位上に叙せられ、元正天皇の靈龜二年八月、十六歲の時に遣唐留學生に選ばれ、翌養老元年三月、遣唐押使多治比縣守・大使大伴山守・副使藤原馬養らに伴はれて入唐した。留學生吉備眞備の入唐も此の時である。

仲麻呂は唐に留ること數年、唐朝に仕へ、博識の聞え高く、玄宗皇帝から左補闕に任ぜられ、更に祕書を經て祕書監に進み、衛尉卿を兼ねた。孝謙天皇の天平勝寶四年、遣唐大使藤原清河・副使大伴古麻呂が入唐した時には、玄宗は仲麻呂に命じて接待させた。清河の歸國するに臨み、仲麻呂も之に從つて歸國しようと請うたが、玄宗は仲麻呂を遣使に任じた。時に仲麻呂は詩を賦して、「銜レ命將レ辭レ國、非才忝二侍臣一、天中戀二明主一、海外憶二慈親一、伏奏違二金闕一、悲驂去二玉津一、蓬萊鄉路遠、若木故園邊、西望懷レ恩日、東歸感レ義辰、平生一寶劍、恩贈結レ交人」といつた。尚書右丞王維も詩・序を作つて之を送つた。

既にして仲麻呂は明州に至り、唐人と別るゝに際し、月を望んで悵然として、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」と詠じ、これを漢譯して唐人に示したが、衆は皆感嘆した。仲麻呂・清河の船は海上で暴風にあひ、安南に漂泊して驩州に至つた。唐人は仲麻呂が溺死したものと思ひ、翰林供奉李白は詩を作つて悲み、「日本晁卿辭二帝都一、征帆一片繞二蓬壺一、明月不レ歸沈二碧海一、白雲秋色滿二蒼梧一」といつた。從者

は多く土人に殺されたが、仲麻呂は死を免かれ、清河と共に、唐に歸つた。

肅宗皇帝は、仲麻呂を拔擢して左散騎に任じ、常に安南都護に侍せしめた。後に光祿大夫に進み、御史中丞・北海郡開郡開國公を兼ね、邑三千戸を食むだ。稱德天皇の神護景雲四年正月、唐で客死したが、時に年七十歳であつた。代宗皇帝はこれに潞州大都督を追贈した。

仲麻呂は唐に在ること前後五十餘年に及んだ。身は榮達したが、懷郷の情が強く、書を新羅王子金隱居に托して送り、また詩が郷國に及ぶ毎に悽惻したといふ。光仁天皇は寶龜十年に詔して、「前學生阿倍仲麻呂、唐に在りて亡ぶ。家口單乏にして、葬祭闕くることあり。其れ東絹百匹・綿三百屯を賜へ」と仰せられ、葬祭の料を與へられた。仁明天皇の承和三年、遣唐使に命じて、仲麻呂に正二位を追贈された。

あべのひらぶ
阿倍比羅夫

名號 武渟川別命の後裔で、阿倍引田臣・阿倍臣・枚夫ともいふ。文武天皇の慶雲元年に朝臣の姓を賜ふ。

事蹟 崇峻天皇の二年に、勅を奉じて北陸諸國を視察したが齊明天皇の朝に越守となつた。齊明天皇の四年に、舟師百八十艘を率ゐて進發し、先づ飽田(秋田)・渟代(能代)・津輕の地方を定め、渡島(今の北海道)の蝦夷をも平げ、郡司を後方羊蹄に置き、更に蝦夷を案内者として肅慎を討ち、功によつて位二階を進んだ。六年には再び舟師二百艘を率ひて肅慎を討ち、大いに武威を輝かした。肅慎は今の黑龍江下流地方に住んだ人種で、一に靺鞨ともいひ、滿洲種族である。

齊明天皇の朝には、新羅は唐と同盟して百濟を降した。時に百濟の遺臣(鬼室福信)は、再興を計つて援を我が國に求めたので、天皇は中大兄皇子と共に、筑前に進まれたが、朝倉の行宮で崩ぜられた。天智天皇は阿曇比羅夫・阿倍比羅夫を朝鮮に遣つて百濟を救はれたが、我が軍は唐兵と白村江(今の錦江口)に戰つて利あらず、百濟は遂に亡んだ。阿倍比羅夫は太宰帥となり、大錦上に進んだ。持統天皇の時には直大肆に進み、封戸五十戸を食んだ。大寶中造大殿垣司となり、慶雲二年、中納言となり、和銅二年、從三位に叙し、養老の初に正三位大納言となり、四年に薨じた。

あべのむねたふ
安倍宗任

名號 鳥海三郎と稱する。

系統 安倍頼時の三子で、安倍貞任の弟である。

事蹟 御冷泉天皇の康平年間に、兄貞任と協力して屢々源頼義と戰つた。最後に厨川柵で軍敗れ、貞任は誅せられ、宗任は降つて捕虜となつた。康平七年三月、頼義に伴はれて京師に至り、遂に伊豫に放たれた。頼義の家にある時には、義家に親近された。後に僧となつて筑紫に居たが、松浦黨は其の後裔であるといふ。「みなもとのよしいへ・源義家」の項を參照されたい。

あべのよりとき
安倍頼時

名號 初め頼良といつた。また安太夫とも稱する。源頼義が陸奥守になつてから、同訓を避けて頼時と改めた。

系統 陸奥大掾忠良の子である。祖父を忠頼といひ、世々陸奥に住み、俘囚の長をして居た。頼時には八子があつたが、貞任・宗任が最も名高い。

事蹟 頼時は父祖の業に藉りて、勢が益々強大を極め、陸奥を横行して人民を劫掠し、部落は皆これに服し、遂に六郡—伊澤・和賀・江刺・紫波・志波・岩手—の俘囚長となつた。衣川の險に據り、そこに關を設けて衣川關といひ、海陸を跨有し、豐饒な資産を貯へ、貢賦を納めず、徭役を供せず、國守もこれを制することが出來なかつた。

後冷泉天皇の永承中に、國守藤原登任は數千の兵を發して頼時を打ち、大いに鬼切部に戰つたが、登任が敗れたので、天喜四年八月、朝廷では源頼義を陸奥守鎮守府將軍に任じ、頼時を討たしめられた。頼義が義家と共に陸奥に入つた時、俄かに天下に大赦があり、隨つて頼時も罪を許された。頼時は大いに喜び、身を委ねて歸服し、國内は平靜になつた。

既にして頼義は任期が滿ち、國府に歸らうとして、途中阿久利川に宿した。時に夜陰に乘じて、頼義の部下藤原光貞の陣營を犯し、人馬を殺傷した者がある。頼義は光貞を召して調査したが、光貞がいふには、「貞任、曾て我が妹を聘せんとせしも、我れ其の門地を蔑みて許さざりき。今回の事、思ふに貞任の所爲ならん」と。時に頼義は、「これ我れに抗するなり。光貞に抗するに非ず」といひ、乃ち貞任の所爲を疑ひ、これを捕へて罪しようとした。頼時はこれを聞いて大いに怒り、衣川關に據つて叛した。頼義は兵を發して攻め、互に勝敗があつたが、安倍富忠が官軍に屬したので、頼時は富忠を說得しようとして、兵二千を率ゐて發したが、富忠は伏兵を設けて頼時を要擊し、戰ふこと二日、頼時は流矢に當り、鳥海柵に歸つて死んだ。時に天喜五年九月である。

あまこつねひさ
尼子經久

名號 法名を省心院といふ

系統 姓は宇多源氏で、治部大輔高秀の三男高久が、近江國犬上郡尼子に居り、尼子六郎左衛門尉と稱したので、子孫はこれを氏としたといふ。代々出雲の守護で、經久の父を清久といふ。

事蹟 尼子氏は、出雲の富田(能義郡)を鎭したが、鹽谷掃部に奪はれたので、經久は出でて山中入道及び賀麻黨によつた。經久は幼時から氣節があり、文明十八年、弟及び舊臣と謀り、急に鹽谷氏を攻めて富田城を恢復した。これから武威が漸く張り、國内の豪族三澤・三刀屋・赤穴の諸氏が來屬し、遂に出雲を平定して其の主となつた。

永正七年六月、兵を起して安藝を侵掠し、鏡山城を取り、また備後に入つて甕田城を拔き、十五年八月、阿興入道宗的を攻めたが、此の時に子政久が戰死した。また經久は毛利興元・吉川興經らを味方として、大内義興と兵を構へたが、大永元年、將軍足利義晴の命を受けて、大内氏と和するに至つた。併し二年の夏、義興が安藝を從へるに及んで、また和議が破れ、三年六月、兵を率ゐて安藝に入り、北池田に陣し、毛利元就・飯井秀綱に命じて鏡山城を拔かせた。四年六月、經久は更に伯耆から安藝に赴き、金山城の後援をなし、大内義隆と戰つたが利がなかつた。元就が夜襲して義隆を破つた。享祿元年、義興が兵を率ゐて石見に侵入したので、經久はこれを防いだ。

既にして元就は尼子氏と絶ち、大内氏に款を通じたので、天文九年、經久は元就を討つたが、義隆が陶晴賢を遣つて元就を援けたので、經久は終に敗績した。これからまた連年大内氏と兵を構へるに至つた。

經久は狹少な富田城七百貫の地から起り、遂に出雲一國の主となり、隱岐・因幡・伯耆を從へ、安藝・備後を蠶食し、尼子家を强大にしたが、天文十一年十一月、八十四歳で歿した。

あまこはるひさ
尼子晴久

名號 小字は三郎四郎、民部大輔右衛門尉と稱する。

系統 尼子經久の孫で、政久の子である。

事蹟 祖父經久の後を承けて、山陰の兵權を握つた。天文五年、大内義隆が太宰大貳となり、山陽・西海を領したので、晴久は大内氏に壓迫されるのを好まず、兵三萬を率ゐて晉野鼻に屯した。義隆は陶晴賢を遣つて逆擊させたが、偶々晴久は病に罹つて軍を還し、義隆もまた師を班した。

八年十一月、晴久は一族群臣を會し、「毛利元就、藝備諸郡を略し、密に我を窺ふ、今にして之を討滅すべし」といひ、群臣も之に賛し、大兵を發して郡山城を攻めたが、義隆・晴賢らが元就を後援し、城が固くて拔けなかつたので、臣義勝は兵を還すやうに諫めたけれども、晴久は聞かずに大敗した。十年、元就が來攻したので、晴久は富田城に歸つたが、これから藝備の民は狄を義隆に通じた。

天文十二年七月には石見を侵し十三年には修理太夫となり、また備後を從へようとして、却つて安藝川で敗戰した。二十年九月、晴賢が義隆を弑した時には、晴久は幕府に請うて逆臣を誅しようとした。二十一年十二月には從五位下に叙せられ、二十三年三月には師を率ゐて美作を討ち、進んで播磨に入り、十七城を拔いたが、土寇が起つたので歸國した。

此の後、毛利氏の族と屢々戰つたけれども、武威は次第に衰へ、山陰・山陽二道の豪族は多く毛利氏に從ひ、晩年には僅に出雲半國を領するに過ぎなくなり、富田城は終に孤立の姿となつた。永祿五年十二月、四十九歳で歿した。

晴久の子に義久があつが、永祿九年毛利氏に攻められて、居を安藝國長田に移した。

あまてらすおほみかみ
天照大神

名號 御名を大日孁貴といひ、また大日孁尊ともいふ。其の御德をたつとんで、天照大神と稱し、また日神とも稱する。

名號 伊弉諾尊の皇女である。

事蹟 伊弉諾尊・伊弉冉尊が大八洲國を生まれてから、更に天下の主になるものを生まうとして、三貴子を生まれた。第一子は大日孁貴で、第二子は月夜見尊で、第三は素盞嗚尊である。天照大神は御德が高く、四方に輝いたので、伊弉諾・伊弉冉の二尊は、大いに喜んで、高天原を治めさせられた。すなはち高天原の主となつて、農業・養蠶・機織の法などをすゝめられたので、治績の大いに見るべきものがあり、萬民は天日と仰ぎ奉つた。たまたま素盞嗚尊の積惡を憤り、天岩窟にこもられたが、多くの神々の請願により、再び岩屋を出て政を聽かれた。天岩窟の變は「すさのをのみこと・素盞嗚尊」の項に詳記してある。

これよりさき、素盞嗚尊と誓約して、五子を生まれたが、其の中の天忍穗耳尊を太子として、豐葦原中國を治めさせようと思つて居られた。當時、中國では大國主命の勢力が強かつたので、まづ武甕槌神・經津主神などをやつて、これを平定させられた。

たまたま天忍穗耳尊は瓊瓊杵尊を生まれたが、天照大神は特に瓊瓊杵尊を愛せられ、天忍穗耳尊に代つて中國を治めさせようとし、勅して、「葦原の千五百秋の瑞穗國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就いて治せ、行矣、寶祚の隆えまさんこと、まさに天壤と窮無かるべし」と仰せられた。また八咫鏡・八坂瓊曲玉・天叢雲劍を授け、「この鏡を以て吾が神靈となし、猶、吾れを祀るがごとく、之を祀れ」と仰せられ、天兒屋根命・太玉命をはじめ、多くの神々を從へさせて、中國に降臨させられた。古史には其の後の事蹟を傳へない。伊勢の皇大神宮は天照大神を奉齋する御宮で、我が皇室及び國民の深く敬ひ奉る所である。

あめのうずめのみこと
天鈿女命

名號 神代の女神であつて猿女君の遠祖である。

系統 天照大神が、天岩窟に幽居された時に、天香具山の眞坂樹を鬘とし、蘿の蔦を手纏とし、小竹葉を手草に結び、手に茅纏の矛を持ち、胸乳を出し、裳緒を垂れ、岩窟の前に覆槽を伏せて蹈みならし、盛んに舞踊をやつて、列座の諸神を笑はせ、天照大神を慰められた。また天孫降臨の時に、猿田彦神を說き伏せて、天孫の爲に道案内をさせ、後に猿田彦神を伊勢の五十鈴川上まで侍送した。猿女君といふのは、天孫の賜はつた號であつて、其の子孫も猿女君と稱した。

あまくさしらう
天草四郎

「ますだときさだ・益田時貞」の項を參照されたい。

あまののりかげ
天野則景

「ゆりはちらう・由利八郎」の項を參照されたい。

あめのおしほみみのみこと
天忍穗耳尊

名號 御名を正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊といふ。

系統 天照大神の皇子である。

事蹟 天照大神は尊を愛して太子と爲し、豐葦原中國を治めしめられた。尊は天降らうとされたが、當時、大國主命が出雲を中心として、四隣に威を張つて居たので、尊は途中から歸還して、此の有樣を天照大神に報告された。よつて天照大神は、高皇產靈神などと相議し、天穗日尊・天稚彦などを出雲に派遣して、これを圖らせられたけれども、意の如くにならなかつたので、更に武甕槌神・經津主神を派遣して、出雲を征服させられたが、大國主命は遂に國土を献上し、杵築宮に隱居された。そこで天忍穗耳尊が降臨される筈であつたが、既に皇子瓊瓊杵尊が誕生して居られたので、天照大神の許可を得て、己の代りに皇子を派遣された。皇子は天壤無窮の神勅を奉じ、天兒屋根命・太玉命をはじめ、多くの神々を從へて日向に降臨された。天孫降臨以後、天忍穗耳尊の事蹟は詳かでない。

あめのこやねのみこと
天兒屋根命

系統 神皇產靈尊の子で、中臣連藤原氏などの祖である。

事蹟 天照大神に臣事し、天岩窟の變の時には、岩窟の前で祝詞を奏せられた。而して諸神と共に、天孫の降臨に隨從して豐葦原中國に降り、太玉命と共に天照大神の委託を奉じ、天孫の爲に神籬を建てゝ奉齋し、また殿内に侍して護衛し、また齋庭の穗（稻の事をいふ）を天孫に奉献された。

あらゐはくせき
新井白石

名號 初名を璵といひ、後に君美と改めた。字を在中・濟美といひ、白石と號し、また紫陽・錦屏山人・天爵堂・勿齋などの別號

がある。

系統 新田義重の後裔である。義重の曾孫新田二郎は、薙髪して僧となり、上州荒居に居たので、新井を氏とした。父は正濟といひ、上總久留里城主土屋利直に仕へた。母は坂井氏である。

事蹟 明暦三年二月十一日に生れたが、幼少から聰明で、三歳の時には能く太字を寫し、六歳の時には書を誦し、七歳の時には演劇を見て一つも忘れなかつた。九歳の頃から日課を定めて字を習ひ、十歳の頃には久留里侯の傍に侍して、其の贈答の文書を書し、殆ど老成者の筆の樣であつた。

長じて器資が宏偉で、「生れて封侯たらずんば、死して當に圜羅王となるべし」と言つた。後に久留里侯の膝下を辭し、父と共に江戸に出て苦學した。時に河村瑞賢は女を娶はせ、學費を給しようとした。白石は辭して、「余聞く、昔潭上に小蛇あり、人其の脚を微傷す、俄に大龍の此の邊に死せるあり、これ卽ち嚮に傷くる所の小蛇なり其の殘一尺に餘れりと、翁、今娶はすに孫女を以てせんとす、これ小蛇を傷るなり、後來余家を興す日、其の殘豈に小ならんや」と言つて從はなかつた。

（新井白石）

天和二年、堀田正俊に仕へ、居ること十年にして志を得ず、去つて木下順庵に遊んで學を勵み、和漢古今の典故に通じ、木門の十哲と稱せられた。併し白石は赤貧であつたから、順庵はこれを加賀侯に推薦しようとした。時に順庵の門人に、加賀出身の岡島石梁（仲通）といふ人があつたが、此の話を聞いて白石に語り、「余、笈を負ふて遠遊こゝに數年に及ぶ。近日、家書を得たるに、老母日に衰頽し、閭に倚りて余が歸るを待つ。一念到る毎に百感心に集まる。余、若し先生の推薦により、本藩に褐を釋く事を得ば、願足れり」といつた。白石はこれを聞いて、友情禁ずる能はず、順庵に請うて石梁を加賀侯に推薦した。元祿六年、甲府の德川家宣に招聘されて儒官となり、待遇が日に厚かつたが、寶永六年、家宣が六代の將軍となるに及び、文學を以て殿中に給事し、兼ねて大政に參與し、間部詮房と謀つて事を決したので、權勢が一時朝野を壓した。

白石は家宣に封事を上り、閑院宮家の創立に盡力した。其の封事の大意に據れば、「南北朝以來、皇室の衰頽が甚だしく、東宮を除く外は、皇子も皇女も佛門に入り、其の胤を絶つのを慣例とした。朕しい匹夫匹婦でさへ、子を生めば其の室家のある事を希ふ。天子の尊きを以て、皇子を佛門に捨てるのは、何うした事であらうか。宜しく皇子を冊立して親王と爲し、皇女は皆降嫁すべきである」と。家宣は白石の建議を納れ、中御門天皇に上奏したが、天皇はこれを嘉納され、寶永七年八月、皇弟秀ノ宮直仁を親王と爲し、ついで料田千石を遺り、閑院宮と稱し、以て世襲親王家とされた。從來、世襲親王家は、僅かに伏見・京極・有栖川の三家に過ぎなかつたが、ここに閑院宮家を加へて四親王家となつた。

從來、朝鮮使節の待遇が厚きに過ぎ、對馬から武藏に至る二十二國は接待に疲れ、幕府に於ても、勅使よりも禮遇して居たので、白石は建議して進見・賜饗・辭見の禮を議し、猿樂・雅樂を奏する事を止めるなど、大いに舊例を改めて、我が國の尊嚴を示した。正德元年十月、朝鮮使節趙泰億らが來聘したが、進見の日、使節と堂上で禮法に就いて爭論し、意氣が頗る激切で、遂に使節を屈服した。また朝鮮に與ふる國書に、將軍を大君と記する事を停め、日本國王源某と署する樣になつたのも、白石の建議に基づいて居る。此の月、白石は功を以て從五位下筑後守に任ぜられ、祿五百石を加增され、舊知と合せて千石を食んだ。

正德二年十月、家宣は疾するに臨み、白石及び間部詮房に遺命して、幼將軍家繼を輔佐させ、改革する所が多かつた。先に綱吉の世には、財政の困難を救ふ爲に、金貨には銀・銅を多く混ぜ、銀貨には錫などを混ぜ、貨幣の數を增し費用の不足を補つて來たので、貨幣の價格が下り、物價が高くなり人民が大いに苦しんだので、白石は家繼に建議し、貨幣の改鑄を始めた。また世の泰平と共に、長崎では奢侈贅澤品の輸入が盛んで、金銀の流出が甚だしかつたので、白石は之を憂へ、外國貿易を制限した。卽ち正德五年正月、幕府は長崎貿易の新例を定め、支那船は年三十隻、和蘭船は年二隻に限り貨物の價額は、支那は銀六千貫を限り、其の中銅三百萬斤を銀に代へて交附し、和蘭は銀三千貫を限り、其の中銅百五十萬斤を銀に代へて交附し、以て金銀の海外濫出を防いだ。また正德年間は、密貿易が盛んに行はれたので、外商には信牌を與へて證とし、之を有しないものゝ來航を禁じ、西海の諸藩に命じ、密貿易を爲す者を捕へさせた。

當時、幕府の號令文章は、多くは白石が草したので、大いに俗吏に忌まれ、謗議が漸く起り、執政も白石を鬼と稱して憚かつた。正德六年四月、將軍家繼が歿し、紀伊侯德川吉宗が入つて八代將軍となつたが、吉宗は白石の畫策を以て、德川氏の舊規を改めるものと非難したので、白石も當世に意なく、野に下つて屏居し、門を閉ぢ客を謝し、日夜典籍を槃みとして餘生を送り、享保十年五月十九日六十九歳で歿した。江戸淺草本願寺中の圓照寺に葬る。

白石は博學多識で、和漢の典故に精通し、家宣・家繼の二代を合せ、僅か八年間政治に參與したに過ぎなかつたが、其の間に献替する所が頗る多かつた。或は閑院宮家を立て、或は朝鮮使節の待遇を改め、勘定奉行荻原重秀の奸惡を黜け、外國貿易を制限して金銀の流出を止め、惡貨を改鑄して慶長の純質に復し、風俗を改め、采覽異言・西洋紀聞を著して洋學の權輿を爲し、銅版を鑄造して輿圖を天下に周布する事を計るなど、頗る見るべきものがあつた。

門人には土肥霞洲・益田鶏樓らがあり、著書には、采覽異言・西洋紀聞の外に藩翰譜・讀史餘論・折焚柴の記・經邦典例・本朝軍器考・五事略・古史通・東雅・紳書・改貨議・和蘭紀事・西洋圖說・蝦夷志など三百餘種がある。

ありすがはのみやたる
ひとしんわう

有栖川宮熾仁親王

系統 有栖川宮は、後西天皇の皇子幸仁親王を祖とする。寛文七年四月、幸仁親王は高松宮を相續し、同十二年六月、有栖川宮と改められた。蓋し京都紫野の有栖川に、宮の別莊があつたからであらう。幸仁親王から正仁・職仁・織仁・韶仁・熾仁を經て、熾仁親王に至る。

事蹟 慶應三年十二月に總裁となられた。明治元年二月、朝廷は德川慶喜・松平容保以下の官爵を削り、熾仁親王を征東大總督に任じ、西鄕隆盛を參謀とし、橋本實梁は東海道から、高倉永祐は北陸道から、薩・長以下二十餘藩の兵を進めて江戸に向はせられた。熾仁親王は海路駿河に進み、總督府を駿府に置いて諸軍を督せられた。慶喜

は深く前非を悔い、上野の寛永寺に退いて恭順の意を表し、「幕府の君臣、皆、恭順、以て朝命を待つ」の旨を書し、山岡鐵太郎に托して駿府に遣り、これを熾仁親王に上つた。鐵太郎は隆盛に會し、江戸の狀況を述べ、寛典に處せられん事を請うた。官軍が江戸に迫らうとする時に當り、德川氏の代表者勝安房は、更に隆盛と內議し、慶喜の罪を謝し、寛典を請うたので、熾仁親王は進擊の期を緩め、隆盛を朝廷に遣つて江戸の處分問題を議せしめ、江戸城及び軍艦・兵器を收め、慶喜の死一等を減じて、水戸に幽閉せしめられた。其の後、朝廷では家齊の曾孫田安家達に宗家を繼がせ、駿河・遠江・陸奥の內七十萬石を賜ふ事になつたので德川家も絕えず、江戸市民も兵火の難を免かれることが出來た。

熾仁親王は更に東北地方の平定に盡力された。卽ち舊幕臣の中には、慶喜の恭順を喜ばない者があり、伊門五郎・本多敏三郎らは彰義隊を組織し、輪王寺宮公現法親王（後の北白川宮能久親王）を擁して上野に據つたので、熾仁親王は市內の紛擾を避ける爲に、解散を命ぜられたけれども、應じなかつたので、之を討たせられたが、敗れて會津に走つた。また大鳥圭介は下總の鴻臺に至り、轉じて宇都宮に據つたが、これも官軍に破られて會津に走つた。

時に會津藩主松平容保は、奧羽越後の諸藩と結んで江戸幕府の恢復を志し、若松城に據つて抵抗したので、官軍は白河口・越後口から進み、包圍殆ど一箇月に亘つたが、明治元年九月、城中は食糧・彈藥に窮し、容保は城を致して降伏した。これよりさき八月二十二日、藩中の少年から成る白虎隊三十八名は、藩主に從つて瀧澤村に至り、戸ノ口原に奮戰し、二十三日萬難を排して若松城に入らうとしたが、官軍の爲に道を塞がれたので、殘る十六名—飯沼貞雄・林八十治・梁瀨竹次・西川勝太郎・井深茂太郎・石田和助・伊藤俊彥・有賀織之助・津川潔美・梁瀨勝三郎・野村駒四郎・篠田義三郎・鈴木源吾・間瀨源七郎・安達藤三郎・永瀨雄次—は飯盛山に登り、若松城の天主閣の烟燼に沒するのを眺めて、城の陷るものと考へ、「主辱められるれば臣死す」と慷慨し、跪いて城を拜し、互に刺しちがへて死んだ。何れも十六七歲の少年である。

また幕府の海軍副總裁であつた榎本武揚は、明治元年八月、軍艦八隻を率ゐて品川灣を脫し、途中で鳳凰の爲に二隻を失ひ、會津に應援しようとして松島灣に居たが若松城が陷るに及んで、偶々來り投じた大鳥圭介と共に、函館に航して五稜廓に據つたので、黑田清隆・山田顯義らは之を討ち、明治二年五月、武揚が降伏したので、東北地方は全く平定した。

熾仁親王は明治三年兵部卿に任じ、爾來、主として軍務に盡力されたが、明治十年、隆盛が鹿兒島の私學校徒に擁せられ、兵を擧げて熊本城を包圍するに及び、二月十九日、熾仁親王は朝命を奉じて征討總督となり、陸軍中將山縣有朋・海軍中將川村純義を參軍とし大阪を經て福岡に上陸し、此の地に總督府を置いて軍務を監督された。三月、官軍は南進したが、賊軍は高瀨・吉次越・植木・田原坂などの要害に據つて防いだので、官軍は容易に進むことが出來ず、殊に田原坂では激戰十七日に亘り、拔刀隊が入り亂れて互に勝敗があり、四千餘人の死傷者を出すに至つた。又熊本城との聯絡が容易に通ぜず、城將谷干城は孤城五旬に及び、兵糧・彈藥が殆ど盡き、漸く危險に瀕したが、四月、黑田清隆の別軍が八代に上陸し、敵の背後を突いて城內との聯絡を取るに及び、賊軍は圍を解いて南走した。よつて熾仁親王は、四月十七日總督府を熊本城に移し、更に人吉・佐土原・延岡などの賊軍を掃蕩させ、九月、大擧して城山を攻め、

隆盛の徒を屠り、全く西南の地を平定された。「さいがうたかもり・西鄕隆盛」の項を參照されたい。

熾仁親王は後に大勳位陸軍大將に昇られたが、明治二十七年に至り、日淸兩國の平和が破れ、八月宣戰の大詔が下り、九月、大本營を廣島に進め、明治天皇が親しく軍事を督せられた時には、熾仁親王は參謀總長となり、次長川上操六と共に輔弼し、心力を盡して作戰計畫に當られたが、同二十八年一月、御年六十一歲で薨ぜられた。

ありまはるのぶ 有馬晴信

名號 通稱を十郎、また左衞門太夫・修理太夫とも稱する。

系統 藤原純友の子直純は天慶の亂に際して逃れたが、後に赦されて官位を拜し、一條天皇の正曆年中に、肥前國彼杵郡大村久原城に居し、子孫は世々大村氏を稱した。直純から六代目の幸澄は、源頼朝に仕へて京都大番を勤めたが、其の子經澄は建保年中に肥前の高來郡を領し、有馬に居城（日野江城・原城）を築いたので、子孫は有馬氏を稱した。いま系次を示すと、經澄・朝澄・家澄・通澄・貞澄・澄世・滿澄・氏澄・貴純・尙鑒・晴純・義貞に至る。義貞の子は卽ち晴信である。

事蹟 永祿五・六年頃、父義貞は口ノ津港を開き、葡萄牙人と貿易を營み、耶蘇會の宣敎師アルメイダに布敎を許し、天正四年には自ら洗禮を受けて布敎を援助した。

晴信は兄義純の後を嗣いで領主となり、南蠻貿易を營んで福裕であつたが、天正七年、宣敎師アレッサンドロ・ヴァリニヤーニの說に感じ、自ら洗禮を受けて敎名をプロタジオと稱し、原城の邸宅附近に神學校（セミナリオ・コレジオ）を建てたが、これが本邦最初の基督敎學校である。セミナリオは上流社會の少年子弟を收容して、これに基督敎の大意を授け、讀書・習字の外に羅典語・葡萄牙語を學ばせ、また自由學藝を課した。セミナリオの生徒中から、耶蘇會士になる者を選拔して修練所（修道院ともいひ、當時、豐後の臼杵に建てられた）に收容し、こゝで二年間の嚴格な宗敎的訓練を卒へた修道士中の優秀者をコレジオに入學させる。コレジオで一層高尙な神學・語學及び必要な學藝を授けたが、歐羅巴から來てコレジオの學生になつて居る者には、特に日本語・佛敎を授けた。また晴信は領內數箇所に敎會堂を建て、有馬を以て切支丹傳道の根據地とした。

Seminar·Arimaense in Iapone

天正十年には甥千々石清左衞門を遣ぬ羅馬法王グレゴリオ十三世の許に派遣した。清左衞門は大友義鎭の使節伊東祐益・大村純忠の使節中浦（名不明）・原（名不明）と共に、前後九年間の歲月を重ねて歐羅巴を遍歷して來た。この四名は何れも十五六歲の少年であつたから、世に天正少年遣歐使といふ。遣歐使の事は「おほともよししげ・大友義鎭」の項を參照されたい。

文祿征韓の役には、晴信は小西行長・宗義智・松浦鎭信・大村喜前・五島純玄らと共に第一軍を組織し、出征して特功を樹てた。豐臣秀吉の歿後、關ヶ原の戰が起るに及び、行長の諜狀を得て、之に應じようとしたが、喜前の建議によつて中止し、子直純に兵二千を授けて、行長の領邑を侵し、水俣城を攻めさせた。西軍が關ヶ原で大敗するに及び、城守は自殺して城が陷つた。よつて晴信は直純を遣はし、捷を德川家康に報ぜしめ、以て食邑を保つことを得た。慶長

十二三年頃、晴信は家康の命を受け、奇補香を求める爲に、商船を艤して亞媽港に寄港させたが、船人が亞媽港人と爭論し、悉く殺されて貨財を奪はれた。晴信はこれを聞いて大いに驚き、駿府に家康を訪ふて訴へ、亞媽港の船が長崎に入津したならば、加比丹を誅して其の罪を斷ずべき指令を受けたが、慶長十四年十二月、遂に長崎港外で葡萄牙船を擊沈するに至つた。

晴信は本多正純の臣岡本大八と善かつた。時に大八は晴信を欺き、「卿、先年蠻船焼打の功あるにより、前將軍（家康）これを賞せられ、其の舊領なれば、鍋島勝茂が領有する肥前の内三郡を給ふべしとの内旨を、正純既に奉じたり」といひ、御敕書の案を僞造して示した。晴信は大いに喜び、大八に托して屢々正純に金銀を贈つた。大八は悉く之を私し、更に晴信を欺き、「この事は江戸の將軍（秀忠）より布達ある筈なれば、江戸老臣へも金銀を贈るべし」といひ、銀六百枚を僞受した。既にして晴信は稍々これを疑ひ、手書して正純に問ふた。よつて大八の奸計が露顯して罰せられ、晴信も連座して旨に達つた。大八は獄中から上書し、「晴信は唐船互市の事に關して、密に長崎奉行長谷川藤廣を暗殺せんことを謀る」よしを訴へたので、再び晴信を大八と對決させたが、晴信の語が塞つた。乃ち大久保長安に命じて、晴信を甲州に配流し、其の封を奪ひ、子直純に新に四萬石を給して祀を存せしめた。時に慶長十七年三月である。晴信は配所に在つて憂悶し、同年五月に自刄した。或は死を賜はつたのであるともいふ。

アレクサンドル
Alexander

系統　マケドニヤ王フィリップの子で、母をオリンピヤスといふ。

事蹟　西紀前三五六年（我が孝安天皇の三七年）に生れた。幼時希臘の哲學者アリストテレスの薫育を受け、文學を好み、ホーマーの詩篇を愛讀し、イリヤッド物語中の勇士アキレスに私淑し、長ずるに及んで武術を鍛練し、特に騎射に長じ、十八歳の時父王に從ひ、ケーロネヤの戰に大功を建てた。父王の歿後、西紀前三三六年二十歳で即位したが、沈着果斷で、内治を整へ、希臘を征し、父王の意志を繼いで、波斯遠征の軍を起し、西紀前三三四年の春、步兵三萬、騎兵五千を率ゐて遠征の途に上つた。

（アレクサンドル大王）

先づ小亞細亞に渡り、トロヤで勇士アキレスの墓に參拜して其の幽魂を弔し、波斯の大軍をグラニクス河畔及びイッススに擊破し、南進してフェニキヤ・パレスチナ・埃及を定め、アレクサンドリヤ市を創建し、更に東北へ轉進して波斯王ダリウス三世をアルベラに破り、僅に四年にして波斯全國を征服した。大王は尙ほ進んで印度に入り、ポールス國王の軍を破り、遂に出征後十年にして、西の方パピロンに凱旋し、希臘・波斯を併せて大帝國を建設せんとしたが、西紀前三二三年（我が孝安天皇の七〇年）三十三歳で病歿した。

大王は其の性が急で、爛醉に乘じて功臣を斬殺するなど、殘暴な行爲があつた。併し將士の心を收攬するに足る美德があつたものゝやうである。それは大王が遠征の際、或る沙漠を行軍した時、炎熱が烈しくて、全軍が皆渴に苦しんだが、偶々一兵士が兜に清水を盛つて大王に捧げたのを、大王は「朕汝が

忠誠の志を感ず、然れども朕豈獨り之を飲むに忍びんや」といつて受けなかつたが、此の話の傳はつて居るのを見ても分る。

あんえい
晏嬰

名號　字を平仲といひ、世に晏子といふ。

系統　支那の春秋時代に於ける齊の名臣である。萊の夷維に生れ、齊の靈・莊・景の三公に仕へ、節儉力行を以て重んぜられ、宰相となつても、なほ一孤裘三十年に及んだ。また博覽強記で、古今の事情に通曉し、大いに諸侯の間に知られた。蓋し管仲以後の名宰相である。

あんかうてんのう
安康天皇

名號　御名を穴穗皇子といふ。

系統　允恭天皇の第二皇子で、御母は忍坂大中姫命である。第二十代の天皇である。

事蹟　允恭天皇の崩後、皇太子木梨輕皇子は淫縱殘虐であつたから、群臣は太子に背き、同母弟の穴穗皇子に從ふ者が多かつた。故に太子は穴穗皇子を殺さうと謀つて成らず、走つて物部大前宿禰の家に匿れられたが、穴穗皇子から圍まれて、遂に自盡された。よつて穴穗皇子が即位されたが、これが安康天皇である。

天皇は都を大和國石上に遷し、穴穗宮で政を執られたが、即位の元年二月、皇弟大泊瀬皇子の爲に大草香皇子（仁德天皇の皇子）の妹幡梭姫（履中天皇の皇后で、天皇の崩後、兄大草香皇子の家にあり）を娶らうとし、根使臣を遣使された。大草香皇子は大いに喜んで勅命を奉じ、私寶珠纓を獻じて信とされたが、根使主は珠纓を私し、倖つて「皇子は勅を奉せず」と奏したので、天皇は根使主の讒を信じて大いに怒り、兵を發して大草香皇子を誅し、且つ皇子の妃中帶姫（履中天皇の皇女）を納れて皇后とし、幡梭姫を大泊瀬皇子に配せられた。大草香皇子の遺子眉輪王（中帶姫の所生）は、其の母が皇后に立たれたので、許されて宮中に養育されたが、三年八月九日の宴後、天皇の醉つて眠られた時を窺つて弑した。時に聖壽五十六歳である。大和國添下郡菅原伏見陵に葬る。

あんかんてんのう
安閑天皇

名號　御名を勾大兄といふ。また勾大兄廣國押武金日天皇とも稱する。

系統　繼體天皇の庶長子で御母を目子媛といふ。第二十七代の天皇である。

事蹟　繼體天皇の二十五年二月に即位されたが、先帝の崩御以前に即位する事の始めである。大伴金村・物部麁鹿火らが政治に參與したが、元年正月、都を大和國高市郡勾金橋宮に遷して政を執り、諸國に屯倉を置き、櫻井田部・連・縣犬養連・難波吉士らに命じて、屯倉の徵稅を司らせられた。天皇は寬大で、頗る人君の量があつたが、在位僅に二年で、聖壽七十歳で薨ぜられた。河内國古市郡高屋丘陵に葬る。

アングル
Ingres

事蹟　ジャン＝オーギュストードミニックアングルは、西紀一七八一年（我が光格天皇の天明元年）佛蘭西のモントーバンに生れ、巴里に出てダウィッド其の他の畫家に學び、希臘風を研究し、新しい古典主義の色彩を濃厚に發揮した畫家である。彼の描く所の人物畫は、彫刻的で形が整備し、描線が平滑で、而もタヴィッドの

樣に硬く冷かでなく、春の樣な氣配が見え、其の完成さに於ては、古今無類と稱せられた。殊に女性美の表現に於て然うである。また木炭の素描では、佛蘭西畫界の第一人者といはれて居る。其の代表作としては泉がある。之は裸體の少女が壺から水を浴びて居る圖で、近代女性畫の典型と呼ばれて居る。またリュッゲロとアンゼリカ・オダリスク・浴みなどの諸作も名高い。また高雅な歴史畫も多い。歿したのは一八六七年（我が明治天皇の慶應三年）である。

あんどうのぶまさ
安藤信正

名號 幼名を欽之進・欽之助といひ、長じて信行と稱し、後に信正・信睦と改めた。字を君脩といひ、欽齋・蛤翠などの號がある。晩年には鶴翁と稱した。

系統 磐城國平の城主安藤信由の子である。

事蹟 文政二年に生れた。天保六年、從五位下に叙し、弘化四年、父の遺領を襲ぎ、對馬守と稱した。嘉永六年、寺社奉行となり、安政五年、若年寄に進み、萬延元年、老中となり、外國御用取扱を命ぜられ、專ら外交の任に當つた。

當時、攘夷鎖港の論が非常に勢力を有したから、信正らの外交政策を以て、國家百年の計を誤るものとなし、目するに奸賊を以てし、これを憎む者が多かつた。

信正は公武合體によつて幕威を恢復しようとし、將軍德川家茂の爲に孝明天皇の御妹和宮（親子）の降嫁を請ひ、公武合體の上は、上下一致して力を攘夷に盡すべきを誓つた。公卿間には頗る異議が起つたが、關白九條尙忠・議奏久我建通・岩倉具視・千種有文らの盡瘁により、遂に降嫁の勅許を得た。時に文久元年十月である。然るに多くの志士は、和宮の東下を目して「幕府、朝廷を脅かして皇女を奪ふ」といひ、深く信正を惡み、文久二年正月十五日、刺客早田郡藏・河本壯太郎・黑澤五郎・高島房次郎・小田彥三郎・平山兵藏・川邊佐次衞門らの一團は、信正の登城を坂下門外に要擊し、其の腰部を傷けた。これを坂下の變といふ。

信正は文久二年四月に老中を辭し、溜詰に列した。八月、久世廣周と共に、故井伊直弼の横死をかくし、後闇い取計りを爲し、其の上に不正行爲があつたといふので、封二萬石を削られ、致仕して永蟄居を命ぜられ、慶應二年に至つて許された。間もなく戊辰の亂が起つたが、信正は奥羽諸藩と聯合して王師に抗したので、再び永蟄居を命ぜられたが、明治二年に免ぜられ、四年十月、五十三歲で歿した。

信正は聰敏機警で、能く内外の事情に通じ、常に外國交渉の任に當り、外國人の論鋒を折り、我が條理を伸張し、前後の執政中最も出色があつた。また日本人が屢々外國人を殺傷し、彼國の感情を害する事があつたが、信正はよくこれを慰撫調停して、大事に至らしめなかつた。蓋し其の手腕の非凡なことは、外交家として永く傳ふるに足るものである。

あんどうひろしげ
安藤廣重

名號 通稱を德太郎といひ後に十兵衞・德兵衞と改めた。世に歌川廣重・一立齋廣重といふ。法名を顯功院德習立齋居士といふ。

事蹟 江戸幕府の小吏で、大鋸町に住み、後に常盤町に轉じた。幼時から畫事を好んだが、十四歲の時に父母を喪つて孤兒となり十六歲の時に歌川豐廣の門人となり、十年間苦心して畫技を練り、二十五歲の時に始めて草雙紙の挿繪を描いたが、其の後、六七年間は多樣な仕事を續けたらしい。彼が畫家として頭角を現しかけたのは三十三歲前後からである。當時豐廣が歿したので、師の名を襲ぐ樣に勸められたけれども、固辭して一立齋と稱した。三十五歲の時、幕府の御馬進獻使の一員として東海道を旅行したが、天保五年三十八歲の時に出した東海道五十三次の傑作は、斯うした旅行の產果である。四十五歲の頃には甲州から富士に旅行し、また曾て日本全土の

（安藤廣重の筆蹟と印）

風景を探る爲に三年間の長旅を企てたが、此の時、彼の妻は櫛・笄を賣却して旅費を整へてやつたといふ。斯樣に苦心して諸國を巡遊し、日本風景の美と特色とを味ひ、北は奥州から南は日向・大隅に至る迄の諸名勝を描現し、當代唯一の風景畫家となり、大いに畫技を變じて廣重流を創意し、其の妙境に達したが、安政五年九月六日、六十二歲で歿した。淺草松山町東岳寺に葬る。

廣重の作物中で有名なのは、東海道五十三次・不二三十六景・諸國百景・江戸百景などの錦繪で、是等は海外にも聞えて居る。是等の中で五十三次の諸作は、よく自然の風景的情趣を捉へ、歎賞に價するものがある。

あんとくてんのう
安德天皇

名號 御名を言仁親王といふ。

系統 高倉天皇の第一皇子で、御母は建禮門院平德子（清盛の女）である。第八十一代の天皇である。

治承二年十一月、高倉天皇の中宮建禮門院德子は、平重盛の六波羅第で言仁親王を生んだ。親王は十二月に太子となり、四年正月に父帝の譲を受け、四月に即位されたが、之が安德天皇である。六月、平清盛の奏により、都を福原に遷されたけれども、十一月に至り、また舊都に復せられた。既にして清盛は薨じ、平家の勢威は衰へたが、東國に起つた源頼朝・源義仲は漸く强大となり、壽永二年に義仲は遂に京都に侵入した。平宗盛は天皇を奉じて筑紫に走り、更に讃岐の屋島に行在を營み、進んで福原に據り、京都を恢復しようとしたが、源範頼・源義經の爲に破られ、再び海に浮んで壇ノ浦に滅んだ。天皇は壽永四年三月二十四日、平家の滅亡と運命を共にし、海に投じて崩ぜられたが、時に聖壽八歲である。「たひらのむねもり・平宗盛」の項を參照されたい。

あんねいてんのう
安寧天皇

名號 御名を磯城津彥玉手見尊（しきつひこたまでみのみこと）といふ。

系統 綏靖天皇の第一皇子で、御母は事代主命の女五十鈴依姬（いすずよりひめ）命である。第三代の天皇である。

事蹟 綏靖天皇の十五年に降誕され、二十五年に皇太子となり、三十七年七月に即位された。都を大和國片鹽の浮穴宮（うなかみのみや）に遷して政を執られたが、在位三十八年、聖壽五十七歲で崩ぜられた。畝傷山南陰井上陵（やなのみなみかげのあのうへのみさざき）に葬る。

あんまひころく
安間彥六

事蹟 越後の上杉謙信と、甲斐の武田信玄とが、屢々川中島に戰ひ、勝負が決しなかつたので、甲斐からは安間彥六を、越後からは長谷川與五左衞門を出し、角力によつて勝を決するに至つたといふが、全く妄說である。即ち五戰記には、「甲越已に戰に倦み、永祿七年、各々力士を出だして相搏せしめ、川中の四郡は勝者に歸し、兵を息めんと約し、甲より安馬彥

六を出だし、越より長谷川連基を出だしゝが、長谷川勝ちて、四郡越に入る」と述べて居る。四郡といふのは高井・水内・埴科・更級の四郡を指してゐる。若し其の地が越後に屬したものならば、謙信の朱印類が存して居る筈であるが、反つて信玄の領地印章が多い。四郡は固より甲斐に屬して居る。角力の事は全く妄說である。

い・ゐ

ゐいなほすけ
井伊直弼

名號 幼名を鐵之助といひ後に鐵三郎と改めた。字を掃部といひ、埋木舍・柳王舍・樹露軒・緑舍などの號がある。通稱を掃部頭といひ、法名を宗觀院柳翁覺翁といふ。

系統 姓は藤原である。藤原良門から八代目の共資は、正暦中に備中守となり、ついで遠江守に任じ、遠江國引佐郡井伊谷に居したので、其の子共保は始めて井伊氏を稱した。共保から二十五代目の直勝は近江彦根に移り元和元年、家を弟直孝に讓つた。直孝から十一代目の彦根城主を直中といふ。直中の十四男は即ち直弼である。

（井伊直弼）

事蹟 弘化三年、兄直亮の嗣子となり、嘉永三年十一月に封を繼ぎ、安政五年四月、拔擢されて幕府の大老となつた。時に幕府は日米條約の勅許と、將軍の繼嗣とに關する二大問題で、非常な難境に陷つて居たが、直弼は斯種の問題を解決せねばならなかつた。

これよりさき、安政三年七月、米國總領事ハリスは下田港に來り、四年十一月、將軍家定に謁見し、大統領フィルモーアの書を呈し、世界の大勢を說き、我が鎖國政策の時代錯誤を指摘し、彼我の通商を求めた。老中堀田正睦は、ハリスの演述筆記及び國書の寫を示し、諸侯に通商の可否を諮ふた。水戸侯德川齊昭及び多くの諸侯は通商の不可を論じたが、越前侯松平慶永は鎖國の時勢に非なるを論じ、勅許を得て通商條約を結ぶべしと主張した。よつて正睦は時勢を察し、ハリスと通商條約の草案を議し、五年正月、自ら上京して勅許を請うたが、朝議が紛然として決せず、空しく江戸に引き揚げた。

偶々英・佛の聯合軍は、阿片戰爭で清國を破り、戰勝の餘威に乘じて日本に來航しようとする風聞があつたので、ハリスは好機逸す可らずとなし、頻りに條約の調印を促した。五年四月、直弼が大老となるに及び、深く時勢の趨向を察し、勅許を待たないで、大英斷を以て假條約に調印した。時に五年六月で、これを安政の假條約といひ、其の內容は、下田・函館の外に長崎・神奈川（横濱）・兵庫（神戸）・新潟の四港を新に開き、其の居留民の治外法權を承認し、輸出入の稅率などを規定したもので、但し下田港は、神奈川開港實施後に閉づるといふ約定である。

時に將軍家定は多病で、難局を處理する力なく、且つ世子がなかつたから、早くから繼嗣に關する議論が行はれた。多くの諸侯・有司は齊昭の子一橋慶喜を推したが、直弼は衆議を排し、家定の從弟慶福を紀伊家から迎立した。安政五年七月、家定が薨するに及び、慶福が將軍職に就いたが、これが十四代家茂である。よつて反對派の齊昭を首め、尾張・越前・薩摩の藩主及び攘夷論者は、益々直弼の專斷を與み、幕府の處置に反對した。

幕府の遣勅と、直弼の專斷とは、公卿・諸侯・志士・攘夷論者の憤慨を招き、世論は漸く沸騰し、批難の聲は頗る高くなつた。偶々水戸藩士は京都に入り、密に公卿間に運動し、孝明天皇に請ひ、「內政を整へ、外侮を防ぐべし」といふ勅書を蒙るに至つたので、直弼は傳聞して大いに驚き、急に追捕の命令を發し、間部詮勝を京都に派し、勅書下賜に關係した水戸藩士及び志士を捕へ、斷然反對派を一掃しようと決心し、（一）幕府に反對した近衛忠熙・三條實萬らの公卿を幽し、（二）齊昭・慶喜父子を首め、尾張・越前・土佐・宇和島などの諸藩主に謹慎を命じ、（三）吉田松陰・橋本左內・頼三樹三郎・梅田雲濱・安島帶刀らの志士五十餘人を捕へて投獄した。幕吏中にも連座した者がある。世にこれを安政の大獄といふ。

併しこれが爲に、直弼は世の同情を失ひ、上下の怨府となつた。時に水戸の浪士佐野竹之助・黑澤忠三郎・大關和七郎・森五六郎・山口辰之介・岡部三十郎・廣岡子之次郎・增子金八・關鐵之介・齋藤監物・鯉淵要人・杉山彌十郎・稲田市蔵・廣木松之助・蓮田市五郎・森山繁之介・海後嵯磯之介及び薩摩の浪士有村治左衞門らの十八人は、萬延元年三月三日、直弼の登城を櫻田門外に待ちぶせした。此の日、大雪は未だ霽れず、時に吹雪を伴つたが、午前八時を過ぎた頃、彼々伍々と路傍に集まり、直弼の行列に接近し、銃聲を合圖に襲擊し、從者たちと戰を始めた。直弼の轎の周圍に從者の居ないのを見て、有村治左衞門は短槍で直弼を突き、ついで其の首を斬つた。時に直弼は四十六歲であつた。武藏國在原郡世田ヶ谷村豪德寺に葬る。

霞樵

いけのたいが
池大雅

名號 名を無名といひ、また勤ともいふ。字を貨成といひ、號を九畹山樵・霞樵・竹居・鳧翁・釣叟・玉海・三岳道者・待賈堂・大雅堂などといつた。

（池大雅の筆蹟）

系統 京都の菱屋嘉衞門の子である。

事蹟 南宗文人畫の大家である。幼時から聰明多藝で、土佐光芳に畫道を學び、後には好んで漢畫を學んだ。父の歿後は家業を繼ぎ、南畫の扇面を描いて販賣した。十六歲の頃、柳澤淇園に畫道を學び、また祇園南海にも敎を乞ひ、南海から清人逼尺木の畫譜を授けられ、學んで畫技が進んだといふ。一說には清人李笠翁（漁）の芥子園畫譜を與へられたともいふ。後には清人伊孚九の筆法を喜び、これに私淑し、三十歲を超えて技が漸く熟し、遂に一格を出し、大雅堂の名は僻遠の地にも聞え、門人も多くなつて來た。青木夙夜・福原五岳らは、門人中の名高い者である。

大雅は人物畫も描いたが、得意は山水畫で、奇古な形の人物畫よりも、山水畫の方が餘程秀逸である。彼が五十歲以前の作は、行筆布置ともに穩健であるが、晩年の作は、行筆が奔放縱橫である。概して彼の作には飄逸の趣が溢れて居り、一見隨性であるが、熟視すると其の中に高い品格があり、「清い梅花」を想ばせ、筆意の妙が窺はれ、他人の達し得ない獨得の點がある。これは獨り大雅のみが能くしたので、決して第二の大雅を出さない。

大雅は財貨に恬憺であつた爲に生涯貧乏生活を脱する事が出來なかつたが、併し妻の玉蘭と共に、洛東鹿苑原の草堂に平和な生活を送り、好んで禪を修め、門人を教へ、多くの名士と交際し、暇があれば諸國を漫遊したが、雅氣に富んだ奇行・逸話が多い。安永五年四月十三日、五十四歳で歿した。

大雅の遺作中では、京都慈照寺の春秋山水圖屏風、同寺の襖に描かれた琴碁書畫圖、黄檗山方丈の襖の山水圖及び羅漢圖、東京帝室博物館所藏の西湖春景圖屏風などが名高い。

いしゐじゆうじ
石井十次

系統 日向高鍋藩士石井萬吉の子である。

事蹟 岡山孤兒院の創立者である。慶應元年四月十一日、日向高鍋城下の上江村に生れ、明治六年、八歳の時に同藩の島田小學校に入學し、翌年、宮崎の學校に轉じた。母のぶ子は同情心の強い人で、乞食に食物古着などを惠む事が屢々であつたが、十次は性質が剛直であるに拘らず、極めて仁慈の情に富み、人に物を與へる事を好んだが、此の點は母に似て居る。曾て高鍋の比木神社の例祭の時に、十次は母の織つた博多帶を締めて參詣した。鳥居の傍に多くの少年が群集して惡口を言つて居たので、何氣なく立寄つて見ると、藁帶を締めた一人の貧兒が泣いて居るので、十次は同情の餘りに、自分の博多帶を貧兒に與へ、其の藁帶を自分の腰に卷いて歸つた。父に叱られるのを恐れて、勝手口の方へ廻り、母に此の事を話したが、母は十次の同情心をほめてやつた。慈善家としての十次の生涯は、既に少年時代に開かれて居た。

明治十五年、岡山の甲種醫學校に入學したが、十七年の夏季休暇に歸省する途中で、人物養成を目的として教育會を組織し、「上江村からも偉い人物を出したい」と決心し、早速各戸を訪問して、全部落三十餘戸の賛同を得て、馬場原教育會の發會式を擧行した。經費は各戸の寄附を仰ぐ事にしたが、其の主な事業は、(一)他國に遊學生を送ること、(二)馬場原朝晩學校を起して、貧家の子弟を寄宿養育すること、(三)書籍部を設けて、次第に子弟に貸與することなどである。

暑中休暇を終つて岡山に歸つたが、同時に馬場原教育會の遊學生五名を世話し、學費を出してやつた爲に借財が出來、學費補給の爲に按摩などを稼いだが、心身過勞の結果、劇烈な神經衰弱に罹り、神崎の醫師太田杏三の紹介により、平島恒五郎の設立に係る診察所に轉地療養した。此處に六箇月程滯在したが、其の間に孤兒教育に畢生の努力を捧ぐべき機緣に遭遇した。即ち英國ブリストル孤兒院長ジョージ＝ミューラーは、世界漫遊の途次、東京・大阪・神戸で孤兒教育の實歴談を試みたが、其の講演筆記が新聞・雜誌に發表された。十次はミューラーが、「五十七年間に孤兒約一萬人を救ひ、今尚ほ二千餘人の孤兒を養育して居る」といつた言葉に感激し、「英國の孤兒が愛護されて居るならば、日本の孤兒も同樣に惠まれねばならぬ」と決意したが、時に明治二十年三月十六日である。

四月四日、神崎の或る大師堂を訪れると、備後國葦田郡藤尾村の前田つねといふ憐れな巡禮者が、二人の子供を伴つて難儀して居たので、其の一人の子供を引受けて養育する事にした。これが十次の救濟事業の端緒で、五月二十五日には池本李次を、三十一日には岡本儀助を救濟したが、何れも軒に立つて物を乞ふ不幸兒である。十次は三兒を救濟し、將來、孤兒教育に盡す旨を兩親に報告すると、父は大いに驚き、親戚の岩村貞藏を神崎に派して、「一學生で信用を天下に得る事は困難であるから、寧ろ教會の人々を發起人として天下に訴へ、一方、情深い人を探して夫人品子と共に孤兒教育に當らせ、やはり父母の意に從つて醫學校を卒業したがよい」と告げさせたので、十次は共に岡山に歸り、同地の三友禪寺を借りて、孤兒教育會の標札を揭げると共に、其の設立趣旨を發表した。孤兒教育會創立後一年間は無事に濟んだが、醫學校に通學しながら孤兒教育に從ふ事は頗る困難であつたから、明治二十二年一月十日、自分の胸底に祕められた使命に生きる事を決心し、六年間修業の醫書を燒き棄て、二月十三日、愈々第三高等中學校醫學部を退學し、孤兒教育會を岡山孤兒院と改稱し、爾來、死に至るまで孤兒院の事業に全力を傾注したが、直接に十次の教養を受けて、獨立生活を營む樣になつた者は、實に五百餘名の多きに達した。大正二年の夏病に罹り、翌三年一月、五十一歳で歿した。

いしだばいがん
石田梅巖

名號 名を興長といひ、字を勘平といふ。梅巖は其の號である。

事蹟 江戸時代中葉の學者

(石田梅巖)

で、心學の始祖である。丹波の桑田郡の人で、寶永四年、二十三歳の時に京都に出で、或る商家に勤務する傍ら神道を研究し、諸家の講莚に侍して學設を聞き、學問が大いに進み、また了雲に禪を學んで大悟し、遂に神道・佛教・儒教・道教などを調和し、心學といふ一派を開き、享保十四年、四十五歳の時に京都車屋町通御池上ル所東側に住居を定め、始めて講席を開いて心學を說いたが、講席の表柱には「何月何日開講、席錢入不申候、無緣にても御望の方には無遠慮御通り御聞可被成候」と書いて貼り、男女を別席に置き、女席には簾を懸けたといふ。梅巖は實踐道德や處世に關する事柄を平易に說明し、世間一般に廣めたが、其の敎は道話ともいはれ、當時、町民の間に盛んに行はれたが、後には次第に衰へた。延享元年九月二十四日、六十歳で歿したが、著書には齊家論・都鄙問答などがある。資性が謹愼篤實で、俗人を敎化することが懇切で、世人の尊敬する所となつた。

いしだみつなり
石田三成

名號 小字を佐吉といひ、本名を宗成といひ、治部少輔と稱する。三成は「かつしげ」とも讀む。

系統 姓は藤原氏である。一說には平氏であるともいふ。近江の人で、父を石田爲成といふ。

事蹟 十三歳の時に豐臣秀吉に擢用された。曾て秀吉が鷹狩に出で、觀音寺に入つて茶を貰はうとした時、佐吉は始め巨盞に六七分の溫茶を進め、次に半盞に少煖の茶を進め、次に薄茶を碗に盛つて進めたので、秀吉に認められた者である。佐吉は才氣があつて深く寵遇され、天正十三年七月には從五位下治部少輔に叙任し・名を三成と改めた。秀吉は事の大小を問はず、悉く三成に委任したので、漸く威權を振ふ樣になつた。ついで近江佐和山城主となり、十八萬六千石を食み、其の後、屢々軍に從つた。

秀吉が慶長三年八月に歿してからは、遺命によつて五大老德川家康・前田利家・毛利輝元・宇喜多

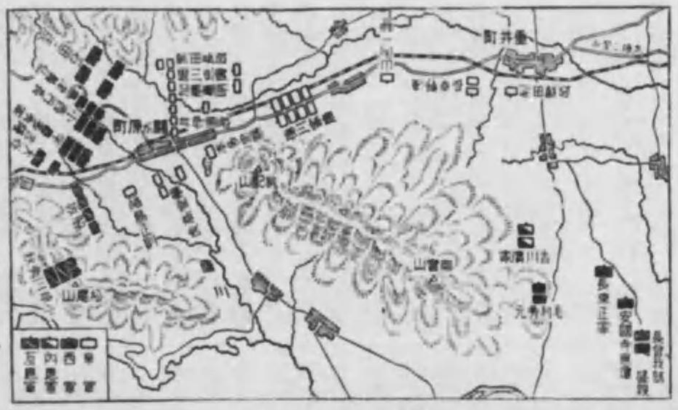
秀家・上杉景勝及び五奉行石田三成・前田玄以・長束正盛・淺野長政・増田長盛らが秀頼を輔佐した。然るに五奉行は家康と仲が惡く、また加藤清正・福島正則・淺野幸長・黒田長政・池田輝政・加藤嘉明・細川忠興・山内一豐らは三成と不和で、却つて家康に與したので、諸將は一致を缺き、形勢が頗る不穩であつた。

然るに家康は密に覇權を握るの意があり、屢々專横な振舞があつたので、石田三成らはこれを憤り、豐臣氏に不利であると觀じ、輝元を盟主とし、景勝らと議し、東西呼應して兵を擧げ、家康を挫撃しようと謀つた。よつて景勝は領國に歸り、兵を擧げて會津に據り、家康の命に從はなかつたので、慶長五年六月、家康は鳥居元忠・松平家忠・内藤家長・松平近正らを伏見城に留め、自ら諸將を率ゐて東下し、江戸を掃て會津に向つた。

よつて三成は其の虚に乘じ、秀頼の名義で諸將を招いて擧兵したが、輝元・秀家・小西行長・長曾我部盛親・長東正家・島津義弘・立花宗茂・小早川秀秋らがこれに應じたので、慶長五年七月、三成は先づ伏見城を圍んだ。守將元忠を首め、家忠・家長・近正らが善く防戰したけれども、衆寡敵せず、遂に八月に城が陷り、元忠以下家康に忠死した。よつて三成らの西軍は、東進して美濃の大垣城に據らうとした。

時に家康は、下野の小山で伏見城の變報を聞き、諸將を會して部署を定め、結城秀康を下野に留めて景勝に當らせ、直ちに軍を班し、九月、諸將を率ゐて江戸を出發し、自らは東海道から西上し、秀忠は東山道から西上した。然るに秀忠の軍は、信濃の小諸に至り、西軍の黨員田昌幸と戰つて破れた。殊に昌幸の二子信之・幸村は上田城を守つて善戰したので、秀忠は西上を妨げられ、遂に關ヶ原の戰に會する事が出來なかつた。

慶長五年九月十五日、三成の主宰する西軍約八萬人は、家康の率ゐた東軍七萬五千人と、愈々美濃の關ヶ原に衝突した。(一)西軍の秀家・行長は天満山を背に東面し、義弘・三成は其の左に、大谷吉隆らの諸將は其の右に、秀秋は松尾山に、脇坂安治らの諸將は其の麓に、毛利秀元は南宮山に、盛親・正家らは其の麓に陣した。(二)東軍は正則を先鋒とし、德川忠吉・井伊直政らがこれに次ぎ、長政・忠興らは右軍となり、一豐・藤堂高虎らは左軍となり、幸長・輝政らは南宮山に對し、水野勝成らは大垣に備へ、家康は中軍となつた。



(關ヶ原合戰圖)

此の日、家康は早朝から諸軍を督して桃配山に往き、更に半里程進んだが、西軍の諸將はこれを迎へ、誘致して來撃しようとし、未だ火蓋を切らなかつた。偶々忠吉・直政・本多忠勝らが突進したので、義弘・行長はこれに應戰した。時に秀家は正則を撃つて精々之を退けたが、長政は正則を援けて奮戰し、三成の部將島勝茂を斃した。一豐・高虎は吉隆を衝いたが、吉隆は健鬪して屈せず、勝敗の決しない中に、松尾山の秀秋は兵八千を以て家康に應じ、急に吉隆の右へ迫つた。よつて家康は諸軍に令し、鼓躁して一齊進撃を始め、聲は天地を動かしたので、西軍は大いに動搖した。家康はこれに乘じ、秀家を走らせ、吉隆を斬り、更に諸軍を合せて三成を夾撃して破つた。義弘・正家・盛親らも潰えた。斯くて西軍は大敗したが、東軍は勝に乘じて追撃し、首を斬ること四萬餘級に及んだ。此の戰に際して、天下の諸大名は大抵東西に分れ、一豐・德川兩氏の興廢は、全く此の一戰で決したから、世にこれを天下分目の戰といふ。「とくがはいへやす・德川家康」の項を參照されたい。

三成は身を以て逃れ、伊吹山中に匿れて日を送り、轉じて吉野山に匿れ、更に再擧を謀らうとして淺井郡を過ぎ、途で田中吉政に捕はれた。慶長五年十月、行長・僧惠瓊らと共に京都で斬首され、三條磧に梟せられた。

いすゞひめのみこと
五十鈴媛命

名號 媛蹈鞴五十鈴媛命といふ。

系統 大國主命の御孫である。事代主命の御子で、御母は玉櫛媛である。神武天皇の皇后である。

事蹟 神武天皇は、既に日向で吾平津媛を妃とされたが、大和を平定し給ふに及び、新に正妃を立てようとされ、廣く名族の間に求め、五十鈴媛命を得て正妃とし、即位の後に皇后とされた。古事記に比賣多多良伊須氣余理比賣とあるのも、同じ皇后を指して居る。綏靖天皇及び神八井耳命は、この皇后の所生である。

いせのたいふ
伊勢大輔

系統 伊勢の祭主大中臣輔親の女である。

事蹟 一條天皇の中宮上東門院藤原彰子に仕へ、和歌を以て聞えた。宮仕への始め、偶々八重櫻を御前に獻じた者があつた。時に上東門院の父藤原道長は、其の才を試みようとし、筆硯を大輔に授けて和歌を求めた。大輔は筆を取つて詠じ、「古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな」と記した。道長は大いに感賞し、これから才媛の名が宮中に高くなつた。蓋し榮式部・和泉式部・小式部らと其の名を齊しうする。

いせやきちべゑ
伊勢屋吉兵衛

名號 幼名を吉松といひ、後に吉兵衛と改む。

事蹟 江戸本郷の麹商に、伊勢屋彦四郎といふ大商人があつた。(一書には、此の伊勢屋彦四郎を、油屋彦兵衛に作つてある。)

或る日、近江から三名の少年が尋ねて來て、店員に雇つて貰ひたいと頼むので、主人の彦四郎が即座に採用する旨を告げると、其の中の二名は、直ちに座敷へ飛び上つたが、一名の吉松といふ少年は、脱いだ草鞋を洗つて垣根に懸けて乾して置き、次に足を濯いで座敷に通り、丁寧に主人に挨拶した。主人は吉松の心懸けのよいのを見て、末頼もしい少年と思つたが、併し表面では却つてつらく當つた。

吉松は二十餘人の雇人中で最も饒面目に働いたが、其の後數年を經て、吉松が二十五歳の暮の事である。主人が賣掛金の徴收を命じたので、早朝から寒氣を冒して奔走し、夕刻に及んで歸つて見ると、

他の者は既に暖い夕餉の膳を圍んで居た。

吉松が敷居をまたぐと、主人は直ちに、「おい吉松、貴樣はぶらぶら遊んで居たのであらう。其の罰に、水を一荷汲んで來い」と命じた。吉松は顏色も變へず、命を奉じて水を汲んで來ると、更に二荷の水を汲ませたので、內心大いに煩悶して、「主人は何故自分にだけつらく當るのであらう。これでは世の見込がない。それかといつて離國するのも面目がない。一層自殺でもしようか」と思つた。併し吉松はまた考へ直して、「これは誰か讒言したのかも知れない。此の上は如何なる苦痛も厭はない。主人の命令ならば水火の中に入るのも恐れない」と決心し、三荷の水も難なく汲んだ。

すると主人の態度が急に變り、「おい吉松、此の寒い日に嘸々疲れたであらう。さあ早く足を洗つて呉れ」と、女中に命じて湯を運ばせ、新調の綿入を着せ、彼の食膳には思ひがけない美食が盛られてあつた。

吉松は不思議に思ひながら食事を濟ますと、主人は彼を奥座敷に呼び寄せ、お前が國を出て此の店に來た時から、深く望みを懸けて居たが、其の方の心を試さうと思つて、日頃、心にも無い難題を言つて居た。然るに其の方は、困苦を忍んで、主人の命令を守つて呉れた。今からお前を一の番頭にするから、一層忠勤を勵んで呉れよ」といひ、名を吉兵衛と改めさせ、また其の旨を他の雇人にも報告した。

吉兵衛は其の後十餘年間誠實に勤めたが、主人は出資して吉兵衛に大きい呉服店を經營させ、また死ぬ時には其の呉服店を吉兵衛に讓り與へ、日頃の勤勉に報いた。吉兵衛は勤勉で、誠實で、仕事に慣れて居たので、其の業は益々發展したが、其の家から出て伊勢屋の名儀で商店を開いたものが、五十三軒にも及んだといふ。

イソップ　伊蘇普

傳略　イソップは印度の人であるともいひ、また希臘の人であるともいふ。此の人の日常物語つたと傳へられて居る寓話を集めたものにイソップ物語がある。今から約二五〇〇年前に作られたが文が短く、教訓に富んで居るので、忽ち世界各國に廣まり、我が國でも戰國時代の頃に譯された。卽ち耶蘇會の經營にかゝる神學校ではこれを譯して居る。物語中には、犬と影、狐と鶴、北風と太陽など有名な話が多い。

いたがきたいすけ　板垣退助

事蹟　土佐藩士である。明治元年、會津藩主松平容保が奥羽・越後の諸藩と同盟して、江戸幕府の恢復を謀つた時、官軍は白河口・越後口などから會津に迫つたが、退助は伊地知正治と共に參謀となり、「先づ敵の本據たる會津を攻め而して後に仙臺・米澤に及ぶ」の策を講じ、直ちに會津に向ひ、八月二十三日若松城を圍み、越後口の官軍と力を協せて重圍し、九月二十二日に之を陷れた。

木戸孝允が廢藩置縣の必要を認め、これが準備を進めた時には、退助も西郷隆盛・大久保利通と共にこれを後援した。明治六年、征韓論が高潮し、隆盛が朝鮮王問罪の師を出すべき事を主張した時には、退助も副島種臣・後藤象二郎・江藤新平らと、これに贊成したが、九月、岩倉具視・大久保利通・木戸孝允・伊藤博文らの海外視察使が歸朝し、內治の急を說き、外征の非を主張するに及び、退助は參議の職を辭し、隆盛・種臣・象二郎・新平らと袂を連ねて野に下つた。

明治七年一月十八日、退助は種臣・象二郎・新平及び由利公正・小室信夫・岡本健三郎・古澤滋の八名連署で、民選議院の設立を政府に建白した。其の建白書は滋が起草し、種臣が筆削したものであつた。民選議院は卽ち今日の帝國議會である。この建白書が「日新眞事誌」に發表されると、世人はこれに和し、一朝にして民選議院の設立を見るの勢を呈した。併し政府は加藤弘之の尙早論に贊成して採用しなかつた。

退助・種臣・象二郎・新平らは、民選議院の建白と同時に、立憲制の實施に對する準備として、「愛國公黨」を創設したが、これが我が國に於ける政黨の鼻祖である。然るに新平は佐賀の亂を起し、武市熊吉らは岩倉具視を要擊し、何れも法を犯したので、退助は切齒して、「獨子、共に事を成すに足らず、好し、余は、余の力を以て議院を設立せしめん」といひ、明治七年三月、古澤滋と共に高知に歸り、少壯子弟を集め、「立志社」を起したので、土佐は政治思想が大いに發達した。

爾來、退助は自由民權論者の木鐸となり、輿論の力で代議制を確立しようと力めた。明治八年三月、退助は再び參議に任ぜられ、孝允・利通・博文と共に、勅を受けて制度の改善すべきものを調査し、「かりに上院・下院を設け、貴族及び勳勞學德ある者を選んで上院議員に充て、立法院に擬し、下院は則ち地方官の會議所となし、以て民選議會の端を開かんこと」を上奏し、四月に明治天皇の裁可を仰いだ。斯くて七月に至り、政府は愈々元老院を開いて上院に擬し、地方官會議を以て下院に充てたので、他日に於ける帝國議會開設の階梯となつた。

西南の役後は、言論によつて己が主張を貫かうとする者が多く、退助は「愛國社」を組織し、十三年に社員八萬七千餘人（二府二十二縣）の連署で、國會開設請願書を上つた。爾來、新聞・雜誌・演說に政治を論じ、國會開設を請願する者が甚だ多くなつたので、明治天皇は時勢を察し、十四年十月、「明治二十三年を期して國會を開くべき大詔」を發せられた。

よつて退助は、此の月に自由黨を結成したが、其の結成盟約には、(一)我が黨は、我が日本人民の自由を擴充し、權利を伸張し、及び之を保存せんとする者、相合して之を組織するものとす。(二)我が黨は、國の進歩を圖り、民人の幸福を增益する事を務むべし。(三)我が黨は、我が日本國民の當に同權なるべきを信ず。(四)我が黨は、我が立憲政體の宜しきを得るものなるを信ず―と記してある。實に國會開設に對する用意といふべきである。

退助は明治二十五年八月伊藤內閣、三十一年六月憲政黨內閣（隈板內閣）の組織に際し、何れも內務大臣に任ぜられた。功によつて伯爵を授けられ、晩年には社會事業に盡力したが、大正八年七月、八十三歳で歿した。

いたくらしげまさ　板倉重昌

名號　字を宇右衞門といひ後に內膳正と稱した。法名を撑月院劍峰源光といふ。

系統　板倉勝重の三子で、板倉重宗の弟である。

事蹟　慶長八年、十六歳の時に伏見に召され、德川家康の近侍となり、十年、叙爵して內膳正と稱した。世人は臙脂內膳と呼んだが、これは兄重宗が周防守であつたから、周防を蘇芳に通はせ、兄に優つた才覺を稱美したのである。

慶長十四年、采邑千石を賜ひ、松平信綱・秋元泰朝と共に、近習出頭人となつたが、十九年には千二百石を加增された。大阪の陣に東西相和した時、重昌は撰ばれて軍使となり、大阪城に入つて豐臣秀賴の血誓を受理して歸つた。元和二年には三千石の加增があり、

合計五千二百石を領した。家康が歿してから德川秀忠に仕へ、寛永元年、父の遺領の内六千六百餘石を賜ひ、三河國深溝の領主となつた。德川家光が將軍となるに及び、書院番頭を兼ね、十年、新墾田を合せて一萬五千石を領した。

寛永十四年、島原の亂が起るに及び、重昌は追討使となり、西國の諸軍を督して原城を攻めたけれども、城兵が奮戰して容易に陷らず、屢々利を失つた。家光が松平信綱・戸田氏鐵の二將を派遣し、總軍を指揮せしめるに及び、重昌はこれを聞き、軍功の擧らないのを恥ぢ、二將の來着しないのに先立ち、十五年正月元日、諸軍を進めて總攻擊を試み、遂に銃丸に當つて斃れた。此の日、出陣に臨んで、「新玉のとしのはじめに散る花の、名のみあらはははさきがけとしれ」と詠じた。人々は皆其の志を憐んだ。時に年五十一歳である。

「まつだひらのぶつな・松平信綱」の項を參照されたい。

いたくらしげむね
板倉重宗

名號 初名を重統といひ、字を十三郎・五郎八と呼び、叙爵して周防守と稱し、法名を松雲院秀峰源俊といふ。

系統 板倉勝重の長子である。島原の亂に戰歿した板倉重昌の兄である。

事蹟 德川秀忠の近習から立身し、慶長十年四月に叙爵して周防守と稱し、小姓頭番頭となり、小十人歩行兩番頭をかね、大阪冬夏の陣に供奉し、元和六年十二月、父勝重について京都所司代となり職に在ること三十年に及び、常に禁裏を守り、兼ねて關西の諸大名を糾割し、世人から神明の樣に尊敬され、父母の樣に親愛され、父子相次いで名臣の譽が高かつた。元和九年、從四位下侍從に任じ、正保二年、左少將從四位上に進み、承應元年七月、老を以て職を辭し、明暦二年八月、下總國關宿の城を賜ひ、五萬石を領したが、同年十二月朔日、七十一歳で歿した。

京都所司代は、江戸幕府の出張所の樣なもので、常に禁裏を守り、京都・伏見・奈良の奉行を管し、二條城の事をも司つたが、重宗が京職にある時には、毎朝必ず愛宕山を拜した。人が其の故を問ふと、「吾訴を聽くに當り、偏に私なからん事を期すれども、若し誤りて一點の私を挾むことあらば、神明立所に吾命を奪ひ給へと祈願するなり」と答へたといふ。

また毎日、聽訴の席に臨めば、必ず明障子を立てたが、これは人の顏色を見れば、感情に左右されて、心が偏する事があるからである。また茶磨で茶を挽きなどして、萬事の疑獄を決したが、これは虚心平氣で訴を決斷する爲の用意である。何れも小事に過ぎないが、併し重宗の人と爲りを想見すべきである。

いちでうかねよし
一條兼良

名號 桃華老人・桃華野人・三關老人などといふ。法名を覺惠といひ、世に一條禪閤といふ。兼良を俗に「カネラ」と訓ずるのは誤りであるといふ。

系統 從一位關白一條經嗣の第二子である。兄郷嗣が病んだので、これに代つて父の後を嗣いだ。

事蹟 稱光天皇の應永二十八年に内大臣となり、三十一年に右大臣となり、後花園天皇の永享元年左大臣となり、從一位に叙せられ、四年八月攝政に任じ、ついで之を辭した。文安三年正月、太政大臣に任じ、四年六月、關白氏長者となつたが、享德二年に職を辭した。詔によつて三宮に准じ、食邑三千戸隨身兵仗及び年官年爵を賜はつたが、長祿二年にこれを辭した。後土御門天皇の應仁元年五月、再び關白に補せられ、文明二年に辭し、十三年四月二日、八十歳で歿した。

兼良は博學多聞で、最も朝典に精しく、神道に通じ、佛典を明かにし、當時才學絶倫と稱せられた。天性和歌を好み、曾て連歌新玉集二十卷を編輯し、勅撰に擬せんとしたが、細川・山名の亂に紛失した。兼良は曾て、「我れ菅相丞に勝れるもの三あり、曰く攝家、曰く太政大臣、曰く延喜以後の事を諳ず」といつた。

兼良には著書が多く、新玉集・公事根源・文明一統記・樵談治要・東齋隨筆・筆占・桃華藁集・花鳥餘情・除官雜例・代治和抄・二判問答・小夜寢覺・雲井春・年立渙語祕訣・連珠合璧・歌林良材などがある。

いちでうてんのう
一條天皇

名號 名を懐仁親王といひ法諱を精覺といふ。

系統 圓融天皇の第一皇子で、御母は東三條院藤原詮子である。第六十六代の天皇である。

事蹟 永觀二年、花山天皇の皇太子となられた。寛和二年六月、花山天皇が神器を捨てゝ出家し、宮外に出でられたので、外祖父攝政藤原兼家が參内して、急に讓位の儀を行ひ、七月に懐仁親王が即位された。これが一條天皇である。最初は兼家が權を恣にしたが、其の薨後は兼家の三子道隆・道兼・道長が權を專らにした。天皇は天資仁慈で民を愛せられた。冬夜、御衣を脱がれたから、中宮が怪んで問ふと、「方今、天寒く、天下の窮民必ず凍ゆるものあらん、朕豈獨り重襲するに忍びんや」と答へられた。天皇は在位二十五年に及び、人才が一時に輩出したので、「朕が人を得たるは、延喜・天暦の時に勝れり」といはれた。併し道長の專權に遭つて、親政し給ふことが出來ず、これを惡まれたけれども、制することが出來なかつた。寛弘八年六月、病を以て位を三條天皇に讓られ、間もなく一條院で崩ぜられた。聖壽三十六、圓城寺に葬る。後に道長は、天皇の御手箱を檢し、「叢蘭欲レ茂、秋風吹破、王事欲レ寄、讒臣亂レ國」とある宸翰を發見し、「これは己れを斥け給ふものだ」といひ、怒つて引き裂いたといふ。

いちべのおしはのわうじ
市邊押磐皇子

名號 市邊押羽・市邊忍齒にも作る。

系統 仁德天皇の孫である。履中天皇の皇子で、御母は葦田宿禰の女黒媛である。

事蹟 安康天皇は市邊押磐皇子に讓位しようと思はれたが、皇弟大泊瀬皇子はこれを知つて喜ばず、近江の韓俗の獻策を用ひ、狩獵に誘つて殺さうと謀られた。即ち韓俗は市邊押磐皇子に向ひ、「近江の來田綿の蚊屋野に猪鹿多に有り。其の載げたる角、枯樹の末に類たり。其の聚れる脚、弱木の株の如し。呼吸氣息朝霧に似たり。願はくは、皇子と、孟冬作陰之月に、寒風肅煞之晨、將に郊野に逍遥びて、聊か情を娛めて以て騁せ射む」と言つて、狩場に誘ひ出し、大泊瀬皇子は自ら弓を取つて皇子を射殺された。大泊瀬皇子は即ち雄略天皇である。

よつて押磐皇子の二子億計王(仁賢天皇)・弘計王(顯宗天皇)は、難を避けて丹波の與謝郡に入り、更に逃れて播磨に入り、名を變じて縮見屯倉首忍海部細目の家僕となられた。後に顯宗天皇は父押磐皇子の遺骨を近江の來田綿蚊屋野に求めて改葬された。

いとううこん
伊藤右近

事蹟 豐臣秀吉が木下藤吉

郎と呼び、織田信長の足軽をして居た時、妻を離別して後妻を求めようとした。よつてお萬に縁談を申込んだが、お萬は之を伊藤右近に謀つた。右近がいふには、「藤吉は名高き發明者なれば、末々の爲にも宜しかるべし。支度は我方にて致して遣はすべし。されども知らるゝ通りの困窮なれば、金錢の世話は出來まじ。其の方の伯父淺野彈兵衛長政へ參りて借り申すべし。彼は勝手能く暮すものなれば、慥しくとも無心を申すべし」と。よつてお萬は淺野方へ行き、金子一兩・木綿三反・鼻紙三折を貰つて來た。右近は大いに喜び、夜着蒲團などを洗濯し、其の外當分入用の道具類を取揃へ、菊といふ下女に同道させ、日柄を選んで婚姻させた。然るに藤吉が出世して終に太閤と仰がれてから、右近の事を思ひ出し、天下に觸を廻はして尋ねたが、右近は困窮して甲斐に寄寓して居る事が判明したので、早速右近夫婦を大阪城に呼寄せ、昔の事を思出して落涙し、鵜子の夜着蒲團に、白銀五十枚に鶴の香合の名器を添へ、お萬の方から、手づから右近夫婦に與へた。また奥方は夫婦の側により、「そなたの木綿の綿入、殊の外に汚れたり。昔の禮に我等洗濯して參らすべし。脱ぎて行かれよ」とて、別に衣服を與へた。右近夫婦は古綿入を脱いで置いて、新に貰つた衣服を着て退出した。十日程經て「先日の洗濯出來上りし」といつて城に召され、奥方から下された。後に右近は七手頭となり、七百石を食むに至つた。

いとうこざゑもん　伊藤小左衛門

名號　幼名は小四郎、後に小左衛門と改めた。伊藤家では世々小左衛門と稱したが、玆に載せたのは五代目小左衛門である。

事蹟　文政元年十二月、伊勢の室山村（今の三重郡四郷村室山）に生れた。世々味噌・醬油の醸造を家業としたが、小左衛門は幼時から讀書・算術を好み、十五歳の時には、一色正芳に就いて百日間で算術の要領を會得したといふ。小左衛門には小右衛門・小三郎・所右衛門の三弟があつたが、共に協力して家業を勵んだので、嘉永二年には仕込高が二千五百石に達し、工夫改良して良品を出す事に努力したので、室山味噌の評判は世に高まつた。

安政元年、小左衛門が三十七歳の時、京阪地方を中心とする大地震があり、其の爲に小左衛門の家屋倉庫は悉く潰れ、偶々梅雨の季節であつた爲に、貯へて置いた味噌・醬油は悉く腐敗し、各地の得意先も震災で潰れたので、掛金が全く集らず、世間の人々は、「今度の震災では、流石の室山の味噌屋も、到底もとの樣にはなるまい」と噂するに至つた。併し一時の不運に屈せず、弟達と相談して、此の難局を展開し、三年後には元の伊藤家になさうと誓つた。其の方法として、先づ仕事を分擔し、小右衛門は味噌・醬油の仕込を掌り、小三郎は松坂へ赴いて家屋・倉庫再築の材木を買集め、所左衛門は倉庫の建築に當り、小左衛門は是等の仕事を總理する事にした。斯くて熱心・忍耐・持久の精神を以て、家業の復興に勵んだので、三年半の後には、前よりも立派な家屋・倉庫ができ、醸造業は一層盛大になり、安政三年には二千八百石の醸造高を見るに至つた。

既に小左衛門は家業を復興し、より以上の繁榮を見たので、進んで事業を改善し、新事業を計畫した。即ち安政六年、四十一歳の時に横濱が開港場となつたので、自ら横濱に往つて貿易の狀況を調査し、外國で茶・生絲の需要ある事を確め、伊勢・近江・美濃の茶十三萬四千斤を買求め、これを賣つて二千六百圓の利益を得た。よつて製茶の利益を知り、萬延元年、先づ山地二段八畝歩を開墾して茶を栽培したが、製茶の事業も思ひ通り進んで、五年目には十二貫目の茶を得た。爾來、次第に山野を開墾して茶園を廣め、各地の製茶事業者に就いて、其の培養方法及び製法を研究し、大いに工夫する所があり、製造所を新築し、數年の後には驚くべき多量の產額を見るに至つた。よつて小左衛門は、地方の人々にも此の事業を勸めたので、茶の栽培をなす者が多くなつた。今日の伊藤製茶部では毎年平均二百五十萬磅の茶を製出し、米國及び加奈陀の各都市に輸出して居る。

天成の事業家であり、製茶業に成功した小左衛門は、文久二年、四十六歳の時に有利な蚕繭製絲業に着手した。桑苗二百本を植付けたのを手始めとして、茶の場合と同樣に次第に擴張し、美濃から工女二名を雇入れ、手繰で製絲を始め、次第に工女を增して三十餘名を使用したが、精良な生絲を得るには、機械によらねばならぬ事を考へ、明治七年、甥小十郎を信州諏訪の小野組製絲場に派遣し、二人の教師を雇つて機械を模造し、始めて十人繰の機械を設置し、それで機械絲を製する樣になり、百二十餘斤の生絲を横濱に輸出したが、品質の劣等な爲に一千圓の損失を受けた。そこで小左衛門は、諏訪式は富岡製絲に及ばない事を知り、更に小十郎を富岡に遣はして研究させ、翌八年、富岡に倣つて二十臺の機械を設置し、其の生產高三百餘斤を横濱に送つたが、品質の粗末と分量の少い爲に一千圓の損失を重ねた。何事につけても、創業といふ事は容易でない。

小左衛門は困難と損失とを加へたが、併し其の精神は益々强固となり、小左衛門自身も富岡工場を參觀して、製絲の方法を研究した。明治九年、蒸氣機關を新調して、製絲機械八臺を增加し、四百斤の生絲を製造したが、偶々生絲の値段が上りかけた時で、また品質も立派であつたから、始めて若干の利益を得た。

翌十年、工女となつて働いて居た二人の姪が富岡から歸つて來たので、また四臺を增加して三十二臺となし、千四百斤を得て外國商人に送つたが、始めて富岡に次ぐ優良品の評判を受け、急に其の信用を高め、十二年には更に十臺を增して四十二人繰にした。其の後更に機械及び工女を增し、近江・美濃・飛驒・信濃・上野・下野・岩代の諸國から繭を買入れ、年々千五百斤以上の生絲を製造して、少からぬ利益を擧げる事になつたのである。

小左衛門は斯樣な事業の傍ら私立學校を建設して子弟を教育し、また失業者・貧乏人に職業を與へて、働く事の悅びを味はせ、道路の修築や架橋などの公共事業にも盡力し、明治十二年五月、六十二歳で歿するに際し、一族を集めて「自分の死後は、一同協力奮鬪して、私利を避け、公益を計れ」と諭した。

いとうじんさい　伊藤仁齋

名號　幼名を維貞といひ、後に維楨と改めた。字を原七・源吉といひ、後に原佐といつた。仁齋と號し、古義堂・棠隣の別號がある。私謚して古學といふ。

系統　本姓を長澤といひ、長勝の長子である。

事蹟　幼時から頴悟であつたが、併し深沈で競はなかつた。十一歳の時、大學の治國平天下の章を讀み、感嘆して、「今世亦之を知る者有るか」といひ、儒者になつて一世に名を燿さうと志した。彼の家は元來商家で、父は醫術を修めよと命じたが、仁齋は聞き容れなかつた。生計は日に困難に陷つたが、併し志は益々堅くなつた。十九歳の時、父と共に琵琶湖に遊び、詩を賦して、「此水一夜作二平湖一、俗塵尤難レ信、世諺傳亦迂、百川流不レ已、萬谷滿相扶、天下滔

々者、應レ慢二異教徒一」といひ、また國城寺の絶頂に登る詩を賦し、「山行六七里、往到杳冥中、船遠閑々去、天長漠々空、横環村落北、湖際寺門東、男子莫空死、請看神禹功」といつた。衆人は其の出凡に驚いたといふ。

時に李延平問答を購ひ、紙が敗爛するまで讀んだが、これから宋儒を奉じ、性理の學に熱中し、大極論・性善論・心學原論などを著した。然るに病に罹り、十年間も門を出でず、家產が傾いたが、間もなく家を弟に讓り、松下菴に居して讀書した。これよりさき、宋儒の學は孔孟の意に乖けるを疑ひ、考索多年、三十七八歳に及び、漸く一家を立てゝ古學と號し、始めて門戸を開いて教授した。教を受ける者が輻輳したが、仁齋は許氏月旦評に倣ひ、人物を品評して生徒を驚ました。

（伊藤仁齋）

延寶元年五月、京都に大火があり、書堂が災に逢つたので、仁齋は古義一部を携へて大恩寺に遁れた。これよりさき、母が病んで三年に及んだが、仁齋は看病して一日も怠らず、偶々肥後侯細川綱利が蘇千石を以て招聘したけれども、老母の侍養人がなかつたので、辭して應じなかつた。仁齋は實に一代の儒宗で、生徒を教授すること四十餘年に及び、飛騨・佐渡・壹岐を除く諸國の人々は、皆其の家塾堀川學校に學び、門人は凡そ千人に達した。其の生徒に教授する場合には、主意を明瞭にして末義を研めなかつた。啓發される者が實に多く、名望は日に高く、天下の學者は學德を慕つて來歸し、京都を過ぎる名士は必ず訪問した。

貞享年間に、豐前中津の僧道香は、文を仁齋に請うたが、仁齋はこれに序を贈つた。其の文は世に流布したが、元祿の季に天聽に達し、遂に詔して其の文を徵せられた。仁齋は人と爲り寬厚穆和で、人に對して城府を設けず、過輻を修飾せず、誰人に對しても誠を以て接した。大義の關するところ、如何に誘ふても動かず、常に書字を好み、亂書して樂み、また和歌をも詠じた。寶永二年三月十二日、七十九歳で歿した。

赤穗の大石良雄も少壯の時に仁齋に學び、其の講書に侍したが、時々居眠りして聽かなかつたので衆人は皆匿笑し、良雄の退いた後で、「懶惰、彼が如きは學ばざるに若かず」と罵つた。時に仁齋は良雄をほめ、「小子妄りに誘ること勿れ、余を以て彼を觀るに、庸器にあらず、必ず能く大事に堪へん」といつた。

曾て仁齋が夜行した時、四五名の盜賊が路を塞ぎ、各々劍を按じて、「吾黨、醉はざれば樂まず、今酒錢なし、客、若し囊錢を缺かば衣服を脫して供せよ」といつた。時に仁齋は自若として、「今日偶々囊錢なし、袷袍を脫して與へん」と答へ、且つ盜賊に向ひ、「汝等は常に何を以て業となすか」と問ふと、「昏夜横行、掠奪を以て自ら給す、これ其の業なり」と答へた。乃ち仁齋は、「それを以て業となさば、吾何ぞ拒まん」と、衣服を脫ぎ與へて去らうとした。然るに盜賊は仁齋を留め、「吾黨、草竊衣食をなすもの數年、未だ曾て擧止客の如きを見ず、抑も客は何する者ぞ」と問ふたので、仁齋は笑ひながら、「儒者なり」と答へると、更に、「儒者とは何事をなす者か」と問ふたので、「人道を教ふる者なり其の人道とは、親には孝行、兄弟には友愛、人と交はるには信を重んじ、老者を敬ひ、幼者を愛し、貧者を賑はし、窮者を救ふ、これ其の主要なるものなり、人として

道なきは禽獸のみ」と說證したが、盜賊は大いに改悔し、遂に教を門下に請ひ、自ら勵んだといふ。

仁齋の家は赤貧で、五十七八に達しても、尚ほ貧の域を脫せず、歲暮に餅を買ふことが出來ない位であつたが、仁齋は曠然として意に介しなかつた。時に其の妻は、「家道の育鞠は妾未だ曾て堪へずとなさず、而して獨り其の忍びざるもの、孺子源藏（東涯）未だ貧の何物たるを解せず、人の家に餅あるを羨み、連りに求めて已まず、妾は口に之を呵すと雖も、斷腸の思あり」と、言ひ終つて落涙した。偶々仁齋は机に向つて讀書して居たが、一言も答へず、直ちに自分の羽織を脫いで妻に授けた。曾て荒川景元は金を贈つたが、仁齋はこれを謝して、「討習研磨二十春、恩如二父子一最相親、受レ金不レ謝非レ傲、適爲二君情厚且眞一」と賦した。

仁齋の門人中で有名なものは並川永崇・並川亮・陰山元質・荒川秀・中江一貫・中島義方・小河成章・小河成材・林義端・伊東儀・北村可昌・淵尾維賢・松岡玄達らである。著書には大極論・性善論・心學原論・論孟古義・中庸發揮・大學定本・童子問・語孟字義・乾坤古義・春秋經傳・讀近思錄鈔などがある。

いとうとうがい
伊藤東涯

名號 名を長胤といひ、字を源藏といひ、東涯・慥々齋などの號がある。私謚して紹遠先生といふ。

系統 伊藤仁齋の長子である。

事蹟 三四歳の頃から能く字を知つた。長じて博學强記で、父に驚いて古學を奉じ、父以上の學者と稱せられ、經術に長じ、能く文を作つた。また品行が方正で、粹然たる古君子の風があり、沈靜・寡默・恭儉・謹愼で、決して人の短を口にしなかつた。當時、「江戸の萩生徂徠、京都の伊藤東涯」といひ、天下の大學者を以て聞えたが、徂徠は屢々東涯を排したけれども、東涯は敢て徂徠を評隲しなかつた。東涯は諸侯の招聘があつたけれども、辭して仕へず、常に家に在つて學を講じ、塞磬を厭はないで勉學した。元文元年七月、六十七歳で歿した。時に內大臣藤原常雅が墓碑銘を撰び、權中納言藤原俊將が篆額し、右中將藤原英朝が之を書したので、世人は以て光榮とした。

東涯の門人中では青木敦書・穗積以貫・香川修德・垣內文徵・奧田士亨・原瑜・谷鶴・澤村維顯・安東守經・松崎堯臣・原田直・陶山晃・倉成軍・木村之漸らが名高い。東涯の著書には周易經翼通解・經史博論・經史論苑・古今學變・天命或問・讀易私記・讀易圖例・周易義例・論孟古義標註・中庸發揮標釋・大學定本釋義・語孟義標註・童子問標釋・周易傳義考異・四書集註標註・卦變考・聖語遡・辨疑錄・復性辨・文集・詩集などがある。

いとうひろぶみ
伊藤博文

名號 初名を俊輔といひ、後に博文と改めた。

事蹟 長州藩士である。十四五歳の頃から父母の手を離れて獨立の生涯に入つたが、安政六年に米國の水師提督ペリーが來朝した時には、長州藩から選拔されて相州警備の番手に加はつた。相州では古武士的氣象に富んだ來原良藏（長州藩士・木戸孝允の妹婿）の黨陶を受け、長州に歸つて吉田松陰の松下村塾に學び、來原良藏に從つて長崎に往き、西洋文化の若干を窺つたが、やがて木戸孝允に從つて江戸に出で、在府中は激烈な攘夷論を主張した。間もなく志を改め、井上馨らと英國に遊び、西洋の事情を攻究したが、長州藩で攘夷を實行する報に接して歸藩

し、攘夷の渦中に入つて開國論を主張した。

下關海峽で外國船砲擊事件が起つた時には、井上馨・高杉晉作と共に、外國との葛藤解決に努力した。慶應元年、幕府が再度の長州征伐をなした時には、博文は晉作・馨及び山縣狂介（有朋）・河瀨眞孝らと共に幕軍と戰ひ、自ら屢々長崎に往つて彈藥・銃砲・汽船を購入し、薩藩の名義で遺憾なく戰地に供給した。其の苦心を察すべきである。

王政復古と共に、封建制度を打破して國家の統一を圖ることに盡瘁し、また工部大輔に任じたが、四年十一月、岩倉具視が特命全權大使として海外視察の途に就いた時には、博文は大久保利通・木戸孝允・山口尙芳と共に之が副使となり、米・英・佛・白・蘭・獨・露・丁抹・瑞典・墺・瑞西の諸國を漫遊し、六年九月に歸朝した。

博文らが海外から歸朝した時には、偶々征韓論が高潮し、西鄕隆盛は朝鮮王問罪の師を出だすべきことを主張し、副島種臣・後藤象二郎・板垣退助・江藤新平らは之に贊成したが、博文は具視・利通・孝允・尙芳らと內治の急を力說し、外征の非を主張したので、遂に征韓論は破れ、隆盛・種臣・退助・象二郎・新平らは連袂辭職し、岩倉具視・大久保利通・木戸孝允・伊藤博文・大隈重信・黑田清隆・井上馨・山縣有朋・西鄕從道・大山巖・川上操六・寺內正毅・桂太郎・小村壽太郎・高橋是清・原敬・加藤高明・若槻禮次郎・田中義一・浜口雄幸・犬養毅・鳩山一郎・吉田茂・岸信介・佐藤榮作・池田勇人・鳩山一郎・石橋湛山・岸信介・佐藤榮作・田中角榮・三木武夫・福田赳夫・大平正芳・鈴木善幸・中曾根康弘・竹下登・宇野宗佑・海部俊樹・宮澤喜一・細川護熙・羽田孜・村山富市・橋本龍太郎・小渕恵三・森喜朗・小泉純一郎・安倍晉三・福田康夫・麻生太郎・鳩山由紀夫・菅直人・野田佳彦・安倍晉三・

（伊藤博文）

に征韓論は破れ、隆盛・種臣・退助・象二郎・新平らは連袂辭職し、岩倉具視・大久保利通・木戸孝允・伊藤博文・大隈重信・黑田清隆・井上馨・山縣有朋・西鄕從道・大山巖・川上操六・寺內正毅・桂太郎・小村壽太郎・高橋是清・原敬・加藤高明・若槻禮次郎・田中義一・浜口雄幸・犬養毅・鳩山一郎・吉田茂・岸信介・佐藤榮作・池田勇人・鳩山一郎・石橋湛山・岸信介・佐藤榮作・田中角榮・三木武夫・福田赳夫・大平正芳・鈴木善幸・中曾根康弘・竹下登・宇野宗佑・海部俊樹・宮澤喜一・細川護熙・羽田孜・村山富市・橋本龍太郎・小渕恵三・森喜朗・小泉純一郎・安倍晉三・福田康夫・麻生太郎・鳩山由紀夫・菅直人・野田佳彦・安倍晉三・

に明治六年十月である。

博文は明治六年工務卿に任じ、七年には工部卿・內務卿に任じ、同年工部大學を設立して鑛業・鐵道其の他の工學・美術・工藝を奬勵し、八・九・十年には工務卿に任じ、十一年には工部卿・內務卿に任じ、十二・三年には內務卿に任じ、十四年には參議となり、十五年三月には明治天皇の命を受け泰西の憲法及び議院政治の狀況調査の爲に歐洲に航し、十六年八月に歸朝し、十七年には宮內卿に任じ、宮內省に制度調査局を設け、自ら其の局長となつて之が調査に努力し、十八年二月には特派全權大使となつて清國に赴き、李鴻章と會して天津條約を結び、十二月には總理大臣となつて內閣を組織し、臨時に外務大臣を兼ね、また內閣に法制局を置いて從來の事業を繼續し、憲法及び附屬法規の起草を終つた。博文が歐化主義を鼓吹し、西洋心醉の高潮に達したのも此の頃である。

博文は帝國憲法制定に就いて次の樣に述べて居る。「明治十五年三月、陛下、余に命じ給ふに、憲法草案の起稿を以てせらる。余、乃ち大命を拜し、直ちに其の事に從ふ。因りて泰西立憲制度の實際の運用及び其の憲法上の種々の規定並びに立憲國に於ける有力なる人士の實際抱懷せる學理及び意見に關し、出來得る限り周到の研究を遂げんが爲に、同月十五日を以て我が國を發し、泰西に向へり。而して當時、余は研究を爲すの便を圖り、國中の少壯俊才を伴ひ、俱に歐洲に留まること、殆ど一年有半なりき。この短日月に於て、出來得る限り必要の材料を蒐集し、十六年八月に歸朝し、其の後、直ちに憲法の起草に從事せり。當時余を輔くるの書記官數多ありしが、其の最も著しきものを故子爵井上毅・伊東（己代治）・金子（堅太郎）の兩男爵とす。外國人は則ち博士ロエスレル及びピゴット氏其の他數名なり」といひ、「余が帝國憲法を起草するに當りては、單に外邦の憲法を模寫するのみを以て足れりとすべからざるは、當初より明らかなる所なり。我が國には自ら

固有の特質あり。決して之を度外視し得べきにあらず。例へば我が國に於て、皇位は他國に於けるよりも更に深く國史上に一種の根柢を有し、また國民の腦裡に一種の印象を有す。我が國の未だ立憲政體とならず、封建制度行はれずして、なほ神權的國家たりし時代に於ては、皇位は實に國家の眞髓たり中樞たり。故に新憲法に於て、其の大權の制限を擴梅するに當りては、吾人は特に將來此の大權の實在卽ち効力を擁護し、以て皇位をして一種の虛飾たらしめざるに意を用ひざる可らず。同時に立憲政治の實を擧げんと欲せば、國民の名譽・自由及び生命・財產の安固を十分に保護せざる可らず。人民の名譽・自由及び生命・財產の安固を保護せんと欲せば、必ずや一方に於て天皇の大權に種々の重要なる制限を加へざる可らず。然らずんば立憲政體は如何なる形體を以てするも、竟に之を樹立すべからざるなり」といひ、「憲法に據りて、國民は種々の權利を附與せられたりと雖も、他國に於けるが如く、君主より是等憲法上の權利を强奪したるものに非ず。則ち日本の新政體は、國民將來の繁榮の爲に、君主の任意を以て、之を國民に賦與し給へる所なり」と。以て憲法制定當時の消息を窺ふべきである。

明治二十一年四月、內閣が瓦解してからは、新に開設された樞密院の議長として活動した。蓋し樞密院は博文らの調査立案した憲法草案を審議する爲に開設されたもので、五月八日から顧問官が出席して審議した。斯くて二十二年紀元節の佳日に當り、宮城の正殿で憲法發布の大典が擧行されたが、時に博文は帝國憲法を明治天皇に捧呈し、天皇は手づから之を時の內閣總理大臣黑田清隆に授けられ、國史上忘る可らざる印跡を殘した。

明治二十五年四月には、條約改正調査委員となつたが、八月には總理大臣となつて內閣を組織し、約四箇年間其の任にあつた。其の間に明治二十七八年戰役があり、二十八年三月には陸奧宗光と共に全權辯理大臣となり、清國の李鴻章・李經芳と下關に會し、媾和談判をなし、四月十七日に所謂下關條約が締結された。この條約により、清國は朝鮮の獨立を認め、遼東半島・臺灣・澎湖諸島を割き、償金二億兩を出し、新に沙市・重慶・蘇州・杭州の四港を開いた。但し遼東半島は三國（露・佛・獨）干涉の結果還附した。

明治三十一年一月には、また總理大臣となつて內閣を組織し、約五箇月の後に瓦解したが、三十三年九月には立憲政友會を結成し、十月にはまた總理大臣となつて政友會內閣を組織したが、この內閣は約六箇月の後に瓦解した。爾來政友會總裁となつて、政黨政治の開發に盡瘁したが、三十七年三月には特派大使として京城に赴き、日・韓の親睦を圖り、三十八年十一月には遣韓大使として京城に赴き、所謂韓國保護條約を結び、韓國の外交權を我が國に收め、韓國皇帝の下に統監を派して扶導することにした。乃ち十二月に統監府を京城に置く事になつたが、これから博文は韓國統監となつて京城に駐在し、外交權を監理し、內政の改善に當り、日韓併合の基礎を作つた。四十二年六月、博文は樞密院議長となつて歸朝したが、年來の功により公爵を授けられ、大勳位に叙せられた。

明治四十二年十月、偶々滿洲に遊んだが、二十六日午前九時半、哈爾賓驛頭で露國大藏大臣の出迎を受け、共に鐵道守備兵を檢閱した際に、韓人安重根の爲にピストルで狙擊されて斃れた。時に六十九歲である。

いとういうかう

伊東祐亨

事蹟　薩州藩士である。明

治維新の後に海軍に入つたが、明治二十七八年戰役の際には海軍中將で、聯合艦隊司令長官の重任を帶び、清國の艦隊を破つて大功を樹てた。

我が陸軍が、平壤城を陷れたのは、明治二十七年九月十六日であるが、此の日、祐亨は聯合艦隊十二隻を率ゐて大同江口を發し、大孤山沖に向つたが、十七日、清國北洋艦隊提督丁汝昌の艦隊十二隻と、大いに海洋島附近に戰ひ、敵の致遠・經遠・超勇・揚威・廣甲の五艦を擊沈し、其の他の諸艦に大損害を與へたので、丁汝昌は敗餘の軍艦を集めて旅順に走つた。時に我が艦隊には、一隻の沈沒もなかつたので、黃海の海上權は全く我が手に歸し、爾來、軍隊及び軍需品の輸送が意の如くになつた。

陸軍大將大山巖の率ゐた第二軍は、十一月二十二日に旅順を陷れたが、これには祐亨の艦隊の援助が少でなかつた。ついで第二軍の一部は、榮城灣に上陸して擺天嶺を陷れ、二十八年二月、威海衞を背後から包圍攻擊したが、祐亨はこれと協力して正面から攻擊した。時に丁汝昌の北洋艦隊は、威海衞の入口の劉公島に在り、死力を盡して守つたが、我が水雷艇隊は危險を冒して屢々之を夜襲し、定遠・威遠などの諸艦を擊沈したので、威海衞は危機に迫つた。

祐亨は開戰以前から丁汝昌と親交が深かつたので、威海衞の危機に際し、一書を丁汝昌に送つて、「貴官程の人物が、徒らに死に直面して働くよりも、平和恢復までの間、暫らく日本に來て自適されては如何、貴官を惜んで、特に此の儀をお勸めする」と傳へたが、併し丁汝昌は國家の爲に職ふべき自己の職責を重んじ、祐亨の勸めを斷乎として拒絕した。既にして我が軍は、海陸兩面から猛擊して威海衞の防力を無くしたので、丁汝昌は祐亨の許に使者を遣つて降伏の意を表し、殘存せる將士の救命を請ひ、二月十三日の早曉、自ら毒を仰いで盡きたが、祐亨は深く其の志を憐み、特に汽船を與へて丁汝昌の柩を送らせた。斯くて遂に威海衞は陷り、鎭遠・平遠・濟遠・廣丙などは我が手に歸し、北洋艦隊は全滅した。ついで明治三十七八年戰役には、祐亨は海軍々令部長として功を樹て、元帥に列し、伯爵を授けられ、大勳位に叙せられたが、大正三年、七十二歲で歿した。

いとくてんのう
懿德天皇

名號 御名を大日本彥耜友尊といふ。

系統 安寧天皇の第二皇子で、御母を淳名底仲媛命といふ。第四代の天皇である。

事蹟 安寧天皇の十一年に皇太子となられたが、時に御年十六歲である。三十八年十二月に安寧天皇が崩ぜられたので、翌元年二月に卽位され、都を大和國高市郡の輕地に遷し、曲峽宮に居て政を執られたが、在位三十四年、聖壽七十七歲で崩ぜられた。畝傍山南纖沙谿上陵に葬る。

ゐのうへかをる
井上馨

事蹟 長州藩士である。吉田松陰に學び、王政復古に盡瘁した。明治八年九月、我が軍艦雲揚が清國牛莊に赴く途中、水を江華島に求めた時、守兵が俄然發砲したので、我が軍は應戰して砲臺を陷れた。よつて我が政府は、黑田清隆を特命全權辨理大臣となし、馨を副大臣となし、朝鮮に赴いて其の不法を責め、兼ねて修好を議せしめたが、翌九年二月、朝鮮は其の無禮を謝し、且つ修好條約十二箇條を結び、釜山の外に仁川・元山の二港を開いた。

明治十一・二年には工部卿に任ぜられ、十二年から十八年までは外務卿の職にあつた。十七年、清國が朝鮮を屬國視し、兵を出して事大黨を助け、獨立黨を討ち、我が公使館を燒いたので、馨は特命全權大臣となり、京城に往つて其の罪を問ひ、十八年一月、朝鮮の全權大臣金宏集と會見し、京城條約を締結して謝罪させた。また十二年に外務卿となつて以來、條約改正に奔走し、列國の公使と協議を重ぬること二十餘度に及んだ。

十八年十二月、伊藤內閣が成立するに及んで外務大臣となり、引續いて條約改正に盡力したが、進行が意の如くならず、十九年七月、政府は其の議を中止し、九月、馨は職を辭した。二十一年四月、黑田內閣が成立するに及んで農商務大臣となり、二十五年八月、伊藤內閣が成立するに及んで內務大臣となり、三十一年一月、伊藤內閣が成立するに及んで大藏大臣となつた。晩年、元老として待遇され、侯爵を授けられたが、大正四年九月、八十一歲で歿した。

ゐのうへでん
井上傳

系統 平山源藏の女である。

事蹟 天明八年十二月二十九日、筑後の久留米に生れた。父源藏は米穀商であつたが、でんは幼時から器用で、手仕事を好み、七八歲頃に木綿織の稽古を始め、十二三歲頃には一人前の織手となり其の技術が優れて居た。家計が甚かでなかつたので、織上げた白木綿・縞物類を町に賣つて生活を助けた。

でんは每日機を織りながら、新しい物を織出さうと工夫したが、或る日、自分の古い仕事着の黑地が擦れて、所々に白い模樣の樣な物が出來て居たのに着眼し、絣を織出す事を考へ出した。先づ其の仕事着の布地を解き放つて研究し其の絲に黑・白の交錯して居るのを見、若し白い所のある黑の經絲で布を織り、黑・白を織り合せるならば、必ず面白い模樣が織出せるに間違ないと考へた。よつて白絲を所々くゝつて藍汁に染め、くくり絲を解き放つて黑・白の斑染絲を作り、それを機にかけて布を織り、何回も工夫を重ね、織り上げた品物に「加壽利」と銘して市場に出した。これが久留米絣の起源である。

十五歲の時には伎倆が進み、「お傳絣」の名が遠近に聞え、でんに就いて絣の染織法の傳授を受ける者が數十人に達した。十九歲の時には、やむを得ぬ事情の爲に、食祿九百石を領する久留米京町の松田平藏の家へ女中となつたが、餘暇には主人の許を得て絣織を研究し、また教を受ける弟子に傳授したのである。

二十一歲の時、原古賀町の井上次八に嫁したが、家事を執る傍ら絣織を研究し、また人々に傳授した。家庭は圓滿で、二男一女を產んだが、二十八歲の時に夫を喪ひ、友人の多い通外町に移り、獨力で一家を立てながら三兒を敎養し、また絣織の爲に盡力した。お傳絣の名聲が高くなるに伴つて、小さい借家では多數の弟子を容れる事が出來なくなつたので、附近に織屋を新築し、絣織の傳授に盡すこと十餘年に及び、繪絣などをも織出した。老後に及んで、遠方から出張教授を依頼された場合には、弟子中の優秀者を派遣した。併し七十歲に及んでも、心身が强壯で、眼鏡もかけず、老人の仕事とは思はれぬ程確であつた。

明治二年八十二歲で歿した。其の後、久留米絣は染色法・織出法などに種々の工夫が加へられ、益々精巧品が製織されて居る。

いなふこうけん
稲生恒軒

事蹟 大阪の人である。慶長十五年に生れ、古林見誼に師事して醫を學び、また儒學に通じ、始め豐臣秀頼に仕へ、後に淀藩主永井尚征の侍醫となり、延寶三年、僕學舍を興して吏民に教へたが、同八年七十一歳で歿した。恒軒の妻はるは、本姓を河瀬といひ、五歳の時に母を喪ひ、よく繼母に仕へ、稲生家に嫁してからは、賢婦人としての名聲が高く、恒軒を助けて家を治め、祖先を尊び、祭祀を重んじ、また力を盡して其の子若水を養育した。

若水は名を宣義といひ、明暦元年に生れたが、父の學を受け、儒醫を以て加賀藩主前田綱紀に仕へ最も本草物産の講明に盡力し、著述が頗る多く、庶物類纂一千卷は特に名高い。これは綱紀が若水の志に感じ、其の完成を圖して成つたものであるが、併し未だ多くの稿を殘し、正德五年、六十一歳で歿した。新井白石・室鳩巣らは大いに之を稱揚して居る。後世に至り、本草學が勃興したのは、若水の功によるものが多い。明治四十二年に從四位を追贈された。

いなふじやくすゐ
稲生若水

「いなふこうけん・稲生恒軒」の項を參照されたい。

いのうただたか
伊能忠敬

名號 字を子齊といひ、號を東河といひ、三郎右衛門・勘解由などと稱した。

系統 神保貞恒の第三子で後に伊能長由の養嗣となつた。

事蹟 上總國武射郡小堤村に生れた。養家の伊能氏は、下總國香取郡佐原村の豪族であるが、長由の時に家産が衰へた。忠敬が養嗣となるに及び、儉素を守り、奢侈を去り、朝夕勉勵して、稍々産を復した。天明三年及び六年の大饑饉には、私儲を開いて閭里に賑貸し、附近の村落も其の惠に與かる者が多かつた。

（伊能忠敬）

忠敬は朴直な精力家で、早くから星暦の學を好み、其の蘊奥を極めたい志があつたが、未だ家道が復しなかつたので、因循することの數年、寛政六年に財産を子の景敬に委ね、意を決して江戸に出で、高橋作左衛門の塾に入り、西洋暦法を學び、發明する所が多く、殊に測量の術に精通した。

ついで幕命を受け、寛政十二年閏四月、北陸道・蝦夷地方・東南の海岸を測量し、享和元年三月、伊豆・相模・上總・下總・常陸・陸奥を測量し、同六月、越前・越中・越後・能登・佐渡・駿河・遠江・三河・尾張の海岸を測量し、文化元年、地方各圖を集めて進呈した。

文化九年、幕府は其の功を賞して廩米を賜ひ、拔擢して散手となし、日官に屬したが、更に幕命を奉じ、山陽・山陰・西海・南海の四道及び壹岐・對馬を測量し、文化十二年には伊豆七島及び箱根湖を測量し、ついで江戸市内を測量し、十四年に府内の圖を作つて進呈した。後にまた幕命を受け、寓内輿地全圖及び度數譜行程記を修定したが、文政四年九月、七十七歳で歿した。江戸下谷清島町淨安寺に葬る。明治十六年二月正四位を追贈された。著書に國郡畫夜時刻對數表・記源術同用法・求割圓八線法・地球測遠術問答・割圓八線表・記源表などがある。

いなうはる
稲生はる

「いなふこうけん・稲生恒軒」の項を參照されたい。

るのまたこへいろく
猪俣小平六

「みなもとのよしひら・源義平の項を參照」されたい。

るのやまさくのじやう
猪山作之丞

「くりばやしじへゑ・栗林次兵衛」の項を參照されたい。

いまがはうぢさね
今川氏眞

名號 幼字を五郎といひ、薙髮して宗闡と號し、法名を仙巖院瞑山瑩公といつた。

系統 今川義元の長子である。

事蹟 永祿三年、從五位下治部大輔に任じ、上總介と改め、相伴衆に列した。五月、父義元が織田信長の爲に桶狹間に斃されたので、其の封を繼いだが、漸く群小と親交し、行爲が荒逸に流れ、國人の離反する者が多くなつた。十一年十二月、武田信玄は駿河に侵入し、諸城を陷れたので、氏眞は僅に掛川・花澤・松枝などの數城を保つに過ぎなくなつた。時に家康は信玄と結んで氏眞の領地割取に力め、元亀元年正月、家康は濱松城に移り住み、信玄は再び來攻して花澤城を包圍したので、氏眞は妻子と共に小田原に逃れ、北條氏康に據つたので、氏康はこれを品川に置いて撫養した。然るに氏康の子氏政は、氏眞と仲が惡くなり、これを殺さうと謀つた。氏眞は難を避けて德川家康に投じたので、家康はこれに八百貫の地を給して厚遇した。

氏眞は後に京畿に流寓したが、父の仇を討たうともせず、却つて信長の盛大を欣慕し、天正三年、遂に遣賀千鳥香爐などを獻じ、京都の相國寺に往つて信長に謁したので、世人はこれを醜として指彈した。家康は氏眞の愚を見て、信長と結んで遠江を取つて領地を廣めたが、四年、氏眞は濱松に家康を訪ふたので、家康はこれを憐んで駿河に納れた。十年三月、信長は武田勝頼を討ち滅ぼし、駿河を家康に加封したので、家康は若干の地を割いて氏眞に與へようとしたが、併し信長が聽かなかつたので、遂に其の議がやみ、氏眞は食邑を失つた。後に家康は第を品川に與へて住ませたが、慶長十九年十二月、七十七歳で歿した。

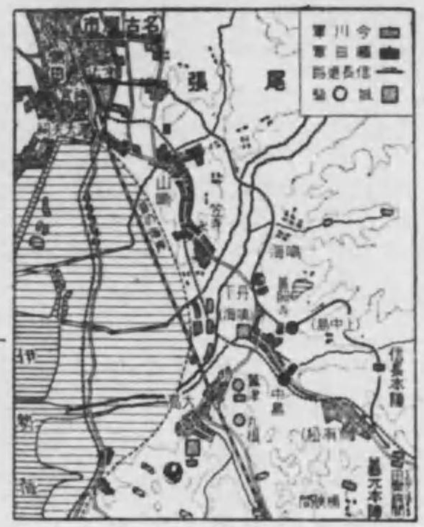
いまがはよしもと
今川義元

名號 法名を天澤寺秀鋒宗哲といふ。

系統 今川氏は清和源氏で足利義兼の曾孫吉良國氏が、三河國幡豆郡今川庄に居住したので、子孫は今川氏を稱した。三代範國の時に駿河を領し、九代氏親に至つて漸く勢力が强大になつたが、氏親の三子は卽ち義元である。義元は兄氏輝の家を繼いで封を受けた。

事蹟 善德寺に入つて僧となつたが、封を繼ぐに及んで、從四位下治部大輔に任じ、駿河守を兼ねた。天文十一年には尾張を侵し、織田信秀と戰つて之を破つた。二十二年には參河を侵し、ついで武田信玄の援を得て北條氏康と戰ひ對軍二箇月に亘り、互に勝敗があつたが、二十三年、義元の謀主雪

齊和尙の周旋により、信玄・氏康・義元の三將は壽德寺に會盟し、信玄の女を氏康の子氏政の妻にし、氏康の女を義元の子氏眞の妻にし義元の女を信玄の子義信の妻にする事を約して和した。



(桶狭間戰要圖)

永祿三年五月、義元は四萬五千の兵を率ゐて京都に向ひ、足利將軍に謁して威名を揚げ、且つ沿道を併せようとして府中(駿府)を出發した。信長は義元から領邑を蠶食されることを憂へ、丸根・鷲津以下の諸砦を襲撃し、其の侵入に備へた。五月十九日、義元は丸根鷲津の諸砦を陷れ、桶狭間の北の田樂狭間に休憩して居たが、鷲津の諸隊が更に西軍の一部を擊退し、三士の首を致したるに會ひ、大いに喜んで「我が旗の向ふところ、鬼神もまた之を避く」といつた。偶々四近の祠官・僧侶が來訪して、酒肴を呈して軍を犒つたので、乃ち杯を擧げ餉を傳へて警備を怠つた。時に信長は將士を清洲城に集めて方略を議して居たが、直ちに馬に鞭つて城を出で、手兵二千を率ゐて進み、正午前後に義元の陣に近づいたが、偶々暴風豪雨が起つたので、これに乘じて喊喊し、直ちに義元の陣を襲つた。東軍は不意討にあつて大いに狼狽したが、信長の士服部忠次は槍を持つて義元に肉薄し、また毛利秀高は義元と相搏つて遂に其の首を斬り、大呼して兩軍に示したので、東軍は益々潰走した。時に永祿三年五月十九日で、義元は四十二歲であつた。東軍の部將松井宗信・井伊直盛は奮戰して死し、また勇士の戰死者五百八十餘人、士卒の戰死者二千五百に達したが、これを桶狭間の戰といふ。

弘治元年八月には蟹江城を拔き義元の軍は目に盛んで、四隣は慴伏した。三年には織田氏の策に陷り、賢臣日下部政直を殺すに至つたが、併し駿河・遠江・參河を併せ、勢が茂だ盛んである。

いはくらともみ
岩倉具視

名號 幼名を周丸といひ、薙髮して友山と號し、また對鶴ともいつた。

系統 堀川康親の第二子で岩倉具慶の養子となつた。

事蹟 天保九年、十四歲の時に元服して昇殿を許され、安政四年、從四位上に叙せられ、また侍從となつた。人と爲り俊邁沈毅で、夙に皇室の衰微を嘆き、同志の人と謀り、經綸畫策する所が多かつた。

(岩倉具視)

文久元年、幕府の老中安藤信正・久世廣周が、衰へ行く幕府の威信を恢復する爲に、公武の合體を謀り、將軍家茂の爲に皇妹和宮親子内親王の降嫁を請うた時には、具

視は深く賛同し、九條尙忠・千種有文と共に周旋の勞をとつた。併しこれが爲に攘夷論者の憤激を深め「幕府、朝廷を脅かし、皇女を奪ふ」となし、信正を坂下門外で要擊するに至つたが、具視も佐幕黨の姦人と看做され、勅奏されて孝明天皇の勅勸を蒙り、洛北の栄邑岩倉村に閉居することになつた。併し勤王の志が厚く、幽居に在つて諸藩の志士を導き、千種有任・中御門經之らと王政復古に就いて畫策する所があつた。慶應三年三月、明治天皇に具視の入京を許され、ついで勅勸を赦された。

具視の王政復古の計謀は、慶應三年九月に至り、正に成熟期に入つた。卽ち太宰府に在つた三條實美と謀を通じ、また西郷隆盛・小松帶刀・大久保利通・木戸孝允らと結び、密に討幕を企圖したが、十月十四日、遂に薩・長二藩に密勅が下つた。時に前土佐藩主山内豐信(容堂)は、これを聞いて驚き、其の臣後藤象二郎・福岡孝弟を大阪に遣り、將軍慶喜に說く所があつたので、慶喜は遂に大政を奉還し、天皇は直ちに許可されたが、時に慶應三年十月十四日である。十二月、具視は議定に任ぜられた。

明治元年には正二位權大納言に進み、また實美・隆盛・利通・孝允らと版籍奉還に盡力し、四年には外部卿右大臣に任ぜられ、十一月、特命全權大使となり、孝允・利通及び伊藤博文・山口尙芳らと歐米國情視察の途に就き、米・英・佛・白・蘭・獨・露・丁抹・瑞典・墺・瑞西の諸國を漫遊し、六年九月に歸朝した。

偶々征韓論が擡頭したが、具視はこれに反對したので、明治七年一月十四日、退朝の時、東京赤坂喰違で征韓黨士佐藩士武市熊吉以下九名の爲に要擊されて負傷した。十一年には公爵となり、大勳位を授けられ、十六年七月二十日、五十九歲で歿した。品川海晏寺に葬る。「やまうちとよしげ・山内豐信」の項を參照されたい。

いはさまたべる
岩佐又兵衛

名號 通稱を又兵衛といひ名を勝以といふ。印文には碧勝宮と刻したのがある。

系統 織田信長の臣荒木攝津守村重の末子で、母方の岩佐姓を名乘つた。

(岩佐又兵衛)

事蹟 土佐派の正統畫家である。父村重は事によつて信長に逆ひ、伊丹城に據つて叛いたが、天正七年十一月に城が陷り、翌年十月潛に安藝に奔り、妻子は捕虜となつて京都で斬殺された。當時二歲の幼兒であつた又兵衛は、特に赦され、乳母に從つて本願寺の支院に隱棲した。斯くて母方の岩佐姓を名乘つて成人し、後には織田信雄に仕へたが、天性畫道を好んだ彼は、和漢の風俗畫を描いて一格をなし、寛永七年、織田信長が歿してからは暫く流浪し、越前福井藩主松平忠昌の知遇を受けて畫名が頓に揚つた。將軍德川家光は彼の畫名を聞いて江戸に召し、長女千代姫が尾張の德川光友に降嫁する時の裝具類を描かせた。勝以の畫名は益々高くなつたが、併し數年間の孤獨生活と老病とで身心を害し、病の癒え難い事を自覺し、自畫像を故郷の妻子に贈り、慶安三年六月二十二日江戸で歿した。時に七十三歲である。

又兵衛は土佐派の正系を學び、自らも土佐流を稱した。卽ち寛永の初に京都で土佐光則に繪事を學び、また狩野内膳の感化を受け、後に稍々其の風を變じ、和漢古樣

の風俗を寫して妙域に入り、遂に一家をなすに至つた。彼は平民的な題材を取扱はずに、貴族的な題材を取扱つて居る。彼を世俗に「浮世繪又兵衛」と稱したのは、恐らく後世の事であつて、卽ち浮世繪といふ語の流行する樣になつてからの事で、而も全く當つて居ない。又兵衛は浮世繪師の樣に時樣の平民的風俗を描寫したのではなく、日本・支那の古典的題材を採つて描いたのである。又兵衛は文筆にも達して居たが、彼が江戸に移住した頃には、未だ文藝は發達せず、畫家には狩野探幽があつたけれども、探幽は京畿に往來して席が暖らなかつた。そこに又兵衛が來て土佐風・狩野風の筆で和漢古樣の風俗畫を描いたから、それが珍重されたのである。

又兵衛の遺作で名高いのは、武藏川越喜多院東照宮所藏の國寶三十六歌仙繪額を首め、人麿像・貫之像・宮女觀菊圖・野々宮圖・源氏物語圖・伊勢物語圖・西行法師・達磨・唐人抓耳圖・中老子左右龍虎圖・王昭君之圖などがある。殊に三十六歌仙圖の人物は、最も謹嚴な態度で描かれ、頰のふくれた、眼の長い面相をして居る。色彩紋樣は土佐風で、流暢な描線は彼の持ち味を現して居る。畫上の和歌は青蓮宮純龍親王の筆である。

いんぎようてんのう
允恭天皇

名號 御名を雄朝津間稚子宿禰といふ。

系統 仁德天皇の第四皇子で、御母は皇后磐之媛である。第十九代の天皇である。

事蹟 反正天皇が崩ぜられ皇子がなかつたので、群臣は相議して、年長で仁孝な雄朝津間稚子宿禰皇子に卽位を勸進したが、皇子は自ら不德を謙遜して固辭された。再三請ふに及んで遂に天位に上られたが、これが允恭天皇である。天皇は大和國遠飛鳥宮に都されたが、卽位の三年、新羅の醫師を招聘して足疾を治療され、癒ゆるに及んで厚く之を賞せられた。また當時姓氏の混亂が甚だしく、或は賤族で貴氏を冒し、或は誤つて本來の姓を失ひ、これが爲に上下相爭ひ、社會の紛亂を生ずるに至つたので、四年九月、詔して諸氏を味橿丘に會して、盟神探湯を行はせられたが、姓氏を詐つた者は長れて探湯したかつたので、正僞が自ら判明し、氏族の紊亂を救ふことが出來たといふ。在位四十二年に及び、聖壽八十歲で崩ぜられた。

いんげん
隱元

名號 姓は林氏で、諱を隆琦といひ、號を隱元といふ。

系統 父を德龍といひ、母は龔氏である。

事蹟 明國福州福淸の人である。明の神宗の萬曆二十年に生れた。家道が衰へた爲に、十歲の時に學を止め、耕樵を業として母を養つた。後に南海の普陀山に至り、觀音を禮讚し、崇佛の心を起し、隱省して母を養つたが、母が歿してからは、園中の黃檗靈源に投じて僧となり、精修して奧義を極め、遂に臨濟宗の正傳を得て、經山寺の費隱の後を受けた。

（隱元）

後光明天皇の承應元年、將軍德川家綱は支那僧を招いて諱刹を創建しようとし、其の旨を長崎興福寺の僧逸然に託した所が、逸然は使を遣つて切に福州の隱元に請うた。隱元は其の志に感じ、承應三

年八月に獨湛・費隱以下二十八人の弟子を從へて長崎に來着した。時に六十三歲である。

はじめ長崎の興福寺で開法したが、僧俗男女の來集者が多く、三百年來絕えた禪の正法を聽き、歎稱して信心を發したといふ。ついで崇福寺・普門寺で說法したが、萬治元年の冬、將軍家綱に招かれて江戸に入り、厚く寵遇され、諸侯群臣の歸依する者が多かつた。家綱から山城の宇治に地を賜はつたので、寬文元年、一伽藍を創建し、本國の寺を忘れない爲に、建築も裝飾も全く支那風のものにし、且つ黃檗山萬福寺と號した。これが本邦黃檗の始めである。

後水尾法皇は厚く尊信され、寬文十二年三月、勅使を以て法要を問はせられたので、隱元は開山法語を書いて奉つた。法皇は大いに御滿悅あり、中華から渡來した錦城の普陀落山の觀音大幅一軸に御書を添へて賜はつた。隱元は因緣があるといつて喜んだ。同十三年四月二日、暇を遙べて皇恩の宏大無邊なことを謝し、法皇もまた御宸翰を以て大光普照國師の號を賜はつたが、翌三日八十二歲で入寂した。人格的感化の甚大なるものがあつた。

う
ウキッテ
Witte

事蹟 露國皇帝ニコラス二世の頃の政治家である。卽ちニコラス二世は、財政家ウキッテ伯を重用して大藏大臣とし爲し、極端な保護政策を實行し、人民の飲酒の惡風を矯正し、且つ國策の財源を得る爲に酒類を國營にした。ウキッテの保護政策の結果、產業が大いに發達し、國庫が充實するに至つたので、露國政府は二三の宮廷野心家に動かされて、始めて膨脹政策を採用し、佛蘭西の資金を利用して極東經營に熱中し、西比利亞鐵道を完成し、更に北淸事變に乘じて滿洲を占領し、遂に北韓地方をも占領しようとしたが、其の政策は頗る大膽無謀であつたから遂に日本の對外政策と衝突し、日露戰爭を見るに至つた。蓋しウキッテは、日本と開戰する事に就いては、クロパトキンと共に積極的でなく、寧ろ日本と妥協することを主張したが、露國宮廷に寵を得たベゾラゾフ一派の爲に退けられた。卽ち日露開戰はベゾラゾフ一派の主張に基づくものであるといふ。

西紀一九〇五年（明治三十八年）六月、米國大統領ルーズベルトは日・露兩國の戰爭の繼續を以て、人類一般の不利益であると觀じ、兩國に媾和を勸誘した。ウキッテはローゼンと共に露國の全權委員となり、日本の全權委員小村壽太郎・高平小五郎と米國ニューハムプシア州のポーツマスに會議し、同年九月五日に媾和條約を締結し（一）日本が韓國に於て政治・軍事・經濟上に於ける卓絕な利益を有する事を承認し、（二）北緯五十度以南の樺太島を日本に割讓し、（三）長春（寬城子）・旅順間の鐵道及び其の支線を日本に讓與し、旅順・大連及び其の附近の租借權を日本に讓與することにした。これをポーツマス條約といふ。

露國の極東經營は、素より國民多數の希望に出たのでなく、且つ凶作・重稅・敗戰などの爲に人民は塗炭の苦に惱み、國內の不平が爆發して、各地に暴徒が起り、一時無政府狀態に陷つたが、一九〇五年（明治三十八年）十月、ウキッテは內閣總理大臣となり、地方の有力家と謀り、銳意新制度實施の準備に着手したが、國民は政府の宣言を信ぜず、各地の騷亂は依然として治らなかつたので、官僚政治家はウキッテの措置を緩慢であると批難するに至り、遂に職を辭するに至つた。一九一五年（大正四年）三月に歿した。

ウィリヤム＝アダムス

三浦安針

名號 William-Adams は、我が國に歸化し、三浦安針（みうらあんじん）といふ。安針は水先案内の義で、彼が水先案内をして居たから、世に安針と呼んだのである。

事蹟 英國ケント州ギリンガムの人である。西紀一五九八年（慶長三年）、和蘭の東印度會社は水師提督ジャックス＝マフに五隻の艦隊を統率させて日本へ航行させた。此の艦隊は太西洋を横斷し、南亞米利加南端のマゼラン海峽を通過し、太平洋を横斷し、西紀一六〇〇年（慶長五年三月）、提督の乘つたリーフデ號のみが日本の豐後に漂着した。ウィリアム＝アダムスは實に此の船の水先案内（航海長　であつたのである。

アダムスは大阪城で德川家康に謁し、和蘭人ヤンヨーステンと共に江戸に招かれ、深く家康に信任され、其の顧問となり、邸宅を賜はつて優遇されたが、現存する東京八重洲海岸の安針町は其の跡である。

家康はアダムスに命じて、西洋船二隻を造らせた。當時、我が國には船渠の設けがなかつたので、頗る困難を極めたが、遂に奇計を案出した。卽ち伊豆伊東の海岸に河があつたから、此の地を造船の好地形とし、其の濱の砂上に柱を敷いて基とし、其の上に船の敷を置き、牛作の頃から砂を掘り上げ、敷臺の柱を少しづつさげ、堀の中に船を置き、此の船が海に浮ぶ時になつて河尻をせきとめ、其の河水を船のある堀に流し入れ、其の力で海中に押し出したといふ。一隻は八十噸、一隻は百二十噸の船である。後に江戸の淺草川近傍に繫かれたが、西紀一六一〇年（慶長十五年）に至り、漂流の西班牙人を乘組ませて、新西班牙のアカプルコ港まで送致するのに使用された。

アダムスは造船術を傳へ、幾何學を說き、數理を敎へたが、家康は相模國三浦郡逸見村に采地二百五十石を賜はつたので、遂に歸化して名を安針と改め、妻を娶つて一男一女を產んだ。

其の後、西紀一六〇九年（慶長十四年）に、蘭船はアダムスらの踪跡を尋ねて日本に來り、其の始末を審にすることが出來たが、此の時、アダムスの周旋により、毎歲二隻の貿易船を送ることを約した。またアダムスは和蘭人が貿易の利を享有するのを見て、故國の英人にも享有させようとし、西紀一六一一年（慶長十六年九月）、蘭船のジャバ島に還るに托して、一書を同島在留の英商に贈つた。西紀一六一三年（慶長十八年）、英人サーリスが家康を駿府に訪ひ、英王ゼームス一世の書翰・贈物を呈する時には、アダムスは其の通事となつて周旋した。大阪冬夏の陣には家康の左右に侍した。斯くてアダムスは、我が國に居ること二十餘年に及び、西紀一六二五年（元和六年四月）、平戸で歿した。歿後、江戸の安針町の人々は、墓碑を三浦半島の逸見村に建てた。横須賀鎭守府を距る約半里、淨土寺の西南高丘にある安針塚はそれである。

うへすぎあきさだ

上杉顯定

系統 上杉朝定の子である

事蹟 扇ヶ谷上杉家三代の主で、鎌倉の扇ヶ谷に住んだ。系次を示すと重顯・朝定・顯定・氏定・持定・持朝・定正・朝良・朝興・朝定に至る。

（因に山内上杉家にも同名の上杉顯定があるから、混同しない事が必要である。山内家の上杉顯定は關東管領となり、扇ヶ谷上杉家七代の主上杉定正と勢力を爭つたが永正七年越後の長尾爲景と戰つて討死した。）

うへすぎかげかつ

上杉景勝

名號 初字を喜平次といひ法名を覺上院宗心といふ。

系統 長尾政景の子で、上杉謙信の養子となる。

事蹟 常に謙信に從つて軍功があつた。謙信は豫め後事を議し、越後・越中の半を景勝に與へ、能登・佐渡を養子景虎（北條氏康の子）に與へた。謙信の歿後、兩人は相爭ひ、景勝は景虎を殺して其の邑を併合した。時に織田信長は北國を經略しようとし、柴田勝家・佐久間信盛を加賀・越前に派遣したが、景勝は屢々これと戰つた。

信長の歿後、豐臣秀吉の招によつて京師に朝し、從四位下左近衛權少將兼彈正大弼に任ぜられ、間もなく歸朝して越後・奥羽を平定し、天正十六年四月には參議正四位下に任ぜられた。十八年四月には、小田原征伐に從つて功があり、文祿征韓の役には、德川家康・前田利家・蒲生氏鄕・伊達政宗らと名護屋の本陣に屯し、文祿三年には從三位權中納言となり、慶長二年六月には、小早川隆景（六月歿）に代つて五大老の一人に列し、三年正月、會津に封ぜられ、百二十萬石を食んだ。

秀吉の歿後、石田三成は景勝の老臣直江兼續と約して天下の覇權を握らうとしたが、遂に景勝は其の局に當り、三成と議して德川氏を倒さうとし、慶長四年八月に會津に歸り、領内の諸城を修め、密に兵備を整へた。家康は屢々遣使して上洛を促したけれども、景勝はこれに應ぜず、益々兵備を嚴にしたので、五年六月、家康は鳥居元忠を伏見城に置き、江戸を經て會津に向ひ、下野の小山に次した。景勝は家康の來攻を聞き、出でて長沼に次し、兵を分つて險要を守つた。家康は三成が伏見城を圍んだ事を聞き、結城秀康を小山に留めて西上し、伊達政宗も兵を收めて上杉氏を討たなかつたので、景勝は兼續を遣つて最上氏を討たせた。關ヶ原の役後、款を德川氏に納れたが、家康は命じて其の封を削り、米澤三十萬石に移封した。十九年十二月、大阪冬の陣には家康に從つて功があり、翌元和元年の夏の陣には、京都を守護したが、元和九年の三月、六十九歲で歿した。

うへすぎけんしん

上杉謙信

名號 本名を長尾景虎といふ。幼名を猿松丸・虎千代などといつたが、十一歲の時に出家して宗心房と改め、天文十二年八月、元服して景虎と改めた。天文二十年に上杉憲政から上杉の族稱を讓られ、また憲政の偏名を受けて政虎と改め、上杉政虎といつた。翌二十一年に薙髮して不識庵謙信と號し、永祿四年に上洛して將軍足利義輝に謁し、其の偏名を受けて本名を輝虎と改めた。

系統 越後の人で、長尾爲景の第三子である。後に上杉氏を冒した。

事蹟 七歲にして僧となり翌年城に歸つたが、十一歲の時に四方を巡遊し、比叡山で宇佐美定行に逢つて兵法を學び、天文十一年に定行を軍師とし、兵一千餘人を募つて歸國し、姉の夫の長尾政景を破り、衆を服し、兵力が日に盛んで、遂に越後を征服し、居城春日山を本據として加賀・能登・越中・佐渡にも出兵し、武威を北陸に振つた。

時に信濃の村上義淸は、天文十一年の頃から屢々甲斐の武田信玄と戰ひ、越後に逃れて景虎に援を乞ふた。景虎は弱を援け、强を挫くの慨があつたので、義淸の請を許し、天文十六年十月、精兵八千を率ゐて信濃に入り、信玄と兵を交へたが、十八年四月には海野平で戰つた。

天文二十年八月、上杉憲政は北條氏康に逐はれて越後に來り、管領職と族稱・系圖・錦幟を景虎に讓り、父子の約をなしたので、景虎は上杉氏を冒し、上杉政虎と改て信玄と戰つた。

（上杉謙信と年譜）

永祿四年、謙信は關白藤原前久父子を護送して上洛し、將軍義輝に謁見し、其の偏名を受けて本名を輝虎と改め、關東管領に補し、錦直垂・朱傘・文書を賜ひ、相伴衆に加へ、從四位下彈正大弼に任ぜられた。ついで朝廷に參し、內裏修理の資金を獻上し、後奈良天皇から天盃・御劍を拜受した。此の年の十月、兵一萬三千を川中島に出し、大いに信玄の兵二萬と戰つた。激戰が相繼ぎ、兩軍の死傷が甚だ多く、謙信が不意討したので、信玄は危地に陷り、信玄の弟信繁は戰死し、甲軍は破れようとしたが、小山田彌三郎が橫擊したので、やつと支へることが出來た。

永祿十二年、北條氏康と和したが、氏康が五男三郎（氏秀）を質に遣つたので、これを養子とし、名を景虎と改めさせた。謙信は景虎に能登・佐渡を與へたが、後に景勝の爲に殺された。

天正五年、織田信長は禮を厚うして謙信に事へ、陰に上杉氏の諸將を招いて己の味方にし、機を見て北國を領しようとした。九月、謙信が叛者を討つた際には、信長は兵四萬八千を柴田勝家・前田利家らの五將に授けて援けさせ、自分もまた潛に來援した。謙信は越中の三城を拔き、石動橋で信長と對陣したが、信長が夜陰に乘じて逃れたので、謙信は金澤を陷れて越前に入り、織田氏の疊寨を悉く拔き、信長を近江の長濱に追ひ退けた。

ついで謙信は書を信長に送り、明春三月十五日を期して合戰し、北國人の侫倆を比べようとし、十月越後に歸り、管內八國の兵を集めた。天正六年三月、檄に應じて北陸の兵が雲集したので、これを聞いて京畿は大いに震駭した。謙信は自ら兵を簡閱し、將に出發しようとする二日前に病を發し、三月三日に四十九歲で歿した。法名を心光といふ。

謙信は武を尙ぶと同時に佛を信じ、每歲法會を修めて冥助を祈り、終世素食し、婦女を淫せず、常に戒を守つたので嗣子がなかつた。兄の子景勝を養子とした。

うへすぎさだまさ
上杉定正

名號 一に定政にも作り、修理大夫と稱し、法名を謬國院大通龍了と號する。

系統 鎌倉の執事上杉持朝の四子で、扇ヶ谷上杉家六代の主である。

事蹟 後土御門天皇の文明九年、山內家の上杉顯定を援けて長尾景春と戰ひ、十年正月景春と和を結び、太田道灌に擁せられて河越に還つた。十八年、足利政氏を擁して顯定と實卷原に戰つた。賢宰道灌が事を行つたので、扇ヶ谷家の勢は日に盛んになつた。然るに定正の嬖臣知宇地主馬助・曾我右衞門佐らは、道灌を妬んで讒

したが、定正は讒を信じて道灌を殺したので、國政はまた振はなくなつた。一說に據れば、顯定は扇ヶ谷家の勢の盛なのを妬み、其の嬖臣を利用して道灌を定正に讒せしめ、遂に賢宰を除かせたのであるといふ。長享元年、足利成氏に說いて顯定を破つたけれども、國人の叛する者が日に多くなつた。延德二年、武威に誇つて鉢形城に據り、成氏を輕視し、關東を併呑しようとした。明應二年十月、北條早雲と兵を併せて顯定と挑戰したが、戰爭中に落馬して死んだ。時に五十二歲であつた。諸將は驚き潰走したので、子の朝良は散卒を聚めて歸つた。「おほただうくわん・太田道灌」の項を參照されたい。

うへすぎしげあき
上杉重顯

系統 上杉顯重の長子で、上杉憲房の兄である。

事蹟 長子であつたけれども、父の後を嗣がず、子孫は世々鎌倉の扇ヶ谷に住んだので、此の家筋を扇ヶ谷上杉家と稱する。いま其の系次を示すと、重顯・朝定・顯定・氐定・持定・持朝・定正・朝良・朝興・朝定である。

うへすぎしげふさ
上杉重房

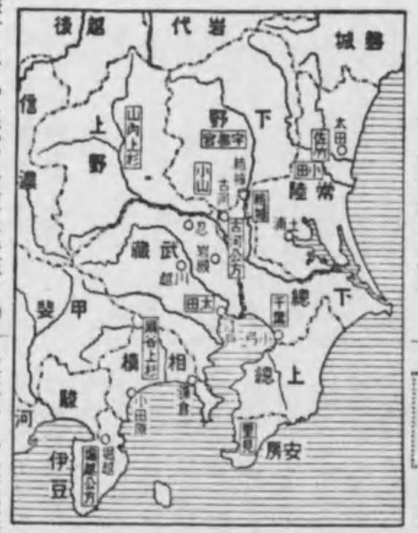
系統 姓は藤原氏で、藤原冬嗣の孫高藤から出て居る。高藤から十一代目に清房があつたが、清房の子は卽ち重房である。

事蹟 建長四年、後嵯峨天皇の皇子宗尊親王が、北條時頼に迎へられて、鎌倉の將軍となられた時、重房も親王に從つて鎌倉に下向した。

時に丹波何鹿郡上杉庄を賜ひ、左衞門督に任ぜられたが、これから子孫は上杉氏を稱し、關東に住んで武家となつた。重房の子に頼重がある。

うへすぎとものさだ
上杉朝定

系統 上杉氏は內大臣藤原高藤に出て居る。十二代目の重房は、建長四年、宗尊親王に從つて鎌倉に下つたが、丹波上杉庄を賜はつたので、子孫は世々上杉氏を稱し、關東に住んで武家となつた。重房の長子重顯は家を嗣がずに扇ヶ谷に住み、三子憲房は家を繼いで山內に住んだので、重顯の子孫を扇ヶ谷上杉といひ、憲房の子孫を山內上杉といひ、連年互に相爭つて關東が亂れたが、後の太田道灌は扇ヶ谷家の宰相である。朝定は朝興の子で、扇ヶ谷家十代の主である。



（東國要地圖）

事蹟 父朝興は江戸城に居り、小田原北條氏と接戰する事が十四回に及んだが、戰へば必ず敗れたので、天文六年四月、病歿する際に遺託して、「後供養を爲す莫れ、たゞ北條氏を征して國家を鎭めよ」といつた。

朝定も甚だ振はず、間もなく北條氏綱のために河越城を奪はれたが、兩上杉家が相敵するの不利を

悟り、山内の上杉憲政と同盟し、天文十二年九月、河越城を恢復しよう欲し、兵八萬を率ゐて包圍した。時に北條氏の守將北條綱成が善く防ぎ、また十三年四月、北條氏康が精兵八千を率ゐて來攻したので、遂に河越城を恢復することが出來ず、城の北方で戰死した。こゝに扇ヶ谷上杉は滅亡した。「ほうでうぢやす・北條氏康」の項を參照されたい。

うへすぎのりあき
上杉憲顯

名號 號を國清寺といふ。晩年、伊豆に國清寺を建てたからである。

系統 山内上杉憲房の子である。

事蹟 足利尊氏が叛した時に、兄の重能と共に、足利直義に從つて官軍を手越河原に防ぎ、後に尊氏に從つて京師に入つた。尊氏が敗れて筑紫に走るに當り、憲顯は命を受けて途中から石見に入つた。やがて尊氏が九州の新設を率ゐて京師を犯すに及び、憲顯は石見の兵を以て進み、備後に會して共に入京した。

既にして足利義詮を擁して鎌倉に在つたが、北畠顯家の來攻に遇つて大敗し、義詮と共に鎌倉を捨てゝ走つた。正平四年、足利基氏が關東管領となるに及び、高師冬と共に、選ばれて其の執事となつた。はじめ高師直が兄重能を殺したので、憲顯は深く師直・師冬の兄弟を憎み、これを圖らうと考へて居たが、間もなく直義が南朝に降順するに及び、兵を擧げて之に應じ、遂に師冬を殺した。五年、また直義に屬して、尊氏と薩埵山に戰ひ、敗れて信濃に走つた。後に新田義宗に從ひ、屢々尊氏の兵と戰つた。基氏は其の舊勳を思ひ、憲顯を召して其の罪を宥し、再び越後守護に任じ、ついで執事となした。基氏が歿してから、其の子氏滿を助けて東國を鎭め、舊の通りに執事を務めたが、正平二十二年、六十三歲で歿した。

うへすぎのりざね
上杉憲實

名號 字を四郎といひ、薙髮して高嶺長棟菴主・雲洞菴などと號した。

系統 上杉房方の子ともいひ、或は上杉房定の子ともいふ。山内家四代の主である。

事蹟 後小松天皇の應永二十六年、鎌倉の執事上杉憲基に繼いで執事となり、また安房守となつた。永享八年十二月、村上頼清は信濃守護小笠原政康と封疆を爭ひ援を關東管領足利持氏に求めたので、憲實は「信濃は鎌倉管領の分國に非ざるが故に、私に兵を動かすは宜しからず」と諫めたが、持氏は此の言を聞かず、翌九年、頼清を援くるを名として憲實を除かうとし、謀議が漏れて人心が惶々としたので、持氏は憲實の第に入つて和解した。

これよりさき、持氏は約して將軍義持の子となり、密に將軍職を志望して居たが、義教が遵俗して將軍となるに及び、大いに失望し、また義教を輕蔑して命を奉ぜず、永享十年六月、嫡子賢王丸に加冠して義久と名づけ、慶賀に托して憲實を殺さうとした。憲實は病と稱して入賀せず、急使を派して變を京都に告げ、遂に領邑上野國白井に走つた。持氏は一色直兼・一色時家に兵を授けて憲實を征伐させたが、憲實はこれを武藏の分陪河原に破つた。

永享十年九月、將軍義教は上杉持房を將として持氏を討たせたので、持氏は破れて窮地に陷り、遂に金澤の稱名寺で薙髮した。憲實はこれを永安寺に移し、京都に遣使して持氏の死を宥めん事を請うたが、義教が宥さなかつたので、持氏は十一年二月に自殺し、憲實は遂に東國を管するに至つた。やがて管領職を弟の清方に讓り、薙髮して清淨光寺に入り、十二月、伊豆國清寺に入つた。文安四年八月、將軍義政が召したけれども、其の召に應ぜず、また足利成氏が召したけれども應ぜず、弟の道悅と諸州を巡錫し、長門國澤川村大寧寺に居したが、寛正七年閏三月六日に歿した。

憲實が鎌倉に在る時には、禮儀を厚うし、足利學校を中興し、田園を寄附して學領とし、書籍を異邦に求めて納入し、永享十一年閏正月には書籍保存に關する條目を制定し、文安三年六月には學校で佛設を設かない樣にし、餘に學問に志す學徒を養成した。

また武藏の金澤に稱名寺を再建し、金澤文庫をも再興し、書籍を寄附した。因に金澤文庫は同寺の境内に興されたのである。當時、兵亂が相次いで文敎が廢れたのに其の命脈を絶さず、後世に傳へたのは憲實の力である。「あしかがもちうぢ・足利持氏」の項を參照されたい。

うへすぎのりふさ
上杉憲房

系統 上杉頼重の三子で、上杉重顯の弟である。

事蹟 兵庫頭憲房といひ、家を繼いで武略があり、子孫は世々山内または佐介ヶ谷に住んだので、此の家筋を山内上杉家と稱し、また佐介と號した。いま山内家の系次を示すと重房・頼重・憲房・憲顯・憲方・憲定・憲基・憲實・憲忠・房顯・顯定・憲房・憲政である。

〔因に山内家の系次に據れば、十二代目にも上杉憲房がある。やはり兵庫頭と稱したが、これは上杉周哉の子で、顯定の養子となつたものである〕。

うへすぎのりまさ
上杉憲政

名號 初字を八郎といひ、入道して立山光建といふ。

系統 上杉氏は内大臣藤原高藤に出て居る。十二代の裔重房は、建長四年、宗尊親王に從つて鎌倉に下つたが、丹波上杉庄を賜はつたので、子孫は世々上杉氏を稱し、關東に住んで武家となつた。重房の長子重顯は家を嗣がずに扇ヶ谷に住み、三子憲房は家を繼いで山内に住んだので、重顯の子孫を扇ヶ谷上杉といひ、憲房の子孫を山内上杉といふ。憲政は憲房の子で、山内家九代の主である。

事蹟 享祿三年、長尾景盛らに擁せられて、八歲の時に鎌倉管領となつた。時に民部大輔と稱し、上野の平井城に居たが、頗る放縱で、奢侈を極め、飲色を好んだ。此の年、北條氏康は十六歲で、出でて府中に在つたが、憲政は氏康を凡庸視し、出兵して品川・神奈川・府中などに戰ひ、八年の歲月を費したが、一回も勝つことが出來なかつた。のみならず、壁臣菅野憲顯・上原兵庫らが權を專らにし、舊規を廢し、奢侈を極めたので、民心は日に離れた。長尾景虎・太田三樂らは、屢々諫めたけれども、憲政はこれを聞き入れなかつた。

天文七年、氏康は河越城・松山城を陷れ、一族の北條綱成を遣つて河越城を守らせた。憲政は大いに驚き、上杉朝定及び古河公方足利晴氏と聯合し、關東八州の兵八萬を募り、天文十二年九月、河越城を包圍した。城中は兵糧に乏しくなつたので、氏康は小田原から精兵八千を率ゐて來援し、僞つて晴氏に講和を申込み、城中の衆命を救はん事を乞ひ、再三懇願して兩上杉軍の意を弛めて覺き、夜陰に乘じて襲擊したので、上杉軍は忽ち大敗した。時に天文十三年四月二十日である。

憲政は逃れて平井城に歸つたが天文十五年十月、二壁臣に勸められて無名の師を起し、武田信玄を討たうとして碓氷嶺に屯し、却つて信玄の爲に破られた。二十年三

月、氏康は關東八州の兵を率ゐて平井城を攻め、七月には益々兵力を增し、火を放つて肉薄したので、憲政は大いに驚き、計を三樂に問ふた。時に三樂は、「巨室の傾くは智力の扶くる能はず、越後の長尾景虎に據るに如かず」と答へた。衆は落膽し、城は陷り、四民は騷擾し、老幼は奔り、婦女は泣いた。氏康は憲政の子龍若丸を殺したので、山内上杉氏の嗣は絶えた。

憲政は急に兵を募つたが、集まる者は五百に過ぎなかつた。八月、遂に越後に逃れて長尾景虎に據り管領・綸旨・系圖・錦幢を景虎に讓り、父子の約束をした。よつて景虎は姓を上杉と稱し、憲政を春日山に迎へて厚遇し、厨食三百貫を寄せた。憲政は薙髮して立山光建といひ、餘命を春日山に送つた。天正六年三月、景虎（謙信）が歿してから、嗣子景虎（北條氏康の子で景虎に養はる）と、景勝（長尾政景の子で景虎に養はる）とが相戰ひ、景虎が走つて憲政の北河館に入つたので、憲政は調停の爲に外に出たが、偶々銃丸に中つて斃れた。時に天正七年三月十八日で、年五十七歳であつた。

うへすぎはるかげ

上杉晴景

系統 長尾爲景の子で、上杉謙信の兄である。

事蹟 父爲景の歿後、家を繼いで春日山城に居たが、生れつき多病で、懦弱で、凡庸であつたから、族人はこれを侮り、叛を謀る者があつたが、晴景はこれを制することが出來なかつたので、越後は大いに亂れようとした。よつて弟の景虎（謙信）が、これに代つ家を繼ぎ、越後を領するに至つた。

うへすぎようざん

上杉鷹山

名號 名を治憲といふ。幼字を直丸といひ、彈正大弼と稱し、老いて鷹山と號した。法名を元德院文心といふ。

系統 日向高鍋藩主秋月種美の二男である。後に出羽米澤藩主上杉重定の養子となる。

（上杉鷹山）

事蹟 幼時から聰明英斷で明和三年、從四位下に叙せられ、彈正大弼と稱し、四年四月、重定に繼いで藩主となり、十二月、侍從に進み、天明五年二月、致仕して越前守と改めた。平素學問を好み、細井平洲・藤長慢らを招いて講讀を聞いた。また城下に興讓館を建設し、俊秀の士二十人を選出して教誨させ、また上足十人を拔擢し、鄕里に派遣して教導させた。また武道を怠らず、武館を設け、師九十人を選び、日を期して教へ、武技を修練させた。また籍田法を學び、田一町餘を定め、親ら泥中に入つて鋤耕し、以て農民を奬勵した。また時々領内を巡視し、孝子ある毎に田園を給して賑恤した。於是、庶民は其の德に化せられ、農工商を勵み、孝悌を勸め、牢獄に入る囚人が無くなつたといふ。文政五年三月、七十七歳で歿した。「ほそるへいしう・細井平洲」の項を參照されたい。

うへすぎよりしげ

上杉頼重

系統 上杉重房の子である

事蹟 修理亮顯重といふ。北條時頼が宗尊親王を迎へて鎌倉の將軍となすに及び、父重房は親王に從つて鎌倉に下向したが、子孫は上杉氏を稱して世々武士となつた。顯重の子に重顯・憲房があつたが、（一）兄の重顯は家を嗣がず、子孫は扇ヶ谷に住んだので、扇ヶ谷上杉と稱する。（二）弟の憲房は本家を嗣ぎ、子孫は山内または佐介谷に住んだので、山内上杉と稱し、また佐介と號した。

うへだまんねん

上田萬年

事蹟 國文學者として知られて居る。東京府に生れた。明治二十一年、東京帝國大學を卒業し、二十三年、獨逸へ留學し、また佛蘭西に遊んで歸朝し、ついで東京高等師範學校及び東京帝國大學に教鞭をとり、文科大學長となり、兼ねて大橋圖書館の理事を務め、日本大學にも教鞭を執つた。文學博士で、帝國學士院會員で、また貴族院議員である。

ヴェラスケス

Velazquez

事蹟 西班牙の畫家である西紀一五六九年（我が後陽成天皇の慶長四年）に商家に生れたが、幼時から繪畫を好み、二十三歳の頃から首都マドリッドに出て勵み、宮廷畫家となつて貴紳の肖像畫を描いた。曾てフランドルの畫家ルーベンスは西班牙に遊んだが、ヴェラスケスは其のすゝめに從ひ、伊太利に遊ぶに及び、其の畫技は一層進んで來た。歿したのは一六六〇年（我が後西天皇の萬治三年）である。遺作としては「饗のヴィナス」などが聞えて居る。

ウェリントン

Wellington

事蹟 ナポレオン全盛時代に於ける英國の將軍である。はじめ印度で土人の内亂を鎭定して功があり、西記一八一四年には、ナポレオン一世の麾下であるスール將軍を擊破して、佛蘭西領内に侵入したが、一八一五年六月、ナポレオン一世の大軍をワーテルローに擊破し、再び立つ事の出來ない樣にし、忽ち名聲を揚げ、後に佛蘭西駐屯軍の總指揮官となつた。一八二六年二月には、使節となつて露西亞に赴き、新帝ニコラス一世の即位を賀し、陰にペテルブルグ議定書を作つて希臘の處分問題を定め、これを土耳其の朝貢國となす樣にした。晩年、政治界に入り、保守黨の内閣總理大臣となつたが、一八三〇年（我が天保元年）に辭職した。ウェリントン公は剛毅果斷であつたから、時の人は鐵侯と稱した。

（ウェリントン）

うがやふきあへずの
みこと

鸕鷀草葺不合尊

名號 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊といふ。

系統 彦火火出見尊の皇子で、御母は豐玉姫である。神武天皇の御父である。

事蹟 彦火火出見尊は海神の國に往き、豐玉姫と婚した。其の歸る時に當り、姫は既に姙んで居られたが、日向に來て皇子を產まれた。これが鸕鷀草葺不合尊である。未だ產屋を葺かない中に誕生された爲に、葺不合尊と命名したといふ。彦火火出見尊の崩後、日向の高千穗宮に都し、其の鵜玉依姫と婚し、五瀨命・稻飯命・三毛入野命・神日本磐余

彦尊らの諸皇子を擧げられた。鵜鷀草葺不合尊は西洲の宮で崩ぜられたので、日向の吾平山上陵に葬つたといふ。「ひこほほでみのみこと・彦火火出見尊」の項を參照されたい。

うきたいつけい

宇喜多一蕙

名號 姓を浮田にも作る。初名を公信といひ、後に可爲と改めた。

事蹟 京都の人で、田中訥言に有職故實及び土佐畫を學び、更に藤原光長・藤原信實の作品を研究して古法を體得し、畫拔を以て一家をなし、好んで大背會圖・長生殿圖・不老門圖を描き、また今昔物語・古今著聞集・孝經などに畫題を求め、氣韻生動の趣致の高い繪を描いた。彼は至誠の人物で、勤王の志に厚く、門弟に畫道を敎へる場合には、先づ孝經を說いて「畫道は單に丹青を塗る法ではない。名敎に補益する爲に學ぶのである。名敎の内に自ら樂地を求めるのを主意として學ぶべきである」と敎へた。安政元年には孝明天皇の勅を奉じて屛風を描き、御感が厚かつたといふ。時に米艦は浦賀を訪問し、國内は騷然たる有樣となつたが、一蕙も幕府の措置に憤慨し、屢々朝廷に獻書して時務を論じたり、或は神風が外艦を覆す圖などを描いて、勤王の精神を鼓舞した。京都熊谷家所藏こんくわい草紙繪圖は、時勢の紊亂を諷刺した彼の傑作で、恐らく當時に描いたものであらう。安政の大獄には、一蕙も父子も收監されたが、獄中で病を得て苦難に陷り、出獄の後に間もなく歿した。時に安政六年十一月で、六十五歳であつた。

彼は畫道の外に、書道・歌道にも通じたが、江戸隅田川邊に住んだ頃の歌に、「わが宿の軒端の梅に鳥が來て、東なまりの初音をぞ聞く」といふのがある。

うさみさねまさ

宇佐美實政

「ゆりはちらう・由利八郎」の項を參照されたい。

うしじまきんじ

牛島謹爾

事蹟 筑後久留米の農家に生れたが、明治二十一年、二十五歳の時に渡米し、カリフォルニヤ州中部の一村に住み、萬難を排して土地を開拓し、馬鈴薯を栽培して成功し、土地の人々から馬鈴薯王と呼ばれるに至つた。やがて在米日本人會長に擧げられ、其の職にあること十五年、米國人の間にも勢力があり、多年日米兩國親善に努力し、功を以て勳四等に叙し、旭日小綬章を授けられた。晩年には墨其哥・南米に發展の新天地を求めて居たが、大正十五年、六十三歳で病死した。

うしわかまる

牛若丸

「みなもとのよしつね・源義經」の項を參照されたい。

うたがはくによし

歌川國芳

名號 俗稱を井草孫三郎といふ。畫名を一勇齋國芳といひ、また朝櫻樓とも稱した。

系統 染物を家業として居た柳屋吉右衛門の子である。

事蹟 寛政九年十一月十五日、江戸神田本銀町一丁目に生れ、十二歳の時に鍾馗提劍圖を描き、筆勢が勇烈で、既に畫才が發露して居たが、最初勝川春英の畫風を學び、文化八年、歌川豐國の門に入り、更に豐國門下の一陽齋國直の畫風を慕ひ、是等三家の筆意を體得し、これに西洋畫の長所を折衷し、別に一家を大成し、特に名

將・勇士などの武者繪を巧に描いて名を揚げた。

先づ文化年間に錦繪を出したが歌川國貞の盛名に壓せられて行はれず、本所石原に借家して赤貧生活を續けたが、曾て自分の拙技の爲に貧乏生活に陷つたのを愧ぢ、奮然として刻苦勵精し、遂に國貞に比肩するに至つた。國芳は文政初期に平知盛の亡靈を描いて名を博し、更に文政末期に、水滸傳中の豪傑百八人の錦繪を描いて傑作の稱が高く、其の勢は國貞を凌ぐ有樣であつた。天保十四年の夏には、源頼光が土蜘蛛の精に惱されて居る怪異な錦繪を出版したが、これは幕府を誹毀する爲の寓意を描現したものとして、官憲の爲に罪科に處せられた。卽ち頼光を將軍德川家慶に比し、閣老水野越前守が非常改革を行つたから、土蜘蛛の精に惱まされる意であるといふ。概して國芳の人物畫は裝飾模樣が精細緻密であるが、これは彼が染物屋に育つたからであらう。

晩年、中風症の爲に畫筆を廢し、文久元年三月五日、六十五歳で歿した。江戸淺草八軒町大仙寺に葬る。

うだがはげんずゐ

宇多川玄随

「さとうのぶひろ・佐藤信淵」の項を參照されたい。

うだてんのう

宇多天皇

名號 御名を定省王といひ亭子院と號し、法名を空理金剛覺といひ、世に寛平法皇と稱す。

系統 光孝天皇の第七子で御母は皇后班子女王（桓武天皇の皇孫）である。第五十九代の天皇である。

事蹟 仁和三年八月、光孝天皇が病に罹られたけれども、未だ皇嗣が定らなかつたので、太政大臣藤原基經は、定省王を立てることを奏請した。天皇は大いに喜ばれ、左に基經の手を握り、右に定省王の手を握り、落淚して「大臣補助の功多し、汝敢て忘るゝ勿れ」と仰せられた。乃ち詔して親王となし、八月二十六日に皇太子に立てられ、當日崩御されたので、定省王が宣耀殿で踐祚された。これが宇多天皇である。

宇多天皇は藤原氏の出でなかつたので、非常に藤原氏の專權を厭はれ、基經の薨後は關白を置かず、親ら政を覽られ、また學德の高い菅原道眞を登用し、基經の子の藤原時平と並んで政務を補けさせ、藤原氏の權勢を殺がうとされた。

天皇は繪畫を好まれ、意を丹青に盡された。曾て畫家を召して、殿周以來の名臣の畫像を紫宸殿の障子に描かせられ、これを賢聖障子と號せられた。

天皇は在位十年、寛平九年七月に位を醍醐天皇に讓つて法皇となられた。世に寛平法皇といひ、實に法皇の始めである。讓位の際には自ら書を著はして醍醐天皇を戒められた。これを寛平の御遺誡といふ。讓位後は東三條院に居り、昌泰元年に朱雀院に移り、二年十月、仁和寺で出家して空理と號し、佛法を尊信に從つて三歸十善戒を受け益々佛法を尊信された。後に東寺に幸し、灌頂を受けて金剛覺と號し、室を仁和寺に營んで居られた。世にこれを御室といふ。讓位後三十餘年を經て、朱雀天皇の承平元年七月、聖壽六十五で崩ぜられた。大内山に葬る。世に宇多院、または亭子院といふ。天皇に何院といふのは、これを始めとする。「すがはらのみちざね・菅原道眞」の項を參照されたい。

うひのみこ

宇斐王

名號 宇非にも作る。

系統 應神天皇四世の御孫である。御父を意富富杼王といふ。

事蹟 事蹟は詳かでない。御子の倉主人王は、近江國高島郡三尾に居り、垂仁天皇七世の裔振媛を越の三國の坂中井（越前國坂井郡）から迎へて妃とし、男大迹王（繼體天皇）を產まれたが、これから推考すれば、宇斐王は近江附近に住居されたのではないかと思はれる。

うめだうんぴん
梅田雲濱

名號 通稱を源次郎といひ號を雲濱といふ。

事蹟 若狹小濱の藩士である。夙に尊王攘夷論を唱へ、浪人となつて長州藩の志士と往來したが、安政の大獄に際し、吉田松陰・橋本左内・賴三樹三郎・安島帶刀以下五十餘名の志士と共に捕へられ、江戸の獄に投ぜられ、獄中で病死した。時に三十四歳である。家を出づる時に賦した詩に、「妻臥二病床一兒叫レ飢、挺身直欲レ當二我爽一、今朝死別與二生別一、唯有二皇天后土知一」といふのがある。以て其の志を知るべきである。

うらしまたらう
浦島太郎

事蹟 本邦古傳說の主人公の名である。雄略天皇の二十二年正月己酉朔、丹後國の漁師浦島太郎は、助けた龜に乘つて龍宮に赴き、乙姬などのもてなしを受け、三年の後故郷に歸つて見ると、世の中が餘りに違ふので、姬から贈られた玉手箱を開けると、忽ち白髮の老人になつたといふ。

日本書紀雄略天皇の條には、「秋七月、丹後國餘社郡管川の人水江浦島子、船に乘りて釣す。遂に大龜を得たり。便ち女に化爲る。是に浦島子感りて以て婦と爲し、相逐ひて海に入りぬ。蓬萊山に到りて仙衆を歷觀る」とある。今はお伽噺として傳へられて居る。

うりふいは
瓜生岩

事蹟 明治時代の社會事業家である。福島縣の人であるが、九歳の時に父を喪ひ、ついで家は火災に罹り、重なる不幸の爲に辛酸をなめ、十七歳の時、結婚して若松に呉服店を開き、家業を勵んだが、十年程經過してから夫は重病に罹り、七年間病床にあつた。岩は夫を看護しながら子供を養育し、一家の生計を立てたが、三十四歳の時に夫が歿したので、店を人に讓つて喜多方に移つた。

間もなく戊辰の役が起り、若松は悲慘な戰禍の巷となり、會津藩士の家族は、多く喜多方地方に逃れ、宿るに家なく、飢寒に苦しんだが、岩は多くの避難者を救濟し、私費を投じて食物を與へ、有志と相談して衣服・蒲團を調達し、特に病者・幼老者を親切に慰めた。また戰死した藩士の兒童を救ひ、其等の將來を案じ、官の許可を得て幼學所と稱する學校を建設し、もとの藩校の教師を聘し、九歳乃至十三歳の兒童五十人程を集めて讀・書・算を學ばせ、また志望者には種々の仕事を學ばせ、是等の兒童の親ともなつて、慈愛をこめて指導した。

明治五年の學制頒布と共に、幼學所は閉鎖となつたので、岩は貧民救濟及び孤兒教養に全力を捧げようと考へ、東京深川の教養會所に赴いて仕事を手傳ひ、翌年に歸つて私宅を貧兒養育所とした。後に事業の便宜上福島に移住し、二十二年から同地に救育所を開き、貧兒の教養に盡力した。二十四年、六十三歳の時に再び東京に出で、東京養育院の幼童世話掛長となつて、孤兒の世話をしたが、間もなく歸郷し、有志と謀つて各所に育兒會を興させた。また此の地方から製出される水飴の糟の棄てられるのを惜み、水飴製法を改良し、飴糟を利用して食料品を製し、救

貧の一資料とした。昭憲皇太后は岩の善行を雲せられ、御内意を以て下賜品を賜はり、二十九年には藍綬褒章を賜はつたが、翌三十年、六十九歳で病歿した。大正十三年に從五位を追贈された。東京淺草觀音本堂右側には、其の銅像がある。

うんけい
運慶

名號 雲慶にも作る。世に備中法印といふ。

系統 定朝の子孫で、康慶の子である。

事蹟 定朝の後に出た有名な佛師で、定朝の定めた木寄法に基づき、更に實物寫生の新趣を加へ、精細な造像の法則を立て、また佛菩薩像の眼に玉を入れる事を始めた。是等の方法は、後世の佛工の金科玉條とする所である。

運慶は後に東寺の大佛師職に補せられた。陸奥平泉の藤原基衡は、文治年中に、丈六の藥師十二神將を註文したので、運慶は上中下三品を示したが、基衡は其の中品を希望したといふ。後に鎌倉に下り、將軍の命を受けて大倉新御堂及び持佛堂の佛像を作り、其の名聲が益々揚つた。運慶の彫刻中では、東大寺南大門の仁王・東方金剛、東大寺の四天・辰己方多門天、東福寺山門の十六羅漢、高野山の石垣千體などが最も名高い。運慶の子に湛慶・康運・慶辨・康勝・運賀・運助があり、父の技術を繼いだが、其の中では湛慶が最も名高い。

え・ゑ

えいさい
榮西

名號 號を明菴といふ。

系統 姓は賀陽氏で、薩摩守頼政の曾孫である。

事蹟 備中國吉備津宮の人である。幼時から聰敏で、八歳にして倶舍・婆娑の二論を讀み、十一歳にして郡の安養寺に投じ、十四歳にして薙髮し、ついで比叡山の戒壇に登り、有辨に就いて天臺を學び、また伯耆の大山に至り、

（榮西）

基好に就いて密教を習ひ、再び比叡山に還り、顯意に就いて灌頂を受け、大藏經を精讀すること八年に及んだ。

榮西は夙に支那漫遊の志があり六條天皇の仁安三年四月、二十八歳の時に、商船に乘つて宋の明州に赴き、天台山に登り、居ること半年、天台の章疏三十餘部を齎らして歸つた。後鳥羽天皇の文治三年、再び宋に航し、また天台山に登り、萬年寺の虛菴禪師に就いて、臨濟正宗の法脉を繼承し、居ること數年、建久二年七月に歸朝し、肥前の平戸に禪刹を創建して禪規を行つた。ついで京師に入り、盛んに佛心宗を唱へたが、南都・北嶺の僧侶に疑はれ、將に配流されようとしたが、興禪護國論を著して之に答へたので、疑が悉く解けて世を風靡した。建久三年、筑前の香椎神宮の側に報恩寺を建て、同六年、博多に聖福寺を開き、盛んに臨濟禪を唱へたが、參徒が四方から雲集した。此の春、天台山の善提樹を東大寺に栽ゑた。

土御門天皇の建仁二年、將軍源頼家は榮西を京都に召して建仁寺を建てたが、此の寺は元久三年に官寺となつた。これよりさき、東大寺・法勝寺の工事を幹した功により、天皇は榮西に紫衣を賜はつたが、建久元年には東大寺の幹事となり、順德天皇の建保元年には

僧正となつた。建保三年、將軍源實朝の請によつて鎌倉に下り、龜谷に壽福寺を開き、始めて禪を關東に傳へたが、同年七月五日、病の爲に壽福寺で入寂した。時に年七十五歳である。著書に興禪護國論・一代經論總釋・日本佛法中興願文・不二門論・三部經開題などがあり、榮朝以下門人も多い。因に榮西が化期を知つて歸京し、建仁寺で入寂したといふ說は誤りである。

えがはたらうざゑもん　江川太郎左衛門

名號　名を英龍といひ、字を九淵といひ、通稱を太郎左衛門といひ、坦庵と號した。

系統　江戸英毅の第三子である。

事蹟　世々伊豆國韮山の代官であつた。文政七年、代官見習となり、天保六年、父英毅の致するに及び、其の職を繼ひで代官となつた。時に將軍德川家齊治世の末年で、天下は驕奢に耽り、風俗は著しく解體したが、これを見て匡正の志があり、自ら節儉を守つて模範を示し、率先して士民を導いたので、管内の風儀が大いに革り、治績の大いに見るべきものがあつた。

時に外船は沿海に出沒し、志士の海防を憂ふる者が多かつたが、太郎左衛門も夙に之に注目し、天保八年正月、始めて幕府に伊豆國防禦策を建議し、ついでポーランドの事實に就いて上書した。六月、外船が沿海に出沒したので、家人・屬吏を率ゐて下田に赴いた。十年の春、目付鳥居耀藏と共に幕命を受け、豆相房總の沿岸を巡視し、歸つて外寇防禦策を上り、四月、外國事情及び伊豆國警備策を上書し、また鯨漁の諮問に答へた。而して耀藏に忌まれたので、其の讒禍に觸れる事を恐れ、間もなく病と稱して韮山に隱居した。十二年、高島四郎太夫の門人となつて砲術を研究し、技術が日に進んだ。既にして四郎太夫は耀藏の讒に遇つて幽閉されたが、太郎左衛門は百方これが救解に奔走し、殆んど寢食を忘れた。嘉永六年、四郎太夫に特赦の命が下つたので、太郎左衛門は喜んで四郎太夫を預り、師禮を以て之を遇した。

これよりさき、天保十二年、幕府に請うて始めて大砲を鑄造したが、韮山で大砲を鑄造したのは之が始である。十三年九月、砲術教授の爲に教場を開いたが、其の門から佐久間象山・川路聖謨・木戸孝允・橋本左内らが出た。十月、他の依頼に應じて銃砲を鑄造してよいといふ許可を得、爾來、屢々諸藩の大砲を鑄造した。十年、拔擢されて鐵砲方兼勤を命ぜられ、且つ專ら西洋火術を教授し、以て速に熟練者を養成すべき命を受けた。これから常に江戸に在り、公務繁多な時にのみ韮山に赴く事になつたが、弘化元年、鐵砲方兼勤を免ぜられた。

嘉永六年、米艦の浦賀に來るに及び、勘定吟味役格となり、海防の議に參與し、ついで若年寄本多越中守に隨行して、武相房總の沿岸を巡視した。八月、品川砲臺の築造及び大小砲鑄造の監督を命ぜられた。はじめ小反射爐を築いて砲を鑄造したが、形が小さくて餘解が意の如くならなかつたので、此の年、伊豆國田方郡中村に大反射爐を築き、其の規模を擴張する事にした。

安政元年、再び鐵砲方兼勤を命ぜられた。十二月、下田附近に海嘯があり、偶々碇船中の露艦が沈沒し、伊豆戸田村で新船建造の擧あるに及び、幕命によつて之が諸費支拂其の他一切の事務を擔當した。當時寒疾に罹つて居たが、推して公務を處理し、且つ幕府の要件で苦痛を忍んで出府した爲に、病勢が劇しくなり、安政二年正月十六日、江戸本所の居邸で歿した。時に年五十五歳である。

えしんそうづ　惠心僧都

名號　源信といひ、當時の人々は惠心院僧都と號した。

系統　俗姓は卜部氏で、父を正親といひ、母は淸氏である。

事蹟　大和國葛城郡の人で比叡山に登り、延曆寺の慈惠大師に事へて顯密の兩敎を究め、權少僧都に進み、惠心院に入つて一家の學を弘めた。壯歳を過ぎてから榮名を忌み、圓融天皇の天祿中横川に屏居し、專ら著述に從事した。世に行はれて居る書に一乘要訣・往生要集・阿彌陀經疏・大乘對俱舍抄・因明相違註釋・二諦義私記・三身義私記を始め、約七十餘部百五十卷がある。一條天天の長保五年に、台宗敎義二十七疑を作り、これを宋國南湖智禮法師に寄問したが、法師は其の問目を見て、「東域にも斯樣な深解の士があるか」と嘆嗟して答釋を送り、爾來、書信往來相繼いだといふ。當時、天台の敎法は、最も盛んであつたから、惠心僧都の名は頗る高く、隨つて其の遺跡も諸國に多い。寛仁元年六月十日、七十六歳で入寂した。

惠心僧都は藤原時代の中期に出現して、繪畫・彫刻に長じ、專ら淨土敎義の宣法に努めたから、これを繪畫に描いたものが多く、殊に彌陀來迎圖を創作したのは事實である。傳惠心筆として最も有名なのは、高野山巡寺八幡講組合大圓院外二十二箇寺共有の阿彌陀如來二十五菩薩來迎圖である。これは古畫中稀有の大作で、今は三幀に裝はれ、高さ七尺、横は中幅七尺、左右各々四尺で、彌陀來迎圖中の最古の圖像の一つである。二十五菩薩の來迎といふのは、十往生阿彌陀佛圖經に出たもので、是等の佛菩薩が行人を迎接するといふのである。其の圖樣を見るに、繪の中央に阿彌陀佛が座し、其の周圍に諸菩薩が樂を奏して繞り、左には合掌の禮をなした勢至を配し、右には蓮台を捧げた觀世音を配し、白雲が棚曳き、蓮花が降つて居る。下界には山・池・樹・草などを描いてある。描法に彩線を用ひ、菩彩が鬱麗で、構圖が盛んで、一筆も苟くしてない。我が佛畫中の莊嚴雄大な傑作であり、世界に誇るべき名品である。織田信長が元龜二年九月に比叡山を燒いた時、この圖像は武人の手に奪はれ、後に高野山に納められたものである。

エヂソン　Edison

名號　トマス＝エヂソンといふ。

事蹟　米國の發明家である西紀一八四七年（我が孝明天皇の弘化四年）オハイオ州の片田舍に生れ、新聞賣子から身を立て、電信技手となり、公務の餘暇を利用し、刻苦勉勵して種々の器械を發明した。即ち改良印刷機を造り、或は二重電信法を創作し、更にベルの電話機を改良し、音聲の高低に應じて電流の力を變ずる裝置を施し、且つ電話の呼出しを極めて簡單にし、一八七七年には蓄音機を發明し、更に竹の纖維の炭化したものから電燈を發明し、また電車・活動寫眞・無線電話器など、すべて彼の發明・發見にかゝるもので、特許を得ること千餘種に及び、商工界に多大の利益を與へ、現代文明の父と稱せられて居る。實に世界的發明家といふべきである。西紀一九三一年（昭和六年）八十四歳で歿した。

（エヂソン）

えとうしんぺい
江藤新平

名號 諱を胤雄といひ、號を南白・白南といふ。幼字を恒太郎といひ、後に又藏と稱し、更に新平と改めた。

系統 姓は平氏である。其の先は、關東の千葉氏から出て居る。千葉常胤九世の孫胤晴は、始めて江藤を氏とした。父を胤光といふ。

事蹟 世々肥前佐賀の鍋島氏に仕へた。天保五年二月九日に生れたが、文久三年六月、脫藩して上京し、皇權を復し、國威を張る策を姉小路氏に建言したが、省みられず、ついで藩に歸り、脫藩の罪に問はれて蟄居した。慶應三年、永蟄居を赦されて監察に任じ、明治元年四月、朝命を奉じて諸道軍監に任じ、江戸に赴き、七月、鎭守府の判事となつた。二年、佐賀權大參事となり、藩政を改革し十月、東京に出て中辨となり、後に文部大輔・左院副議長に歷仕し、五年、司法卿となり、大いに司法制度を改革した。即ち改定律例を制定して新律綱領に代へ、或は全國司法事務の統一を企圖し、裁判權の獨立を計り、或は人身賣買を禁じたりなどした。

六年、參議に任じたが、偶々西鄕隆盛らによつて征韓論が起り、新平も之に賛成したが、遂に其の議が破れ、職を辭して野に下つた。ついで板垣退助らと民選議院設立を建議して容れられず、去つて佐賀に歸つた。

時に佐賀藩士の中には、政府に滿足しないものがあり、隨つて政府は出兵して鎭定したが、偶々新平は鳥義勇と共に勢に擁せられ、終に兵を擧げたが、これを佐賀の亂といふ。

新平は戰に敗れ、鹿兒島に走つて西鄕隆盛に說き、更に宇和島に逃れた。政府は新平を捕へようとしたが、新平は高知に逃れて林有造に說き、更に中國に赴かうとして捕へられ、七年四月十三日、四十歲で斬刑に處せられた。

エドワード
Edward

系統 エドワード七世は、ビクトリア女王の皇太子で、英國皇帝ジョージ五世（西紀一九三六年歿）の父王である。

事蹟 エドワード七世は、西紀一九〇一年（明治三十四年）ビクトリア女王の歿後、六十歲の高齡で即位し、一九一〇年（明治四十三年）に薨去された。日英同盟は同帝の時に締結されたものである。

えのもとたけあき
榎本武揚

名號 通稱を釜次郎といふ。

事蹟 はじめ德川幕府の旗本であつたが、後には軍艦奉行に進んだ。明治元年八月、戊辰の役に際し、兵二千餘人を船艦八隻に乘せて品川灣を脫走し、會津籠城中の松平容保を應援する爲に北航し、途中颶風の爲に二隻を失ひ、仙臺領の松島灣に碇泊したが、若松城が陷るに及び、偶々來り投じた大鳥圭介・土方歲三らを乘せ、十月、函館に航して五稜郭に據り、海陸の兵備を嚴にし、各國領事と應接し、外交を修め貿易を行ひ、遂に英佛二國の軍艦に托して朝廷に上書し、「蝦夷地を以て德川氏に與へん」ことを請うた。

朝廷はこれを許さず、翌二年正月、黑田清隆・山田顯義らを遣り、諸藩の兵を率ゐて討たせられたので、五月、武揚は破れて降伏した。高松凌雲が武揚の依託を受けて函館病院を設け、交戰中彼我の負傷者を收容看護したのは此の時である。

爾來、朝廷に仕へたが、明治七年、駐露公使の任にある時には、朝命を受けて露國政府に交涉し、八年五月、樺太全部を露國に讓り、千島全部を日本領と定めた。十三年には海軍卿に任ぜられたが、其の後清國駐劄公使として支那に在り、明治十八年四月には、大久保利通と共に所謂天津條約締結に奔走し、十八年十二月、伊藤內閣が組織された時には遞信大臣になり、

（榎本武揚）

二十一年四月、黑田內閣が組織された時にも遞信大臣となり、臨時に農商務大臣を兼ね、また文部大臣となつた。

二十四年五月、松方內閣が組織された時には外務大臣となり、二十五年八月伊藤內閣及び二十九年九月松方內閣が組織されたときには、何れも農商務大臣となり、主として交通・殖產の發達に貢獻したが、後に功によつて子爵を授けられ、明治四十一年十月、七十二歲で歿した。

エルグレコ
El Greco

事蹟 十六世紀後半に於ける宗教畫家である。西紀一五四七年（我が後奈良天皇の天文十六年）に希臘のクレテ島で生れ、二十五歲の時にヴェニスのチシヤンに學び、同地の繪畫を研究し、また羅馬にも住み、更に一五七五年に西班牙の宗教都市トレドに移り住んだといふが、其の傳記は詳かでない。

併し多くの優秀な、神々しい宗教畫を遺して居る。歿したのは一六一四年（我が後陽成天皇の慶長十九年）である。遺作としては西班牙トレドの聖ドーメ寺に藏する「オルガ伯爵の埋葬」が名高い。これは個性の強い宗教畫である。

ゑんせいがい
袁世凱

事蹟 支那の政治家である明治十五年、朝鮮の大院君一派の暴徒が、我が公使館及び軍人を害した時、我が政府は花房義質らに命じて朝鮮政府に抗議したが、此の時、袁世凱は直隸總督李鴻章の命を受け、丁汝昌と共に清兵を率ゐて京城に向つた。

（袁世凱）

明治十七年、獨立黨の朴泳孝・金玉均らが急に起つて、事大黨の大臣閔泳翊を傷くるに及び、袁世凱は事大黨の請ふを機として、十二月、清兵二千を率ゐて朝鮮王宮に迫り、我が公使館を燒き、我が兵と衝突した。其の後、袁世凱は朝鮮公使となり、朝鮮政府を操縱し、屢々日本に頼る獨立黨を壓迫した。二十二年朝鮮政府は我が國を侮り、所謂防穀令事件が發生した時には、袁世凱は調停の任に當つた。

明治二十七年、全羅道に東學黨の亂が起つたが、朝鮮政府が鎭定し得ないのを見て、袁世凱は閔泳駿に勸めて援を清國に請はせたので、清國は屬邦の亂を鎭定するつもりで朝鮮に出兵した。既にして日清兩國が開戰するに及び、袁世凱は朝鮮を去り、故國に歸つて事務に當つた。四十一年、清の德宗が歿し、宣統帝が即位し、父醇親王が攝政となるに及び、清廷から退けられ、河南の鄕里に隱退した。

明治四十四年十二月、革命軍が南京に共和政府を建て、中華民國と稱し、遜文を推して臨時大總統

となすに及び、清廷は袁世凱を起用し、湖廣總督に任じ、叛亂を鎮定させようとしたが、袁世凱は辭して受けず、清廷の要請の切なるに及び、(一)明年國會を開くこと、(二)現内閣を更迭すること、(三)革命黨を罰しないこと、(四)討伐の總指揮權を得ること――などを條件とし、四十五年十一月、北京に入つて自ら内閣を組織した。翌月、醇親王は攝政の位を辭し、政權は悉く袁世凱に歸したが、於是、袁世凱は革命黨の討伐に從はず、却つて密に之と妥協して己の地歩を固め、宮中に對しては、人をして共和政體を建つる事の難く可らざるを說かしめたので、清室は遂に意を決し、皇帝の退位を宣し、清朝はこゝに滅んだ。乃ち袁世凱は共和國を組織し、自ら大總統となつた。

後に皇帝にならうとしたが、革命軍の爲に妨げられ、大正五年六月（西紀一九一六年）五十八歳で急死した。

エンマヌエル
Emmanuel

名號 ヴィクトル＝エンマヌエル二世といふ。

系統 サルヂニア王チャールス＝アルバートの子で、サルヂニア王となり、後に初代の伊太利王となつた。

事蹟 賢明にして雄略があり、父王の遺志を繼ぎ、伊太利統一を以て己が任となし、即位以來銳意熊心に民主的政治を勵行し、西紀一八四九年憲法を制定し、賢相カヴールの策を用ひ、タリミヤ戰爭の時に同盟軍に加はつて、英・佛の歡心を得、巴里會議にカヴールを派遣し、大いに自國の地位を高めたので、伊太利諸國の志士は、サルヂニア王によつて自由・統一の宿志を果さんことを期した。偶々英傑ガリバルヂーが出て、エンマヌエル王の伊太利統一運動を援けたので、西紀一八七〇年（我が明治三年）都を羅馬に遷し、遂に伊太利統一の事業を完成した。これが今日の伊太利王國である。

エンミチ
Emmich

「レマン・Lemanニ」の項を參照されたい。

ゑんゆうてんのう
圓融天皇

名號 御名を守平といひ、法諱を金剛法といふ。

系統 村上天皇の第五皇子で、御母は中宮藤原安子である。冷泉天皇の同母弟で、第六十四代の天皇である。

事蹟 康保四年九月、冷泉天皇の皇太弟となり、安和二年八月十三日、襲芳舍で受禪し、九月二十三日、大極殿で即位の禮を行はせられた。時に御年十一歳である。關白藤原實頼が攝政となつたが、實頼が歿してから藤原伊尹（これたを）が攝政となつた。天皇は在位十五年で、永觀二年に花山天皇に讓位し、寛和元年に薙髮し、圓融院に遷られたが、爾來、詩歌管絃に日を送られ、或は紫野に幸し、或は大井河に幸し、風流文雅の生活を營まれ、院に在ること七年で、正曆二年二月十二日、聖壽三十三歳で崩ぜられた。圓融寺の北原で火葬し、御骨を山城國葛野郡花園村後村上陵に葬る。

お・を

おほいしよしを
大石良雄

名號 通稱を内藏助といひ、法名を忠誠院双空淨劍居士といふ。池田久右衛門と變名したことがある。

系統 姓は藤原氏である。

豊原秀卿の後裔某は、結城氏に從つて嘉吉の亂に戰死したが、其の次子久朝は、近江國栗太郡大石莊に住んだので、それから大石を氏とする樣になつた。久朝から相繼いで朝重・重國・朝良・良信・良勝・良欽・良昭・良雄・良金に至る。良勝の時に始めて常陸の淺野長重（長政の子）に仕へ、正保二年三月、淺野内匠頭長直（長重の子）が播磨の赤穗に移封されたので、大石氏も赤穗に移つた。

事蹟 父良昭が早世したので、十五歳の時に家を繼いだ。これよりさき、山鹿素行は赤穗に來たので、良雄は之に親炙して兵學を學び、また京都の伊藤仁齋に經史を學んだ。長じて淺野氏の國老となり、千五百石を食んだ。良雄は寛仁、大度、沈毅で、事に齟齬せず、世人は彼を痴と稱した程である。また繪畫を好み、氣韻ある雪舟風の筆で、巧に達磨などを描いた。

良雄の出たのは所謂元祿時代で泰平久しく打ち續き、勤儉尚武の風は失せて、上下奢侈遊惰に流れて居た。江戸幕府では、毎年正月、使を京都に上せて賀正し、ついで勅使の東下があるのを例とした。東山天皇の元祿十四年三月、勅使の東下に當り、幕府は赤穗城主淺野長矩・伊豫吉田城主伊達宗譽を其の時の接待役に任じた。長矩は儀禮に通じないのを口實として、接待役を辭退したけれども許されず、儀式に精しい吉良義央（よしなか）と共に謀らせた。然るに義央は自ら高ぶり、性質が貪婪で、多くの賄賂がなければ指圖しなかつた。長矩は人と爲り剛直强硬で、賄賂などを行はなかつたので、義央は快からず、偶々三月十四日、城中で勅使を馳走する當日、義央は長矩の儀禮に通じないのを嘲り、これを衆中で辱かしめた。長矩は憤怒の餘り、小刀を拔いて義央の額を傷けたので、傍に居た梶川與惣兵衛らは照は長矩を抱き留めた。將軍綱吉は之を聞いて大いに怒り、長矩の場所柄をも辨へない仕業を詰り、長矩を田村右京太夫に預け、やがて死を賜ひ、其の城邑を沒收した。時に老中土屋政直は綱吉を諫め、「長矩を誅して義央を宥さば、他日必ず變あらん」と言つたが、併し義央は罪に問はれなかつた。

時に良雄は群臣三百人を赤穗城に會し、「主辱められるれば、臣死すといふ。吾輩、當に死すべしと雖も、先君の弟大學（長廣）あり、立てゝ嗣となし、祀を奉ずべし。此の事、吾等生命を賭して幕府に請ひ、若し許されずば、城を枕にして死なん」と言つた。偶々大野知房は、「これ上を要するもの、不可なり」と主張し、互に辯論が決しなかつた。

よつて良雄は、奥野將監・原元辰らと議し、四月、多川九郎左衛門・月岡治左衛門を江戸に派遣し、藤僚安井彦右衛門・藤井又左衛門と謀らせ、後嗣の事を請はせ、若し成らなければ城を枕に殉ずる旨を決し、戸田氏定に意志を通じたが、氏定も其の不可を說諭した。

良雄は多川・月岡を江戸に派遣すると同時に、衆を會して守城を議したが、會する者が五十五人に過ぎなかつたので、衆心の離散して事の成功しない事を知り、幕使脇坂淡路守・木下肥後守の來るを待ち、自ら陳じて後に殉じようと決したが、衆は血を刺して盟誓した。良雄は遂に同志と復讐の議を定め、城を輸し衆を解き、京都の山科に隱れて迹を晦し、辛苦を嘗めて時の來るのをまつた。

既にして義央は、家を其の子に讓つて隱退し、淺野家は再興されない事に定つたので、良雄は愈々謀を定め、同志と共に江戸に下り、密に敵の動靜を伺つた。元祿十五年十二月十四日、義央は客を招いて宴を張つた。此の夜、良雄らの同志四十六人は堀部金丸の宅に會し、各々鎖甲を裏にし、兜鍪を戴き、韋股を著け、弓槍を擔ひ、長梯・大槌を持し、小笛を號となし、若し事が成就しなければ火を放つ

て自盡しようと誓ひ、衆を二分して吉良邸(江戸本所)を襲ひ、終に義央を獲て首を斬り、泉岳寺に往つて主君長矩の墓を祭つた。

良雄は豫め連名書二通を作り、一通を義央の外廐に止め、一通を大目付仙石久尚に送り、遣使して實情を陳べ、罪をまつ事にした。乃ち幕府は良雄以下四十六人を細川綱利・松平定直・毛利綱元・水野忠元の諸侯に預け、其の處置を議した。良雄らの擧は固より大義に出て居るので、將軍綱吉も其の忠節に感動し、幕僚中にも之を救さうとする者があつたが、併し國法を曲げる譯には行かず、翌十六年二月、遂に良雄以下四十六人に死を賜ひ、義央の遺子を信濃に配流して家を絕ち、長矩の弟大學長廣に五百石を賜ひ、旗下の士に列した。時に林大學頭信篤は、詩を賦して良雄らの死を悼み、室鳩巢は赤穗義人錄を撰して其の事蹟を叙した。後にこれを赤穗義士と稱し、淨瑠璃に作り、演劇に上ぼせ、愈々久しく行はれ、泉岳寺義士の墓には、常に香火が絕えない。

四十七義士の姓名・年齢は次の通りである。大石内藏助良雄(四五)・吉田忠左衞門兼亮(六三)・原惣右衞門元辰(五六)・片岡源吾衞門高房(三七)・間瀬久太夫正明(六三)・小野寺十内秀和(六一)・間喜兵衞光延(六九)・磯貝十郎左衞門正久(二五)・堀部彌兵衞金丸(七七)・近松勘六行重(三四)・富森助右衞門正因(三四)・潮田又之丞高敎(三五)・早水藤左衞門滿堯(四〇)・赤垣源三重賢(三五)・矢田五郎右衞門助武(二九)・大石瀧左衞門信清(二七)・奥田孫太夫重盛(五七)・大石主税良金(一五)・堀部安兵衞武庸(三四)・中村勘介正辰(四九)・菅谷半之丞政利(四四)・木村岡右衞門貞行(四六)・千馬三郎兵衞光忠(五一)・岡野金右衞門包秀(二四)・貝賀彌左衞門友信(五四)・大高源吾忠雄(三二)・不破數右衞門正種(三四)・岡島八十右衞門常樹(三八)・吉田澤右衞門兼貞(二九)・武林唯七隆重(三七)・倉橋傳介武幸(三四)・村松喜兵衞秀直(六三)・杉野十平次治房(二八)・勝田新右衞門武堯(二四)・前原伊助宗房(四〇)・小野寺幸右衞門秀富(二八)・間新六光風(二四)・間十次郎光興(二六)・奥田貞右衞門行高(二六)・矢頭右衞門七敎兼(一八)・村松三太夫高直(二七)・間瀬孫九郎正辰(二三)・蘆野和助常成(三七)・横川勘平宗利(三七)・神崎與五郎則休(三八)・三村次郎左衞門包常(三七)らである。

寺坂吉右衞門信行は、安藝に使して居たので、死を免かれた。「あさのながのり・淺野長矩」、「きらよしなか・吉良義央」の項を參照されたい。

おほいしよしかね

大石良金

名號 通稱を主税といひ、法名を双上樹鄕信士といふ。垣見左内と變名したことがある。

系統 大石良雄の嫡子である。

事蹟 赤穗四十七義士の一人である。主君淺野長矩が自盡し、國を除かれた時、父に從つて赤穗城を守つたが、後に復讐の議が熟するに及び、母と共に京都山科に隱れた。間もなく江戸に移り、元祿十五年十二月十四日、父に從ひ、同志と共に、吉良義央の邸を襲つて讐を報じた。明年二月四日に切腹を命ぜられたが、時に年十五歲である。「おほいしよしを・大石良雄」の項を參照されたい。

おほうちよしおき

大内義興

名號 幼名を龜壽丸といひ法名を淺雲院傑夏義秀といふ。

系統 推古天皇の十九年、百濟國の琳聖太子は、歸化して周防に住んだが、其の子の正恒が大内縣を食んだので、子孫は大内を氏とし、世々大内介と稱した。十九世の裔義弘に至つて勢を得たが、二十三世の裔政弘の第二子は、即ち義興である。

事蹟 大内介をつぎ、左京太夫に任ぜられ、周防・長門・豐前・筑前・安藝・石見の六州を領し、威名が頗る盛んであつたが、明應二年、將軍足利義稙が奔つて來たので、義興は之を崇奉した。文龜元年八月、將軍足利義澄は、義興が義稙を驅戴した事を聞き、大友宗麟らの諸將に命じて、義興を討たせようとしたが、九州の諸將は義興の武威を恐れて、義澄の命に應じなかつた。尤も永正三年に至り、小貳敎頼・筑紫資房・麻生元貞らが九州で兵を擧げたが、間もなく義興の爲に破られた。

永正五年正月、義興は前將軍義稙を率ゐて、山陰・山陽・西海の諸將を率ゐて東上し、四月、數百の船艦は堺浦に着いた。時に管領細川澄元・斯波義康・赤松義村・畠山義豐らの諸將は、これを攝津に拒からうとしたが、義興の軍が大いに振ふと聞いて、戰はないで潰走し、澄元は三好長輝と共に阿波に走り、將軍義澄は近江に走つた。乃ち義稙は京都に入り、七月に再び將軍となり、義興は管領に補せられ、ついで從四位に進んだ。八月、澄元は一族の細川政賢を遣つて京都を侵させた。義興は防戰して利あらず、義稙を率ゐて丹波に避けたが、偶々周防山口の一僧が京都附近に托鉢して敵軍の守備を探り、丹波に入つて義興に告げたので、義興は敵の不意を討ち、政賢を得て餘兵をやぶり、九月、再び義稙を率ゐて京都を恢復した。義興は義勇、仁義で、王法を尊敬し、神佛を崇信し、君臣の道を重んじたので、恩威並び行はれ、京都は小康を得た。九年三月、義稙の奏請によつて從三位に昇り、十五年八月、職を辭して歸國した。

永正十六年の秋には、義興は兵二萬を率ゐて筑前に入り、太宰府の有智山に少貳政資を破り、進んで、大友義鑑の兵を破つたので、筑前・豐前の二國が定まつた。また此の年、兵を遣つて朝鮮全羅道を巡視させたが、これは父政弘が、曾て舟師を發して、朝鮮王を壓迫し、全羅道の貢賦を大内家に納めて居たので、こゝに義興が武威を示さうとして、此の擧に及んだのである。これよりさき、尼子經久は伯耆・備後の地を蠶食し、義興の領を侵したので、義興は連年經久と戰つて勝敗が決しなかつたが、大永元年、義稙の命によつて媾和した。二年六月には、兵數萬を率ゐて安藝に入り、西條鏡山城を築いて歸つた。

大内氏は夙に朝鮮・支那と通商し、また海賊を利用して海外貿易の利を得た。大永三年、義興は僧宗設を明に派遣したが、寧波に着いて數日の後、細川高國の使者瑞佐・宋素卿らが來着し、市舶太監に賄賂を送り、到着順を破つて先に貿易を營んだので、宗設は大いに怒り、瑞佐を攻めて船を燒き、市舶太監を殺し、日本の名を以て倉庫を封じ、指揮劉錦と職つて之を殺し、大いに寧波・紹興を掠奪して歸つた。永正九年には軍船を西蕃に遣はし、洋中の一離島で交易利得し、屢々兵威を西蕃に張り、八幡宮の文字を舟標としたので、夷人は八幡船といつた。

大永四年五月、義興は嫡子義隆と共に、兵を率ゐて岩國永興寺に陣し、草津仁保島城を陷れ、ついで櫻尾城を圍み、また兵を率ゐて筑前に行き、龍造寺隆信を討ち、其の賀子を收めて凱旋した。六年三月、また兵を率ゐて石見に入り、尼子氏の屬城六處を陷れ、まさに出雲に入らうとしたが、偶々風疾に罹り、翌春山口に歸り、享祿元年十二月二十日、五十二歲で歿した。

大内氏は斯樣に中國及び北九州に雄飛し、遣明船を支配して貿易の利を占め、石見の銀山を有し、富は天下に冠たりと稱せられた。隨

つて周防の山口は、大陸文明の輸入地として、内外の商業地として繁昌を極めた。公卿・學者は京都の戰亂を避けて來り、また縫物・染職・彫刻の家々は、京都から呼び下され、諸藝に堪能なものが四方から來集し、國々の諸商人は雜沓し、日毎に市を立てゝ寶買したから、關東の小田原と共に、其の繁昌は京都を凌いだ。よつて時人は、山口を稱して中國の花都と呼んだ。

おほうちよしたか

大内義隆

名號 幼名を龍童丸といひ、法名を龍福寺瑞雲珠天といふ。

系統 大内義興の長子である。「おほうちよしおき・大内義興」の項を參照されたい。

事蹟 享祿元年に家を繼ぎ、翌二年、從五位上に叙せられた。天文元年、星野親忠が筑後里城に據つて叛いたので、義隆は島津・大友・菊池・千葉・小貳の諸族と共に之を討つたが、二年に親忠が降伏したので兵を收めた。此の年の十月に正五位下周防介に任ぜられた。三年には從四位下に進んだが、此の年、九州に出兵して少貳資元を立花城に攻め、肥筑の亂を平定した。

義隆は亂を治め、備前・安藝・周防・長門・石見・筑前・豐前の七國を領し、家富み國榮え、名聲が頗る重くなつたが、漸く心が奢り、武事を怠り、酒宴を事とし、茶事を嗜み、明國と往來して珍器を貯聚し、茶寮の玩具などを高價で買ひ求め、時々文臣を招待して風雅を學び、詩歌管絃を弄し、春夏秋冬に逍遥した。或は經書を巡講し、四書五經の諺解を寫させ、或は官位和歌の疑義などを質して筆記し、聚文韻略・潛溪集などを版刻し、文學上に盡す所も尠少でない。併し此の機に乘じて、壁臣相良武任らが寵を專らにしたので、老臣は目をそばだてたといふ。

大永六年四月、後柏原天皇が崩ぜられ、後奈良天皇が踐祚されたが、戰國の世の事とて、朝廷の式微が甚だしく、幕府の献費八萬匹で踐祚・大葬の式は漸く濟んだが、併し即位の大禮を行はれることが出來なかつた。これから十年を經過し、天文四年、三條西實隆の盡力により、義隆が二十萬匹を献じたので、天文五年二月にこれを擧行された。義隆は功により、太宰大貳に補し、昇殿を許され、左兵衛佐に任じ、六年正月には從四位上に叙せられた。

天文七年二月、義隆は書を朝鮮の禮曹參判に寄せて、大藏經・朱註・五經・漏刻などを求めたが、爾來海船を通じて交を結んだ。九年には伊豫守を兼ね、十年には從三位に進んだ。十二年には大擧して尼子晴久を討つたが、城が堅くて拔けず、且つ晴久の爲に糧道を絶たれ、全軍は日に苦境に陷り、また降者の叛き去る者が多かつた。よつて義隆は陸路から、嫡子義房は海路から、各々僅に免かれて山口に還つた。十三年には侍從を兼ね、十四年には正三位に進んだ。

義隆は常に、「聖賢は道を以て國家を平治す。故に文道最も重く、武道これに次ぐ」といつたが、阿諛の徒は義隆の意を受け、文を主とし、佛を信じ、茶事・蹴鞠を嗜み、武備を怠つたので、老臣陶晴賢はこれを憂へ、屢々諫めて聞かれず、反つて壁臣相良武任の爲に讒せられた。毛利元就も諫めて納れられなかつた。

天文十七年、義隆は從二位に進み、兵部卿となり、十九年、舊儀に從つて入幡祠に參詣しようとしたが、偶々晴賢らは徒を組んで武任を討たうとした。時に武任は讒を構へ、「晴賢、臣を討つを以て名と爲し、實は國家を謀らんとす」といつたので、義隆は讒を信じて大いに驚き、人を遣つて晴賢を詰責した。晴賢は陳謝して富田若山城に歸り、竊かに大友宗麟に通じて不軌を謀つた。然るに義隆はこれを見て、長怖懷居するものと思ひ、武備を怠り、益々佚樂に耽つた。二十年五月、義隆は始めて晴賢の異圖を知り、援を大友氏に請うたけれども、大友氏は應じなかつた。冷泉豐隆らが僅に義隆を護衛したが、集まる者は六千餘人に過ぎなかつた。晴賢の勢が益々熾んで、大内氏の軍の死傷者・逃亡者が甚だ多く、筑山館は灰燼に化した。義隆は嘆嘆して、「家運すでに竭きたり」といひ、潛に長門の瀧戸崎に逃れたが、晴賢の追擊が急であつたから、家士數名と共に深川大寧寺に入り、四十五歳を末期として自殺した。時に天文二十年九月朔日である

おほうちよしひろ

大内義弘

名號 幼字を法師・孫太郎といふ。薙髮して有盛と稱し、法名を香積院梅窓道實といふ。

系統 大内弘世の子である

事蹟 父に繼いで周防權介となり、從四位上に叙し、左京權太夫に任じた。文中三年、今川貞世と共に九州を略し、功を以て豐前守護となつた。元中八年、山名氏清らが叛いたので、これを二條大宮に擊ち破つた。九年正月、將軍足利義滿は諸將の功を論じ、義弘を和泉・紀伊の守護に任じたので、義弘は周防・長門・石見・豐前・和泉・紀伊の六州を領し、勢が頗る強大となつた。

元中九年九月、義滿の命を受けて吉野に赴き、北畠顯敎に說いて南北兩朝の和議を媒じた。閏十月、後龜山天皇が後小松天皇に神器を傳へられ、皇統が一に歸したが、これは義弘の盡力によるといふ。

應永四年、義滿の命を受けて九州に入り、菊池貞賴・少貳忠資らを討平した。六年十月、和泉の堺浦で密に兵備を整へ、鎌倉管領足利滿兼と東西呼應して蜂起し、以て足利幕府を倒さうとしたので、義滿はこれを召したが、義弘は應じなかつた。山名滿氏・土岐詮直らも義弘に黨したので、義滿は僧絕海を遣つて再び說諭させたけれども、遂に應じなかつたので、義滿は大兵を發して堺城を圍み、十一月二十一日に陷れた。義弘は自ら眉尖刀を揮ひ、奮戰して斃れたが、時に年四十六歳であつた。これを應永の亂といふ

おほえのまさふさ

大江匡房

名號 世に江帥と稱する。

系統 大江匡衡の曾孫で、信濃權守大江成衡の子である。

事蹟 幼少から穎悟絕倫で四歳で始めて書を讀み、八歳で史漢に通じ、十一歳で詩を作り、世に神童と稱せられた。長じて文章得業生に補せられ、對策して及第し、式部少丞となつた。後三條天皇の東宮時代には、匡房は學士となつてこれに侍したが、東宮は其の才學を愛して、善くこれを遇せられた。天皇卽位の後には藏人に補せられ、ついで左衛門權佐に任ぜられた。

堀河天皇の寛治年間に參議となり、嘉保元年に權中納言に轉じ、承德元年に太宰權帥を兼ね、正二位に進んだ。嘉承年間に中納言をやめ、再び太宰權帥となつた。併し足疾の故を以て太宰府に赴かず遙に府務を決した。鳥羽天皇の天永二年大藏卿を兼ね、同年十一月五日に病を以て薙髮したが、其の夜、七十一歳で歿した。

匡房は博覽强記で、朝廷の典章を暗んじ、また和歌・詩文に長じた。江家次第二十一卷を著したが、貴紳はこれを稱揚して模範とした。曾て匡房は、「我れ文學に達し、名、古にすぐれ、齡、中壽に垂んとす。たゞ藏人頭を經ざると、子孫の不肖なるとを以て遺憾となす」といつた。世に大江匡房・藤原伊房・藤原爲房は材能を以て聞えたので、三人を並び稱して三房

といふ。

おほえひろもと
大江廣元

名號 薙髪して覺阿と號した。

系統 中納言大江匡房の曾孫式部大輔大江惟光の子である。幼時、中原廣季に養はれて中原氏を冒したが、後に奏して本姓に復した。

事蹟 廣元の家は世々儒を以て業としたが、廣元は頗る文史に渉り、また籌略があり、源頼朝の兵を起すに及び、往つて之に從ひ、其の推薦によつて安藝介となつた。壽永三年十月、頼朝が公文所を創置するに及び、其の別當となつて政治を綜理した。既にして因幡守となり、益々頼朝から尊重されたが、頼朝の創業に際しては、廣元の献言する所が甚だ多い。文治元年十一月、頼朝が行家・義經の逮捕を名として、守護・地頭を置いたのも、廣元の建策に出て居る。よつて頼朝は、廣元に肥後山本莊を與へた。廣元は朝廷の法例に明かで、幕府の事を奏請する毎に命を含んで往來し、悉く朝廷の允許を得たので、多くの史家は、「頼朝の政權掌握は、廣元及び三善康信の功多きによる」と評して居る。頼朝が右近衛大將となり、公文所を改めて政所となすに及び、廣元は其の別當となつたが、時に後鳥羽天皇の建久元年で、やがて從五位下に叙し、明法博士・左衛門大尉・檢非違使となつた。三年、三官を辭して兵庫頭となつた。

頼朝の歿後、其の夫人北條政子に信任され、細大諮詢に預つた。即ち頼家・實朝の時、背叛疑議ある毎に、廣元は康信と共に參預して之を決した。比企能員が北條氏を圖つた時、時政は之を廣元に謀つたが、廣元は答へて、「僕は久しく政事に參與したれど、武事に至りては知る所に非ず、能員を誅すると否とは、一に賢算にあり」といつた。時政は其の意を悟り、天野遠景らに能員を殺させようとし、再び廣元を召した。廣元は變の起ることを恐れ、獨り飯富宗長を從へて赴き、密に宗長に向つて「變あらば速かに我れを斬れ」といひ、時政の宅に入つて計畫し、遂に能員を誅せしめたといふ。和田義盛が兵を起した時には、廣元は北條義時と共に、實朝を奉じて法華堂に避け、謀を合せて將士を諭し、遂に義盛を殺した。時に順德天皇の建保元年九月である。

其の後、廣元は正四位に叙し、陸奥守に任ぜられたが、眼疾を患つて薙髪し、號を覺阿と稱した。既にして承久の亂が起り、後鳥羽上皇が義時を討たれた時には、廣元は康信と共に鎌倉に在り、北條氏の爲に軍國の事を統理した。此の時に當り、諸將は足柄・箱根の險に據つて官軍を拒がうとしたが、廣元は此の策を不可とし、大軍を發して京師を取る策を陳じ、遂に勝利を得たので、北條氏の爲に親愛された。嘉祿元年の六月十日、七十八歳で歿した。八十三歳歿說もある。

おほをかただすけ
大岡忠相

名號 初名を求馬といひ、後に市十郎といひ、忠右衛門と改めた。越前守と稱し、法名を松運院昭養仁山崇義といふ。

系統 姓は藤原氏である。大岡忠高の三男で、後に大岡忠眞の養子となつて、大岡氏の宗家を繼いだ。

事蹟 元祿十三年、忠眞の後を繼いで寄合となり、十五年には書院番、寶永元年には御徒頭、四年には御使番、五年には目付となり、正德二年正月、伊勢の山田奉行に任ぜられ、ついで從五位下に叙し、能登守と稱した。

享保元年二月、普請奉行に移つたが、德川吉宗が紀伊から入つて八代將軍となるに及び、二年二月、

拔擢されて江戸町奉行となり、越前と改め、十年九月、播磨・武藏比企・上總市原郡などで二千石を賜はつた。忠相は明敏果斷で、吏務に長じ、よく市政を整へ、巧に裁判を決し、世に「大岡さばき」の名を得た。吉宗は功を賞し、元文元年に寺社奉行に榮轉させ、上野・下野で二千石を加增し、舊知と合せて五千石を領せしめた。寛延元年閏十月、奏者番を兼ね、三河國宝飯・渥美・額田三郡内に於て四千八十石を加增され、始めて一萬石の諸侯に列し、三河國西大平に居城した。寶曆元年十一月、病に罹つて寺社奉行を辭し、翌十二月、七十七歳で歿した。

「大岡さばき」に關する逸話は尠少でない。紀伊侯德川光貞の領地伊勢阿濃ケ浦は禁漁地で、禁を犯した者は死刑に處せられる規定であつた。光貞の子源六郎は殺生を好み、村民の迷惑を顧みず、山野河海を荒したが、領主の若殿といふので、人が咎めないのをいゝ事にして、遂に禁漁地阿濃ケ浦を犯した。時に忠相は下役人に命じ、源六郎を縛つて嚴に詰責した。これから源六郎は謹慎する樣になつたが、光貞は忠相が剛毅と公正とで職責を全うした事に感じ、重くこれを賞した。

伊勢山田の農民は、松坂の農民と田地の境界を爭ひ、これを山田奉行に訴へた。松阪の農民が不正であつたけれども、紀伊藩の封地であつた爲に、從來の奉行は紀伊侯を憚つて決せなかつた。然るに忠相が奉行となるに及び、斷ずるに公正を以てし、山田の農民を勝訴にした。時に吉宗は紀伊藩にあつて潛に忠相の正道に感じ、其の人材を認めて居たので、將軍となるに及んで、拔擢して江戸町奉行に任じたのである。

おほざまちてんのう
正親町天皇

名號 御名を方仁（みちひと）といふ。

系統 後奈良天皇の第一皇子で、御母は藤原晴房の女で、贈皇太后藤原榮子である。第百六代の天皇である。

事蹟 天文二年に親王となり、弘治三年十月二十七日、御年三十九歳で踐祚されたが、當時、騷亂の日が久しく、公武の命令は行はれず、皇室の供御は殆んど竭乏し、從つて即位の資が無く、これから三年を經て、永祿三年正月毛利元就が米千石を献じて資を助けたので、漸く即位の大禮を擧行された。

後奈良天皇から本朝にかけては皇室の式微の極に達した時代で、老人雜話に據れば、織田信長の入洛以前には、禁中は邊土の民屋と異ならず、簷屏は崩落して無くなり、竹垣に茨などを結び附けてあつた。兒童が遊びに往つて、綠で土などを捏ねて遊び、時に破れた簾をあけて見ると、人影もない有樣であつた。また源老物語に據れば、三條橋の上から遙かに内侍所の燈火が見え、禁宮殿の左近の橘の附近には、市人が茶店を開いて居たといふが、今人の想像にも及ばない長い事である。

永祿十二年、信長は宮闕の壞傾を修補し、元龜二年に至つて竣工した。天皇は在位二十九年で、天正十四年十一月七日に後陽成天皇に讓位し、文祿二年正月五日に崩ぜられた。聖壽七十五歳である。泉涌寺に葬る。

おほくにぬしのみこと
大國主命

名號 別名を大己貴神（おほなむちのかみ）・大穴牟遲神（おほあなむぢのかみ）・葦原色許男神（あしはらのしこをのかみ）・葦原醜男（あしはらのしこを）・八千矛神（やちほこのかみ）・顯國玉神（うつしくにたまのかみ）（宇都志國玉神）・大物主神（おほものぬしのかみ）・大國玉神・國造大神にも作る。

系統 素戔嗚尊の御子であると言ひ、或は六世の孫であるとも言ふが、何れが是であるか明瞭でない。

事蹟 出雲に居住して智勇共にすぐれ、頻りに大八洲國を征服し、また神皇產靈神の子少彥名命と協力して國土を經營し、水利を通じ、田畝を開き、民業を盛んにし、醫藥・禁厭の法を起し、よく人民を愛撫したので、其の恩德になびき、威力が山陰・山陽の間に振つた。

時に天照大神は、既に天忍穗耳尊を嗣とし、豐葦原中國に君臨させ、大八洲國を治めさせようと思つて居られた。ところが大國主命の勢力が盛んであつたので、逐次に天穗日命・天稚彥（あめのわかひこ）らを出雲に派遣し、大國主命に國土獻上を相談させられたけれども、何れも目的を果さなかつた。更に武甕槌神・經津主神を出雲に派遣し、大命を大國主命に傳へさせられたので、遂に國土を獻上された。やがて天忍穗耳命の代りに、天孫瓊々杵尊が諸神を率ゐて降臨されたので、大國主命は出雲の杵築宮に隱居された。今の官幣大社出雲大社は、其の地に命を祀つたものである。

おほくぼとしみち
大久保利通

名號 幼名を正助といひ、後に一藏と改めた。號を甲東といふ。

事蹟 鹿兒島藩士である。慶應三年に岩倉具視・西鄕隆盛・小松帶刀・木戸孝允らと討幕を議し、遂に十月十四日に至り、薩長二藩は、討幕の密勅を拜するに至つた。時に前土佐藩主の山内豐信（容堂）は、討幕の計畫を聞いて驚き、其の臣後藤象二郎・福岡孝弟を大阪に遣り、將軍慶喜に說く所があつたので、遂に慶喜は大政を奉還し、明治天皇は直ちに之を許可されたが、時に慶應三年十月十四日である。十二月、利通は參與に任ぜられた。

明治天皇は、明治元年七月、江戸を改めて東京と稱し、人心を一新する爲に帝都とされたが、これは利通の建議に據る。同二年には孝允・具視・三條實美と謀り、諸藩主に版籍を奉還させ、また參議大藏卿となり、四年には孝允・隆盛・板垣退助と謀り、廢藩置縣に盡力した。同年十一月には具視・孝允・伊藤博文・山口尙芳らと歐米國情視察の途に就き、米・英・佛・白・蘭・獨・露・丁抹・瑞典・墺・瑞西の諸國を漫遊し、六年九月に歸朝し、參議內務卿に任じた。

（大久保利通）

歸朝後偶々征韓論が起つたが、利通はこれに反對し、大いに其の非を論じた。時に參議江藤新平は征韓論に破れ、明治七年二月、佐賀で亂を起したので、利通は命を受けて佐賀に赴き、これが鎭撫に盡力した。これよりさき、臺灣生蕃が我が漂流民を殺害した事から問題が起り、同年四月、我が政府は西鄕從道・谷干城を遣つて臺灣蕃地の一部を征伐させた。よつて日清兩國の國交が一時危殆になつたが、八月、利通は全權辨理大臣となつて北京に往き、大いに談判し、且つ清國駐劄英國公使ウェードの調停により、償金五十萬兩を取り、平和を見るに至つた。十年、西南の役に際しては、廟堂に列して勢があり、役後、朝廷は金帛を賜ひ、利通の功を賞せられた。明治十一年五月十四日、反對派の刺客島田一郎以下六名に襲はれ、東京赤坂紀尾井坂で殺された。時に四十八歲である。惜し一郎らは曾て隆盛の知遇を受けたもので、隆盛が征韓論に破れ、叛を企てゝ誅せられたのは、元來、利通との衝突によるものであると信じ、隆盛の爲に怨を報じたものであるといふ。東京青山墓地に葬る。世に利通・隆盛・孝允を維新の三傑といふ。

おほくましげのぶ
大隈重信

事蹟 佐賀藩士である。明治維新の際には國事に奔走し、やがて參議に擧げられ、明治四年十月、特命全權大使岩倉具視及び大久保利通・木戸孝允・伊藤博文らが歐米視察の途に就いた時には、西鄕隆盛・副島種臣・後藤象二郎・板垣退助・大木喬任らと國內に留まり、太政大臣三條實美を輔けて政務に當つた。

明治六年、征韓論が高潮し、隆盛は朝鮮王問罪の師を出すべきことを主張し、種臣・象二郎・退助・新平らはこれに贊成したが、重信は喬任・勝安房らとこれに反對した。六月、偶々具視・利通・孝允・博文らが歸朝し、內治の急を說き、外征の非を論じたので、重信らの意見が通つた譯である。

重信は明治六年から同十三年まで、大藏卿に任じて補弼の功があつたが、十三年に官を辭し、漸く政黨團結の必要を感じ、「嚶鳴社」の沼間守一・河津祐之・肥塚龍・吉田次郎・末廣重恭・靑木匡・波多野傳三郎・草間時福・田口卯吉・丸山名政・島田三郎及び「東洋議政會」の矢野文雄・尾崎行雄・犬養毅・藤田茂吉・箕浦勝人らの同志を結合し、更に河野敏鎌・前島密・北畠治房・小野梓・牟田口元學・成島柳北らを加へ、新に「立憲改進黨」を組織し、十五年四月十六日、東京木挽町の明治會堂で結黨式を擧げ、重信は推されて其の總理となつた。

其の趣意書の中には、(一)王室の尊榮を保ち、人民の幸福を全うすること、(二)內治の改良を主とし、國權の擴張に及ぼすこと、(三)中央干涉の政略を省き、地方自治の基礎を作ること、(四)社會進步の度に從ひ、選擧權を伸潤すること、(五)外國に對し、勉めて政略上の交涉を詳くし、通商の關係を厚くすること、(六)貨幣の制は硬貨の主義を持すること――などの翼望を述べて居るが、要するに自由黨と同樣に政府の反對に立ち、政黨內閣の成立を望むものである。

明治十八年十二月に組織された伊藤內閣の時にも、明治二十一年四月に組織された黑田內閣の時にも、引續いて外務大臣の椅子に就いたが、黑田清隆の委任を受け、獨力强硬の態度で條約改正問題の衝に當り、二十二年二月には米國と、六月には獨逸と、八月には露西亞と改正條約を結んだ。

然るに其の改正條約案が、外國新聞によつて世上に洩れ、外國法官を日本の高等裁判所に採用するの件を始めとして、我が國に不利の點が多かつたので、重信は朝野の反對を買ひ、十月十八日、閣議を終へて霞ヶ關の官邸に歸らうとする時、刺客來島恒喜に爆彈を投ぜられて右足を失ひ、二十五日には黑田內閣の總辭職となつたのである。

明治二十九年に組織された松方內閣（一名松隈內閣）の時には、また外務大臣となり、臨時に農商務大臣を兼ねた。三十一年六月には自ら總理大臣となつて憲政黨內閣（一名隈板內閣）を組織し、同時に外務大臣を兼任したが、大正三年四月にも自ら總理大臣となつて內閣を組織した。三年八月には日獨の國交が斷絕し、爾來、國務に盡瘁し、四年十一月には京都で大正天皇の卽位の大禮が行はれ、重信は七千萬の臣民を代表して壽詞を奏した。五年七月には新日露協約を結んだが、十月に內閣の瓦解と共に野に下り、また功によつて侯爵を授けられた。

重信は明治・大正にかけての大政治家として活動した外に、子弟の敎育にも盡瘁したが、今の早稻田大學は彼の創立にかゝるものである。大正十一年一月、八十五歲で歿した。

おほしほへいはち
らう

大鹽平八郎

名號 名を後素といひ、字を子起といひ、通稱を平八郎といふ。中齋は其の號である。

事蹟 大阪の與力である。少壯から學問を好み、王陽明の學を奉じた。剛直敏活で、吏務に通じて居たが、併し嚴格に過ぎる所があつた。後に職を辭して諸生に教へた。

天保七年、諸國に大雨があり、米穀が豐熟せず、人民の饑餓に迫る者があつたけれども、幕吏は聚斂して賑救しなかつた。平八郎はこれを憂ひ、翌八年二月、上書して官穀を賑せんことを請うたけれども、町奉行跡部良顯は省みなかつた。平八郎は憤つて兵を起し、檄を攝津・河内・和泉・播磨などに飛ばし、同志と黨を結び、人民を救濟するを名として、民兵を擧げようと謀つた。既にして同志の平山助次郎が密告した爲に事が露顯した。よつて平八郎は、瀨田濟之助・小泉淵五郎・吉見九郎右衛門・近藤梶五郎・河合郷左衛門・渡邊良左衛門・庄司儀左衛門らの諸同志を率ゐ、二月十九日、火を市中に放ち、城代の家を攻めた。城代・町奉行などが、出兵して之を拒ぐに及び、勢が稍々沮喪した。

平八郎は事の成らないのを知り潛に八軒家から舟に乘り、天滿橋下に遁れ、夜上陸して衆を散じ、京都油掛町の美吉屋五郎兵衛の隱宅に潛匿したが、捕吏の爲に包圍され、子の格之助を介錯し、自ら火を放つて自殺した。時に天保八年三月二十六日の夜である。此の騷動の爲に、大阪の城倉は燒失し、市家の兵火に罹つた者が一萬八千餘戸に及んだといふ。

おほじんてんのう

應神天皇

名號 御名を譽田別皇子といふ。また大鞆別命・胎中天皇とも稱する。

系統 仲哀天皇の第四皇子で、御母を神功皇后といふ。第十五代の天皇である。

事蹟 仲哀天皇の九年十二月、筑紫で誕生された。既に仲哀天皇は崩じ、未だ應神天皇が幼弱であられたので、長く神功皇后が攝政されたが、皇后の崩後、御年七十一歳で即位された。當時、三韓征服の後であつたから、韓土から歸化する者が多く、學術技藝の輸入も尠少でなかつた。

即ち十四年二月には、百濟から縫衣女眞毛津を貢した。また同年支那人弓月君（融通王）は、百二十七縣の部民を率ゐて、百濟を經て歸化し、毒蠶・織物の業を傳へたが、これが秦氏の祖である。

十五年には、百濟から阿直岐が來朝して、良馬を獻じた。阿直岐は學問に通じて居たから、皇太子菟道稚郎子は、彼を師として漢學を學ばれた。

十六年には博士王仁が天皇のお召によつて百濟から入朝し、論語十卷・千字文一卷を獻じた。稚郎子は、また王仁に從つて漢學を學ばれた。

また王仁と同時に、韓鍛の卓素、呉服の西素、釀酒の仁番（須々許理ともいふ）らの工藝家が來朝した。

二十年には支那の阿知使主、其の子都加使主が十七縣の民衆を率ゐて歸化した。三十七年には阿知使主を呉（國（楊子江以南の地方）に遣つて、機織・裁縫の工女を求められたが、四十一年に兄媛・弟媛・呉織・穴織などを率ゐて歸朝した。

斯樣に應神天皇の朝には、朝鮮・支那から多くの歸化人が來朝し、また漢學・儒教・工藝などが傳來し、我が文化史上注目すべき史實が多い。

應神天皇は四十一年二月に崩ぜられたが、日本書紀に據れば、聖

壽百十一である。河内國恵我藻伏崗陵に葬る。元明天皇の和銅五年には、天皇を豐前國宇佐に祭り、八幡大神宮と號し、清和天皇の朝には、山城國男山石清水社を創められたが、何れも歴代朝野の崇拜する所である

をうすのみこと

小碓尊

「やまとたけるのみこと・日本武尊」の項を參照されたい。

おほただうくわん

太田道灌

名號 初名を資長といひ、小字を鶴千代といひ、元服して持資と稱し、字を源六郎と改めた。薙髪して道灌と號し、備中入道と稱する。法名を洞昌院香月道恩といふ。

系統 源三位頼政の裔で、父を太田資清といひ、父子ともに扇ヶ谷上杉家の宰相である。

事蹟 幼時から雄偉で、十一歳の時に能く文を屬した。後花園天皇の享德二年、從五位下に叙し、康正元年に家を繼ぎ、正五位下に進み、備中守に任じ、左衛門

（太田道灌）

太夫と稱した。康正二年江戸城を築いて居り、扇ヶ谷上杉定正を相けたが、定正は大小となく諮詢したので、兵勢が稍々振つた。長祿元年に薙髪して道灌と號し、寛政六年三月、入京して將軍義政に見え、また後土御門天皇に謁した。

文明五年には駿河の亂を平げたが、九年に山内上杉顯定と長尾景春とが兵を交ふるに及び、道灌も兵を發して屢々長尾氏と戰つて勝ち、威名が益々著はれ、關東の將士の扇ヶ谷上杉家に屬する者が多かつた。よつて山内上杉家は道灌を妬み、扇ヶ谷上杉家の隆盛を嫌ひ、之と隙を生じ、道灌を除き、扇ヶ谷の勢を殺がうとした。偶々道灌は江戸・河越の二城を修め、其の規模が制を論へたので、顯定はこの機に乘じて術を弄し密に定正の近臣を利用して、「道灌は山内家に抗し、兩家の禍をなす」と讒せしめた。暗愚な定正は讒を信じ、使を遣つて道灌を誡さしめたが、道灌が命を聽かなかつたので、定正は道灌を相模の糟屋第に召し、謀を設けて浴室で殺した。時に文明十八年七月である。道灌は五十五歳であつたが、衆人は彼が絶命の歌「昨日までまく妄執を入れ置きし、へむなし袋いま破りけん」を讀んで歎惜した。これから扇ヶ谷上杉家は衰へた。

道灌は容貌が魁偉で、穎悟大膽で、善く謀り善く戰つたので、衆は皆畏れ憚り、屬僚は「諸葛武侯の再生なり」といつた。道灌は敢て軍事を議せず、歌道及び飛鳥井の家書などを話題とした。寛正六年三月入京した時、後花園上皇は道灌が和歌に名あることを聞いて居られたので、詔して武藏野の風景を問はれた。道灌は和歌を以て奉答し、「露置かぬ方もありけり夕立の、空より廣き武藏野の原」とよんだ。上皇は感あり、「武藏野は刈萱のみと思ひしに、かゝる言葉の花もありけり」といふ御製を賜はつた。後土御門天皇の文明十二年にも上落したが、此の時にも勅使が東山第に下向し、都鳥の事を諮はせられたが、道灌は取りあへず、「年ふれど我がまだ知らぬ都鳥、隅田川原に宿はあれども」と詠じた。

俗說に據れば、道灌は弱年の頃狩獵に出で、野中で驟雨に遇ひ、民

家を訪れて蓑を借らうとした。時に一少女は無言のまゝ、ほゝゑみながら山吹の折枝を道灌の前に差出した。これは古歌に、「七重八重花は咲けども山吹の、實の一つだになきぞ悲しき」とある歌意に因り、蓑のない事を傳へたが、未だ歌學を學ばず、人情に通ぜず、少女の意を覺ることが出來なかつたので、心中大いに慙ぢ、これから和歌に志したのであるといふ。

おほつきばんすゐ　大槻磐水

名號　名を茂賢といひ、字を子煥といひ、玄澤・磐水などの號がある。

系統　仙臺の人大槻玄梁の長子である。

事蹟　十三歲の時、建部清庵に從つて醫學を修め、後に杉田玄白の門に入つて、和蘭醫術を學び、更に長崎に遊學して蘭學を究めた。時に前野良澤は江戸にあり、蘭學を以て聞えたので、磐水は之に師事して學が漸く進んだ。天明六年、仙臺侯に召されて侍醫となり、文化八年、幕命によつて蘭書を飜譯し、五月、將軍德川家齊に謁見した。ついで命により、白歲白銀二十枚を賜はつた。九年三月、藩主の命によつて、番頭の次班に進み、祿三百石を賜はつた。文政五年五月、幕府は多年飜譯の功を賞し、五人扶持を給した。十年三月、七十一歲で歿した。江戸高輪東禪寺に葬る。

磐水は人と爲り質直嚴密で、特に惡を憎むことが甚だしかつた。而して子弟を敎ふるに當つては、諄々と說いて倦まず、人々は皆其の溫厚篤實に服した。

著書が甚だ多く、環海異聞・北海採事・金城祕韞・海外異聞・官能餘言・六物新志・厚生新編・蘭設辨正・瘍疹啓迪・重訂解體新書・瑪醫新書・蘭學梯梯・蘭畹摘芳・蘭學凾牘・蘭說辨惑・鬼錄などがある。

おほともものやかもち　大伴家持

系統　大納言大伴旅人の子である。

事蹟　聖武天皇の天平中に從五位に叙し、越中守となり、累進して正四位下に叙し、光仁天皇の寶龜元年に太宰少貳となり、後に左中辨中務大輔に進み、相模・上總・伊勢の守を經て、十一年二月に參議兼右大辨に拜せられ、天應元年に東宮太夫と爲り、左大辨に轉じ、從三位に叙せられた。

桓武天皇の延曆元年正月、氷上川繼の事に坐して官を奪はれ、京師の外に移されたが、四月に赦されて太宰に復し、六月に陸奥按察使鎭守府將軍を兼ね、二年に中納言に任ぜられた。三年には持節征東將軍となり、四年には上奏して、「陸奥の國たる、名取以南の十四郡は、山海に僻在せるを以て、施政に便ならず、是に因り、彼に多賀・階上二郡を置きて百姓を募集し、國府を充實し、東西を防禦せん」といひ、朝廷の許可を得たが、同年八月、五十七歲で歿した。

間もなく宗人右少辨繼人らが、皇太子の命を受けて藤原種繼を殺し、事が露顯して捕はれたが、其の黨が家持に連り、「其の謀主なり」といつたので、遂に名籍を追除され、其の子永平は隱岐に流された。併し桓武天皇は崩ずるに際し、遺詔して家持の本官を復せられた。家持は柿本人麻呂・山部赤人・山上憶良らと共に和歌を以て聞え、名吟が頗る多いが、名門の出である爲に、官位は三家よりも頗る高い。其の和歌は雄壯を主とし、悲愴の詠にも長じた。萬葉集は其の撰であるといふが、併し詳かでない。

おほともよししげ　大友義鎭

名號　幼名を龍法師丸・五郎・親太郎などといふ。將軍足利義晴の諱字を受け、義鎭と改名し、薙髮して宗麟と號し、法名を瑞峯院といふ。また切支丹宗に歸依して教名をフランシスコといふ。

系統　大友義鑑の長子で、母は坊城氏である。

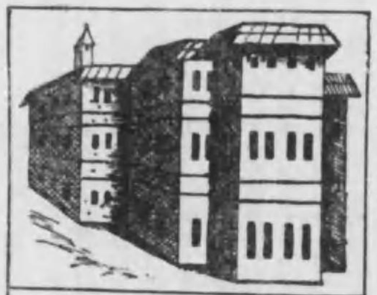
事蹟　幼時から學問を好み臣下の服する所となつた。天文年

（大友義鎭の羅馬字印）

中、熊本城主高橋親忠は義鎭に屬し、後に島津氏に屬したので、義鎭は親忠を攻めたが、勝たなかつた。二十年には菊池義宗を攻めて肥後を併せ、弘治二年には豐前を攻めて宇佐氏の領地を併せ、三年には筑前の秋月清種を滅ぼした。

永祿五年には九州を併有しようとし、府內城を長子義鑑に讓り、白杵に丹生島城を新築して居り、入道して三非齋宗麟と號した。六年には豐前を侵略し、更に周防に航しようとしたが、毛利隆元は防府に屯して之に備へたので、將軍足利義輝は大納言興通を遣つて兩氏を和解させた。これよりさき、筑後に叛者が出たので、七年三月、兵を發して筑後に入り、秋月種實と戰つて和し、麥生城を降し、草野氏を獄城に破り、速水實久を猫尾城に破り、筑後を平定した。

はじめ義鎭は文を好み、武を嗜み、政事に勵み、絕を繼ぎ、廢を興したが、諸州を平定してから、漸く政事に倦み、酒色に耽つたが、賢臣戸次道雪に諫められ、其の誠忠に感じて行を改めた。永祿八年四月、立花鑑載が叛いたので、義鎭は道雪を遣つて之を攻めさせ、鑑載を殺して立花城を取つた。十二年三月、毛利家の吉川元春・小早川隆景が立花城を圍んだので、十一月、義鎭は毛利氏と和し、豐筑の地が著く平定した。天正五年義鎭は島津義久を討ち、大敗して歸つたが、八年五月、豐筑の地が龍造寺氏に屬したので、兵を出して秋月種實と戰つたが、志を得ないで止めた。其の後、義鎭は屢々



（府內のコレジオ）

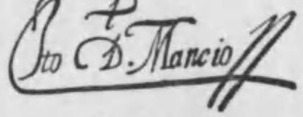
義鎭は最も早く西洋の學藝・宗教に親んだ切支丹大名の一人であつた。彼は豐後の日出・神宮寺浦・臼杵・佐賀關などに葡萄牙船を招致し、南蠻貿易を營んだので、國內は富み榮えた。また自ら葡萄牙人デイオゴ＝ワスに就いて西洋の學術を修め、天文二十年には來朝中の宣教師ザビエルを招き、また屢々葡萄牙領印度副王に通信して宣教師を招き、臼杵に教會堂を建てゝ布教させ、天正六年には自ら洗禮を受けて信徒となり、教名をフランシスコと稱し、八年には宣教師アレッサンドロ＝ワリニヤーニ（ノビシヤート）の建議を容れ、臼杵に修練所（修道院）を建て、府內（大分）に神學校（コレジオ）を建てた。修練所には耶蘇會士たらんとする者を收容し、二年間嚴格な宗教的訓練を施して修道士（イルマン）を養成する。神學校には修道士中の優秀者を入學させ、更に高遠な神學・語學及び必要な學藝を授けた。但し歐羅巴から來て神學校に入つて

居る者には、特に日本語と佛教とを授けた。

義鎮はワリニヤーニの建議を容れ、肥前の大村純忠・有馬晴信と相談し、(一)羅馬法王グレゴリオ十三世に敬意を表する、(二)日本人に歐洲文化を視察させる、(三)東洋にも日本人の樣な智能の優れた國民のある事を歐羅巴人に知らせる、(四)傳道上有望な日本を獨立の宣教區にする、(五)日本の基督教教育をもつと盛大にする——ことを圖る爲に、歐羅巴に使節を派遣する事にした。卽ち大友氏の代表として伊藤祐益(伊東義賢に非ず)、有馬氏の代表として千々石清左衛門、大村氏の代表として中浦(名不明)・原(名不明)の四名が渡歐することになつたが、何れも十五六歳の少年であるから、世に天正少年遣歐使といひ、これが邦人渡歐の始めである。

是等の四少年は、數名の隨行員(通譯員)を從へ、ワリニヤーニに導かれて、天正十年正月三十日(西紀一五八二年二月二十一日)、葡萄牙船イニヤース=リマ號に乘つて長崎を出帆し、支那の媽港及び印度のコチンを經、其の年の秋にゴアに到着し、こゝに暫らく滯在し、天正十二年(西紀一五八四年)の春にゴアを出帆し、アフリカの希望峯を廻航し、同年七月五日(八月十日)に葡萄牙のリスボンに上陸し、非常な歡迎を受け、ついで西班牙に入り、首府マドリッドではフイリップ二世から王公の禮を以て待遇され、ついで天正十三年二月十九日(西紀一五八五年三月二十日)に羅馬に入つた。其の時には羅馬法王の派遣にかゝる騎兵隊に迎へられ、非常な盛儀を以てグレゴリオ十三世に謁見し、大友氏・大村氏・有馬氏の書翰・贈物を呈したが、此の時、法王は四少年を抱き起し、涙を流して喜び、世界の端から遙々來訪した勞苦を慰めてやり、大國の大使と同樣に待遇した。グレゴリオ十三世は間もなく歿し、カルジナル=シキタスが羅馬法王となつたが、四少年は其の卽位式にも參列した。また羅馬の議會を傍聽する權利を與へられたが、これは君主のみに與へられる權利である。羅馬法王は日本の神學校などの教育費として、年々四萬二千エクターを支出することを約束した。四少年は天正十三年(西紀一五八五年)にヴェニスに入つたが、市長及び元老は大歡迎をなし、大畫家チントレットに二千エクーの揮毫料を拂つて、四少年の肖像畫を描かせ、これを歴代市長の肖像畫と同じ所に揭げた。此の時、四少年がヴェニス市に呈した感謝狀が羅馬ヴァチカン法王宮附屬圖書館に現存して居る。四少年は更にパドワ・マンツア・ミラノ・ゼノアなどの文物を視察し、西班牙王の出した迎へ船で西班牙に渡り、葡萄牙に入り、天正十四年(西紀一五八六年四月三十日)にリスボンを出發し、翌年ゴアに到着し、暫らく此の地に滯在した。時に印度副王はワリニヤーニを日本に遣使し、秀吉に國書・贈物を呈しようと計畫して居たので、四少年は再びワリニヤーニと同伴し、天正十六年(西紀一五八八年四月)にゴアを出發し、途中で媽港に滯在し、天正十八年六月二十日(西紀一五九〇年七月二十一日)に長崎に上陸した。曾て長崎を出てから九年目である。

義鎮・純忠は既に歿して居たので、四少年は有馬晴信・大友義統・大村喜前の歡迎を受け、長崎に滯在すること約五箇月、翌年一月にワリニヤーニの一行と共に長崎を發して東上し、天正十九年閏正月八日(西紀一五九一年三月三日)聚樂第で秀吉に謁見し、頗る盛儀であつた。四少年が京都に在る間、九年間の旅行物語を聞く爲に訪問



(伊藤祐益の自署)

する貴族・諸侯が頗る多く、四少年は支那・印度・歐羅巴の事情を說明し、また持參した時計・地球儀・數學及び天文學の器械・樂器・書籍・版畫・美術品・衣服・珍奇な物品などを見せた。これから二十餘年間を葡萄牙風味流行期といふ。

おほのやすまろ
太安麻呂

事蹟 曾て天武天皇は、皇位の繼承及び先代の舊辭を傳へようと思召され、舍人稗田阿禮に口授され、よく誦習させられたが、阿禮は聰明で勅語を記憶して忘れなかつた。斯くて元明天皇は、和銅四年九月、博士太朝臣安麻呂に勅し、阿禮の記憶せる勅語の舊辭を聞き取つて筆錄させられた。五年正月に完成したが、これが古事記であつて、三卷からなつて居る。上卷には天地初發の時から鸕鷀草葺不合尊まで、中卷には神武天皇から應神天皇まで、下卷には仁德天皇から推古天皇までを錄したもので、現存せる最古の歴史である。當時は片假名・平假名の便がなかつたから、言辭を直ちに筆記する事が出來ず、全體を漢文で記し、所々に漢字で邦語を挿入してある。古事記の註釋書は甚だ多いが、本居宣長の古事記傳が最も名高い。元正天皇の朝、安麻呂は舍人親王と共に勅命を奉じ、國史の撰修に從ひ、養老四年五月に完成したが、これが日本書記である。「とねりしんわう・舍人親王」の項を參照されたい。

おほばかげちか
大庭景親

名號 通稱を平三郎といふ

系統 大庭平太景能の弟である。

事蹟 相模の人で、保元の亂に源義朝に從つて白河殿を攻めた。曾て斯罪に當る行爲をなしたが、平氏の救濟によつて、免かれる事を得たので、深くこれを德とした。源頼朝が兵を石橋山に擧ぐるに及び、弟景久と共に兵三千を率ゐて之を討ち、聖勢大いに破つたので、頼朝は僅に逃れた。既にして關東の將士は頼朝に來附し、其の勢威が大いに振つたので、景親は兵一千を率ゐて藍澤宿に至つた。然るに頼朝が兵二十萬に將として足柄を越え、甲斐源氏二百餘を以て駿河に屯するを聞き、大いに驚いて策の出づる所を知らず、河村山に逃れたが、間もなく降伏したので、頼朝は景親を捕へて平廣常の邸に拘留し、固瀨河上で斬殺した。

おほひこのみこと
大彦命

系統 孝元天皇の第一皇子で、御母は皇后鬱色謎命である。阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狹狹城山君・筑紫國造・越國造・伊賀臣など、七族の始祖である。

事蹟 崇神天皇の十年、四道將軍の一人に選ばれ、和珥坂に到つた時に、少女の歌を聞いて反亂のある事を知つて天皇に奏したが、偶々武埴安彦が謀反したので、詔を奉じて安彦を討伐し、彦國葺と協力して安彦を輪韓川(現今の山城木津川)に射殺した。

十月、京師を出發して北陸に赴任し、遂に此の地方を鎭め、十一年四月、京師に歸還して平定の狀を奏上した。其の子孫も越國の開發に盡した。

四道將軍の一人として東海を鎭した武淳川別命は、此の大彦命の子であるが、大彦命及び武淳川別命の後裔で、各地に繁殖した氏族には、佐々貫山君(近江)・阿倍臣(駿河)・陸奥臣・安積臣・信夫臣及び柴田臣・會津臣・飛島臣・磐城臣・道君・高志國造・深江國造などがある。「しだうしやうぐん・四道將軍」の項を參照されたい。

おほほどのみこ
意富富杼王

名號 一名を大郎子といふ。

系統 應神天皇の御孫である。稚野毛二派皇子の御子で、御母は弟日賣眞若比賣命（百師木伊呂辨）である。

事蹟 古事記に據れば、「意富富杼王は、三國君・波多君・息長君・坂田酒人君・山道君・筑紫之米多君・布勢君等の祖なり」といふ。

おほまちよしる
大町芳衛

事蹟 號を桂月といふ。明治二年、高知市に生れた。東京帝國大學文科大學を卒業してから、中學校に教鞭をとつたが、後に雜誌記者として文名を走せた。明治末葉の青年で桂月の文に親しまない者は居ない位であつた。大正十四年、五十七歳で歿した。著書が頗る多い。

おほむらすみただ
大村純忠

系統 藤原純友から出て居る。純友は天慶年中に叛し、一族悉く戰死したが、其の子直純は獨り遁れ、後に赦されて官位を拜し、一條天皇の正曆年中に肥前國彼杵郡大村久原城に居し、子孫は世々大村を氏とした。直純から七代目の忠澄に至り、鎌倉幕府に仕へたが、建保年中、兄の經澄は高來郡を領し、有馬の原城に居して有馬氏を稱し、兄弟共に大番役を勤めた。十七代の純前には嗣子が無かつたので、純忠（有馬義貞の弟）が有馬家から入つて後嗣となつた。

事蹟 純忠は聰明であつたが、一面强情で、自己の信ずる所を強行した。領主であつた。正親町天皇の永祿五年には横瀨浦を開いて葡萄牙船を招致し、六年には重臣二十五人と共に洗禮を受けて天主教徒となり、教名をバルトロメウと稱し、八年には福田港を開き、元龜元年には長崎港を開いて南蠻貿易を營んだ。天正十年には中浦（名不明）・原（名不明）の二名を遠く羅馬法王グレゴリオ十三世の許に派遣した。二名は有馬晴信の使千々石清左衛門、大友義鎮の使の伊藤祐益と共に、前後九年間の歲月を重ねて歐羅巴を遍歷して來た。四名は何れも十五六歲の少年であつたので、これを天正少年遣歐使といふ。遣歐使の事は「おほともよしししげ・大友義鎮」の項を參照されたい。

おほむらますじらう
大村益次郎

名號 本姓を村田といひ、後に大村と改めた。諱を永敏といひ、通稱を益次郎といふ。

事蹟 周防國吉敷郡鋳銭司村に生れた。父を孝谷といふ。幼時、漢學を廣瀨淡窓に學び、後に大阪に出でて洋學を緒方洪庵に學んだ。既にして武備の嚴弛を慨き、專ら洋式の兵法を講じて倦らず、また江戸に遊學して其の術を研究し、大いに得る處があつた。藩主毛利敬親は之を聞き、拔擢して兵學の師範となし、子弟教授の任に當らせた。また命を受けて音書西の兵書を抄譯し、名づけて戰鬪術門といつた。

慶應二年、長州藩が幕府と隙を構ふるに及び、幕府は出兵して其の四境に迫つた。益次郎は自ら兵を率ゐて北方の一面に當り、連戰連勝、兵威が大いに振つた。明治元年、敬親の世子元德に隨つて入京した。これよりさき、德川慶喜は大政を奉還し、ついで鳥羽・伏見の變があり、官軍が東征するに及び、益次郎は朝命を受けて軍務局判事となり、江戸府の判事を兼ねた。偶々德川氏の餘黨彰義隊が上野の寺刹山に據り、陰に會津・仙臺の諸藩と通じて、事を擧げようと圖つた時、益次郎は兵を督して之を破つた。ついで一軍を特派し、征東の師と合して會津を襲はせ、更に獻策して五稜廓に據る榎本武揚・大鳥圭介らの兵を破り、東北平定の功を擧げた。朝廷は其の功を賞し、世襲の祿千五百石を賜はつた。

明治新政府の成るに及び、兵部大輔の職に任じ、大いに兵制を革新しようとし、佩刀を禁じ、徵兵令を定め、兵學校・造兵局を開き、鎭臺を七道に分置する策を立てたが、偶々京都木屋坊の旅館に投宿して居る時、守舊黨の爲に襲擊され、重傷の爲に歿した。時に明治二年九月で、四十七歲であつた。詔によつて從三位を贈らる。

おほやまいはほ
大山巖

事蹟 薩州藩士である。戊辰の役に際しては、明治十年西南の役に際しては、一旅團の兵を率ゐて有栖川宮熾仁親王に從ひ、福岡に上陸して館本城に向ひ、薩軍を討平して軍功を樹てた。十三年から十八年にかけては、陸軍卿の任にあつて軍政を補弼し、十八年十二月、伊藤內閣が組織された時には陸軍大臣となり、臨時に海軍大臣をも兼ねた。二十一年四月に組織された黑田內閣及び明治二十二年十二月に組織された山縣內閣の時にも、陸軍大臣となつて軍政の改革に盡力した。

明治二十五年八月、伊藤內閣が組織された時には、また陸軍大臣に任じたが、此の內閣の時に偶々日清戰爭が起つた。時に陸軍大將であつた巖は、第二軍司令官となり、二十七年十一月、軍を率ゐて花園口に上陸し、大連灣を占領し、金州城を陷れ、行政廳を城內に置き、我が海軍の援助を得て、十一月二十二日、僅か一日で旅順の堅壘を陷れた。ついで海軍中將伊東祐亨と協力し、海路威海衞に向ひ、榮城灣頭に上陸して摩天嶺を陷れ、二十八年二月、海軍の正攻と相俟つて威海衞を圍み、やがてこれを陷れ、更に陸軍大將山縣有朋の率ゐた第一軍と合し、北京に向つて進擊し、三月、牛莊・田庄臺・營口などを取り、將に天津に迫らうとしたが、偶々清國は媾和を申込み、やがて凱旋するに及んで陸軍大臣に復職し、二十九年九月、伊藤內閣の瓦解と共に辭職した。

明治三十七年二月、我が國が露西亞と戰端を開くに及び、（一）三月、陸軍大將黑木爲楨は第一軍を率ゐて鎭南浦に上陸し、進んで九連城・鳳凰城を占領した。（二）四月、陸軍大將奧保鞏は第二軍を率ゐて鹽大澳に上陸し、普蘭店・貔子窩・金州・南山を略して北進し、六月に得利寺の敵を破つた。（三）五月、陸軍中將川村景明は第十師團を率ゐて大孤山に上陸し、第一・二軍の間を連絡して北進した。（四）陸軍大將乃木希典は第三軍を組織して旅順に向ひ、（五）陸軍大將野津道貫も第四軍を組織し、析木城を陷れて北進した。

六月二十二日、明治天皇は巖を滿洲軍總司令官に任じて諸軍を統べしめられた。敵將クロパトキンは、形勢の非なるを見て、我が軍を遼陽附近に逆襲しようとした。時に巖は參謀總長兒玉源太郎以下の幕僚を率ゐて盍平城外に在り、我が全軍の部署を定め、大擧して遼陽に迫り、激戰數日、クロパトキンは九月四日に敗走したが、十月に入つて再び來襲したので、我が軍はこれを擊退して遼陽に據つた。敵は奉天に至り、本國からの援兵を合せて南下したので、我が軍はこれと沙河附近に會戰して大勝を得た。

明治三十八年一月、旅順陷落後、敵を奉天に包圍殲滅させる策を立てたが、然るにクロパトキンは六十萬の兵を督し、連敗の恥を此の

一戰で雪がうと力めた。我が第一軍は敵の右翼から進み、第二・四軍は敵の左翼及び正面から進み、第三軍は迂回して敵の後方を脅かしたので、三月九日、敵將は本國に向つて「余は包圍されたり」と打電するに至つた。此の時、巖は全軍四十萬に總攻擊令を發したので、三月十日、敵は破れて北方に走り、三月十五日、巖は多くの幕僚を從へて奉天城に入つた。此の戰に於ては、捕虜四萬餘、敵の遺棄死體二萬六千、負傷者九萬に達し、我が死傷者も四萬に達した。毎年三月十日を以て、此の大勝の記念日とする。巖は戰後公爵を授けられたが、大正五年十二月、七十五歳で歿した。

おほわだたてき
大和田建樹

事蹟 伊豫國宇和島の人である。明治時代の國文學者で、また歌人である。國文に關する著述が多いが、最も流行したのは、其の作にかゝる鐵道唱歌である。明治四十三年、五十四歳で歿した。

をかあさじらう
丘淺次郎

事蹟 明治元年、靜岡縣に生れたが、特に動物學を專攻し、理學博士の學位を受け、長く東京高等師範學校に教鞭を執つた。動物學に關する著述が多いが、進化論講話は最も聞えて居る。隨筆物もある。

をかざきまさむね
岡崎正宗

名號 薙髮して岡崎五郎入道といふ。

系統 岡崎行光の子である

事蹟 鎌倉に住んで刀劍製作に從つたが、北條高時が誅せられ、鎌倉が兵燹に罹つたので、京師に移つて薙髮し、岡崎五郎入道と號した。間もなく足利尊氏が叛き、天下が再び亂れたので、正宗の作つた刀劍は實地に用ひられ、益々精妙を顯はした。正宗は幼年から諸國を歴遊し、深く意を用ひて刀劍を鍛つたので、先人未發の法を考案し、天下の寶刀は多く其の腕に成つた。即ち三好長慶の三好、德川家康の本莊、蒲生氏鄕の會津、本多忠勝の中務、立花宗茂の豐後、水野勝成の大垣、石田三成の石田、永井道存の永井などは、正宗の製作した名刀である。

正宗は後村上天皇の興國五年、八十歳で歿したが、子がなかつたので、近江高木の貞宗を養嗣とした。諸國の劍工の正宗に師事する者が多かつたが、就中、越中松倉の鄕義弘、越中御腹の佐伯則重、美濃多藝郡の志津兼氏、美濃關の金重、筑前の金剛盛高、筑前隨岐潤の左衞門三郎、備前長船の兼光及び長義、山城の長谷部國重、石見の直綱を正宗門下の十哲といふ。

をかじませきりやう
岡島石梁

名號 名を達といひ、字を仲通といひ、石梁と號した。

事蹟 加賀の藩士である。出でて木下順庵に學んだ。當時、順庵の門に新井白石があつたが、或る日、順庵は白石を加賀侯に推薦しようとして、其の旨を白石に告げた。ところが石梁はこれを聞き、戚然として白石に物語り、「余笈を負ふて遠遊こゝに若干年、此の頃、家書を得たり、老母日に衰頽し、門に倚りて余が歸るを待つ、一念到る毎に百感心に攢まる、若し幸に吾れ先生の推薦に賴り、本藩に褐を釋く事を得ば、願足れり」といつた。白石は此の言を聞き、順庵を訪れて、「余が仕を求むる、何れの國かこれ擇ばん、請ふ、余を舍て、彼を薦めよ」といつた。順庵は感歎して、「世衰へ、道微に、日に澗澤に入る、子が如きは祇無に

して傳有なるものなり」といひ、石梁を加賀侯に推薦したので、石梁は故國加賀侯に仕へ、老母に孝を盡す事が出來た。

をがたこうあん
緒方洪庵

名號 名を章といひ、字を公裁といふ。はじめ三平と稱し、後に洪庵と改めた。

系統 緒方惟因の三子である。

事蹟 世々備中國足守の藩主木下氏に仕へた。十五歳の時に父に從ひ、大阪の藩邸に祇役した。人となり偉岸で弱く、武人となるに適しなかつたので、始めて醫學に志し、中天遊に從つて西洋醫術を學ぶこと四年、當時の譯譯書は殆どこれを閲讀し畢つたが、更に洋書を讀むの必要を感じ、江戸に出て坪井信道の門に入り、刻苦勉勵して學問が漸く進み、其の塾長に擧げられた。また傍ら宇田川玄瑞の教を受くる事六年に及び、更に長崎に遊び、親しく蘭醫に就いて研究する事三年に及んだ。斯くて大阪に歸つて開業し、洪庵と稱したが、時に二十九歳であつた。爾來、名聲が高く、生徒が雲集し、治を請う者が門に滿ち、諸大名の東覲して大阪を經る者は、病に罹れば必ず診察を請うた。ついで木下侯に召されて俸八人扶持を賜ひ、藩の侍醫に擧げられた。文久二年、幕府の侍醫となり、法眼に叙せられ、兼ねて醫學館を督したが、翌三年六月十日、五十四歳で歿した。江戸本鄕駒込高林寺に葬る。著書に病學通論・扶氏經驗遺訓・虎狼痢治準などがある。

をがたくわうりん
尾形光琳

名號 實名を惟富といひ、字を伊亮といひ、通稱を雁金屋藤十郎といふ。光琳・方祝・道崇・寂明・淵聲・谷響・堆翠・日受・長江軒・青々堂などの號がある。

系統 日向國鹿田村の住人緒方惟義の後裔である。緒方道柏（通稱新三郎）の時に、京都の尾形社に奉仕し、緒方を尾形に改めたが、道柏の孫尾形主馬は、東福門院御所具服物御用商人で、實名を宗錄といひ、號を洗齋といひ、親戚の本阿彌光悅に從つて書法を學び、別に一家を出した。主馬の子は即ち光琳である。

（尾形光琳の筆讀）

事蹟 光琳は最初染物業に從つたが、後に江戸に出て畫道を狩野安信に學んだ。一說には狩野常信（養朴）に學んだといふ。併し狩野の畫風に滿足せず、大和繪の方に傾響し、古土佐を學び、本阿彌光悅の藝術を精細に研究し、また俵屋宗達の畫風を慕ひ、二人の風を鎔鑄陶冶して新に一格を出した。光琳は宗達と同樣に、或は水墨淡彩の草畫を描き、或は濃彩華麗の細畫を描いたが、併し光琳の本領は、後者の濃彩華麗の繪畫にあり、其の妖艶な筆致にあり、妖艶濃彩の間に大省筆を行ひ、粗放の氣を漂はせた點にある。光琳は金地の花卉畫や、扇面流しの類を多く描いたが、彼の花卉畫は、實物を洞察して寫生の堂奥に入り更に寫生を脱して寫意の極致に達した觀がある。其の筆致は實に巧妙で、一抹の墨痕が葉となり、數點の彩筆が花となり、花卉の粹を描現して、細末は捨てゝ顧みず、全體が實物寫生の態を脱して、頗る模樣に近いものがある。畫面は概ね生地の儘で、後景を加へてないが、併し意匠が非凡で、布置が緊密で、行筆が淋漓として居て、實に款稱の外はない。彼は金銀泥を用ひる事が巧妙で、花鳥・山水・人物に至るまで、悉く金銀泥を混へて彩色し、頗る艶美を極めたが、此の一家特別の格は、光悅や宗達

を祖とするけれども、これを大成したのは光琳であるから、世にこれを光琳風と稱する。光琳・宗達の足跡を踏んで益々新意を出し、奇拔な裝飾的畫風を創設し、能く成功を收め得たのは、彼の個性の然らしめる點であり、同時に豪奢な元祿時潮の影響を偲ばせる。

併し嚴格にいへば、光琳の特色は、繪畫の域を脫して工藝の域に進んだ點にある。特に蒔繪は彼の長技としたもので、漆器中に鉛・錫・銀・靑貝などを嵌入し、頗る風流なものを製作したので、世にこれを光琳蒔繪といふ。併し斯種の蒔繪も、光琳を始祖とするのではなく、本阿彌光悅の創意に倣つて新意を加へ、豪宕で雅趣に富むものを製作した。彼の繪畫と蒔繪とを比較して見るに、何れも共通・同巧・同趣のもので、繪畫は紙地・絹地に獨特の方法で胡粉を高く盛つて彩色され、菊花の描現法などは半肉浮彫の觀がある。而してそれは厚く切つた金屬・貝類を蒔繪に嵌入した意匠と同じ趣である。其の繪畫が概して模樣に近接して居るのを見ると、光琳は繪畫と工藝との調和を圖り、工藝を導いて美術の境地に進めた人といふべきである。

光琳は法橋に叙せられたが、また茶事を良休宗佐に學び、巧に假山をも造つたといふ。享保元年六月二日、五十二歲(五十九歲、或は七十六歲ともいふ)で歿した。京都小川頭妙顯寺中本行院に葬る。文政二年十一月、雨華庵酒井抱一は光琳の爲に一碑を建て、題して長江軒靑々光琳墓といふ。

光琳の歿後、其の繪畫を蒐集刊行したものに光琳百譜・新撰光琳百圖などがあり、今に圖案家の金科玉條となつて居る。光琳の主な遺作には、岩倉具定公家所藏の四季草花屛風、伊達宗德伯家所藏の扇面散し屛風、京都齋藤家所藏の金地四季花卉圖屛風、岩崎男爵家所藏の鶴鹿圖屛風などがある。何れも名作である。

をがたしゆうへい　尾形周平

系統　伊勢國龜山の藩士高橋宰中(光重)の二男である。京都の陶工初代道八仁阿彌の弟である。

事蹟　京都五條坂の有名な陶工である。繪畫をよくし、詩文をも作つた。性酒を嗜み、生涯妻を娶らなかつた。

若年の頃、諸國をめぐつて陶業を研究し、頗る得る所があつたが、殊に陶畫の妙を喫き、專ら金銀彩畫に工夫を凝らし、大いに世評を得た。

紀州侯に召されて和歌山へ赴き御庭燒に從事したが、其の後、賀集珉平に聘せられて、淡路の伊賀野村に行き、淡路燒をも起した。尾張の陶工大橋秋二にも陶器の製法を傳へたといふ。天保十二年、四十二歲で歿した。「かしふみんべい・賀集珉平」の項を參照されたい。

をかだためちか　岡田爲恭

名號　爲恭は「ためたか」とも讀む。外戚の冷泉氏を冒して冷泉三郎藤原爲恭と稱したが、後に藏人所衆岡田家に養はれて、岡田爲恭と改稱した。屋號を松殿といふ。

系統　京都の畫家狩野其同(永泰)の子である。一說には狩野永岳の甥に當るといふ。

事蹟　近世土佐派の名畫家である。最初狩野派を學んだが、併し家風を喜ばず、十二歲頃から巨勢派及び古風の大和繪を好み、藤原信實・鳥羽僧正を慕ひ、多くの繪卷物を模寫して、古畫の眞髓を體得しようとした。二十歲前後に描寫したものでも、鎌倉初期繪畫の粹を摩する樣な筆致である。東京帝室博物館所藏光格天皇策命使繪卷は彼が十九歲の筆であり、宗伯書家舊藏公事十二ヶ月繪卷は彼が二十一二歲頃の筆であるが、何れも圖冠の筆とは思はれない程精妙である。殊に公事十二ヶ月繪卷は、末挽町狩野の大家狩野晴川(養信)が爲恭の畫技に感服し、自家の寶にする意味で、天保十四年に爲恭に依頼して描かせたもので、隨つて非常な努力を以て完成されたものである。また爲恭は田中訥言の模寫した應天門火災繪卷を愛好し、また知恩院所藏の法然上人繪傳(一名四十八卷傳)を模寫したが、二十五六歲頃の作としては、才能の卓越と精力の絕倫とに驚嘆する程である。斯くて多くの古畫を模寫し、古土佐畫の極意を體得して別に一家を出したが、彼が晩年の作である小野篁機智圖の如きは、行筆が熟達して居る。古土佐畫を復活した畫家中では、彼の畫技を第一に推すべきである。

爲恭は有職故實に精通した爲に皇族公卿に愛せられ、殊に古畫愛玩家の三條實萬・所司代酒井若狹守忠義の第に出入した。文久元年十二月、和宮が德川家茂に降嫁された時には、其の調度圖案を作つて奉納した。然るに討幕攘夷論の喧しい當時、殊に京都は暗殺の街になつて居たが、浪士の中には、爲恭の行爲を以て幕府の內命を受けて爲すものと見る者があり、遂に過激な浪士の狙ふ所となつた。爲恭は文久二年四十歲の時に薙髮し、紀州粉河寺御池坊顯海阿闍梨の下に潛伏したけれども、浪士の追跡が嚴しく、遂に元治元年大和丹波市の路上で暗殺された。時に四十二歲である。

をかべろくやた　岡部六彌太

「みなもとのよしひら・源義平」の項を參照されたい。

をぎふそらい　荻生徂徠

名號　名を雙松といひ、字を茂卿といひ、通稱を總右衛門といふ。徂徠・護園・赤城翁などの號がある。本姓が物部であつたから、物徂徠とも稱した。

事蹟　幼時から穎悟で、五歲で字を知り、十歲で能く文を屬した。延寶元年、父方菴(名は篤、字は玄甫)の事に坐して江戶を逐はれ、上總に蟄居した。居ること十二年、赦されて父と共に江戶に歸つた。父は元來幕府の醫師で、法眼であつたが、此の時、再び召出されて醫官となつた。よつて徂徠は帷を芝浦に下し、子弟に敎授して自給した。柳澤吉保は其の名聲を聞き、徵して俸十五人扶持を給した。ついで異進して五百石に至り、番頭格に進んだ。

これよりさき、伊藤仁齋は京都で古學を唱へ、力めて程朱を排した。徂徠は護園隨筆を著し、大いに程朱を辯護したが、旣にして李王の書を讀むに及び、忽ち感發する處があり、盡く舊學を廢して古文辭を修め、これを復古學と稱した。名聲は一世に高く、其の爲に文藝が一新した。

徂徠は人と爲り英氣高邁、卓拔不羈で、學問が甚だ廣く、且つ精該を極めて居た。書に達し、文に秀で豪放佚蕩で、時勢を論じ、法令を議し、また兵事を談じた。將軍綱吉が柳澤邸に臨む每に、選ばれて經書を進講する事が多かつた。享保六年、將軍吉宗の命により、六論衍義を和譯したが、十三年正月六十三歲(一說には六十五歲)で歿した。江戶三田の長松寺に葬る。

徂徠は著書が甚だ多く、辨道・辨名・學庸解・論語徵・孟子刪讀・韓非子・孫子・吳子・素書國字解・譯文筌蹄・經子史要覽・南留別志・度量考・政談・太平策・古文矩・鈴錄・文變・文罪・管子考・經濟總論・護園錄稿・樂律篇などの數十種がある。

門人も甚だ多く、太宰純・服部元喬・安藤東野・山縣周南・平野金華・成島鳳卿・大內子綽・高野蘭亭・釋方庵・木下公達・宇佐美

子迪・宇野子朗・菅谷甘谷・篠崎東海・釋元皓らは名高い。

おぎふゆづる
大給恆

「さのつねたみ・佐野常民」の項を參照されたい。

おさかひこひとのおほえのわうじ
押坂彦人大兄皇子

名號 忍坂彦人大兄・忍坂日子人大兄などにも作る。

系統 敏達天皇の嫡長子で御母は息長鹿手王の御女比呂比賣命である。舒明天皇の御父である。

事蹟 敏達天皇の前後には御位を皇弟に讓る風習があり、欽明天皇の御子敏達・用明・崇峻・推古の四天皇は相繼がれた。此の風習がなかつたならば、押坂彦人大兄は御父に繼いで即位されたであらうが、併し用明天皇が即位された爲に、遂に即位せずに薨ぜられた。

をざきこうえふ
尾崎紅葉

事蹟 名を德太郎といひ、慶應三年十二月江戸の芝で生れ、三田英學塾・大學豫備門を經て大學に入り、法學と文學を各々一年づつ修めた。文章に巧みで、小說家にならうと志し、江戸時代の文學に基づいて、新しい多くの傑作を出し、硯友社といふ一派を起し、文名が高かつた。其の作にかゝる多情多恨・金色夜叉などは、最もひろく讀まれた小說である。曾て讀賣新聞社・春陽堂などの編輯局に務めたこともある。明治三十六年十月、三十七歲で胃癌の爲に斃れた。德田秋聲・泉鏡花・小栗風葉らは其の門人である。

德太郎が胃癌の宣告を受けた時の事である。友人内田魯庵の勤先の日本橋丸善書店を訪ね、センチュリーを買求めようとした。魯庵は餘命幾何もない瀕死の病人が、高價な辭書を買ふのを不思議に思ひ、其の理由をたづねると、紅葉は答へて、「醫師が三月と宣告したのだから、無理して勉强しようとは思はないが、欲しいと思ふものは、頭のはつきりして居る中に自分のものとして置かないと氣が濟まないでなあ」と答へ、一時間程談話して後に人力車で歸つた。死に直面して尙ほ勉强を怠らなかつた。

おだのぶを
織田信雄

名號 幼字を茶筌丸・三助などといひ、長じて具豐と改め、更に信雄と改めた。薙髮して常圓と號し、法名を德源院實巖といふ。曾て北畠氏の養子となり、北畠氏を冐したことがある。善庵隨筆に據れば、信雄の訓は「のぶかつ」を正しいといふ。

系統 織田信長の次子で、織田信忠の弟である。

事蹟 最初、北畠具敎の養子となり、伊勢國船江城に居たが、元龜二年に婚を納め、翌年大河内城に移つた。天正二年七月、桑名から舟師を率ゐて發し、長島の一向一揆を攻めたが、此の年に從五位に叙せられた。三年には具敎に代つて伊勢の國司となり、五年六月には從四位下に任ぜられ、八年には伊賀を平定し、信長に請うて食邑とした。

天正十年六月、信長が本能寺で斃れた時には、遲々として師を發せず、豐臣秀吉が捷を報ずるに及び、催に封内の土寇を平げた。清洲會議の後に、信忠の遺孤三法師(秀信)が織田氏を嗣ぐに及び、信雄は信孝と相談して三法師を輔佐し、尾張・伊勢の北方及び江田の地百萬石を領して清洲城に居した。併し信雄は信孝と和せず、遂に權を爭ふ樣になり、十一年正月、兵を發して信孝を篠山に陷れ、四月

に岐阜城を攻めたが、信孝は内海に奔つて自殺した。

天正十一年六月、信雄は長島城に移つた。十二年正月、群臣は安土城に赴き、秀信を訪ふて賀正したが、獨り秀吉が來賀しなかつたので、信雄はこれを含んだ。秀吉は天下平定の志があつたから、陽に織田氏を厚遇したけれども、陰にこれを傾けようと考へ、利を以て信雄の老臣津川玄蕃允・岡田長門守・滝井田宮丸を誘ひ、君臣の間を離間したので、信雄は怒つて援を德川家康に求めたが、家康はこれを承諾し、同年四月、兵一萬五千を率ゐて西上し、秀吉と小牧山に對陣した。秀吉の部將池田輝政は、家康の虛に乘じて三河を衝かうとしたが、家康は大須賀康高・榊原康政を遣つて、輝政を長久手に破つた。ついで信雄は秀吉と和し、十三年三月權大納言となり、次第に累進して正二位内大臣に陞り、清華の上に班した。

天正十八年四月、信雄は小田原征伐の軍に從ひ、後に秀吉の旨に逆つて那須に放たれ、二萬石を食んだが、ついで出羽の秋田に移り、間もなく赦されて伊勢の朝熊に蟄居した。慶長五年九月、關ヶ原の役に際しては、舊臣に擁せられて西軍に應じた。役後、京都に匿れたが、家康は罪を許して問はなかつた。後に淀君は信雄を大阪城に迎へて厚遇し、事を擧げようと謀つたが、間もなく京都に奔つた。元和元年七月、松山小幡五萬石に封ぜられ、寛永七年四月、七十三歲で歿した。

おだのぶたか
織田信孝

名號 字を三七郎といひ、法名を功巖德虎といふ。

系統 織田信長の三男で、神戸氏を繼いだ。織田信雄と同年月に生れたといふ。

事蹟 天正五年、兄の織田信忠に從つて紀伊雑賀の僧徒を討ち、此の年從五位下に叙し、侍從に任ぜられた。十年五月、阿波・讃岐などの四國に封ぜられ、從父弟信澄らと紀伊に入り、本願寺光佐(顯如上人)を討つたが、偶々本能寺の變に接し、急に兵を班して大阪に次した。然るに衆が潰亂し、信澄も叛いたので、信孝は之を殺した。六月、豐臣秀吉が中國から上り、尼崎から大阪に報じたので、信孝は大いに喜んで秀吉に會し、共に山崎に戰つて明智光秀を斃し、清洲會議の結果、信忠の三子三法師(秀信)を擁立し、信雄と共に事を攝し、三法師と共に岐阜城に居した。後には信雄と權を爭ひ、柴田勝家・瀧川一益と謀つて、秀吉・信雄を除かうとしたが、事が漏れて秀吉に攻められ、懼れて和を請うた。十一年四月、再び擧兵して勝家に應じたので、秀吉は怒つて信孝の生母を殺し、兵を發して信孝を攻めた。信孝は勝家の敗亡を聞き、落髮して支ふることが出來ず、内海に奔つて野間正法寺に入り、辭世の歌「昔よりしうをうつみのうらなれば、むくいをまてよはしばちくぜん」を詠んで自殺した。時に年二十六歲である。

おだのぶただ
織田信忠

名號 幼名を奇妙丸といひ、また三法師と稱し、元服して勘九郎と改めた。法名を大雲院仙巖といふ。

系統 織田信長の嫡子で、母は夫人生駒氏である。

事蹟 弘治三年に生れ、元龜三年正月に元服し、同年七月、始めて軍に從つて敵首二百餘級を獲た。天正二年四月、從五位下に叙せられ、三年、出羽守に任ぜられ、ついで正五位下に進み、秋田城介と爲つた。信長から尾濃の地を割いて與へられたが、四年、從四位下に叙せられ、岐阜の地を治めた。五年正月、正四位下に進み、左近衛少將となり、二月、紀伊雑賀

の僧徒を征し、九月、松永久秀を大和に征して陷れた。時に信長は大いに喜び、「久秀、老賊なりと雖も、我子、一舉して之を平げしは、將器ありといふべきなり」といつた。十月、從三位左近衛權中將に任ぜられた。六年、豐臣秀吉の後援となつて、播磨附近の地を征し、十年三月、甲斐の武田氏を攻め滅ぼした。信長は大いに喜び、「旗竿三旬にして巢穴を覆し鯨鯢を取る、信忠の偉勳なり」といひ、黄金劒馬を贈つて賞した。五月、信長に從つて京都に入り、妙覺寺に宿したが、六月二日、信長が本能寺に弑せらるゝに及び、馳せて變に赴かうとして果さず、還つて妙覺寺の門を鎖して守つたが、遂に明智光秀の圍む所となり、敗れて自殺した。時に二十六歳である。

おだのぶなが
織田信長

名號 小字を吉法師・三郎と稱した。初めは法名を天德院といひ、後に總見院泰巖と號した。

系統 姓は平氏である。平家沒落の際、平重盛の子資盛の妻は潛に逃れて近江津田鄕長の家で親實を生んだ。後に親實は越前の嗣官織田某に養はれ、子孫は世々

（總田信長）

越前に住んだが、常昌の時に斯波義重の召によつて尾張に移り、信定の時に管領義廉の奉行となる。信定の子備後守信秀の時に古渡城に移り、威を隣國に振つた。信秀の二男は卽ち信長である。

事蹟 少年時代には古渡城に居たが、豪縱無狀で、稍々長じて士を養ひ、俠を好み、勇武果斷で、細節に拘はらなかつた。天文十九年に元服して信長と改めた。十八年、父信秀の歿後に家を繼いだが、日夜武事を習ひ、國務を顧みなかつたので、平手政秀は屢々諫めたが、聞き容れられず、遂に自殺するに至つた。信長は之を見て漸く悟し、其の忠節に感動し、政秀寺を建立して其の靈を慰め、愧然として天下を平定する志を起したといふ。「ひらでまさひで・平手政秀」の項を參照されたい。

永祿三年、今川義元は駿・遠・參の兵四萬五千を率ゐて京都に向ひ、將軍足利義輝に謁して威名を揚げ、且つ沿道を併せようとして府中（駿府）を發した。時に信長は清洲城に在つたが、義元から領邑を蠶食されることを憂へ、丸根・鷲津以下の諸砦を襲撃し、其の侵入に備へた。五月十九日、義元は進んで丸根（守將佐久間盛重）・鷲津（守將織田信平）を陷れた。偶々信長は林通勝以下の家臣を清洲城に會し、色々と戰略を議して居たが、丸根・鷲津の危急を聞き、「死生は命なり。余が志決す。余と志を同うする者は從へ」と、直ちに馬に鞭つて城を出た。從ふ者は近臣數名に過ぎず、途中、熱田神宮に參詣して戰捷を祈り、善照寺砦に往き、兵三千を得て進んだ。時に一人の諜者が來て、義元が田樂狹間（今の屋形狹間）に屯して居ることを告げた。梁田政綱の議を用ひ、不意に義元の本陣を突くことに決し、潛に二千を率ゐて近路を取り、太子ヶ根を下つて直ちに敵營に迫つた。義元は連勝して稍々心が驕り、且つ四近の嗣官・僧侶の贈つた酒肴を開いて酒宴を行ひ、警備を怠つて居た。此の時信長は令して、「名を揚げ、家を興す、此の一戰にあり。衆、それ努力せよ」といつた。恰も午後二時頃に暴風猛雨が沛然として來襲したので、これに乘じ突進したが、

東軍は風雨の爲に信長の兵の近づいた事を知らず、大いに狼狽した。信長の士服部忠次は槍を揮つて義元に迫つた。義元は拔刀して槍幹を斷ち、また忠次の膝を斬つた。毛利秀高は義元と相搏ち、遂に其の首を斬り、大呼して兩軍に示したので、東軍は大いに弱つた。義元の部將松井宗信・井伊直盛は奮戰して死し、また勇士の戰死者五百八十餘名、士卒の戰死者二千五百名に達した。これを桶狹間の戰といふ。翌二十日、信長は兵を收めて清洲城に凱旋し、武名が大いに揚つたが、これは信長が二十七歳の時である。

永祿五年十月、正親町天皇は、密に立入宗繼を尾張に下して、信長に御領所の恢復を命ぜられたが、信長は大いに喜び、感涙に咽んで勅を拜し、益々上京の準備をなした。京都では八年五月、三好義繼・松永久秀らが將軍足利義輝を弑したので、其の弟足利義昭は近江に走つた。信長が伊勢の北部を定めるに及んで、義昭が來り投じたので、やがて六角氏を討つて伊賀に逐ひ、十一年九月、義昭を奉じて近江の園城寺に次したが、三好・松永の徒が散じたので、進んで京都に入つて東寺に陣した。天皇は信長に勅して京都を鎭めさせられたが、信長の號令が嚴肅であつたから、市民は堵に安んじた。十月、義昭は將軍に任じ、信長は從五位下彈正忠に任じたが、十二年、義昭を奉じて攝津・河内に向ひ、各地に三好黨を破り、諸城を平定して京都に凱旋し、義昭の爲に二條城を經營した。

信長は父信秀と同じく、夙に敬神・勤王の志に厚く、桶狹間の役後、熱田神宮を修理したが、永祿十二年、攝津・河内を平定して入京すると、先づ錢萬貫を献じて朝廷の費御に充て、元龜元年には皇居の修理に着手し、朝儀を興し、また諸國に令して御邑及び公卿の領所を兼併した者を戒め、これを朝廷・公卿に還納させた。また羽柴秀吉に京都の民政を整へさせたので、朝廷の有樣は舊觀に復した。蓋し諸國の豪族が御邑を兼併したのは、朝廷に兵力が無かつたからであるが、信長が將軍義昭を擁して朝廷に仕へ、武力を以て天下に號令する樣になつたので、諸國の豪族は皆朝命を奉じ、皇威が再び盛んにならうとした。

元龜元年には正四位下に叙せられた。此の年の四月、越前の朝倉義景を征したが、近江の淺井長政及び延曆寺の僧徒が義景に與したので、信長は德川家康の來援を得て、二氏の軍を姉川に破つた。此の頃本願寺の顯如上人は大阪に石山城を築いて信長に抗し、伊勢長島の一向宗一揆も之に應じたので信長は先づ長島を平げ、後に勅旨を奉じて顯如上人を諭して之と和した。二年九月には延曆寺を燒き拂ひ、悉く僧徒を殺して、其の横暴をこらした。

信長の威名が揚がると、將軍義昭は之を忌み、信長を倒して威權を收めんとし、密に諸國の豪傑と結び、且つ失行が多かつたので、信長はこれを諫めたが、義昭は國より僻ばす、且つ天正元年正月、上杉謙信・武田信玄と謀り、信長を夾擊する策を講じ、また毛利輝元を後援としたので、信長は怒つて二條城を攻め、義昭を河内に放逐した。足利氏は義滿が將軍となつてから、十三代約百八十年で滅んだ。

天正二年三月には、從三位・參議に任ぜられたが、奏請して東大寺の黄熟香を剪り、これを將士に分與した。三年七月には入朝して清凉殿で天盃を受け、功勞ある諸臣を叙爵させた。十一月には權大納言となり、ついで右大臣を兼ねた。四年には正三位内大臣となつたが、此の年、近江に安土城を起工し、同七年に落成した。其の中の天主閣は天下の偉觀であつた。五年には右大臣に任じ、六年には正二位に累進し、十年正月には伊勢兩大神宮を修築し、數百年間廢

絶した舊制を復し、六月には家康と共に甲斐に攻め入り、武田勝頼を天目山に破り、遂に武田氏を滅ぼした。

當時、中國には毛利輝元があり、叔父吉川元春・小早川隆景が之を輔け、十餘國を領し、勢が甚だ盛んであつた。信長は羽柴秀吉を遣つて中國を平定させ、尼子・宇喜多の諸氏を服し、毛利氏の諸將を降し、天正十年五月、毛利氏の部將清水宗治を備中高松城に圍み、川を堰きとめて水攻を企てた。此の時、吉川・小早川の兩將が輝元を擁して來援したので、秀吉は援兵を信長に求めた。

乃ち信長は赴き援けようとし、先づ部將明智光秀を先發隊とし、自ら長子信忠と共に安土を發し、京都の本能寺に宿した。光秀はかねて信長を恨む事があり、陽に命を拜し、私に異圖を藏し、一旦領邑丹波亀山に歸り、兵を整へて京都に上り、信長を本能寺に襲つた。信長は變を聞いて起ち、森蘭丸に向つて、「叛者は誰ぞ」と問ふた。蘭丸は外に出て旗幟を見て歸り、「惟任光秀なり」と答へた。信長は弓を執つて防ぎ、蘭丸及び蘭丸の二弟坊丸・力丸らが奮戰したが、信長の從兵は僅か百六十餘人に過ぎなかつたので、衆寡敵せず、悉く戰死した。信長は天野源左衛門の爲に刺されたが、時に天正十年六月二日で、四十九歳であつた。これを本能寺の變といふ。信忠は之を聞いて二條城を固めたが、光秀の兵と戰つて斃れた。

信長は政を行ふに際し、嚴酷ではなかつたけれども、命令がよく行はれ、役人も人民もよく法を奉じた。彼の治める領内には、一人の盜賊もなく、戸を閉さないでもよい位であつた。歿してから太政大臣從一位を贈られた。

京都にある別格官幣社建勲神社は、明治八年の創建で、卽ち信長を祀つたものである。「あけちみつひで・明智光秀」の項を參照されたい。

おだのぶひで　織田信秀

名號　織田彈正といひ、また彈正忠信秀ともいふ。法名を萬松院桃巖道見といふ。

系統　織田敏定の子で、織田信長の父である。

事蹟　武勇智謀ともに衆に勝れて居たが、斯波氏に仕へて尾張の勝幡城に居り、彈正忠と稱し、備後守と改めた。享祿中には清洲奉行をして居たが、常に連歌を好み、名古屋城主今川氏豐と詠句を往來して親交した。後に氏豐は信秀を城中に移し、共に娛樂したが、天文元年三月、氏豐の不意を襲ひ、遂に名古屋城を奪つて居城とした。信秀の威名が聞えたのはこれからである。

天文四年には、松平氏を襲つたが、却つて破れて和を結んだ。十一年八月には今川義元と小豆坂に戰つて之を破り、十三年には自ら將として松平廣忠の安祥城を陷れ十四年には再び參河を侵したが、また破れて歸つた。十六年には美濃を侵して破れたが、此の年、廣忠の長子竹千代（後の德川家康）を質子として奪ひ取つた。十七年には今川・松平の軍と戰ひ、互に勝敗があつたが、同年十一月には齋藤道三を討ち、これと同盟して其の女を信長に妻はせた。十七年には末森城を居城としたが、十八年三月四十二歳で歿した。

信秀は夙に敬神・勤王の志があり、伊勢神宮の衰頽を嘆き、天文十年には賽を献じて外宮の假殿を造營した。また十三年には四千貫文の賽を献じ、内裡の築地を修繕したが、後奈良天皇は大いに喜ばれ、翌年、連歌師宗牧の東下に託して聖旨を傳へ、女房奉書を賜はつて之を賞せられ、且つ古今集などを下賜された。當時、皇室は甚だ衰へ、尊王を說く人の絶えた時代に、此の擧があつたのは、誠に珍らしいことである。

おだひでのぶ　織田秀信

名號　幼名を三法師といひ元服して秀信といふ。

系統　織田信長の孫で、織田信忠の子である。

事蹟　天正一〇年、祖父信長・父信忠の死後、舊臣秀吉・丹羽長秀・池田信輝・瀧川一益・森長可・柴田勝家らは、尾張の清洲に會し、織田氏の後嗣問題を議し、秀信を立てゝ信長の後嗣とした。

爾來、秀信は岐阜城に居り、叔父織田信孝の輔佐を受けた。天正十年十一月、信孝は勝家・一益と謀つて秀吉及び織田信雄を除かうとして、却つて秀吉に圍まれて降服し、秀吉の要求に應じて秀信を出したので、秀吉は秀信を安土城に置いた。十九年の頃から三好秀俊の輔佐を受けたが、文祿元年に秀俊が歿してからは、秀信は清洲から岐阜城に徙り、十三萬五千石を領した。世に岐阜中納言秀信といふ。

慶長五年、石田三成が兵を擧ぐるに及び、秀信は岐阜城を固めて西軍に黨した。東軍の將福島正則・池田輝政らが來攻したので、秀信は兵を出して木曾川に拒いだが、東軍は竹ケ鼻を屠り、進んで岐阜城に迫り、火を放つて之を攻めたので、八月、秀信は降を乞ひ、髮を削つて高野山で歿した。

おとたちばなひめ　弟橘媛

「やまとたけるのみこと・日本武尊」の項を參照されたい。

をののいもこ　小野妹子

名號　隋國の人は蘇因高と呼んだ。

系統　天帶彥國押人命の六世の孫で、米餅搗大使主命の後である。世々近江國滋賀郡小野村に家居したので、小野を氏とした。

事蹟　推古天皇の朝に仕へ大禮の位に叙せられた。大禮といふのは、冠位十二位階の中の第五階目の冠位である。十五年七月に遣隋正使となり、鞍作福利を通事として隋に入つた。時に隋は煬帝の大業三年に當り、我が朝廷の支那政府と直接に交際する事の始めである。

この遣隋使の目的は、佛書を求め、兼ねて隋と交際するにあつた。其の交際は何處までも對等の禮を以てされたので、聖德太子は其の國書に、「日出づる處の天子、書を日沒する所の天子に致す。恙なきや」と記された。隋は日本を三韓諸國と同樣に屬國視したらしい。煬帝は我が國書を覽て喜ばず、鴻臚卿（外務大臣）に向つて、「蠻夷の書、無禮なるものあらば、復た以て聞する事勿れ」と言つた。經緯後傳記に據れば、煬帝は我が國書を見て喜ばなかつたが、併し「其の意氣の高遠なるを怪み、斐世清らを遣はして妹子を送り、國風を觀せしむ」とある。

妹子は翌十六年四月に歸朝したが、隋は日本の如何なる國柄であるかを觀察させようとし、同時に斐世清を遣つて報聘させた。朝廷では飾船三十隻を出して、之を難波の津に歡迎されたが、船に錦繡を飾る事は之を始めとする。日本書紀には、妹子が隋から歸る時、煬帝から受けた國書を途上百濟人の爲に奪はれた事を記してある。蓋し其の書に日本を屬國視した不遜の文字があつた爲に、妹子が隱して出さなかつたのではあるまいか。妹子は國書を奪はれた事により、將に其の罪に問はれる筈であつたが、隋使の耳に入ると宜しくないので、特に赦されることになつた。斐世清が天皇に上つた隋の國書は、日本書紀に見えて居るが、其の最初には、「皇帝、倭皇に問ふ、使人長吏大禮蘇因高等、至りて狀を具す。云々」とある。聖德太

子は之を讀んで喜ばず、同十六年九月、妹子が再び隋に使するに及び、親しく國書を草せられたが、其の最初には「東天皇敬みて西皇帝に白す。使人鴻臚寺掌客裴世清等至り、久しき憶方に解けたり。云々」と書かれた。以て對等の地位を保たうとされた苦心の迹が分る。

十六年九月、裴世清の歸國に際し、妹子は再び選ばれて遣隋大使となり、雛波雄成を小使とし、福利を通事として隋に遣した。此の時、學生倭漢直福因・奈羅譯語惠明・高向漢人玄理・新漢人大國及び學問僧新漢人旻・南淵漢人請安・志賀漢人惠隆・新漢人廣齊らの八人が同伴留學した。妹子は十七年九月に歸朝し、功によつて大德冠に叙せられた。

をののたかむら
小野篁

名號 世に野相公と稱する野は小野の略で、相は參議を指して居る。

系統 小野妹子の子孫で、參議小野岑守の子である。

事蹟 嵯峨天皇の弘仁年中に、父岑守が陸奥守に任ぜられたので、篁も陸奥に往つて馬術を習ひ、京師に歸つた後にも、學業を事としなかつたので、嵯峨天皇は嘆じて、「斯の人にして、射、弓馬の士となるか」と仰せられた。爾來、篁は慚愧して學に志し、弘仁十三年、文章生の試驗を受けて及第した。淳和天皇の天長九年、累進して從五位下太宰大貳となり、十年三月、東宮學士・彈正少弼となつた。清原夏野らと共に、令義解（大寶令の註解）を撰定したのは、此の間のことである。

仁明天皇の承和三年五月、藤原常嗣を遣唐大使とし、篁を副使に任じて、唐に發遣させられたが、暴風の爲に漂蕩すること數箇月に及び、肥前・對馬に漂着して果さなかつた。四年三月、船を整へて再び京師を出發し、七月に太宰府を發したが、また暴風の爲に肥前・壹岐に漂着して果さなかつた。五年七月、常嗣は三度び唐に向つて發したが、此の時、篁は常嗣と船を爭ひ、病と稱して乘船しなかつたので、嵯峨上皇は罪を論じ、十二月、遂に隱岐に流されたが、七年四月に召還し、本位に復せられた。九年には陸奥守に任じ、東宮學士兼式部少輔となり、十二年正月には從四位下に叙し、七月には藏人頭に補せられ、十四年には參議兼彈正大弼に進み、嘉祥年中左大辨に轉じ、間もなく從四位上に進んだが、斯樣な累進は仁明天皇が篁の文才を愛せられたからである。文德天皇が即位されるに及び、正四位下近江守を授けられたが、病に罹つて起つ事が出來なくなつたので、天皇はこれを愍み、屢々人を遣つて物を賜ひ、從三位を授けられ、やがて五十一歲で歿した。時に仁壽二年十二月二十二日である。

篁は人と爲り不羈で、直言を好んだので、往々世人に容れられなかつた。併し母に事へて至孝で、また家が清貧であつたに拘らず、俸入は悉く親友に施した。

而して文章は當代に冠絕したので、鴻臚館に居た唐人沈道古は、篁の材思を聞き、屢々詩賦を以て唱和し、常に其の富饒を賞したといふ。

弘仁年中嵯峨天皇は河陽館に行幸して、「閉ヂ閣唯聞朝暮鼓、登レ樓遙望往來船」といふ一聯の詩を賦して篁に示された。篁はこれを見て、「聖作、甚だ佳なり、但し遙を空と改めなば更に妙ならん」と奏した。天皇は愕然として、「これ白居易の句にして、遙はもと空に作れり、朕、聊か卿を試みしに、卿の詩才、樂天と相匹敵するを見たり」と仰せられた。當時、白氏文集は始めて渡來し、未だ秘閣に藏して、人々の見る事の出來ない時であつたから、天皇は大いに稱美されたといふ。

をののみちかぜ
小野道風

名號 小野篁の孫である。小野葛絃の子で、小野好古の弟である。

事蹟 道風は書を好くし、殊に草書に堪能で、其の遒勁神逸なことは、古今に冠絕すと稱せられた。醍醐・朱雀・村上の三朝に歷仕し、正四位下內藏權頭に進んだ。醍醐天皇は其の書を愛し、醍醐寺を建てられた時には、道風に榜を書せしめられた。また命じて行草法帖各一卷を書せしめ、册寬建に托して唐に送られたが、これは其の美を異邦に示さうとされたからである。其の他、宮殿の題字、門榜など、道風の手に成るものが甚だ多い。また曾て道風は橘直幹の爲に奏疏を書した。村上天皇は常に之を坐側に置かれたが、偶々禁中に火事の起つた時、天皇は侍臣を顧みて、直幹の疏の存否を問はれ、他を問はれなかつたといふ。以て道風の書を重んぜられた事が分る。晩年、中風を患つて手が顫ひ、筆勢が稍々奇體になつたが、村上天皇の康保三年十二月、七十一歲で歿した。歿後、世人は其の一行隻字をも競ひ求めたといふ。世に藤原佐理・藤原行成と並び稱して三蹟といふ。

か・くわ

かいくわてんのう
開化天皇

名號 御名を稚日本根子彥太日日尊といふ。

系統 孝元天皇の第二皇子である。御母は穗積臣遠祖鬱色雄命の妹鬱色謎命である。第九代の天皇である。

事蹟 孝元天皇の七年に降誕され、二十二年正月に皇太子となられた。時に御年十六歲である。五十七年九月に父天皇の喪にあひ、十一月に即位し、元年十月に都を大和添上郡の春日に遷し、率川宮で政を執られたが、在位六十年、聖壽百十五歲で崩ぜられた。百十一歲說もある。春日率川坂本陵に葬る。一說に據れば、坂本陵は坂上陵であるといふ。

かひばらえきけん
貝原益軒

名號 名を篤信といひ、字を子誠といひ、通稱を久兵衞といふ。初號を柔齋といひ、後に益軒・損軒と號した。

系統 筑前福岡侯の醫貝原利貞（寬猶）の子である。

事蹟 世々醫を以て福岡侯に仕へたが、益軒は寬永七年十一月十四日、福岡城中の官舍に生れた。幼時から警敏殊質で、九歲の頃には兄の存齋に學んで書を暗誦した。明暦三年、京都に遊んで松下五山・山崎闇齋・木下順庵らに就いて學び、日夜勉勵して學業が大いて進み、中年に及んで、京都で講筵した。はじめ陸象山・王陽明の說を採用したが、後には朱學に歸依した。益軒は常に著書を事とし、國字で之を草し、一に世を益するのを主とした。また好んで名勝の地を探り、到る處に足跡を印した。老いても精力が衰へず、藩の三侯に歷仕して厚く禮遇を受

（貝原益軒）

けた。元祿十四年に致仕して京都に隱居し、正德四年、福岡に在つて歿した。年八十五歳である。

益軒は人と爲り謙恭純篤で、博識を以て自ら傲らず、居常深く自ら韜晦して、令譽が日に隆かつた。曾て京都から歸國しようとして、海路船に乘つたが、同船中の一少年が頻りに經義を談じた。益軒は沈默諦聽して字を解しない者の樣であつた。既にして上陸するに及び、各々其の姓名を告げたが、少年は益軒である事を知り、大いに慚ぢ、姓名を告げないで去つたといふ。

益軒の著述の多くは、救世の志から筆を取られたものが多く、國字で懇切に書かれたので、田夫・紅女・兒童・隸卒も容易に讀むことが出來た。愼思錄・近思錄・大和本草・筑前續風土記・和漢名數・日本釋名・養生訓以下の十訓を首め、凡そ百餘種に上つて居るが、就中、教訓に關する書が多い。益軒の辭世の詩に、「平生心曲有レ誰知、常長二天威一欲レ勿レ欺、存順沒寧雖レ不レ克、朝聞夕死豈不レ悲、幼求二斯道一在二孤懷一、德業無レ成夙志乖、八十五年爲二曷事一、讀書獨樂是生涯」といふのがあり、また辭世の和歌に、「越し方は一夜ばかりの心地して、八十じあまりの夢を見しかな」といふのがある。

かきのもとの柿右衛門

名號 酒井田柿右衛門といふ。初名は喜三右衛門である。

事蹟 肥前松浦郡有田の人である。父は圓西といひ、俳諧を好み、筑前博多の承天寺の僧某と親交した。其の僧某の友人に竹原五郎七といふ者があり、豐臣氏の陶器師で、大阪城にあつたが、城が陷るに及んで、肥後の或る寺院に隱れた。僧某は柿右衛門が製陶に志ある事を聞き、圓西を五郎七に紹介して、其の子柿右衛門に製陶の法を習はせた。元和三年、五郎七は始めて有田の南河原山に來り、製陶に從事したが、寛文年中に泉山の磁礦が發見されてから、一層精巧のものを出したといふ。其の後、伊萬里の東島德右衛門は、長崎で清國人總官から磁器を金銀泥で着色する法を受け、これを柿右衛門に謀り、屢々試みたけれども、其の功をなさなかつたが、遂に柿右衛門は吳洲權兵衛と謀り、樣々の工夫を重ねて其の法を得たので、先づ自ら製した磁器に施し、それを長崎に携へて行き、清國人八觀に寶與へたといふ。これが有田燒の海外に出た濫觴で、實に正保三年六月の事である。今日有田磁器の外國人に迄も持映されて居るのは、全く柿右衛門の功といふべきである。

かきのもとのひとまろ
柿本人麻呂

系統 孝昭天皇の皇子天足彦國押人命の遠孫である。

事蹟 持統・文武の兩朝に仕へたが、其の官位は詳かでない。和歌を善くし、最も長歌に秀で、世に歌聖と稱する。新田部皇子・高市皇子らと遊び、或は聖駕に陪して大和・紀伊・伊勢に遊び、或は近江・石見・筑紫に遊び、至る所で名歌を詠んだが、晩年には石見に住み、此の地で歿した。墓は大和の添上郡にあるといふ（大日本史）。

人麻呂が歿して後、石見の人は同國高角山に廟を立て、寺を置いて祭祀したが、後一條天皇の萬壽三年、山崩れの爲に湮沒したので、同國美濃郡高津山に祭り、これを柿本神社といつた。享保八年、一千年囘忌に當り、正一位を贈り、卜部兼雄を遣つて奉幣し、人麻呂寺を眞福寺と改めたといふ（八重巷）。

人麻呂の歌は萬葉集の中に收められて居る。萬葉集は雄略天皇から淳仁天皇に至る約三百年間の和歌四千四百九十六首を集錄したもので、今に殘つて居る本邦最古の歌集である。文字は所謂萬葉假名といふ一種の假名を用ひ、作者は天皇・皇后・皇子・公卿などから官人・田夫・野人に至る諸階級の人士幾百千人に及んで居るが、中でも人麻呂・山部赤人・山上憶良らが名高い。而して集中の文字は所謂萬葉假名で書かれ、歌は未だ峻嚴な規則に拘束されない時代のものだけに、其の風姿が自然で、雄健で、氣魄がある。つまり飾り氣のない古代人の心持が、力强い調子で表現されて居る。歌の種類は雜歌・相聞・挽歌・譬喩及び四季の五種で、形狀から區別すると短歌・長歌・旋頭歌などになる。長歌は五七調から成つたもので、絕妙なものゝ多いのは、實に此の歌集の特色である。集中の歌によつて、歷史上の疑問を解決し、また當時の人情・世態・風俗の一班を知ることが出來る。編者は大伴家持といひ、或は橘諸兄といひ、定說がない。

くわざんてんのう
花山天皇

名號 御名を師貞といひ、法諱を入覺といふ。

系統 冷泉天皇の第一皇子で、御母は藤原伊尹の女懐子である。第六十五代の天皇である。

事蹟 安和元年十月二十六日に降誕され、二年八月に圓融天皇の皇太子となり、永觀二年八月に受禪し、同十月十日に卽位された。時に御年十七歳である。

天皇の卽位された年の七月、特に寵愛された女御藤原怡子（兼家の弟爲光の女）が歿した。天皇は追慕の情を禁ずることが出來ず、密に冥福を修しようとされた。時に藤原兼家は、政柄を弄しようとする志を抱いて居た。然るに天皇は藤原伊尹の女懐子の所生であるから、伊尹の子藤原義懐は外戚の故を以て天皇の信任を蒙り、漸く權勢を得て來た。兼家はこれを喜ばず、詐謀を弄して天皇を出家させ、皇太子懐仁親王（一條天皇）を擁立しようと企てた。

偶々怡子が歿し、天皇が悲哀に沈まれたのに乘じ、兼家は子藤原道兼及び僧嚴久に意を含め、人生の無常を說き、出家して怡子の冥福を祈られるように勸めた。よつて天皇は出家入道の念を發し、其の旨を道兼に傳へられた。道兼は大いに贊成し、「陛下の志、太だ佳なり、臣不肖なりと雖も、幸に厚恩を辱うす、願くは隨從して共に道に入らん」と言ひ、卽夜、天皇に勸めて禁門を出で、密に花山寺に向つた。途中で天皇は道兼に向ひ、「讓位は大事なり、尙ほ思慮を致さん」と仰せられた。道兼は答へて、「劍璽、既に太子に渡る、再び宮中に還幸あるも、また如何ともなし難し」と奏した。よつて天皇は遂に意を決し、花山寺に入つて出家された。時に道兼は、「臣頃日父兼家を見ざる事久し、願くは未だ形を變ぜざる前に、家に歸り、父の意を安ぜんとす、願くは暫くの暇を賜へ」と奏し、坐を起つて去つた。天皇は道兼らの詐謀を悟つて後悔されたけれども、既に出家入道の後であつたから、策の施すべきものがなかつた。時に寛和二年六月で、御年僅に十九歳であつた。花山法皇と稱する。

花山法皇は、出家の後、常に律を嚴守されたが、また好んで名山古刹を巡歷し、曾て熊野に行幸された時には、徒步して艱苦を嘗められ、病んで海濱に臥せられたこともある。數年の後、入京して外祖母の家に居り、稍々婦女を近づけ、遂に志操を變ぜられた。また器翫を好み、和歌を詠ぜられたが、寛弘五年二月八日、聖壽四十一歳で崩ぜられた。山城國葛野郡衣笠村紙屋上陵に葬る。

かしふみんぺい
賀集珉平

名號 初名を豐之助といふ。

事蹟 淡路の人である。代々庄屋を勤めて居たが、夙に產業を興し、國益を增さうと志した。文政中京都に出て某公卿に仕へたことがある。平素陶器を愛玩し、和漢の名器を集めて居たが、或る時、京都の陶工尾形周平と和泉の堺で邂逅し、製陶の事を聽いて感動し、製陶の事を思ひ立ち、天保五年、淡路三原郡伊賀野村に窯を築き、自分の好む茶器の樂燒を試み、傍ら陶賀の適否を試驗した。其の後、池内村で白土を發見し、前途に大きい希望を得たが、其の白土は耐火力が强かつたので、更に大きい陶窯數箇を築き、各地から職工を雇ひ、種々の工夫を加へて製造し、自ら京都に周平を訪ねて技術を練ること一年、ついで周平を淡路に聘して土石・釉藥・製法を調究錬磨し、周平の授けた製陶の奧義を會得し、漸く精良な製品を得るに至り、新に發明する所があり、遂に淡路燒または琅平燒の名が四方に喧傳される樣になつた。文久二年病に罹り、其の業を甥三平に讓つて隱居し、明治四年七十六歲で歿した。

かすがのつぼね
春日局

名號 姓を齋藤といひ、名を福といひ、法名を麟祥院仁淵了義といふ。

系統 齋藤內藏助利三の女で、母は稻葉通明の女である。

事蹟 稻葉重通の養女となり、重通の子正成と結婚し、正勝・正定・正利の三男を生んだが、後に故あつて離縁し、慶長九年、德川家光の生るゝに及び、召出されて乳母となつた。

間もなく家光の弟忠長が生れたが、幼にして被捷で、才氣があつたので、將軍秀忠及び夫人淺井氏は、共に忠長を寵愛し、遂に家光を廢嫡して、儲嗣にしようと考へた。春日局は深く憤慨し、言を伊勢參宮に託して、駿府に赴き、密に家康に訴へたが、家康はこれを聞き、暗に將軍夫妻を誡戒したので、廢嫡のことは遂に止んだ。

（春日局）

既にして家光が將軍となつたが母御臺淺井氏が歿したので、家光は春日局に命じて大奧の政を總べしめた。隨つて春日局の威權は、頗る大であつたけれども、資性忠貞愼重であつたから、內外の人々に尊敬された。また大奧の記律の如きも自ら制定したといふ。

後水尾天皇は、幕府が權威を以て朝廷に臨むのを、常に不快に思はれたが、寛永五年、僧澤庵らに許された紫衣を幕府が奪つたので、天皇は大いに其の所置を憤り給ひ俄に位を中宮東福門院和子（秀忠の女）の御腹なる興子內親王（明正天皇）に讓らうとし、旨を江戶に傳へられた。時に春日局は前將軍秀忠の內意を受け、言を伊勢參宮・清水寺參宮に託して京師に入り、參內して親しく天顏を拜し、東福門院との御間柄をも觀察し、且つ所司代板倉重宗と會し、讓位後に於ける善後策をも謀議して江戶に歸つた。

春日局が參內した時、朝廷では、「無位無官の女流が天顏を拜したる例なし」とて拒まれたが、春日局が堅く請うて止まなかつたので、遂に武家傳奏三條西實條の妹分として、緋袴を御免あり、且つ從三位に叙せられた。春日局の名

も、此の時に賜はつたといふ。

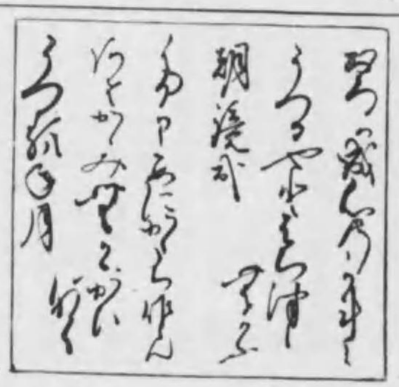
晩年、從二位に叙せられ、江戶の湯島臺に天澤寺（麟祥院）を建立したが、家光は寺領三百石を寄附し、且つ菩提寺に准じた。寛永二十年九月十四日に歿した。天澤寺に葬る。「みやうしやうてんのう・明正天皇」の項を參照されたい。

かすのみや
和宮

名號 御名を親子といふ。和宮と稱し、落飾して靜寛院宮といふ。

系統 仁孝天皇の第八皇女で、孝明天皇の御妹である。御母は權大納言實久の女橋本經子である。

事蹟 弘化三年閏五月十日降誕、嘉永四年七月、有栖川宮熾仁親王へ降嫁の事に定まつたが、偶々幕府の大老井伊直弼は、皇妹の降嫁を得て、主上と將軍家と親戚の緣を結び、內外の政治の圓滑を圖らうとし、諸々と歩を進めたが、萬延元年三月、櫻田門外で斃れて一時中止した。久世久周・安藤信正が幕政を執るに及び、更に直弼の遺策を奉じ、政略結婚により東



（靜寛院宮御詠草）

京都を發して中山道を經、十一月十五日に江戶に着き、先づ清水邸に入り、十二月十一日に本丸に遷御し、十四代將軍德川家茂と婚姻の大禮を擧げられた。時に御年十五歲である。

慶應二年七月、家茂が大阪城中に歿するに及び、落飾して靜寛院と稱せられたが、慶應四年、十五代將軍德川慶喜が恭順の意を表して水戶に退去し、ついで朝廷が江戶城を收むるに際し、閏四月十一日、田安邸に立退き、更に築地の一橋邸に移り、翌年二月、京都に遷られたが、明治五年、再び東京に移られ、十年九月二日、三十二歲で薨ぜられた。芝增上寺德川廟所に葬る。

かすやたけのり
糟谷武則

「さくまもりまさ・佐久間盛政」の項を參照されたい。

かたぎりかつもと
片桐且元

名號 通稱を助作といふ。初名を直盛といひ、後に且元と改め、市ノ正と稱した。法名を三英宗元といふ。

系統 姓は清和源氏である源經基の曾孫爲基が信濃國伊那郡片桐に住したので、片桐を氏とした。爲基から十三世の裔に片桐肥後守直貞があつたが、直貞の子は卽ち且元である。

事蹟 父直貞は淺井長政に仕へたが、且元は幼時から豐臣秀吉に仕へ、五百石を領した。天正十一年には近江の賤ヶ嶽に戰ひ、所謂七本槍の一人として武名を揚げ、功によつて食邑五千石を受けたが、十三年には從五位下に叙せられ、市正（いちのかみ）と稱した。

文祿元年には、兵二百を率ゐて

征韓の軍に從つた。同二年に豐臣秀頼が生れたが、小出秀政と共に其の傅に擧げられ、四年八月には加封して一萬三千石を食んだ。慶長三年八月、秀吉は病床に且元を召し、深く秀頼のことを遺囑したので、秀吉の歿後は心を傾けて秀頼に奉仕し、石田三成が兵を擧げた時には、書を關東に送つて、秀頼の關知しないことを告げた。關ヶ原の役後は、且元は罪を免かれて再び傅となつた。慶長六年には封一萬八千石を加增され、ついでまた一萬石を加增された。

（片桐且元）

秀頼の長ずるに及び、且元はよく之を補佐したが、諸侯中にも秀頼に心を寄する者があつたので、家康はこれを恐れ、其の財力を屈めて後患を絶たうと思ひ、秀頼に勸めて京都の方廣寺に大佛殿を再建させた。慶長十九年四月に完成したので、供養の式を擧行しようとすると、家康は其の鐘銘に「國家安康」の文字のあるのを指摘し、己れを呪ふものと見做し、急に供養式を止めて嚴に詰責した。

時に且元は、「いま供備悉く辨じ、公卿門跡以下集まる。期を延ばすが如きは尤も不可なり。願くは事畢るの後自殺して罪を謝し、大御所（家康）の怒を解かん」といつたが、所司代板倉勝重は聽きいれず、遂に八月に供養式を差し停めた。乃ち且元は駿府に行き、家康に辯解したけれども、家康も許さなかつた。偶々本多正純は且元に語つて、「われ秀頼の爲に圖るに三策あり。秀頼大阪を去りて他に遷ること其の一なり。江戸に參覲すること其の二なり。母公を江戸に客たらしむること其の三なり」といつた。且元は此の言を以て家康の意に出づるものと推測し、秀頼母子に說いたけれども用ひられず、却つて將士の爲に疑はれたので、弟直隆と共に大阪を去り、居城茨木（攝津）に歸還した。

慶長十九年十一月、遂に大阪冬の陣が起り、家康は秀忠と共に大阪城を攻めた。此の時、家康は且元兄弟を召したが、且元は辭して「臣が策行はれずして東西離起る何の面目ありてか公に見えん」と言つて出なかつた。故に家康は正純を茨木城に遣り、「今日の事、子が罪に非ず。宜しく速に來りて和順の計を爲し、秀頼母子の生命を完くすべし。これ子が忠にあらずや」と言ひ傳へさせた。乃ち且元は大阪に來て、家康に謁し、間もなく和議が成つたが、元和元年大阪夏の陣が起り、五月、豐臣氏が滅亡するに及び、自殺して主君に殉じた。時に六十三歳である。

かたぎりこはちらう
たいふ
片桐小八郎大夫

「みなもとのよしひら・源義平」の項を參照されたい。

かぢはらかげすゑ
梶原景季

名號 通稱を源太といふ。

系統 梶原景時の長子である。

事蹟 父景時と共に源頼朝に仕へ、最も騎射を能くし、左衛門尉となつた。曾て頼朝は親臣十一人を選んで、自分の寢室に宿直させたが、景季もこれに預つた。頼朝が源義仲を討つた時、景季は名馬磨墨（するすみ）を得て、佐々木高綱と共に宇治川を渡つて奮戰した。一ノ谷の戰の時には、父弟と共に力戰して菊池高直を斬つた。文治年間には、頼朝に從つて藤原泰衡を擊つた。

正治元年に頼朝が薨じて頼家が立つた。時に景時は結城朝光を讒したので、朝光は三浦義村・和田義盛の諸氏と議し、六十六人連署して景時の誣告を訴へた。頼家はこれを景時に示したが、景時は辯ずる事が出來ず、正治二年正月、親族を率ゐ、鎌倉を脫して京都に赴かうとした。頼家は義村らに命じて討たせたが、景時父子は駿河に敗死し、一族悉く殺された。時に景季は三十九歳であつた。景季は和歌に秀でたが、其の作歌は世人に誦せられて居る。「ささきたかつな・佐々木高綱」の項を參照されたい。

かづさのすけはちらう
上總介八郎

「みなもとのよしひら・源義平」の項を參照されたい。

かつしかほくさい
葛飾北齋

名號 名を爲一といふ。幼名を時太郎といひ、後に鐵藏と稱した。假に八右衛門・仁三郎・時太郎可候と名づけた事もある。畫名には勝川春朗・叢春朗・菱川宗理・北齋辰政・辰齋・雷斗・雷信・戴斗・畫狂老人・畫狂道人・是知翁・卐翁・卐老人・群馬亭・錦袋舍・魚佛・前北齋爲一などがある。

系統 姓は藤原である。中島または川村氏と稱し、父は江戸幕府用達鏡師中島伊勢である。

事蹟 寶曆十年九月、江戸本所に生れた。十四五歳の時から彫刻を學んだが、十九歳の時に其の業を廢し、浮世繪師勝川春章に就いて畫道を學び、頗る畫才があつたので、師姓を冒して勝川春朗と稱した。後竊に濱町狩野家に畫法を學んだが、春章の不興を買つて破門され、叢春朗と改めた。此の頃は俳優繪などを描いて居たが、天明七年二十八歳の頃から俵屋宗理の畫風を慕ひ、名を菱川宗理と改め、卑俗な錦繪をやめて、

（葛飾北齋）

筆法で浮世繪を描く樣になり、北齋辰政と改稱したが、これが寛政十一年四十歳の頃である。

北齋は頗る筆技に達者で、世の森羅萬象に畫題を採つて描いた。人物は田園耕織・市井往來・甲冑武士、其の他人生百般の方面に亘り、また山川・瀑布・海濤・花卉・器物に至るまで、殆ど描かない事物はなく、また支那の人物・家屋・風俗をも好んで描いた。彼の畫法は浮世繪に則つて居るけれども、和漢の諸流に渉り、西洋畫にも通じ、細畫に巧である許りでなく、大畫にも達し、また滑稽畫は頗る面白い。彼の筆力は遒勁で、筆勢は紙外に溢れ、構想にも奇拔なものがあり、版刻の小畫には殊に傑作逸品が多い。併し彼は概して描寫が典型的で、運筆に一種の癖がある。

畫家としての北齋は、文學者としての馬琴に似て居る。兩人とも自信が強く、人を白眼に視て、自ら固執して下らなかつた。馬琴の

書に挿畫を描いて意見が協はず、屢々論議して遂に絶交した。併し性格が洒落で、狂歌・俳句を吟じ、衣食の美を好まず、日常生活が頗る奇逸で、人が鮮魚を贈れば、割烹の面倒を避けて貧民に與へ、家の表札には「百姓八右衛門」と記し、壁には「おじぎ無用、みやげ無用」と書いて張つて居た。また屢々家を移す癖があり、一日中に兩三度移つた事があり、生涯中に八十七回轉宅したといふ。嘉永二年四月十八日、九十歳で歿した。

北齋の畫は和蘭人の賞する所となり、之を求むる者が多く、幕府は國内の秘事を漏すことを恐れ、海外輸出を禁止したことがあるといふ。現今でも歐米人中に筆意を愛する者が多い。北齋の作物には肉筆として傳はるものが少く、版刻畫の摺物、殊に諸國の名所・山水・花鳥畫しなどの錦繪類が最も多い。繪本にも數百種があり、北齋漫畫・富嶽百景・北齋畫譜・北齋畫花・北齋塵中畫譜・北齋畫鑒・繪本庭訓往來などは名高い。門人も甚だ多いが、柳川重信・魚屋北溪・蹄齋北馬・戴斗北泉・蘭齋北嵩・俵屋宗理らが名高い。

・北齋新雛形・一筆畫譜・傳心畫

かつやすよし
勝安芳

名號 通稱を麟太郎といふ。安房守に叙せられたので、安房と稱し、後に安芳と改め、海舟と號した。

事蹟 德川將軍家の家臣である。文政六年一月三十日、江戸本所の旗下の家に生れた。少壯の頃から貧困の中に育ち、劍道・禪學・蘭學・砲術などを修め、安政二年七月、幕命を受けて長崎海軍傳習所に入り、夙に開國論を主張したが、萬延元年正月、幕府が外國奉行新見豐前守及び村松淡路守・小栗豫後守以下七十餘名を米國に派遣するに當り、安芳は木村毅と共に之に從ひ、軍艦咸臨丸（八百噸）で米國に渡つた。我が軍艦が太平洋を横斷したのは、これが最初である。

文久三年から幕府の海軍奉行の職を務めたが、元治元年五月、幕府は海軍術を盛んにする爲に、攝津の神戸に海軍操練所を設けて、子弟を教育したが、安芳は其の長官に擧げられた。

明治元年二月、朝廷は有栖川宮熾仁親王を東征大總督とし、西鄕隆盛を參謀とし、橋本實梁は東海道から、岩倉具定は東山道から、高倉永祐は北陸道から、薩・長以下二十二藩の兵を進め、日を期して一齊に江戸城を陷れようとした。熾仁親王は海路から駿河に入り、三月、總督府を駿府に置き、軍政を監督された。

德川慶喜は、上野の寛永寺に退き、山岡鐵太郎を駿府に派遣し、隆盛に會せしめて、書を熾仁親王に上り、恭順の意を表し、寛典を請うた。愈々官軍が江戸に迫らうとする時に當り、安芳は德川氏を代表して隆盛と會見し、慶喜の衷情を傳へ、大いに内議する所があつた。

よつて熾仁親王は江戸攻撃を中止し、隆盛は西上して更に朝廷と相議し、慶喜の死一等を減じて水戸に幽し、江戸城及び軍艦・兵器を收め、家臣の郭内に住する者を郭外に退かせ、家臣の逆謀者を處分された。後に家齊の曾孫田安家達に德川の宗家を繼がせ、駿河・遠江・陸奥の内七十萬石を賜ふことになつた。

安芳は「江戸城明渡し」の重大事を平和の裡に解決することに努めたので、江戸民衆の生命・財産は、兵火の難に罹らずに濟んだのである。

後には朝廷に仕へ、明治六年には海軍卿に任じ、我が海軍の發達に盡力した。晩年には樞密顧問官となり、伯爵を授けられたが、明治三十二年一月、七十七歳で歿した。「しんみまさおき・新見正興」の項を參照されたい。

かつらたらう
桂太郎

事蹟 長州萩の藩士である。戊辰の役及び明治二十七八年戰役などに功があり、陸軍大將に進んだ。明治三十一年に組織された伊藤内閣・憲政黨内閣・山縣内閣及び三十三年十月に組織され伊藤内閣の時には、何れも陸軍大臣となつた。三十四年六月には自ら總理大臣となつて内閣を組織し、三十五年には日英同盟を結び、引續き首相として國政を執り、明治三十七八年戰役には、よく國内の人心を引締めて大敵露西亞を破つた。四十一年七月には再び總理大臣となつて内閣を作り、四十三年八月には、日韓併合に功があり、大正元年十二月には三たび總理大臣となつて内閣を組織した。また四十四年には明治天皇の聖旨を奉じて濟生會を起した。濟生會といふのは、正しくは「恩賜財團濟生會」といひ、恩賜金を基にし、多くの人々の寄附金によつて立てられた社會事業團體の一つで、金が無くて醫者にかゝる事の出來ない樣な者に藥を惠んだり、療治をしてやつたりする事を目的として居る。本部を東京市芝區に置き、全國に病院・診療所・巡回診療班などを設けて居る。太郎は永年の功により、公爵を授けられたが、大正二年十月、六十八歳で歿した。

かつらはらしんわう
葛原親王

系統 桓武天皇の第三皇子である。

事蹟 幼時から穎悟で、長ずるに及び恭儉で、物に傲らず、史傳を歴覽して、常に古今の成敗を以て自ら戒められた。桓武天皇の延暦二十四年には四品に叙し、治部卿に任じ、大藏卿・彈正尹・式部卿を經て二品に進まれた。淳和天皇の天長二年に上表し、子女は皆其の王號を棄て、世世平朝臣を賜はらんことを請ひ、朝廷の許可を得て、何れも臣籍に列した。實に桓武平氏の始祖である。同八年には一品に進み、後に上野太守・常陸太守を兼ね、仁明天皇の嘉祥三年には、太宰帥に轉じ、文德天皇の仁壽三年六月、六十八歳で薨ぜられた。親王は久しく式部の職にあつて職務に閑習し、凡ての舊典に練達し、朝廷から重んぜられ、詔によつて輦車を宮中に入るゝことを許され、其の儀は諸親王と異つて居たといふ。

かとうかげまさ
加藤景正

名號 加藤四郎左衛門景正といふ。薙髮して春慶と號した。一に俊慶にも作る。尾張瀬戸の人は追稱して陶祖といひ、世人は初代藤四郎といふ。

系統 父は藤原元安で、母は平道風の女である。

事蹟 山城の人で、幼時から土器を造ることを好み、支那に往つて其の製法を學ばうと考へたといふ。成長して大納言久我通親に仕へ、五位諸大夫となつた。後堀河天皇の貞應二年四月、通親の子道元禪師と同伴して宋に航し、建溪（福建泉州府德化縣）で陶業を學び、約六年の後に歸朝した。時に二十六歳である。

はじめ肥後の川尻に上陸し、持つて來た土で小壺を造り、一を道元禪師に贈つたが、後に傳へられて珍重された。父を備後松尾の謫所に訪れ、ついで山城の深草に赴き、母に侍して孝養を盡し、母の歿後、京畿の内外で陶器を試みたが、何れも意に適しなかつたので、遂に尾張山田郡瀬戸村で試みた。瀬戸の地は山高く水清く、土質が支那のそれと同樣であつたから、此の地で業を開き、最後まで他に移らなかつたといふ。景正の宅址を中島といひ、瀬戸の深川神社の東邊の田

圃の中にあり、また其の北の禪長菴の地は、晩年景正が隱居した地であるといふ。歿年は詳かでないが、其の墓を五位塚といふ。景正の手造品は殆んど傳はらず、村社深川神社の獅子一個が其の遺作であるといふ。

景正の家業は、其の子の藤四郎（二代）が繼いだ。初代藤四郎の製作品を單に古瀬戸といひ、二代藤四郎の製作品を眞中古といふ。二代藤四郎は黃色の釉を發明したが、古瀬戸に對して、これを黃瀬戸といひ、世人の珍重する所である。

かとうきよまさ
加藤清正

名號 小字を夜叉若といひ、後に虎之助と改めた。世に鬼清正と稱する。法名を淨地院日乘といふ。

系統 姓は藤原で、權中納言忠家の後裔である。忠家の子正家は美乃加藤武者と號したが、正家九代の裔頼方は尾張愛知郡中村に住んだ。頼方の子清信は犬山城に住んだが、清信の子清忠は、即ち清正の父である。清正の母は豐臣秀吉の母と從父姉妹である。

事蹟 幼少の時に父清忠を喪ひ、母と共に秀吉に據り、十五歲の時に元服して食祿を受けた。天正九年には、因幡鳥取城・備中冠城・攝津山崎・丹波亀山などの諸戰に殊功があり、十年五月には近江の曉ケ嶽に戰つて武勇を發揮し、七本槍の第一に數へられた。十三年には、功を以て從五位主計頭に任ぜられ、十五年には、島津征伐の軍に參加し、宇佐城を守つて大功があり、終に肥後半國二十五萬石を受け、熊本城に據つて治めた。

天正十八年八月、秀吉が明國を征服する事に決し、諸將に令を傳へた時に、清正は進言して、「公、明を征して、各將の戰功を論じ、封土を得せしむ。樂、これに過ぎざるなり。臣、駑なりと雖も、命を奉じて先鋒となり、朝鮮王を擒にし、然る後、明に入りて四百餘州を屠らん」といつた。秀吉は大いに悅び、征明の師を起すに際し、軍旗を與へて第一先鋒となした。

（加藤清正）

文祿元年、清正は鍋島直茂・相良長毎と共に、第二軍の兵二萬二千八百人を率ゐて渡鮮し、釜山から北進して京城に入り、二王子臨海君・順和君を追つて、咸鏡道の會寧府に至り、七月、遂にこれを捕へて厚く遇し、更に進んで女眞に入つたが、明との和議が成るに及んで師を班した。後に和議が破れたので、慶長二年正月、再び小西行長と共に兵を率ゐて渡鮮し、到る處に武勇を輝かした。十二月、明の大軍が淺野幸長らを蔚山城に圍んだので、清正は五百人を率ゐて蔚山城に入り、大いに明軍に包圍され、糧水が盡きて、血の混つた水を飲んで渴を醫し、また紙を嚙み、壁土を食し、牛馬を食つてなほ足らず、熊城十餘夜に及び、頗る苦戰を極めたが、清正は死を決して之を守つた。三年正月、毛利秀元・黑田長政・小早川秀秋・立花宗茂・小西行長らが來援したので、遂に明軍は圍を解いて走つた。清正は征明の役に從ふ事前後七年、異域に恩威並び行はれ、殊に韓人は永く其の勇に怖れた。三年八月、偶々秀吉が沒したので、諸將と共に軍を班した。「あさのよしなが・淺野幸長」の項を參照されたい。

慶長五年、近江佐和山城主石田三成は、德川家康の專權を惡み、毛利輝元・宇喜多秀家・上杉景勝と謀つて、之を除かうとしたが、清正は三成と善からず、家康の爲に國に就いて西海を鎭撫した。十年四月、功によつて從五位上侍從肥後守に任ぜられた。

慶長十六年三月、家康が嬰臣秀頼を京都の二條城に招いた時、清正は淺野幸長と共に陪從した。時に福島正則は、兵一萬を率して大阪に留つて居たので、清正は不虞に備へる爲に兵五百を拔擢して、其の中の三百を伏見・京都に徘徊させて警戒させた。無事に歸路に就き、伏見から船で邸に歸つて後に、匕首を懷中から出し、推戴して涕泣し、「太閤の洪恩、今日に報ずるを得たり」と言つた。ついで肥後に歸り、六月、熱病に罹つて歿した。時に年五十歲である。遺命により甲冑帶劍のまゝで中尾山に葬る。

清正は人と爲り誠忠・勇武で、よく舊恩を忘れず、幼主秀頼を守つて臣節を全うした。居常論語を好み、旅行の途中に於ても之を愛讀し、奢侈を戒め、學問を勸め、忠孝を勵まし、武事を怠らしめなかつた。其の逸話は種々の物語・芝居に仕組まれ、今尙ほ清正公樣と崇められて居る。

かとうきんべゑ
加藤金兵衛

「きくちようさい・菊池容齋」の項を參照されたい。

かとうともさぶらう
加藤友三郎

事蹟 明治・大正時代の我が海軍々人である。明治三十七八年戰役には、海軍少將を以て第一艦隊の參謀長となり、旗艦三笠に乘組み、聯合艦隊司令長官東郷平八郎を援けて、日本海にバルチック艦隊を擊破した。

大正三年四月に組織された大隈内閣の時には、海軍中將を以て海軍大臣となつたが、八月、對獨宣戰布告のあるに及び、第一艦隊を組織して南洋に出動し、獨逸東洋艦隊の主力に當り、英國の濠洲艦隊と協力して、十月に赤道以北の獨逸領南洋諸島（マーシャル・マリアナ・カロリン等）を占領し、太平洋に於ける獨逸の根據地を一掃した。

大正五年十月に組織された寺内内閣の時には海軍大臣に任じ、爾來、我が海軍の主腦となつたが、大正十年に至り、米國大統領ハーヂングは日・英・米・佛・伊の五大國に加ふるに支那・和蘭・白耳義・葡萄牙などの四國の代表者をワシントンに招き、軍備制限に關する會議を開く事にしたので、友三郎は海軍大臣を以て全權委員となり、貴族院議長德川家達・駐米大使幣原喜重郎・外務次官埴原正直らと共に出席し、十年十一月一日から、翌十一年二月六日迄の間に、（一）五大國海軍の制限、（二）太平洋防備の協定、（三）支那の主權及び領土の尊重、（四）日英同盟の終了などを議した。

此の會議の結果、英・米・日の三國は、五・五・三の比率として主力艦の制限を締めたが、補助艦の方は不成立に終つた。また太平洋方面に於ける日・英・米三國の海軍根據地及び要塞は、現狀維持を取りきめた。また日・英・米・伊・支・蘭・白・葡は、支那の獨立及び其の領土の保全を尊重し、支那領土内で各國が商工業を經營する場合は、各國とも其の機會を平等にし、且つ自由に經營が出來るやうにしたが、これを九箇國條約といふ。また太平洋に關係ある國々は、互に相手國の權利と利益を尊重し、若し爭議が發生した場合には、日・英・米・佛の四國會議に委託することを定めたが、これを四國協約といひ、其の結果、從來の日英同盟は自然に消滅する事となつた。

友三郎は大正十一年三月に米國から歸朝したが、此の年の六月には自ら總理大臣となつて所謂加藤

内閣を組織したが、十二年八月に内閣の瓦解と共に職を辭した。

かとうひろゆき
加藤弘之

事蹟 但馬の人である。幼時佐久間象山に學び、後に獨逸文化を研究して其の泰斗となつた。明治七年一月、副島種臣・後藤象二郎・板垣退助・江藤新平らは、民選議員の設立を政府に建白した。其の建白書が日新眞事誌に掲載さるゝに及び、議論が大いに高まり、民選議院は一朝にして設立されようとする勢を呈した。時に弘之は、宮内省四等官出仕であつたが、「議院設立の時機、なほ早し」となし、一書を草して種臣・象二郎・退助の三人に送つたが、政府もまた弘之の尙早論に贊成した。弘之は文學博士・法學博士となり、元老院議官・東京帝國大學總長・宮中顧問官などに任じ、また勳四等を授けられたが、大正五年二月、八十一歳で歿した。

かとうよしあき
加藤嘉明

名號 本名を茂勝といふ。小字を孫六といひ、左馬之助と稱する。

系統 姓は藤原氏で、鎭守府將軍利仁の後裔である。

事蹟 三河の人である。幼にして孤となつたが、長じて膽氣膂力があり、眼光が人を射た。年少から馭馬に熟練したが、十五歳にして岐阜の加藤景泰に謁し、驂馬を馭したが、其の爲に拔擢されて豐臣秀吉に仕へた。敏捷で秀吉の意に協ひ、從軍する毎に大功があり、賤ヶ嶽の役に武勇を顯はし、七本槍の一人と稱せられた。「とよとみひでよし・豐臣秀吉」、「さくまもりまさ・佐久間盛政」の項を參照されたい。

天正十三年、從五位下に叙せられ、正末城を受け、食邑六萬二千九百石を賜はつた。秀吉が九州の島津氏を征するに及び、九鬼嘉隆と共に、軍艦を督して薩摩に入つた。また小田原役にも海路から進み、下田を陷れて秀吉に賞せられた。文祿征韓の役が起るに及び、嘉明は水軍の將として、屢々力戰し、親ら進んで敵船を奪ふこと前後二十餘艘に及んだ。慶長二年再征の時、また水軍を率ゐて至り、七月、陸兵と共に南京城を陷れた。加藤清正が蔚山城に圍まるゝに及び、嘉明は諸將と共に赴き救ひ、首を斬ること千五百餘、大功を以て十萬石に封ぜられた。

曾て石田三成と隙を生じたので慶長五年には、福島正則・池田輝政と共に德川家康に黨し、八月、岐阜城を拔き、大いに關ヶ原に戰つた。嘉明は衆に先立つて三成の先鋒を逐つたが、十一月、軍功を賞せられ、松山城二十萬石を治した。元和元年八月、從四位下侍從に叙任し、寛永四年二月、會津四十萬石に轉封し、八年九月十二日六十九歳で歿した。嘉明は常に、「氣利勇なる者は、拔群の功ありと雖も遂げず、武功は質直に在り、また阿諛なる者は、絶倫の功あるも恃む可らず」といつた。

かねこじふらう
金子十郎

「みなもとのよしひら・源義平」の項を參照されたい。

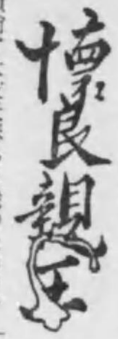
かねながしんわう
懷良親王

名號 世に鎭西宮・九州宮・阿蘇宮・肥後宮などと稱する。

系統 後醍醐天皇の第十六皇子で、御母は權大納言三位局である。後村上天皇（義良親王）の御弟である。

事蹟 延元元年、足利尊氏が再び京都を犯した時、親王は後醍醐天皇に從つて比叡山の延曆寺に赴かれたが、十月、天皇が假に

尊氏と和し、京都に還幸された時には、奔つて吉野に匿れられた。三年九月、勅を受けて征西大將軍となり、吉野から四國に入り、四年三月、九州に赴任された。時に菊池武重・菊池武敏・菊池武光の兄弟は、力を王事に捧げ、親王を迎へて肥後の八代城に置き、心を傾けて輔衛した。阿蘇維時・五條頼元も武重に黨し、尊氏の黨少貳



（懷良親王の御筆蹟）

頼尙、大友氏泰らと戰つたので、九州の官軍は一時振つた。

興國三年五月、親王は自ら軍を督し、中院義定・五條頼元・五條良氏らを從へ、薩摩・大隅を征せられた。當時、薩摩の諸族は、多く官軍に屬したが、殊に谷山雲禪は、親王を奉じて行營を德本に造つた。六月、賊黨島津貞久は、兵を率ゐて谷山を攻めたが、却つて官軍の爲に逆襲され、一族郎黨の死傷者が多かつた。八月、貞久は再び大隅・薩摩の兵を率ゐて谷山を攻め、また官軍の爲に破られた。斯くて薩南は平定したので、親王は別將を留めて、薩摩の官軍を監督させ、正平二年、肥後に歸還された。

ついで武光と協力し、一色範氏を擊破し、進んで筑前に入られたが、少貳頼尙・大友氏時らも降附し、九州の地はほゞ定まり、親王は一品に叙せられた。

正平十三年、尊氏は一色直氏を九州探題にしたが、武光の爲に破られた。ついで頼尙も叛いて足利義詮に應じたので、武光は親王を奉じ、十四年八月、頼尙と筑後川附近の大原に戰つた。親王は衆を督して敵陣を衝き、身に數創を被り、部下の將卒も多く斃れた。武光の一族は殊死して戰ひ、遂に頼尙を破り、三千二百餘級の首を得た。これを筑後川の戰といふ。親王は後に筑前を鎭撫されたが、其の終る處は詳かでない。「きくちたけみつ・菊池武光」の項を參照されたい。

かのえいとく
狩野永徳

名號 通稱を源四郎といふ。初名を州信といひ、後に重信と改めた。號を永德といひ、世に古永德と稱する。法名を實相院日竟永德居士といふ。

系統 狩野元信の孫で、狩野直信（松榮）の子である。

事蹟 後奈良天皇の天文十二年正月十二日、山城國に生れた。織田信長の近侍となつて寵用されたが、天文元年に信長の命を受けて、洛中洛外の景地及び源氏物語の屏風二雙を描いた。これは信長が上杉謙信に贈る料として描かせたのである。天正四年七月には、安土城天主七重の金壁に龍管を描いて名を揭げ、感賞として法印に叙し、三百石を受けた。

信長の歿後は秀吉の寵を受け、山城國大原郡の内で三百石を賈つたが、秀吉の權勢が盛んになつたのは、狩野派の爲にも幸福であつた。秀吉は聚樂第を營み、大阪城を築き、主として大殿堂に描かせたので、永德は古今獨歩の大作に其の伎倆を發揮し、壁畫の人物といひ、松梅類といひ、大きいもの許りであつた。殊に聚樂第の金壁に西湖の圖を描いてからは、秀吉は大殿傑閣の裝飾畫を悉く永德に描かせたので、彼の畫家的生活は頗る多忙を極め、日々多くの門人を率ゐて筆に從つた爲に、自ら其の筆致が粗略に傾いたけれども、當代人は一人も批評を試みる者はなかつた。それは永德の考案が概ね斬新であり、また前人未踏の妙を現はして居たからである。

固より其の筆は祖父元信には及ばなかつたけれども、よく元信の畫風を受けて、筆力が勁健で、規模が宏遠で、更に新意を出し、山水・人物・花鳥に達し、尙ほ一代の巨匠たるに愧ぢない。

エルネスト＝フェノロサは、永德が歐羅巴藝術の感化を受けた點に就いて、「永德が始めて試みた色彩モザイクの特色は、西歐の膠畫や油繪の樣に、色地の上へ透明な顔料を施して暗色を出す事であつた。所謂切支丹大名の爲に輸入された西歐の油繪を見て、永德が如何程の影響を受けたかは、たゞ吾人が推測し得るに過ぎない。併し西歐の繪畫の色どりを見て、彩色法の效果ある事を暗示されたに相違ない」と述べて居る。

永德は天正十八年九月十四日、四十八歳で歿したが、其の遺墨は京都の大寺・亙刹に遺つて居る。畫界の秀吉は卽ち永德であつて、縱橫に腕を揮つて、天下を風靡したところは、兩者の頗る相似た點である。永德の子に狩野光信があつたけれども、餘り技術が振はなかつた。永德の門からは、狩野山樂・海北友松の二名匠が出て、桃山時代の美術に一段の光彩を放つた。

かのさんらく　狩野山樂

名號　姓を木村といひ、名を光頼といふ。通稱を平三といひ、また修理亮ともいふ。薙髮して山樂（三樂）と號し、後に狩野氏を冒した。

系統　木村永光の子で、狩野永德の養子となつた。

事蹟　近江國蒲生郡の人である。最初淺井氏に仕へ、後に秀吉の近侍となつたが、曾て書請場の砂上に、秀吉の杖で馬を描いて畫才を認められ、それから永德に繪畫を學び、秀吉の命によつて永德と父子の義を結び、狩野氏を冒して修理亮と稱した。

秀吉が東福寺を修營した時、法堂の仰板に描かれた明兆の雲龍の繪が、雷火の爲に破損して居たので、永德に命じて補修させたが、永德は雲を描いたのみで俄に病死したので、其の畫稿を直ちに山樂が繼承して、頭二丈餘、身長十八尺の龍を數日で描成したといふ。秀吉が天王寺を修營した時にも、其の堂壁に聖德太子繪起を描いて居る。京洛に居る頃、近衞の金殿玉樓に多くの彩畫を揮つたが、彼の繪畫は能く狩野の正風を傳へ、豪壯雄大な所があり、人物・花鳥・岩石・樹木の描法は、よく永德の畫風を模し、龍・虎・馬・麕などの描法は出藍の聞えがある。後には古士佐の畫風を學び、また宋元の畫風を慕つて、筆力が精巧になつた。併し桃山時代の繪畫は、支那の影響から離れて、ゴブラン織の美しさなどを取入れ、まばゆい、遠見の利くやうに描かれたので、山樂の畫風にも、歐羅巴藝術の感化がないとはいへない。

秀吉の歿した後にも、畫道の外に、武臣として大阪城に居り、豐臣氏滅亡後は、秀吉の恩に感じ、節を重んじて德川家に仕へず、男山の麓本坊に身を寄せ、僧侶達に畫道を授けて居たが、後には德川家康に敎され、京洛に歸休して剃髮した。寛永十二年八月四日七十七歳で歿した。山樂の義子に狩野山雪があり、所謂京狩野の祖であるが、其の子孫も、山樂の遺志を守つて關東に仕へず、京都に住して家法を守つた。

山樂の遺作は、東福寺法堂天井の龍、天王寺の聖德太子繪起を始め、京畿の佛閣に見られるが、桃山百雙屏風繪も、半ば彼の作であるといひ、西本願寺飛雲閣の葡萄と栗鼠の襖繪なども、彼の作であるといふ。東京帝室博物館所藏の黃石公張良圖及び虎溪三笑圖は、六曲金地極彩色屏風である。

かのたんいう　狩野探幽

名號　通稱を四郎次郎といひ、また采女とも稱する。名を守信といひ、薙髮して探幽と號し、また白蓮子・筆峰大居士などの號がある。法名を玄德院守信日道居士といふ。

系統　狩野永德の孫である。狩野孝信の長男で、母は佐々成政の女である。鍛冶橋狩野家の祖である。

事蹟　狩野派中興の名匠で慶長七年正月十四日に京都で生れた。二歳の頃から筆を弄び、四歳の時に描いたが、其の繪は殆んど習熟したものゝ樣であつた。慶長十九年十三歳の時、江戸城に伺候して將軍德川秀忠に謁し、席畫を命ぜられて、海棠花下に猫を描いた。秀忠は大いに其の筆拔を感賞したが、見る者は古永德の再生であると稱した。元和二年十五歳の時、豪命によつて紅葉山の靈廟に龍を描き、それから日光山、芝の三緣山、上野の東叡山などに、廟の經營ある毎に龍を描くのを例とした。三年には改めて幕府の繪師に擧げられ、鍛冶橋門外に屋敷地を賜はつたので、父孝信の遺跡を弟尙信に讓り、自ら新に一家を起したが、これが鍛冶橋狩野家の起源である。六年には將軍家の命を受けて寺日局の肖像を描き、七年には神田松永町・京都高辻にも屋敷を賜はつた。九年には大阪城修理に際して其の殿中に描き、江戸城本丸の殿中にも描いた。

（狩野探幽）

寛永三年、後水尾天皇が二條城に行幸された際には、豫め其の殿中の高座に描く事を命ぜられた。よつて探幽は京都に出張したが、既に小堀遠江守は工事を監督し、木材を集めて桁とし、長板を其の上に架し、所謂足代を作つて待ち受けて居た。探幽が之を見るに、足代の爲に殿中に陰影が出來て、描くのに不便であつたから、命じて其の足代を撤去させ、牢頭に筆を結び、丈餘の壁面に描いたが、其の結果は運筆が自在で、墨色が淋漓として、平氣上で描いたものと少しも異らなかつた。日ならずして完成したが、これは二十五歳の時で、畫名が高くなつたのも此の頃からである。五年には二十人扶持を賜ひ、十三年には豪命によつて東照宮緣起及び肖像を描き、また將軍家の命により、薙髮して法眼に叙せられ、號を探幽齋と稱した。これが三十五歳の時である。

寛永十四年には芝增上寺安國殿に描き、十八年九月には日光山に描き、十九年、皇居造營の際には、勅命を奉じて紫宸殿の賢聖障子を描き、以て一代の面目を施した。正保四年には江戸城及び殿中に描き、寛文二年には仙洞御所に召され、太上天皇（後水尾）の叡旨を奉じて玉體を寫し奉り、宮內卿法印に叙せられ、筆峯大居士の印を賜はつた。四年には河內國河內郡客坊村に領地二百五十石を賜はつた。十年六十九歳の時には、中風症に罹つて執筆に困難を感じたが、翌年には回復して筆力は益々旺盛となり、更に老蒼の氣を加へて來たが、延寶二年十月七日、七十三歳で歿した。江戸池上本門寺塔中南院に葬る。

探幽は始め父孝信に就いて家法を學んだが、父の歿後は、狩野興意（養育の親）に從つて家法を研究した。彼の中年以前の作が、何れも興意の筆格に似て居るのは其の爲である。彼は四十歳を超えてから、宋元の名家を學び、殊に牧溪の畫風を慕ひ、東山時代の名流を學び、殊に雪舟の減筆法を採り、諸家の畫風を折衷して、終に一家の格を大成し、狩野派を中興したのである。彼は刻苦勉勵の畫家であり、狩野家風の眞意に達したのは言ふに及ばず、宋元及び東山時代の畫蹟を渉獵し、土佐派などの大和繪をも模寫し、諸家の斷簡零

墨は一つも逃さずに學び、數千枚の模本は積んで大帙をなした。これが所謂探幽縮圖である。探幽の探幽たる所以は、古今の名畫を見る毎に縮寫研究し、從來の諸風を集成陶冶して一丸となし、其等の上に立つて、自家獨得の畫風を創成した點にある。彼の雪舟・元信の畫風は、漢畫の風格を繪入したものであつたが、探幽は是等の漢畫を材料とし、自己の藝術家的手腕に訴へて精練醇化し、簡淨温雅な我が國民的性情を描現した。探幽は繪畫の構圖に就いても苦心經營し、往々東山時代の繪畫に見られる樣に、絹紙の上を畫で滿す樣な幼稚な法を採らず、山水木石を巧妙に配置し、構圖の整つた日本的漢畫を描成した。彼の繪は穩健蕭散であるが、其の間に覇氣が露出して居る。五十歳前後の作は渾厚圓熟し、最も嘆賞に價するものが多い。六十歳以後の作には、概ね其の名と共に年齢を記したから世に行年書きといふ。この行年書きは、思ふ儘に筆を弄し、覇氣が全幅に滿ち、勁健の氣が溢れて居るけれども、簡樸枯燥に過ぎ、また細心の工夫がないので、識者は却つて之を採らない。

探幽は一世の畫宗として、七十三歳迄も長生し、畫道に篤實で、朝廷・幕府・諸侯・寺院・貴顯の需に應じて執筆し、また上下貴賤を問はず、交際が頗る廣かつたので、隨つて世に傳はる畫蹟も尠少でない。

彼の作品中には、水墨淡彩風のものと、金碧濃彩のものとがあるが、現存する大作には、本派本願寺書院鴻の間にある張良四皓を引いて惠帝に謁せしめる圖、草堂遊戯の圖、武帝西王母に會する圖、南禪寺方丈の竹林虎豹の圖などがある。

門人も甚だ多いが、久隅守景・鶴澤探山・山本素程・桃田柳榮・神足常庵・尾形幽元・狩野洞雲・加藤遠澤・松原探梁らは探幽の高弟である。

かのつねのぶ　狩野常信

名號　通稱を右近といひ、薩髮して養朴と號した。耕寛齋・青白齋・古川叟・寒雲子・弄毫軒・紫微翁などの別號がある。

系統　木挽町狩野家の祖狩野尚信の子である。

事蹟　寛永十三年三月十三日、京都に生れたが、父尚信に畫道を學び、尚信の歿後は伯父の狩野探幽に學んだ。後年雪舟に私淑し、また土佐派の和風を交へて、益々優麗な家風を生じた。寶永元年、將軍德川綱吉の時に藝裏が炎上したが、其の造營に際して、紫宸殿の賢聖障子及び仙洞御所に描き、また江戸紅葉山の靈廟にも描いた。常信の伎倆は殆んど探幽に匹敵して居たが、二人の畫風には稍々相異があり、探幽の筆致の雄勁秀拔に比して、常信の筆致は蒼實穩健であつた。常信が畫道に篤實勵精であつた事は、養朴縮圖の多い事でも分る。併し彼は正德三年正月二十七日七十八歳で歿するまで、絶えず畫道に勵精したに拘らず、概して探幽の法を守り、新機軸を出さなかつたのは遺憾である。蓋しこれは師法墨守を事とした時代的反映であつて、老實な性格の常信が、自ら世風に化せられて、探幽の畫法の外に出なかつたのは是非もない。併し探幽の後に常信が出た爲に、狩野家は儼然として畫界の覇權を握つたので、若し探幽を家康に比するならば、常信は畫界の家光であらう。常信は文學歌道にも秀で、德川光圀の愛顧を受け、中院通茂・里村昌億とも交際した。養朴詠草に「夕日かげ野島が崎にうつろひて、よせくる波ぞ秋の色なる」といふ歌がある。一つの風景畫を見る樣である。

かのはうがい　狩野芳崖

名號　幼名を幸太郎といふ。松國・皐國・梨庵などの號があり、勝海雅道と稱したこともある。

系統　長州萩浦藩のお抱繪師諸葛董信の子である。董信は狩野派の畫家で、畫名を狩野皐川と稱した。

事蹟　文政十一年正月、長州萩浦藩に生れ、十九歳の時に江戸の木挽町繪所に入塾し、狩野勝川（雅信）に師事して勝海雅道と稱し、畫才の秀逸を以て聞えた。偶々橋本雅邦と入塾の日を同じくしたので、後年遂に相許すに至つたといふ。當時、木挽町塾頭の三村晴山は、佐久間象山と親しかつたので、象山は屢々晴山を木挽町に訪れたが、一日芳崖の畫を見て嘆賞し、題畫の詩を贈つた事があり、爾來、芳崖は象山に師事し、共に信州に遊んだ事もある。芳崖が日常志士の態度を持したのも、象山の感化の然らしめる所であらう。當時、木挽町繪所の繪畫教育は粉本模倣主義に流れて居たが、天性俊邁な芳崖は、早くも古法墨守の愚を悟り、師家の規矩を脱して、其の天禀を發露する傾向があつた。曾て勝川が下谷常樂院の壁に麒麟を描いた時、芳崖は助手として設色に携つたが、古法・家則

（狩野芳崖）

を無視して自己の所信を試みた爲に、勝川の怒に觸れて破門されようとしたが、調停者の爲に總に助かる事が出來た。其の後も芳崖は屢々古法を蹂躙して意に介せず、勝川もこれを知つて居たが、併し其の畫才の拔群なのを惜んで、默認して再び詰責しなかつたといふ。後年日本畫の革新に奮勵した大志は、既に彼が青春期に胚胎して居る。

やがて幕末に至り、防長には尊王攘夷の聲が沸騰したが、芳崖は晏然として畫道に從ふことが出來ず、筆墨を擲つて藩事に奔走し、或は要路を設計し、或は大砲の鑄造を手傳つた。王政復古の後には一時養蠶業に手を出して失敗し、再び畫筆で立たうとし、明治十二年五十二歳の時に東京に出たが、恰も畫道凋落の秋に際し、殆ど糊口を得るに道なく、貧窮の揚句、砲兵工廠の圖案課に志願したけれども、用器畫の試驗に落第して採用されず、日藏町の借家に作品を陳列して顧客を待つたけれども、一人も寄りつく人もなく、酷寒と飢餓とは狼の樣に此の天才畫家の身に纏ひ、禍は更に禍を生み、加ふるに肺患に襲はれ、貧窮生活のどん底に陷り、乞食同樣の悲慘な生活を續けたが、雅邦の推薦で、島津公爵家の犬追物の繪卷を描き、これから同家の扶助を受ける樣になり、僅に一時の飢渴を凌いだ。十五年九月の第一回繪畫共進會には、赤貧と闘ひ乍ら、一幀の壽老人を描いて出品したが、盤獅が針金の樣で潤色がないといふ惡評を蒙つたゞけで、誰も顧みなかつた。この天才の心情を偲ぶべきである。十七年四月の第二回繪畫共進會には五十七歳の腕を揮つて雪景山水・櫻下駿馬の二幀を出陳したが、最劣等の三等褒狀を得たゞけで、同胞は誰一人として此の天才畫家を賞讃しなかつた。併し名家はやはり名家を知る。米人フェノロサは一日共進會場に入り、二幀の繪を見て感賞やまず、遂に芳崖の草屋を訪問して親しく談論し、一見舊知の樣で、相携へて日本美術の發揚に盡瘁する事を誓つた。芳崖はこれからフェノロサ及びビゲローの援助により、漸く米鹽の道に窮しなくなり、隨つて藝術に專心する事が出來る樣になつた。十八年には文部省圖畫取調掛委員

に擧げられ、またフエノロサ及びビゲローらと鑑畫會を起して青年畫家を開發し、毎月本郷麟祥院・下谷松源などに會合して、作品の指導批評を行つた。松源に出陳した仁王捉鬼圖は、特に配色變化の妙を極め、日本畫の傳彩が西洋畫に及ばないといふ偏見を打破したものである。時の總理大臣伊藤博文は、此の繪を見て感じ、直ちに芳崖に繪を註文したが、芳崖も博文を官邸に訪ひ、熱烈に日本美術の優秀な點を說き、やがて亘鷲が地球上に座して居る繪圖を描いて送つた。蓋し日本美術の世界征服を暗示したものである。東京美術學校設立の内命が下つたのも、一は芳崖が博文を動かしたからであるといふ。爾來、殆ど寢食を忘れて、小石川植物園事務所に出勤して、美術學校創立に盡瘁したが、未だ開校を見ない中に歿した。時に明治二十一年十一月五日で、年六十一歲であつた。

芳崖の樣に悲慘な生活の中に畫技を練つた畫家はない。明治前期の藝術不振時代に出現して、幾多の艱難困苦と戰ひ、而も撓まず屈せず、常に國家的見地から日本美術の精華を世界に發揚しようと努めたが、其の畫名が知れてから五年を經ない中に、早くも此の世を去つて仕舞つた。併し其の短い五年間に於て、先づ山水畫に一新機軸を出し、勁健の筆と和柔の筆とを併用して、濃淡黑白の鮮明な、印象の明晰な作品を出し、斯道に多大の感化を與へた。殊に設色の妙は彼が最も苦心研究した所で、日本畫の賦彩は決して西洋畫に劣るものでないといふ彼の持論を如實に實現したもので、而も沈痛で秀拔の趣がある。また人物畫に於ては狩野探幽以後の第一人者で、他人の企及を許さないものがある。彼の東京美術學校所藏の悲母觀音圖は、最も苦心した畢世の大作で、十四年佛國大博覽會に出陳する爲に描いたのを第一稿とし、推敲八年の久しきに亘り、長逝五日前に、漸く完成されたものである。其の間に於ける產の惱みは言語に絕し、或は機土の山色を表現する爲に木灰を絹篩にかけて彩具を作り、或は紙帳の内で苦しい嗽嗽を忍びながら微妙の色彩を案出するなど、改描十八葉の多きに達し、尙ほ最終の作品に於てさへ、彼が藝術的欲望を滿すに足らなかつたといふ。筆致に稍々奇癖がないではないが、全體として設色が渾厚優麗で、善く觀音の慈悲を表現して、端麗温雅の極致に達して居る。菩薩の聖相は古今の名畫に比肩すべき佳例であり、靜觀する者を淸淨光明の境地に遊ばせる。蓋し一代の名作として推すべきものであらう。

芳崖が藝術を產む時には、苦心に苦心を重ねて煩悶するのを常とした。曾て奈良に遊んで不動明王の像に接し、一眼を閉ぢ一眼を開いた樣を看取し、歸つてから之に似せて維摩を描いた事があり、或は火災の時の熾盛な火力を見て、不動の背火を金泥のみで描いた事があり、或は牧牛の圖を描いて、遠山の起伏した線を臥牛の姿態に似せて、彼是の照應を得ようと試みた事もある。これは彼が圖を構へる場合の例話であるが、斯樣に苦心經營したので、隨つて其の作品には堅忍豪快な人格が能く表現されて居る。殊に墨繪は豪健雄壯で、勁健の筆致は時に峻峭となり、時に怪奇となり、時に品致を損ずる事もあるが、併し氣力が充實して寸毫の弛緩がなく、永遠に懶夫を起たしめるの慨がある。尙ほ彼の有名な遺作としては、東京美術學校所藏達磨・維摩・羅漢・不動明王・龍虎圖・猛鷲圖・巖石圖・鳥津家所藏琴棋書畫圖・米國ボストン博物館所藏旭將軍之一擢・懸崖飛瀑・深谷雄飛などがある。

かのまさのぶ

狩野正信

名號　一名を伯信ともいふ。通稱を四郎次郎といひ、後に大炊助と改めた。號を祐淸といひ、祐勢・友淸にも作る。法名を乃性院日如といふ。塔銘には勇高院前式部卿法眼永仙越州元信日春大居士とある。

系統　姓は藤原である。伊豆狩野介景信（出羽次郎）の長男で、狩野家の第一世である。

事蹟　後花園天皇の享德二年伊豆の狩野に生れた。幼時から畫を善くしたが、關東の兵亂の爲に家運が衰微したので、亂を避けて京都に入り、如拙の畫風を慕ひ、周文に師事して畫道を學び、小栗宗丹にも接して其の感化を受け、また宋の梁楷を慕つて、最も人物畫に長じ、喜んで減筆の法を用ひた。應仁元年頃から將軍足利義政の近侍となつて畫事を掌り、若干の食邑を受けて居たが、文明十五年六月、命を受けて東山殿中の障子に瀟湘八景の圖を描いて大いに畫名が揚つた。義政は正信の能畫を賞し、法眼に叙し、五千貫の地を賜はつた。始め大炊助であつたが、於是、越前守式部大輔に任じ、從五位に叙せられ、費粟を以て家職となし、一家を興すことになつた。畫風は周文から出て居るけれども、既に宋人を追步した趣があるのは、時人に珍重された所であらう。晩年、薙髮して祐淸（祐勢・友淸）と號したが、延德二年七月九日、年三十八歲で歿した。天文十九年七月九日、九十七歲歿說もある。京都妙覺寺に葬る。位牌は武藏の池上本門寺に安置してある。

かのもとのぶ

狩野元信

名號　初名を四郎二郎といひ、後に大炊助と改めた。剃髮して永仙・玉川と號したが、世に古法眼と稱する。法名を善巧院通性日到といふ。塔銘には勇高院前式部卿法眼永仙越州元信日春大居士と書してある。

系統　狩野正信の長男で、狩野氏第二世の畫家である。

事蹟　後土御門天皇の文明八年八月九日山城國で生れた。四五歲の頃から畫を父正信に學び、遊戲の間にも筆を取つて、見る所の人物・鳥獸・草木・器物などを描き、周文・宗丹の風を慕ひ、天禀の畫才を發揮したので、世人は彼を奇兒と稱した。十歲の頃には將軍義政の近侍となり、畫技に巧なので寵遇を受けたが、義政の歿後は將軍義澄に仕へ、義澄の歿後は諸國の名山勝地を遊歷し、到る處の山水風物を描寫し、歲月を經て京都に歸つた。

雲萍雜志所載の逸話、「泉州堺の一國寺で、伏したり起きたりして自分の影を襖に映し、其の暗示によつて二十餘羽の鶴を描き、飄然として東國へ旅立ち、また繪の一枝を描き足す爲に、遙々箱根山から一國寺に歸つて來た」といふ話は、事の眞僞は別として、畫道に忠實な彼の遊歷中に起つたらしい事柄である。

宋元の畫風を發揮しようとした元信は、其の畫才を大和繪の土佐光信に認められ、光信の女の土佐光久（千代子）を娶つて、宋元畫と大和繪との二傾向を併合する契機を得たが、後には土佐家の後見人となつて繪所を預り、正五位越前守に叙任し、法眼となつたが、これは將軍義晴の命によるものである。元信は紫野の大德寺塔內に居たが、後に山城大原內二百石及び邸宅を賜はつたので、其處に轉住することにした。小川東新町德大寺町西であるといふ。其の附近に居住した彫工後藤家とも親交したが、後藤祐乘の家名が現はれたのも、彫刻にする獅子・龍の下繪を元信に仰ぎ、元信の妙趣を傳へたのによるといふ。祐乘の子孫も狩野の畫格に倣つて居る。

後柏原天皇の永正五年頃、策彥周良は元信の山水花鳥畫を持參して入明したが、明人鄒澤は之を見て歎賞し、「筆法は趙昌・馬遠の

知く、墨色は牧溪・玉澗に似たり。一草一木、また苟も放心する所なし。日本五百年來、曾て此の品あるを聞かず、若し夏士良の時に遭はゞ、必ず圖繪寶鑑中に列せん」といつた。更に鄭澤は策彦が醫國する際に、「吾、先生の畫彩を見るに、恰も趙昌・馬遠の如し。筆跡甚だ藪ぶべし。若し我が國に遊ぶを得ば、必ず先生の門下とならん」といふ意味の書を元信に送つた。其の書の終に、「正城鄭澤、狩野四郎二郎先生座下、正德五年仲春、奉書」とある。明國の正德五年は、我が國の永正七年に當る。

元信の畫風は、先づ小栗宗丹に出で、中頃から次第に變化した。卽ち山水畫は馬遠・夏珪・牧溪・玉澗・梁楷・子昭らの濃淡に通じた點があり、人物畫は馬遠・夏珪・梁楷・顏輝により、花鳥畫は趙昌・馬遠・舜舉らに學び、大和繪は藤原信實・土佐光信の法により、其の短を去り、長を取つて居る。彼の雪舟派は水墨を妙とし、土佐派は彩畫を妙としたが、獨り元信は彩・墨ともに美を盡し、和・漢を折衷し、之を稍々日本化した點に異彩がある。元信の畫は細密・滋潤・清秀で、山水・人物・花木は何れも妙趣を極め、殆ど入神の技である。筆致の雄渾勁拔なものもあるが、併し其の傑作は、多くは細致を極め、温雅典麗を特色として居る。

元信は正親町天皇の永祿二年十月六日、八十四歳（八十三歳・八十六歳發說あり）で歿したが、其の傑作は京都妙心寺に藏せられて居る。同寺塔頭靈雲院所藏の四十九幅は、彼が畫技の粹を盡した大作である。京都府東福庵所藏の瀟湘八景圖も名高い。蓋し狩野派の宗であつて、子孫は畫界に繁榮した。

かまくらごんごらう かげまさ
鎌倉權五郎景正

名號 平景正といふ。世に鎌倉權五郎と稱する。

系統 鎭守府將軍忠通の孫で、鎌倉權守景成の子である。

事蹟 後三年の役の時、年十六にして源義家に從ひ、金澤柵を攻め、衆に先んじて進んだ。時に敵の矢が景正の目に中つたが、景正は自ら其の矢を折り、己れを射た者を射殺し、曾を脫いで其の場に仆れた。

矢がなほ目に在つたので、三浦爲繼は足で其の面を踏んで、矢を拔いてやらうとした。景正は大いに怒り、瞋起して刀を拔き、まさに爲繼を刺さうとした。

爲繼は驚いて其の故を問ふと、景正は「命を鋒鏑に隕すは、則ち固より甘んずる所なり。生きて面を踏まる。汚辱また甚だしからずや。汝を刺して死するに如かず」と答へた。乃ち爲繼は跪づいて、矢を拔き取つてやつた。以て其の剛毅を知るべきである。景正の事は其の後詳かでない。

かまたびやうゑ
鎌田兵衛

名號 本名を鎌田正清といひ、また鎌田政家ともいひ、通稱を二郎といふ。

事蹟 相模の人で、鎌田通清の子である。源義朝に仕へ、勇敢を以て聞えた。保元の亂に義朝に從つて白河殿を圍み、兵を率ゐて源爲朝に當り、射て其の胄に中てた。爲朝は大いに怒り、首藤家末らの猛士二十八騎を率ゐて來り迫つた。正清は敵す可らざるを知り、衆を率ゐて之を避けたので、爲朝も敢て窮迫しなかつた。平治の亂の時には、源義平に從つて待賢門を守り、平重盛の來り攻むるに及び、防戰して之を退けた。併し戰遂に利あらず、義朝と共に關東に赴き、再擧を圖らうとし、尾張國野間に至り、縁翁平（長田）忠致の家に投じた。忠致が義朝を害した時、正清は偶々忠致と會飲し

たが、變を聞いて席を起つた。酒を行る者が拔刀して之を斬らうとしたので、正清は其の刀を奪つて奮鬪し、遂に忠致の子景致の爲に殺された。時に三十八歳である。

かみつけぬのかたな
上毛野形名

系統 上毛野氏は崇神天皇の皇子豐城入彥命に出て居る。豐城入彥命は東國を鎭めたが、其の曾孫御諸別王は、景行天皇の時に東國を治め、上毛野國造となり、子孫は各地に因つて氏を命じ、姓を賜ふものが多かつた。

事蹟 舒明天皇の九年三月、將軍に任ぜられて蝦夷を討つたが、却つて賊の爲に敗られ、走つて壘に入り、遂に賊に包圍された。時に軍兵は離散し、城中に在る者は極めて少數であつたので、形名は爲す所を知らず、將に暗に乘じて逃れようとしたが、形名の妻は勇略があり、卽ち酒を置いて夷を聚し、且つ自ら劍を帶び、婢妾數十人に弓弦をならさしめた。よつて形名は、兵を率ゐて進んだが、賊は壘中に尙ほ兵が多いと思つて、圍を脫いて去つた。於是、離散した兵が稍々集まり、遂に蝦夷を討平することが出來た。

かめやまてんのう
龜山天皇

名號 御名を恒仁親王といひ、法諱を金剛源といふ。

系統 後嵯峨天皇の第三皇子である。御母は西園寺實氏の女で、大宮院藤原姞子である。第九十代の天皇である。

事蹟 正嘉二年八月、後深草天皇の皇太弟となり、正元元年十二月、御年十一で卽位された。後嵯峨上皇が院に在つて政を聽かれた。天皇は英邁であらせられたから、深く後嵯峨上皇の愛を受けられた。また後嵯峨上皇は崩ずるに臨み、天皇の御子孫に永く皇統を繼がせたき旨を遺詔し、萬事鎌倉の成敗を仰がせられたので、皇兄後深草上皇の御子孫との間に、皇位繼承に關する爭が生ずるに至つた。天皇は在位十五年に及び、文永十一年の正月、後宇多天皇に位を讓り、院中で政を聽かれた。

（龜山天皇）

弘安四年の夏、蒙古來襲の際には、龜山上皇は大いに宸襟を惱まされ、親ら石清水宮に詣でて終夜祈禱し、從臣に命じて神樂を奏せしめられ、ついで春日・日吉の兩社に幸し、また勅使を遣つて寰筆の願文を伊勢神宮にさゝげ、御身を以て國難に代へんことを祈られた。正應二年に出家し、南禪寺に居られたので、世に禪林寺殿と號する。後二條天皇の嘉元三年九月十五日、聖壽五十七歳で崩ぜられた。山城國葛野郡嵯峨村龜山法華堂に葬る。「ごさがてんのう・後嵯峨天皇」、「ごふかくさてんのう・後深草天皇」の項を參照されたい。

がまふくんぺい
蒲生君平

名號 名を秀實・奥吾といふ。通稱を伊三郎といひ、字を君平・君藏と呼び、修靜庵と號した。

系統 下野國宇都宮の人で本姓は福田氏であるが、祖母の言に據り、蒲生氏鄕の裔である事を知り、自ら蒲生と改めた。

事蹟 幼少から氣慨があり

また學問を好んだが、或る時、祖母から蒲生氏郷の後裔である事を聞き、益々發奮して勉學した。江戸に遊んで山木北山に學んだが、長じて深く經世の志を抱き、常に人に語つて、「吾が生るゝや晩くして大化・大寶の盛世に逢はず、古を稽へ今を徵し、安に居りて危を思ひ、王室を尊びて名分を明かにし、諸侯を富ましめて國本を固うするは吾が志なり」と言ひ、書を著して其の意を述べた。

また君平は歴代山陵の荒廢を慨き、自ら近畿及び諸方の山河を跋渉し、山陵を拜して實地踏査に着手した。曾て大和に入つた時、郡奉行はこれを非とし、「草莽の處士として、山陵を調査するは、皇家を弄ぶものなり」と言つて咎めた。時に君平は、「煎餅屋は煎餅を燒くに百人一首の歌牌を模型にするに非ずや。中には天智天皇あり、持統天皇あり。煎餅屋を咎めずして何故に拙者を咎むるや」と言ひ、屈しないで山陵を調査し、其の荒廢を幕府に告げたが、併し顧みられなかつた。

偶々露艦が來寇して北邊が騒擾したので、不恤緯五編を著して海防の事を論じ、これを幕府に献じたが、有司はこれを譏し、「邊防は國家の大事にして、處士の言ふべき所に非ず」となし、君平を罪しようとしたが、時に大學頭林信敬は、かねて君平の人と爲りを知つて居たので、幕府に辯じて免免を請つてやつた。爾來、君平は悟る所があり、敢へて世に抗せず、閑居して書を讀み、先づ山陵志を編み、從來世に知られなかつた御陵を明瞭にし、更に職官志・神祇志・氏族志を編んで九志を完成しようとしたが、まだ果さないで、文化十七年七月、江戸で病歿した。時に四十六歳である。明治時代に至り、其の功を追賞して從四位を贈らる。

（蒲生君平）

君平は忠孝の心厚く、曾て京都に遊び、小澤蘆庵と親交したが、江戸へ下る時に蘆庵は別離の宴を張つた。君平が時刻に遲れて來たので、蘆庵が怪んで其の理由を問ふと、「途に等持院を過ぎ、足利尊氏の像を見て、扼腕禁ずる能はず、鞭つて數百に及ぶ、これが爲に遲る」と答へた。君平は江戸に住んで貧苦に慣み、假に按摩を業とし、夜、市中に出て笛を吹いたが、音調が拙劣で、招く者が稀であつた。往々招く者は君平を恥ぢて逃れ去つたといふ。或る日、門弟の一僧が君平を訪れ、其の憂色を見て理由を尋ねると、「數日食せざるが爲なり」と答へた。門弟は集まつて、米を買求めて炊いたが、偶々談話が外人來寇の事に及ぶと、君平は釜竈に指で形勢を畫示し、剪りに海防策を物語つてやまず、遂に飯の焦れるのも知らなかつた。以て其の人と爲りを知るべきである。高山彦九郎・林子平と併せて寛政の三奇士といふ。

かもまぶち 賀茂眞淵

名號 名を政成・政躰といふ。字を參四・政德といひ、後に衛士と改めた。眞淵と號し、家號を縣居と稱し、法名を玄珠院眞淵義體居士といふ。

系統 姓を岡部といひ、神魂神の孫鴨武津之身命の後裔である。遠江國敷知郡伊場村岡部新宮の禰宜定信の二男で、母は竹山氏、孫左衛門家茂の女である。

事蹟 元禄十年に生れたが二十七歳の時、濱松の驛長梅若三郎の養子となり、享保十八年三十七歳の時、京都に遊學して荷田春滿の門に入り、よく國史・國文を研究し、最も國文・和歌に長じ、遂に其の學派を傳へた。元文三年から岡部の姓に復し、寛保三年、江戸に出でて門弟を教養した。彼の門下で業をなした者は三百人を超えて居るが、其の中では藤原宇萬伎・村田春郷・楫取魚彦・橘千蔭・村田春海・本居宣長・荒木田久老らが最も名高い。中納言田安宗武は國學を好み、延享三年、眞淵を招聘して侍讀となしたが、寶暦十年十一月に職を辭し、家を養子定雄に讓り、明和六年十月三十日、七十三歳で歿した。江戸品川東海寺境内少林院に葬る。

（賀茂眞淵）

眞淵は最初漢學に志したが、遂に轉じて國學を修め、師春滿の道を繼いで國學を復興した。眞淵は常に人に語つて、「契冲、田を開き、先師、これを耕す、皆未だ功を畢らず」と言つたが、蓋し收穫を以て己の任としたのである。また當時の儒者は概ね漢學に醉ひ、往々國體を忘れ、荻生徂徠の樣に漢土を尊んで中華と稱し、自ら卑下して東夷と稱するものもあつたので、眞淵は其の名分を誤るを慨き、力めてこれを排斥した。眞淵はまた繪畫を能くし、故實の考證上、其の調度・供物などの圖を描いたといふ。後世の人は春滿・眞淵・宣長・篤胤（平田）を國學の四大家と稱する。眞淵の著書には萬葉考・冠辭考・祝詞考・源氏物語新釋・伊勢物語古意・古今集打聽などがある。

カラカラ Caracalla

事蹟 羅馬帝國衰亡期の皇帝である。西紀二一一年（我が神功皇后攝政の十一年）に即位したが、實弟ゲータを殺害して政權を專らにし、また歳入を增加する爲に、伊太利以外の屬領の人民に羅馬の市民權を與へたので、中央集權の側が漸く破壞されて來た。古代の羅馬人は入浴を好んだので、民意を迎へようとする皇帝は、多くは大規模の浴場を設けた。カラカラ帝の設けた浴場は、其の最も廣大なもので、千六百の浴席があり、浴室の外に圖書室・談話室・化粧室・游泳場・遊戯場・庭園などの設があり、頗る華美を盡したものであつたが、今に大理石造の遺跡の一部を存して居る。當時は、まさに羅馬帝政衰亡の時代で、暗君が相ついで政を失ひ、軍閥の横暴が甚だしく、恣に皇帝を弑殺して、内亂が絶えなかつたが、カラカラ帝も西紀二一七年（神功皇后攝政の十八年）に弑せられた。

かはかみのたける 川上梟帥

名號 一名を取石鹿文といふ。

系統 景行天皇の頃の熊襲の魁帥である。先に景行天皇は九州に親征し、熊襲を平げて大和に還幸されたが、それから十年を經ない中に、再び謀叛するに至つた。即ち天皇の二十七年八月、熊襲が邊境を侵して止まなかつたので、十月小碓尊を遣つて平定させられた。十一月小碓尊は熊襲の國に入り、地形及び事情を視察された。偶々梟帥は親族を集めて宴會を催ほしたが、解髮童女姿の小碓尊の容姿を愛で、眞の童女と思つて宴席に侍せしめた。小碓尊は夜更け

て酒醋なのを待ち、隠し持つた劍を取り出し、梟帥の胸を刺された。時に梟帥は暫く猶豫を請ひ、小碓尊の御名を問ふた。よつて、「吾れは是れ大足彦天皇（景行天皇の御諱）の御子日本童男なり」と答へられると、梟帥は啓して、「吾れは是れ、國の中の强力者なり、是を以て、當時の諸人、我が威力に勝たず、而して從はずといふ者なし。吾れ、多くの武力に遇ひしかども、未だ皇子の如き者あらず。是を以て、賤しき賤の陋しきを以て尊號を奉らむ。今より後、日本武皇子と號し給へ」と言つて絶命した。

川端玉章 かはばたぎよくしやう

事蹟 京都の人で、幼時、富豪三井家の丁稚となり、稍々長じて中島來章に畫道を學んだ。幕末に志を立てゝ江戸に出たけれども、畫運不振の爲に悲境に沈み、三井家に救ひを求め、深川別邸の番となつて生活した。時勢に鑑みて西洋畫を學んだが、愈々窮厄に迫つたので、眼鏡を持つて路傍に立ち、兒童に見せて一錢二錢の料を取り、それで米鹽を購つた事もある。明治二十三年に東京美術學校日本畫科教授となり、橋本雅邦と共に名聲が揚つたが、雅邦が

（川端玉章の筆蹟）

辭職してからは、獨り同校の巨頭となつて、前後二十五年間子弟の教養に盡瘁し、四十二年には小石川富坂に川端畫學校を私設し、子弟の爲に日本畫を授けた。彼は恬憺洒脫の人格者で、圓山派の正統を傳へ、西洋畫の長所を加味し、暢達爛熟の筆を揮つたが、大作・密畫よりも、一氣呵成の小品に長じ、氣韻の生動する者があつた。隨つて中年の授密な山水畫よりも、晩年の略畫に佳品が多い。大正二年二月十四日、七十二歳で歿した。田中賴璋・結城素明・平福百穗・福井江亭らは門人中の名高い人々である。玉章の遺作には、花賣翁圖・墨堤梅花圖・鵲鷸と秋草の屏風などがあり、何れも內外の博覽會に出陳したものである。また東京美術學校所藏の葡萄栗鼠圖・松溪圖、東京淺川眞盛寺本堂天井の天女圖・三井男爵家書院の襖繪などがある。

川村清雄 かはむらきよを

事蹟 開成所の畫學生となり、川上冬崖に繪畫を學んだ。明治三年三月、德川家から選ばれて米國に留學し、更に佛國に渡り、轉じて伊太利ヴェニスに入り、繪畫修業中に印刷局留學生となり、ヴェニス＝アカデミーの教師チート及びリッコ（西班牙人）に畫法を學び、十四年に歸朝して印刷局に在つたが、蕊薔薇圖の性格は官府の事に堪へず、民間に下つて日本人の洋畫を工夫しようと努め、意を日本風にし、材を西洋風にし、靜物花卉畫を巧に描いた。殊に柴田是眞の漆畫から思ひついて、好んで神代杉の木目ある板面・平皿をカンバスに代用し、日本趣味の花鳥畫を描き、俳趣の溢るゝものがあつたが、多く描かなかつたので、名聲を博せずにやんだ。併し我が國にヴェニス派の畫風を傳へた事は確である。昭和九年五月十六日、八十三歳で歿した。

河村瑞賢 かはむらずゐけん

系統 初名を七兵衛といひ後に十右衛門と改めた。薙髮して瑞軒と號し、晩年蓄髮して平太夫と稱した。

事蹟 家が貧であつた爲に車力を業とし、人に雇役された。併し資性敏捷で才幹があり、曾て發奮して江戸を發し、畿內に赴いて事を成さうと欲し、小田島屋に宿したが、宿主に誘められて江戸に歸つた。途中、品川を過ぎたが、時は正に七月盂蘭盆で、瓜や茄子が多く水面に流れて居た。瑞軒は之を拾つて鹽漬にし、自ら荷つて賣つたが、人々は競つて買ひ求めた。後にも屢々之を賣つたが、遂に下吏と識り、日傭長となつた。これから家宅を建て、商計を張つた。

偶々江戸に大火があり、材木が多く灰燼となつたが、瑞軒は未だ消えない中に、晝夜兼行して木曾に赴き、材木を盡く買收し、それに極印を押した。果して材木の價が騰貴したので、江戸の材木商は木曾に赴いたが、餘材がなかつたので、みな瑞軒から頒つて賣はねばならなかつた。瑞軒はこれによつて、數千金を獲て江戸に歸り、多くの家屋を作り、上下の土木業に從事し、數萬金を得て名聲があがつた。元祿十三年六月十六日、八十三歳で歿した。

瑞軒は地理に詳しく、運輸・航海・治水の術に長じた。大阪の安治川を治め、其の土砂で堤を築いたが、それを波除山（瑞軒山）といつた。また淀川・長柄川・中津川などを治し、永く氾濫の患を絶つた。また奥羽航海には、大抵一箇年餘を費したが、瑞軒の海路調査の功によつて、覆沒の患ひが去り、僅に三箇月で江戸に達するに至つたといふ。

閑院宮載仁親王 かんゐんのみやことひとしんわう

系統 閑院宮は東山天皇より出で、四親王家の一つで、「かんにんのみや」と訓むのを古實とする。はじめ世襲親王家は、伏見・有栖川・京極の三家に限り、其の嫡流の外は、一切の皇子は、（儒君皇太子を除き）悉く出家入道する制であつた。然るに將軍德川家宣は新井白石の建議に基づき、新宮家の創立を奏上して、皇子・皇女の御出家を止めようとした。中御門天皇は之を嘉納せられ、寶永七年八月、皇弟直仁親王（東山天皇の第三皇子秀宮）に閑院宮家を立てしめられた。爾來、世々相繼いで現今に至る。いま系次を示すと、直仁親王から典仁親王・孝仁親王・愛仁親王を經て載仁親王に及んで居る。

事蹟 大正十年、大正天皇の皇太子裕仁親王が、歐羅巴巡遊の途に就かせられた時、載仁親王は珍田捨己外十五名と共に供奉の重任を負ひ、香取・鹿島の二艦に乘り、三月三日に横濱を出發し、凡そ半歲の間、英・佛・白・獨・伊の諸國を巡り、各國の元首を訪ひ、親交を重ね、また歐羅巴諸國の文化及び世界大戰後の世相を視察し、同年九月三日に横濱に歸着された。

顏淵 がんえん

「こうし・孔子」の項を參照されたい。

韓國皇帝 かんこくくわうてい

「りせき・李拓」の項を參照されたい。

鑑眞 かんしん

系統 姓を淳于といひ、淳于髡の後裔である。

事蹟 唐の揚州江陽縣の人で、律宗の開祖である。幼時から俊敏であつたが、十四歲の時に僧侶となり、大雲寺の智滿に就いて薙髮した。唐の中宗の神龍元年（文武天皇の慶雲二年）に、菩薩戒を道岸律師に受け、ついで長安の實際寺に入つて具足戒を受けた。これから長安・洛陽の間に遊んで三藏の敎法を學び、江淮の間に遊歷して戒律を說いた。爾來、大律疏及

び律抄を講ずること十數回、其の他の講席は殆ど算無く、寺院を建立すること八十餘、一切經を寫すこと三部一萬卷、人を度すること四萬餘人に及び、門人の多いことは當代第一であつた。

聖武天皇の天平五年、我が國の榮睿・普照の二僧は、勅を奉じて入唐し、鑑眞を揚州の大明寺に訪ひ、東渡を懇請したが、鑑眞は大いに喜んで之に應じ、徒屬八十餘人と共に來朝の志を起した。爾來旅裝を整へる事五回に及んだが、或は海上暴風の爲に船が進まず、或は唐人が鑑眞を惜んで出發を止めたりしたので、東渡の志を遂げずに十一年を送り、其の間に老年に達し、且つ眼疾に罹つて一盲僧となつて居た。

孝謙天皇の天平勝寶五年（唐の玄宗の天寶十二年）に、偶々我が遣唐大使藤原清河は唐で此の話を聞き、遂に鑑眞を伴つて歸つた。清河の船は海上暴風の爲に安南に漂流したけれども、鑑眞一行の船は六年正月太宰府に到着し、四月に入京したが、此の時に佛舍利三十粒・阿育王塔樣支提・止觀・玄義・文句・菩提子三斗・晉王右軍眞行書一卷を献じた。天皇は大いに喜ばれ、勅して東大寺に置き、大いに優遇された。

やがて戒壇を大佛の前に建て、先づ聖武上皇・光明皇后が菩薩戒を受けられ、續いて天皇・皇太子・公卿以下受戒する者が四百三十餘人に及んだ。ついで大佛殿の西に戒壇院を起し、また下野の藥師寺・筑紫の觀音寺にも之を設け、以て東西の受戒者の便に供へた。鑑眞は八年に大僧都に任ぜられ、唐招提寺を創建して律を學ぶ者に便し、此の寺にも戒壇を設けた。蓋し唐招提寺の建築は、鑑眞に從つて歸化したペルシヤ人如寶の主宰によつて出來たものである。鑑眞は移つて唐招提寺に居たが、淳仁天皇の天平寶字二年、老を以て大僧都を辭したので、更に尊んで大和尚の號を授けられた。七年五月六日、七十七歳で入寂した。鑑眞は實に日本律宗の初祖といふべきである。

くわんむてんのう
桓武天皇

名號 御名を山部親王といふ。また日本根子皇珍天皇・柏原天皇とも稱する。

系統 光仁天皇の庶長子で御母を高野新笠姫といふ。第五十代の天皇である。

事蹟 藤原百川の推擧により、光仁天皇の皇太子となり、天應元年四月に卽位された。天皇は平城京の規模が小で、大帝都たるに適せず、また情弊の充滿したのを見て、人心を一新しようと欲し、一時山城國乙訓郡長岡に遷されたが、更に和氣清麻呂の建議に基づき、延曆十三年に同國葛野郡宇太村（今の京都）に遷し、平安京と稱せられた。

この都は平城京に倣ひ、更に其の規模を大にしたもので、中央に朱雀大路があつて、京を左京・右京に分ち、其の正北に大內裏があり、正南に羅生門があり、大內裏の中央から少しく東北に位して皇居があり、諸官省は整然として其の周圍をめぐつて居た。平安遷都から明治二年まで千七十五年間、歷代の天皇は概ね平安京を都とされた。遷都後、鳥羽天皇の御代に至るまで、凡そ四百年間は政令が概ねこゝから出たので、この間を平安時代といふ。

（桓武天皇）

天皇は深く東夷の叛服を憂へられ、これを討平するの志があり、延曆四年に紀古佐美を征東大使として出師されたけれども、其の功がなかつたから、更に延曆十六年十一月、坂上田村麻呂（阿知使主の子孫）を征夷大將軍に任じて、これを征討させられた。田村麻呂は智勇があり、深く蝦夷の地に攻め入り、其の根據地を覆へして、膽澤城（今の陸中）を築き、ここに鎭守府を移し、蝦夷の地を全く王化に服することが出來た。「さかのうへのたむらまろ・坂上田村麻呂」の頃を參照されたい。

天皇は在位二十五年にして、延曆二十五年三月十七日、聖壽七十歳で崩ぜられた。山城國紀伊郡柏原の陵に葬る。官幣大社平安神宮は明治二十八年の鎭座で、桓武天皇を奉祀したものである。

き

きぐちこへい
木口小平

系統 父を木口久太といひ母をひさのといふ。

事蹟 明治五年八月八日、岡山縣川上郡成羽村大字成羽新山の農家に生れた。十五年、居村の成美小學校に入學し、成績優秀であつたが、家計の都合から中途で退學し、父を授けて家業に從ひ、居村の模範青年となり、衆に推されて青年組合の組長になつたこともある。また十九歳前後の頃には隣村の小泉鑛山の坑夫となり、日々採鑛に從つたが、激しい勞働の間にあつて、尙ほ修養を忘らず、鑛山から歸る途中、必ず近所の良鑛寺を訪れ、寺僧に敎を受け、家に歸つて後も獨學自習に努め、深更なほ孤燈に對することが屢々あつたといふ。

明治二十五年、徵兵檢査を受けて合格し、入營の日には未明に床を拂ひ、齊戒沐浴して身を淸め、祖先の墓に詣で、氏神に參詣し、兩親及び親故者に別を告げ、多くの村人に見送られ、雄々しい軍人として郷關を發し、廣島第五師團歩兵二十一聯隊第十二中隊に入つた。其の中隊長は陸軍歩兵大尉松崎直臣であつた。軍隊敎育の第一期を終ると、小平は選ばれて喇叭手となり、中隊長に直屬することになつた。小平は諸演習に於て、敏捷、奇智の才の認むべきものはなかつたが、沈着、剛健、膽力は他兵に抽きんでて居り、また平常の行狀は極めて方正であつて、勤務に甚だ勉勵であつた。

明治二十七年、日淸兩國の國交は急を告げ、東學黨の蜂起から、淸國は屬國の難を救ふと稱して、兵を韓國に送つて我を脅威した。我が廟議は忽ち決し、第五師團から大島混成旅團を編成して朝鮮に派遣する事になつた。六月二十四日、小平も其の一隊に加はつて宇品に着き、直ちに運送船に搭乘して出發し、軍艦浪速（艦長海軍大佐東鄕平八郎）の護衞を受けて仁川港に着し、二十八日の黃昏に上陸した。

大島混成旅團は、七月二十八日の夜陰に乘じ、成歡附近で淸兵の幕營地を攻擊し始めた。偶々滿潮の爲に進路の河川・沼澤は多く氾濫し、道路と水田とを辨別することが出來ず、行進が極めて困難であつた。松崎大尉以下二十餘名が此の低地を超えたのは、二十九日の午前三時であつたが、雨模樣の曇天を衝き流した樣な暗闇の間から、百餘名の敵兵が不意に猛射したので、一隊は直ちに應戰したが、小平は松崎大尉の命を受け、敵前數十歩の處に在つて少しも恐れず、滿身の力をこめて、勇ましく進擊の譜を吹き始めた。其の鋭い號音に、我が將兵は喊聲を揚げて敵に突擊した。偶々一彈は小平の胸部を貫通し、氣管から溢れる鮮血は、進擊の譜と共に、喇叭から吹き出た。夜が明けてから屍體を檢べて見ると、左手に銃を握り、右手で喇叭を口に當てたまゝ、斃れて居たのである。これを見て感激しない者はなかつた。

小平の壯烈な最期は、世人に非常な感激を與へた。人々は表忠碑を建て、銅像を設け、軍歌を作つて、其の忠義の精神を後世に傳へた。彼の故郷成羽町天神ケ丘には「壯烈喇叭手木口小平之碑」があり、朝鮮の成歡公園にも「陸軍喇叭手木口小平碑」がある。また小平の屬して居た歩兵第二十一聯隊は、今は島根縣濱田に移されて居るが、其の營門の側には小平の銅像が建設されて居る。

きくちたけしげ
菊池武重

名號 菊池二郎と稱する。

系統 菊池武時（寂阿）の長子である。

事蹟 肥後守となり、後に左京太夫となつた。元弘三年、父武時が北條英時と博多に交戰した時には、武重は父の命を受けて軍中から歸國し、再擧の計をなした。建武二年には新田義貞に從つて東下し、足利直義と箱根に戰ひ、先登して敵を破つた。官軍が竹下に敗るゝに及び、全軍が敗戰となつたが、義貞は武重の爲に西還することが出來た。延元元年、足利尊氏が闕下を犯すに及んで、武重は義貞に從つて大渡に戰つて利あらず、車駕を護つて延暦寺に往つた。また脇屋義助と共に船坂山を攻めて功があつたが、同年十月、後醍醐天皇が尊氏に給かれて入京された時には、武重は拘囚の身となつた。やがて守者の隙を窺つて遁れ歸り、再び兵を集めたが、同二年一色範氏が來り侵したので、武重は阿蘇大宮司宇治惟澄と協力し、範氏を大塚原に破り、更に合志城に闘んで勝ち、九州の義軍を統帥したが、其の晩年は詳かでない。

武重の護法立身願文には、「一、武重弓箭の家に生れて、朝家に仕ふる身たる間、天道に應じて正直の理を以て家の名を揚げ、朝恩に浴して身を立せんことは、三寶の御免されを蒙る可く候、其の外、私の名聞、己の欲の爲に、義を忘れ、恥を顧みず、當世に諛へる武士の心を永く離る可く候。一、己の欲の爲め、親疎に依りて五常の道に背く可くは、世にある可らず候、それも愚闇の身にて候間、正理を不レ辨して誤り候はん時は、御諫に應じて、やがて正路に本づく可く候。一、己前の二箇條の道を守り候はん事は、當世雜儀の事に候と雖も、釋迦牟尼佛の正法を護持し奉り、其の志至誠に存候間、條々の願に若し誤り犯し候罪過に依りて、天罰を受け候と雖も、末代當三正法破滅之時、たとひ一旦一夜にても正法を護持し奉らん信心を、此の身に起し候功德を隨喜し候に依りて、先づ在家正直の願を立て候なり、云々」とある。以て菊池氏の忠烈な家風を知るべきである。

武重には子がなかつたが、弟の武茂・武敏・武士・武光らは、何れも西海に於ける義軍の中堅であつた。

きくちたけとき
菊池武時

名號 通稱を二郎といひ、薙髮して寂阿といふ。

系統 菊池武房の孫である。菊池隆盛の二男で、兄菊池時隆の死後に其の家を繼いだ。

事蹟 肥後菊池郡の豪族である。元弘三年、護良親王の令旨を奉じたが、後醍醐天皇が隱岐を脱し、船上山に行幸された時には、筑前の少貳貞經、豐後の大友貞宗らと勤王に志し、密使を船上山の行在所に遣つて奏上した。天皇はこれを嘉賞し、錦旗を賜はつた。

時に鎭西探題北條英時は此の事を聞き、武時を博多に召したが、武時は謀の漏れたことを覺り、貞經・貞宗に謀して兵を擧げようとした。時に貞宗は大勢を觀望して答へず、貞經も官軍の屢々京都で敗れる話を聞いて安んぜず、遂に武時の密使を斬り、其の首を英時に送つた。

武時は大いに憤り、手兵百五十

（菊池神社）

騎を率ゐ、英時を博多の探題の館に圍んで奮戰した。英時は敗れて將に自殺しようとしたが、偶々貞經・貞宗の援兵が來たので、漸く危急を脱した。武時は勝利の期し難い事を知り、長子菊池武重に兵五十を分ち授け、本國に歸つて再擧を謀らせ、自ら餘兵を督し、奮戰して陣頭に斃れたが、時に元弘三年三月十三日で、年四十四歳であつた。肥後の隈府町にある別格官幣社菊池神社は武時を主神とし、其の一族を祀るものである。

きくちたけとし
菊池武敏

系統 菊池武時の第二子で、菊池武重の弟である。

事蹟 掃部助であつたが元弘中義軍を起して遙に官軍に應じ、父武時と共に夙に王事に盡瘁した。延元元年二月、足利尊氏が叛旗を翻へし・新田義貞・北畠顯家の爲に破られ、足利直義と共に九州に逃走した時、九州の諸豪族の尊氏に從ふ者が多かつた。殊に少貳貞經は、其の子少貳頼尚を遣つて尊氏兄弟を迎へさせた。武敏はこれを偵知し、兵三千を發して赤木渡に要擊し、其の後軍を鏖殺した。ついで貞經を太宰府に襲ひ、悉く其の兵器を燒いた。貞經は太宰府を出て内山に陣したので、武敏はこれを包圍すること數日、貞經は遂に自殺した。蓋し貞經は入道して妙惠といひ、曾て北條英時と協力し、武敏の父武時を討死させた人で、玆に武敏の爲に讐を報ぜられるに至つた。

武敏は勝に乘じて、尊氏を筑前に攻めた。延元元年三月二日、足利軍と多々良濱に會戰したが、菊池軍は箱崎を經て博多の須濱まで退いた。武敏は叱咤して軍氣を鼓舞し、自ら眞先に立つて奮戰し、忽ち頽勢を挽回して、全軍が攻勢に轉じたので、足利軍は支へ難く、直義は遣使して尊氏に救を求めたが、偶々松浦氏の一軍が足利軍を援助したので、菊池軍は再び崩れ立ち、武敏は負傷して本國に歸つた。直義は太宰府に入り、尊氏は箱崎に陣したが、九州の將士の足利氏に屬する者が多かつた。

後に武敏は再び兵を擧げ、延元二年、兄の武重と寺尾に據り、阿蘇大宮司宇治惟澄と協力し、賊將一色範氏を大塚原に迎へ擊ち、また之を合志城に包圍して、屢々勝利を得たが、更に仁木義長らが來攻するに及んで、遂に支へる事が出來ず、僅に山に匿れて免れた。尊氏が九州を去るに及び、また兵を起して各地で戰つたが、其の歿年は詳かでない。大正三年十一月に從三位を追贈された。

きくちたけふさ
菊池武房

系統 菊池隆泰の子である。

事蹟 肥後菊池郡の豪族である。後宇多天皇の文永十一年十月、元は船艦九百艘・軍兵四萬を以て入寇し、先づ對馬を侵して守護代宗助國を斃し、壹岐を侵して

平景隆を斃し、進んで博多の浦に迫り、鐵砲を放つて我が軍を苦しめた。時に隆泰・武房父子は、兵を率ゐて博多に出征した。武房は一族の赤星有隆・菊池康成・西郷隆政を從へ、八百餘騎を率ゐて博多灣岸に進擊し、竹崎季長と先陣を爭ひ、力戰して敵軍を擊破したが、敵軍の勢が盛んで、進んで今津・佐原・百道原・赤坂に來たので、赤坂にこれを拒ぎ、多くの部下を失つた。併し武房は手づから數人を斬り、有隆は賊魁の首を斬り、康成は驍勇で創を被りながら奮戰した。偶々大風が起り、敵艦は多く離破し、殘兵は夜に乘じて去つた。

文永の役が終つてから七年目に卽ち弘安四年の五月に、元は東路・江南の兩軍を發し、先づ壱岐を犯し、進んで筑前に迫つた。時に武房は有隆と共に千餘騎を以て敵を破り、且つ賊魁を捕へ、彼の河野通有・竹崎季長・少貳景資らと共に、大いに武名をあげた。偶々七月晦日の夜から暴風が起つて、四千餘艘の敵艦が多く離船したので、敵は肥前の鷹島に據り、元將范文虎は身を以て逃れた。武房は大正四年十一月、大正天皇卽位の際に從三位を贈られた。

きくちたけみつ
菊池武光

名號 豐田十郎といひ、後に家を繼いで菊池に改めた。

系統 菊池武時の第八子で菊池武重の弟である。

事蹟 最初、兄の武重は、弟の菊池武士を養子としたが、武士が早く家務を辭したので、武光が入つて本家を襲ぎ、やがて肥後守となつた。

これよりさき、延元三年九月、後醍醐天皇は皇子懐良親王を征西大將軍となし、出でて四國・九州を鎭撫させられたが、四年三月、武光は親王を迎へて肥後の八代城に入れ、心を傾けて補翼した。興國年代に入り、大友氏時・少貳頼尙と連年兵を構へ、屢々これを破つた。正平十三年、登氏は一色直氏を九州探題にしたが、武光は直氏及び其の弟一色範氏を筑前に攻め破つたので、名聲が大いに揚り、九州の諸豪族が多く來附した。ついで兵五千を率ゐて、畠山國久を日向の六笠城に擊ち、また國久の子畠山重隆を三股城に攻め破つたので、官軍の勢が日に振つた。

武光は懷後の大友氏時を討たうとし、阿蘇惟時・少貳頼尙と兵を合せ、自ら兵五千騎を率ゐて懷後に向つた。時に頼尙は俄かに變心し、太宰府に據つて反旗を翻へし、惟時もまた小國に據り、武光の後方を遮らうとした。よつて武光は軍を回へし、先づ惟時を破つて退け、ついで頼尙を討たうとした。

乃ち武光は、正平十四年七月、懷良親王を奉じ、兵八千騎を率ゐて頼尙を太宰府に襲はうとした。頼尙はこれを聞き、少貳忠資・少貳頼泰らと、兵六萬騎を率ゐて進み、武光と筑後川を隔てゝ對陣した。七月十九日、武光は精兵五千騎を督して川を渡り、急に頼尙の陣を突いた。頼尙は戰はないで、一里程退いて大原に陣した。武光は追擊して軍を大原に進めると、敵は既に徑路を斷して居り、また前面には泥濘があつて、一歩も進むことが出來なかつた。よつて對陣したまゝ戰はず、日を經ること月餘に及んだ。時に武光は子菊池武政と一策を謀じ、八月十日の夜、精兵七千騎を三隊に分ち、筑後川に沿ひ、水際に乘じて進ませ、同時に壯士三百を選び、間道から敵の背後を突かせ、喊聲を揚げて亂射させた。頼尙の軍は大いに震駭し、隊伍が亂れて同志討をなし、死者が枕を並べた。武政は鶏鳴と共に一千騎を率ゐて先發し、忠資及び副將四人を斬つた。ついで武政の甥菊池武信も大いに奮戰し、頼泰を生擒にし、首を獲ること七百餘級に及んだ。ついで武光は三千騎を率ゐ、懷良親王と共に頼尙の中堅を突いたが、敵の亂矢が雨の樣で、親王は身に三創を被り、北畠顯信は斃れ、戰死者が甚だ多かつたが、武光は衆に先立つて奮戰したので、頼尙は逃れて太宰府に退いた。武光の軍は戰死者千八百名であつたが、頼尙の軍は三千二百名に餘つた。世にこれを筑後川の戰といふ。

武光は頼尙を追擊せず、一旦兵を率ゐて肥後に歸り、翌十五年、親王と共に筑前に進み、博多に陣し、兵を分つて松浦黨を香椎に破つた。文中二年十月に發した。肥後の隈府町にある別格官幣社菊池神社は、菊池一族を祀るものである。

きくちときたか
菊池時隆

系統 姓は藤原で、太宰權帥藤原隆家の裔太宰少監則隆が、延久二年、肥後菊池郡に居したので、菊池を氏とする樣になつた。則隆から經隆・經頼・經宗・經直・隆直・隆定・能隆・隆泰・武房・時隆・武時・武重・武士・武光に及んで居る。

事蹟 時隆の父武房は、元寇の時に博多に奮戰して殊功を樹てた。時隆は叔父武本と地を爭ひ、交刺して死んだので、國史上特記すべき事蹟はないが、其の子武時は、元弘年間に後醍醐天皇の詔を奉じて北條英時を博多に討ち、力戰して節に殉した。

きくちようさい
菊池容齋

名號 名を武保といひ、通稱を最平といひ、號を容齋といふ。

系統 菊池武長の子である。

事蹟 德川幕府の家人で、有名な歴史畫家である。幼時から文學に志し、深く繪畫を好んだが、幕府の先手與力を辭して畫道に就き、十八歳の時に狩野派の畫家高田圓霞に學んだ。一時奇困の爲に畫事を廢しようとしたが、幕臣久貝因幡守は彼の畫才を認め、出資して勉勵させた。圓霞は彼に敎へて、「博く古法を研究し、精しくを選び、一家に泥む勿れ」と言つたので、流派の如何を問はず、先哲の遺蹟は悉く模寫修學し、而も古法に拘泥せず、屢々畫風を變へて新開展を試み、遂に一派を爲した。

（菊池容齋）

容齋の描く處は、有職衣冠の人物、南朝の武者及び官女・遊女、雅俗の人物・山水・草木・鳥獸・蟲魚・神社・佛閣などの畫圖で、みな眞に迫る趣がある。山水畫は深淺・遠近・高低の位地が全備して、幅中に數里の眺望がある。樹木・人家の類は、恰も設立した樣で、西洋の油畫に似て居る。而して其の筆意は、畫界の三傑である狩野探幽・圓山應擧・谷文晁の雅趣を拔き、圖は有職古土佐の風に倣つて新意を出した。師風を墨守する當代畫界の流弊を打破し、自由研究の氣運を開いたもので、或る意味に於て、畫界に警鐘を鳴らしたものである。

また容齋は、我が國に名臣節婦などを描いたものゝ無いのを遺憾とし、遂に「前賢故實」を著した。これは歴史畫の模範であつて、彼が祕庫の圖書を閲覽したり、或は近畿の遺物を探索したりして、古來の明君・賢輔・忠臣・烈士五百餘名の肖像を描き、それに小傳を附したもので、十七年間の歳月を費し、四十八歳の時に完成したも

のである。増上寺の高僧福田行誡の助力により、加藤金兵衛の喜捨金によつて出版されたが、版刻が成つてから天覽に供し、孝明天皇の叡感が深く、和氣清麻呂に神號を追贈されたのに就いても、太書が與つて力あつたといふ。

容齋は久貝因幡守に贈る爲に阿房宮圖・遡媛熊に當る圖・呂后人彘を作る圖を描いた。淺草觀音堂所藏堀川夜討圖扁額は、夙に人口に膾炙して居るが、併し渾熟の域に達しない時代の作である。東京山下家所藏元鑑覆沒圖は、彼が得意の畫題を描いたものである。また福田行誡の需に應じて、五百羅漢十五幅を描いたが、これは畢世の大作であつて、東京淺川本誓寺所藏であり、また同寺所藏の土佐日記繪卷も、晩年の傑作といはれて居る。明治天皇は容齋の繪畫を賞められ、明治八年一月二日、彼に日本畫士の稱を允された。

容齋は文筆にも達し、前賢故實の外に詩集・歌集及び枕紙と稱する隨筆物がある。十一年六月十六日、九十一歳で歿した。東京谷中天王寺の共葬墓地に葬る。

きたがはうたまろ
喜多川歌麿

名號 幼名を小川市太郎といふ。通稱を勇助といひ、號を燕岱齋・柴乃屋といつた。

事蹟 浮世繪師である。寶曆三年江戸に生れた。少壯の頃には通油町の繪草紙舗蔦屋重三郎の家に寄食した事もある。最初、畫事を狩野周信の門人鳥山石燕に學んだが、石燕は浮世繪に堪能であつたから、歌麿は其の筆技を體得し、別に一格を創意して、專ら浮世繪に力を盡した。

當時は錦繪の精華を發しようとした時代で、俳優の錦繪が盛に流行し、俳優の外には畫題がないものゝ樣に考へ、專ら人氣に媚びる事を勉めたが、殊に歌川豐國は其の妙手で、名聲嘖々として歌麿を壓して居た。

然るに天性剛强な歌麿は、卑俗な當世の流行に背き、終身、歌舞伎俳優の似顔繪を描かず、一定の見識の下に、時樣の風俗を描寫したが、其の美人畫は世人の歎賞を博し、豐國も及ぶことが出來なかつた。長崎在留の支那人は、當時、歌麿の名聲を聞いて、彼の錦繪數千枚を買求め、支那に持ち歸つたことがある。

歌麿の描いた時俗の美人畫は、錦繪の精華を盡したもので、彼獨得の境地である。卽ち彼の描いた人物畫は面長で、丈高で、風采がしなやかで、優しい事は前後無比である。併し同時に寫實を離れた一種の病的典型を後人に遺した罪は免れない。

歌麿の肉筆畫では東京高嶺秀夫氏所藏達磨に遊女の圖が聞えて居る。刊行の繪本は可なり多いが、主なものは江戸雀・詞の花・蟲ゑらみ・汐千のつと・和歌夷・百喚・彙愉面・花の雲・銀世界・二十四孝・美人競・筆の鞘・百千鳥・駿河舞・數寄屋釜・吉原年中行事の類である。

吉原年中行事は名聲嘖々たるもので、撰文は十返舍一九で、挿繪は歌麿であるが、兩人の間に自負心を生じたのは滑稽である。卽ち一九は、「斯樣に好評を博したのは俺の文章の巧妙な爲である」といひ、歌麿は、「否々、それは俺の挿繪が巧いからである」といひ、互に爭ふに至つたが、調停する者があつて和解した。

ついで文化元年五月、太閤が美童妾の石田三成の手を握つた樣、長柄の侍女が袖をおうた姿、甲冑姿の加藤清正が朝鮮妓婦に三絃を彈かせて酒宴して居る光景などを描き、これを錦繪にして出版したが、偶々官憲の咎めにあひ、直ちに呼び出されて吟味中入牢を命ぜられ、出牢の上手鎖の刑に處せられたが、これが爲に大いに氣力を害し、翌二年五月二日、五十三歳で歿した。

きたしらかはのみやよしひさしんわう
北白川宮能久親王

名號 曾て輪王寺宮公現法親王といふ。

系統 北白川宮家は、明治三年十一月、伏見宮邦家親王の王子智成親王が、北白川宮を稱せられたのに始まる。能久親王は伏見宮邦家親王の第九王子で、はじめ江戸寛永寺の輪王寺宮家に入り、僧となつて公現と稱せられたが、偶々彰義隊事件に關係して蟄居を命ぜられ、後に北白川宮家を繼いで、能久親王と稱せられた。

事蹟 德川慶喜は大政を奉還し、明治元年正月、鳥羽・伏見の戰後、江戸の寛永寺に屛居して恭順の意を表したが、同年四月、伴門五郎・太多敏三郎らは、德川家の舊恩を思ふの餘り、輪王寺宮公現法親王を奉じて、彰義隊を組織し、上野に據つて兵を擧げたが、諸藩・諸藩の兵が加はり、其の數が三千に餘つた。征東大總督有栖川宮熾仁親王は、市内の紛擾を避けて之を攻めず、參謀西鄕隆盛をして解散を命ぜしめられたけれども、これに應じなかつたので、軍務局判事大村益次郎は剿滅を主張し、同年五月、諸藩の兵を遣つて之を陷れたが、公現法親王は會津に走られた。

會津藩主松平容保は、若松城に據つて江戸幕府の恢復を謀り、奥羽・越後の諸藩を聯合し、當時白石城（陸前の南）に在つた公現法親王を奉じて軍事總督に戴き、同年七月、公議府を白石城に設け、奥羽北越同盟軍政總督府の名を以て討薩の檄を發し、大いに官軍に抗したが、同年九月に若松城が陷り、奥羽・越後が平定するに及んで、公現法親王は幽居を命ぜられ、後に北白川宮家を繼ぎ、同時に軍籍に入り、種々の要職に就かれて、大いに我が陸軍の進歩發達に盡瘁された。

既にして日清戰爭が起り、明治二十八年四月の下關條約により、臺灣島は我が有に歸したが、然るに臺灣に在る清國將士は、臺灣が日本の有になつたのを憤慨し、相議して共和政府を建て、臺灣の獨立國なる旨を宣言し、巡撫唐景崧を推して大統領となし、執政官を置き議會を設け、國旗を制定し、紙幣・郵券を發行し、其の旨を島民及び列國に布告した。

近衞師團長であつた能久親王は、臺灣征討の大命を拜し、同師團の兵を率ゐて進發し、途中、琉球で新任臺灣總督海軍大將樺山資紀と合し、共に臺灣に進み、三貂角に上陸されたが、時に明治二十八年五月二十九日である。當時、能久親王は痔を病んで居られたが、砂上に天幕を張つて椅子により、雨と蚊に襲はれ、從者の勸むる儘に甘藷を食べて夜を明された。翌日から軍を進め、士卒と雜儀を共にされたが、我が軍は六月三日基隆を占領して唐景崧を厦門に走らせ、ついで炎暑と疫病とを冒して臺北・淡水・新竹・苗栗・彰化・嘉義などを屠り、八月に悉く北部地方を平定し、更に臺南に進擊して、守將劉永福の本據を突かうとした。偶々新任臺灣副總督陸軍中將高島鞆之助は、兵を率ゐて臺灣南端に上陸し、次第に北上して來たので、我が軍は南北から臺南を夾擊したが、劉永福は密に厦門に遁れ、十月二十二日臺南は陷り、臺灣は悉く平定した。

然るに能久親王は、十月十七日から風土病マラリヤに罹られ、三十九度五分の高熱をおして、臺灣轎に乘つて指揮されたが、十月二十二日臺南に入られてから、病が革まつて遂に薨ぜられた。時に明治二十八年十月二十八日で、御年四十九歳である。能久親王は高貴の御身を以て勞を士卒と共にし、久しく瘴烟瘴霧の中に馳驅されたが、遂に病の爲に去られた。明治天皇は痛く惜まれ、國民もまた哀悼してやまず、十一月十一日、國

葬の儀を以て東京豐島岡に葬る。明治三十三年、臺北市大宮町に臺灣神社が創建され、大國主命・大巳貴命・少名彦命と共に、能久親王の英靈を祀る事になり、翌三十四年十月、故親王妃殿下及び勅使の渡臺があり、同月二十七日に鎭座式を擧げられた。官幣大社臺灣神社はこれである。

きたばたけあきいへ
北畠顯家

系統 北畠親房の長子である。

事蹟 後醍醐天皇の元應・嘉曆の間に、從五位上兼侍從左近衛少將に異進した。元弘三年、參議に任ぜられ、左近衛中將となつたが、年僅か十四歲である。此の年の八月に陸奧守と爲り、十月、義良親王を奉じて奧羽に赴き、府を多賀に開き、陸奧・出羽を鎭撫したが、父親房も奧羽に下つて顯家を補けたので、東國の將士の服する者が次第に多くなつた。殊に結城宗廣は、心を傾けて顯家を補けたので、數箇月にして奧羽を服することが出來た。建武元年、功を以て從二位に叙し、二年、鎭守府將軍を兼ねた。

既にして足利尊氏は、北條時行を鎌倉に討つたのを機として、遂に叛旗を翻へし、建武二年十月、義貞を除くを名として西上した。天皇は大いに怒り、十一月、尊良親王を征夷大將軍とし、義貞・顯家に命じて尊氏を討たせられた。十二月、顯家は尊氏を討たうとして、急いで陸奧を發して鎌倉に進んだが、尊氏は義貞を竹下・箱根に破り、既に西上の途にあつたので、顯家は晝夜兼行して其の後を追ひ、近江に入つて諸城を攻め、ついで義貞・正成・長年らと協力して、尊氏兄弟を紀河原に破つて九州に走らし、京都を恢復したので、天皇は喜んで比叡山から還幸され、顯家は右衞門督檢非違使別當を兼ねた。時に延元元年正月である。

時に尊氏の黨が奧羽に蜂起したので、顯家は三月義良親王を奉じて再び陸奧に赴き、常陸・下野の二國を併管し、上書して鎭守府大將軍と爲り、ついで權中納言を拜した。間もなく尊氏兄弟は九州・四國・中國の新銳を率ゐて京都を犯し、光明院を擁立したので、天皇は吉野に潛幸された。時に延元元年十二月である。此の時、天皇は江戸忠重を陸奧に遣り、勅書を顯家に與へ、急いで上京を命ぜられた。忠重は二年正月、靈山城（阿武隈山脈の北部にある靈山の西麓）に着いたが、當時、未だ陸奧・常陸・下野の賊軍が盛んであつたから、顯家は先づ之を征し、九月、義良親王を奉じ、結城宗廣・伊達行朝と共に宇都宮に至り、南下して足利義詮を利根河畔に破つたが、偶々新田義興（德壽丸）・北條時行の來援があり、鎌倉を取つて威を東國に振つた。

三年正月、鎌倉を發して遠江で宗良親王（尊澄法親王）と會し、共に美濃に進んだ。尊氏は高師泰・高師冬を遣つて拒がせたが、顯家は賊將上杉憲顯・桃井直常と青野原・墨股に戰ひ、二月、伊勢を經て大和の奈良に入り、桃井直常と戰つて敗れ、三月、高師直と攝津の阿部野に戰つて破れ、五月、更に和泉の堺浦に轉戰して破れ、吉野に走らうとして石津で敗死した。時に二十一歲である。天皇は痛惜して、從一位右大臣を贈られた。福島縣伊達郡靈山村にある別格官幣社靈山神社は、親房・義顯らを合祀したものである。

きたばたけあきのぶ
北畠顯信

名號 春日の地に住んだので、春日少將といふ。

系統 北畠親房の子である。

事蹟 延元元年、後醍醐天皇が花山院に在られた時、兵を伊勢に起し、密に興復を圖らうと奏請した。同年十二月、天皇は吉野に遷幸された。同年十二月、天皇は吉野の顯家と協力し、土岐頼遠を美濃の青野原に破り、男山に據つたが、高師直が來り攻めたので、相持すること數箇月に及んだ。天皇は兵を遣つて救はせられたが、既に城中は糧食が盡き、且つ敵兵が急に擊つたので、顯信は敗れて河内に走つた。

ついで近衞中將に轉じ、從三位に叙せられ、陸奧守鎭守府大將軍に任ぜられた。よつて父親房と共に義良親王を奉じて陸奧を鎭し、東國の官軍を總べようとし、吉野から陸路伊勢に赴き、延元三年九月、大いに舟師を整へて大海（伊勢度會郡）を發したが、海上暴風の爲に諸船は四方に漂流し、親房の船は常陸に漂着し、顯信及び義良親王の船は伊勢の鎌島に漂着した。翌四年八月、後醍醐天皇の不豫あり、よつて義良親王が行在で踐祚されたが、これが後村上天皇である。天皇は顯信に詔して恢復を圖らせられた。興國四年、顯信は宇津峰宮を奉じて陸奧に留まつたが、正平四年、結城顯朝が來り攻むるに及び、顯信は敗走し、後遂に吉野に歸還した。同十四年、西征大將軍懐良親王に從ひ、菊池武光と協力して、少貳頼尚と筑後川を挾んで對陣し、大いに頼尚を筑前大原に破つたが、此の戰に於て戰死した。官は中納言に進んだ。「きくもたけみつ・菊池武光」の項を參照されたい。

きたばたけあきよし
北畠顯能

名號 號を多藝御所といふ。

系統 北畠親房の子である。一說には源貞平の子で、御房に養はれたのであるといふ。

事蹟 伊勢の國司と爲り、多藝に居したので、多藝御所と稱せられた。後醍醐天皇の延元元年、兄の顯家と共に足利氏を討つて功を樹てたが、時に十六歲である。後村上天皇の正平三年正月、敵が行宮を襲ふと聞き、兵を率ゐて大和の橋寺に赴いたが、既に行宮の火炎に包まれるのを認め、賀名生の皇居に候し、匠材を運搬して皇居を造つた。天皇は大いに嘉賞し、從三位に進められたが、また此の年の秋、矢田城を攻めて高師秋を退けた。

正平七年、伊賀・伊勢の兵を率ゐて四天王寺の行宮に至り、楠木・和田の諸氏と協力して足利義詮を破り、閏二月に京都を復し、崇光院を幽閉し、父親房と共に入京して諸務を參決し、從二位中納言に叙任された。ついで義詮が大擧來攻したので、顯能は防戰したけれども利なく、遂に天皇に從つて吉野に還り、ついで伊勢に歸つた。同十五年、義詮は大軍を率ゐて吉野の行宮を襲つたが、顯能は大和・伊勢の國境に陣し、敵の糧道を絶つて功があつた。長慶天皇の建德元年、詔によつて淳和院・奬學院の別當及び氏長者となつた。其の後、屢々土岐・仁木の諸氏と戰つて之を破つたが、官位は異進して從一位右大臣に陞り、三宮に准ぜられた。弘和三年七月に病歿した。

きたばたけちかふさ
北畠親房

名號 薙髮して宗玄といひ北畠准后と稱する。其の家を北畠といひ、また中院ともいつた。

系統 姓は村上源氏であつて、村上天皇の皇子具平親王の後裔である。父を北畠師重といふ。

事蹟 永仁・延慶の間に、異進して從四位に叙し、右近衞中將左中辨を經て參議に任じ、元應元年に中納言に遷り、正二位に叙し、元亨三年に大納言に陞り、世良親王の傅となつたが、元德二年九月、親王が薨ぜられたので、痛惜して薙髮した。親房は五朝に歷

仕し、頗る重望があつたので、官を罷めて退去する際には、天下の人々が之を惜んだ。

元弘元年、後醍醐天皇が隠岐から還幸し、建武中興の新政を布かられた際には、再び出でて仕へ、從一位に叙し、准大臣となつた。三年十月、子北畠顯家が陸奥守となり、義良親王を奉じて奥羽鎮撫に出掛けた時には、親房もこれを聴けて奥羽に赴いたが、後には京都に歸つた。

（北畠親房）

延元元年、足利尊氏が鎌倉に據つて叛し、兵を進めて京都を犯さうとしたので、正月、天皇が比叡山に避けられた時には、親房も駕に從つた。やがて尊氏は九州・四國・中國の大兵を率ゐて京都に侵入し、光明院を擁立したが、十月天皇が假に尊氏と和し、京都に還幸された際には、親房は尊澄法親王（宗良親王）を奉じて伊勢を鎮撫した。天皇が花山院に幽閉され、二箇月餘に及んだ時には、親房は伊勢から献策したので、天皇は吉野に還幸された。

延元三年閏七月、北畠顯信（顯家の弟）は陸奥守となり、結城宗廣と共に、義良親王・宗良親王を奉じ、伊勢を發して海路から陸奥に赴かうとしたので、親房もこれを聴けて出發したが、偶々洋中で大暴風に遇ひ、乘船は四散し、義良親王及び顯信・宗廣らは伊勢に吹き戻され、宗良親王・北條時行は遠江に漂着し、親房の船は常陸に漂着した。乃ち親房は常陸の小田治久に頼り、小田城に據つて東國の官軍を指揮したが、經營が意の如くならなかつた。延元四年八月、後醍醐天皇崩じ、後村上天皇が即位された。此の年の冬、尊氏の將高師冬は東國に下つて小田城を攻めた。親房は師冬に圍まれ、屢々白河の結城親朝（宗廣の子）に來援を求めたけれども、親朝は遷延して來なかつた。興國二年五月には、吉野から興良親王（護良親王の御子）を迎へて奉じたが、十一月には、城主小田治久が歌を師冬に通じたので、小田城は遂に陥落した。よつて親房は關宗祐の關城に據り、また興良親王は妻政泰の大寶城に據り、互に再擧を謀つたけれども、遂に成功しなかつたので、康永二年十一月、城を棄てゝ吉野に走つた。

正平五年、足利直義が降を請うた時、朝議は其の許否に就いて容易に決しなかつた。親房はこれを納るべきを建言したので、朝議は漸く定まつた。此の年、勅して三宮に准じ、輦車を宮中に入れることを許された。七年閏二月、天皇は賀名生の行宮を發して男山に幸し、北畠顯能・楠木正儀・和田正忠らを京都に遣つて足利義詮を破り、親房・顯能父子を京都に遣つて諸事を總決せしめられたが、賊軍の勢がまた盛んになつたので、天皇は賀名生に還幸された。親房は正平九年四月、賀名生で薨じたが、時に六十三歳である。

親房は多年朝廷の柱石の臣として功績が多く、陣中にあつて神皇正統紀を著した。これは神代から後村上天皇の踪跡に至る迄の歴代の大要を記し、皇統の由來及び國家の治亂興亡などを說き、吉野朝廷の正統を論じたもので、議論が頗る穩健である。後醍醐天皇の條に於て、最も熱誠の筆を揮ひ、逆賊を筆誅して正道の發揚に力めて居る。本書は六卷から成つて居るが、其の奥書に據れば、一卷の參考書もなく、寔蒙に示す爲に、

延元四年小田城で著して天皇に上り、興國四年七月、關城の陥らうとする際に、謬謬のある點を修正したものである。著書には此の外に職原抄・元々集・二十一社記などがある。親房は博洽で吏務に通じた。世に藤原藤房・源定房と並稱して、後の三房といふ。別格官幣社靈山神社（鳴島縣伊達郡靈山村）・阿部野神社（大阪市住吉區）は親房・顯家らを合祀する社である。

きつかはもとはる
吉川元春

名號 幼字を小輔二郎といひ、法名を洞泉院海印正惠といふ。

系統 毛利元就の二子で、吉川興隆の養子である。

事蹟 天文十年正月、父元就に從つて尼子氏を討つたが、時に年十二歳である。十七年三月、吉川興隆に養はれて吉川氏を冒したが、既にして興隆は異圖を抱き、毛利氏を滅ぼさうとしたので、元就はこれを殺し、元春に其の祀を存せしめた。

弘治二年四月、元春は石見に入つて郡邑を從へ、尼子氏に備へる爲に尾高・黒岩の二城を築いた。永祿元年、元就と共に石見を襲ひ、小笠原良雄を温泉城に破つた。八年、從四位下駿河守に任じた。

永祿十二年、尼子勝久は出雲を犯し、大内輝弘は山口で亂を起した。偶々元春は九州に在つたが、變を聞いて歸り、子元長と共に兵一萬を以て輝弘を誅伐し、元龜元年、更に毛利輝元と協力し、兵二萬餘を率ゐて出雲に入り、勝久を征して連勝した。二年六月、元就が病に罹つたので、輝元は師を班したが、元春は出雲に駐り、兵六千を以て勝久を壓した。元就が歿すると、勝久は部將山中幸盛と共に頗る勢を振つた。よつて元春は、伯耆に入つて幸盛を降し、また出雲の新山城に勝久を攻め、これを隱岐に追ひ、伯雲の地を平定した。天正六年、勝久・幸盛は織田信長の後援を得て、播磨の上月城に據つて兵を擧げた。元春は弟小早川隆景と共にこれを征し、城を陥れて勝久・幸盛を斃した。

時に信長は、中國平定の志があり、豐臣秀吉を遣つて、頻りに播磨・美作の地を侵させたので、元春は常にこれと對抗し、奮戰頗る勉めた。天正十年五月、秀吉が高松城を圍んだので、元春・隆景は輝元を奉じて備中に入り、高松城將清水宗治を救はうとした。兩軍が未だ戰はない中に、城は水攻めにあつて寫したので、輝元は秀吉と和を媾じて兵を收めた。

やがて秀吉が志を得るに及び、元春は其の下風に立つ事を恥ぢ、早く家を子元長に讓つて老を養つた。後に秀吉は島津氏を征し、元春を起して渡海させようとした。元春は病と稱して出でなかつたので、輝元は强ひて之を出した。元春はやむを得ず征途に上つたが、これが爲に怏々として樂まず、遂に臺灣病を發し、小倉に駐つて療養したけれども全快せず、天正十四年十一月、五十七歳で歿した。

元春は人と爲り豪邁で、最も戰術に長じたので、世に隆景と並べて兩川と稱した。蓋し元就の歿後、輝元が家名を墜さなかつたのに就いては、元春の輔導の功が尠少でない。

きつしやうてん
吉祥天

傳略 佛經でいふ女相の佛名であつて、功德女・吉祥天女ともいふ。父は德叉迦（圓滿と譯する）で、母は鬼子母神で、兄は毘沙門天であるといふ。梵語では室利摩訶々毘訶といふ。咸德成就衆事大功德と名づける。左手に寶珠を持し、右手に與願の印を結んで居る。祈る者に幸福を與へるといはれ、我が奈良朝から平安朝にかけて、此の天女を祈ることが頗る流行した。

きどたかよし
木戸孝允

名號 初名を桂小五郎といふ。但し桂氏に憚はれた爲である。

事蹟 長州萩の藩士である。勤王の志に厚く、藩主毛利侯に從つて京都に出で、諸藩の志士と交際した。元治元年前後の京都は、會津藩主松平容保を中心とする佐幕黨の勢力が強く、長州藩を主とする攘夷論者は、悉く京都を追はれたが、孝允は巧に幕吏の追捕を逃れて、京都の內外に潛伏し、天下の形勢を觀望し、勤王の爲に盡した。やがて高杉晉作と共に長州藩の代表者となり、其の言論は能く朝旨を動かす樣になつた。

慶應三年、孝允は岩倉具視・小松帶刀・西鄕隆盛・大久保利通らと討幕を策し、同年十月十四日、薩・長二藩は討幕の密勅を拜するに至つた。前土佐藩主山內豐信（容堂）は、討幕の計畫を聞いて大いに驚き、其の臣後藤象二郎・福岡孝弟を大阪に遣り、將軍慶喜に政權奉還の必要を說いたので、慶喜は意を決して大政を奉還したが、時に慶應三年十月十四日である。翌年十月に、孝允は參與に任ぜられた。

大政奉還により、幕府・幕臣の領地は朝廷の直轄となつたけれども、諸大名はなほ藩の土地（版）・人民（籍）を私有して居たから、中央政府の政令は地方に徹底しなかつた。孝允はこれを憂へ、明治元年二月、版籍奉還を具視及び三條實美に建言し、また山口に歸つて老侯毛利敬親（たかちか）に讓し、ついで利通にはかり、各藩に勸むる所があり、先づ薩井・島津・毛利・山內・鍋島の諸侯が率先して奉還し、斯くて二年六月に版籍奉還の實が擧り、土地・人民は悉く朝廷に歸したが、其の先鞭をつけたのは實に孝允である。また孝允は早くから廢藩置縣の必要を說き、利通・隆盛及び板垣退助と謀り、色々の準備を進めたが、四年七月に至り、其の實現を見るに至つた。

孝允は特に版籍奉還・廢藩置縣の大業に與つた外に、參議となつて大政を輔弼したが、明治四年十一月には具視・利通・伊藤博文・山口尙芳らと歐米視察の途に就き、米・英・佛・白・蘭・獨・露・丁抹・瑞典・墺・瑞西の諸國を漫遊し、六年九月に歸朝した。

偶々我が朝野には征韓論が擡頭して居たが、孝允は具視・利通・博文と共に內治の急を力說し、外征の非を論じたので、遂に征韓論は敗れ、明治六年十月、隆盛・象二郎・副島種臣・板垣退助・江藤新平らは連袂辭職し、玆に輿論は二派に分れた。

爾來、內閣の顧問として國政に盡力したが、明治十年、西南の役が起つた時には、自ら請うて征討の任に當らうとしたけれども、許されず、優詔によつて大阪の內閣行署に留まり、利通・博文と共に京都の行在所に往來し、軍政に參與することになつた。偶々京都の旅館で肝臟肥大症に罹り、四十四歲で歿したが、時に明治十年五月二十六日で、此の日京都の靈山に葬られ、朝廷から正二位を贈られた。孝允は夙に國事に盡瘁し、屢々身命を拋つて維新の大業を成したので、世に隆盛・利通とあはせて維新の三傑といふ。

きのしたじゅんあん
木下順庵

名號 名を貞幹といひ、字を直夫といひ、通稱を平之允といふ。號を順庵といひ、錦里・敏慎齋・薔薇洞などの別號がある。私

證して忠靖といふ。

系統 京都の人で木下意春の二子である。

事蹟 幼時から聰敏で、善く書を讀み、字を寫し、而も强記であつた。既にして詩文を作り、好んで貴紳と往來し、五山の僧侶と交際し、題詠が頗る多かつたが、衆は其の奇才俊逸を稱した。天海僧正は彼を見て、己の法嗣にしようとしたが、順庵は從はなかつた。十三歲の時に太平賦を作り、大納言烏丸光廣に呈したが、詞旨が諄正であつたから、光廣は後水尾上皇及び後光明天皇の叡覽に供し、大いに稱賞を賜ひ、世人はこれを國瑞とした。

既にして松永昌三（貞德の子で藤原惺窩に學び、尺五と號す）に學び、出藍の譽があつた。曾て柳生宗矩に從ひ、江戶に遊んだが、志を得ないで京都に歸り、爾來、讀書に耽る事約二十一年に及び、名聲が四方に聞えた。時に加賀侯前田利常は、幣を厚くして招聘したが、順庵はこれを辭して、「先師松永先生の子某、嗣ぎて家學を承け、未だ仕途に就かず、家道屢々窘し、請ふ彼を用ひて以て其の宿望を得せしめよ」といつて、松永氏を推薦した。利常は順庵の節に感じ、松永氏と共に順庵を禮聘した。併し順庵は尙ほ居を京都に定め、時々江戶に從ひ、また加賀に赴き、席の煖まる遑がなかつた。天和二年七月、將軍綱吉の時に拔擢されて幕府の儒官となり、ついで命を奉じて國史を修し、これを完成したが、元祿十一年十二月に七十八歲で歿した。歿するに臨んで、後事を榊原篁洲・新井白石に屬し、また孝經一卷を棺中に藏したといふ。

順庵は極めて孝心に厚く、父母の喪に服し、泣血三年に及んだので、これを觀る者は悲酸の感にうたれたといふ。また友愛の情に厚く、兄弟四人床を連ね、被を共にし、己の子と同樣に其の子を撫育した。また妻を喪つてから再び娶らず、孤枕獨衾、恰も野僧の樣であつた。また平生嗜欲がなく、質素な衣服を纏ひ、淡泊な食物を攝つた。併し其の經學・詩文は世に聞え、朝鮮人は對馬に來る毎に文を求めたが、荻生徂徠は彼の詩を評し、「錦里先生出でて扶桑の詩皆唐なり」といつた。

順庵の門人は甚だ多かつたが、其の中で新井白石・榊原篁洲・室鳩巢・雨森芳洲・祇園南海・松浦靈沼・服部寬齋・向井三省・三宅觀瀾・南部景衡を木門の十哲といふ。順庵の著書には錦里文集・班荊集などがある。

きのつらゆき
紀貫之

系統 藏人紀望行の子である。

事蹟 醍醐天皇の延喜年中に御書所預となり、越前權少掾・內膳典膳・少內記などを經て大內記に轉じ、從五位下に叙せられた。ついで加賀・美濃などの介となり、延長年中に大監物右京亮に拜せられ、また土佐守に任ぜられて下國し、朱雀天皇の承平年中に任期が滿ちて歸京した。天慶年中に玄蕃頭となり、從五位下に進み、木工權頭に遷り、從四位下に進んだが、天慶九年に歿した。

貫之は書を善くし、和歌に長じ、神妙の域に入つた。醍醐天皇の延喜五年、貫之は紀友則・凡河內躬恒・壬生忠岑らと共に、詔を奉じて古今集を撰んだ。これは一名を古今和歌集といひ、二十卷からなつて居るが、萬葉集撰定後に出來た歌集で、卽ち淳仁天皇の天平寶字三年二月から、延喜五年四月に至る約百五十年間の和歌を撰んだもので、始め續萬葉集と稱したが、後に今の名に改められた。四季・戀・雜などに分類し、千百十一を收めてあるが、其の歌體は萬葉集の樣に雄渾淳樸ではなく、文辭の華麗で、用語の雅馴なものを撰んである。中に貫之の歌を百首

ほど收めてあるが、これは天皇の特旨によつて斯樣に多く收めさせられたのである。また貫之の假名文の序と、紀淑望の漢文の序とを附してある。

承平四年、貫之は土佐から歸京する時、假名文で日記を綴つたが、これが土佐日記である。百里の途上に五十日を費し、途中で海賊の來襲を恐れた記事などもあり、地方政治の頽廢に伴ふ海賊の跳梁などが窺はれる。文章が輕妙で、間に滑稽諧謔の句などがあるのは出色である。今に殘つて居る最古の假名文の紀行である。

貫之は曾て紀伊に赴き、和泉を夜行した時、其の馬が地に伏して進まなかつた。貫之はこれを怪んだが、或る人が告げて、「此の地に蟻通神あり、禮なくして過ぐれば其の怒に觸る」といつたので、貫之は馬から下りて口を噤ぎ歌を詠じてこれに謝した。「かき曇りあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべしやは」と。馬は忽ち進んだといふ。後人は貫之を柿本人麻呂に配し、稱して和歌の祖宗とする。萬葉集鈔・新撰和歌集なども貫之の撰である。

きびつひこのみこと
吉備津彦命

名號 名を彥五十狹芹彥命といひ、別名を吉備津彥命といふ。

系統 孝靈天皇の皇子で、御母を倭國香媛といふ。吉備臣・上道臣の祖である。

事蹟 崇神天皇の十年、四道將軍の一人に選ばれたが、偶々武埴安彥が謀反したので、詔を奉じて安彥の妻吾田媛の軍と大和の大坂に戰つて之を討滅した。十月、京師を出發して西道（山陽道）に赴任し、遂に吉備國を鎭め、十一年四月、京師に歸還して平定の狀を奏上した。吉備津彥の弟稚武彥の後裔には吉備・下道・上道・賀陽・三野・苑の諸氏があり、吉備國の開發に盡力したが、備中の吉備津神社は、命を祭神とする。「しだうしやうぐん・四道將軍」の項を參照されたい。

きのしたとうきちらう
木下藤吉郎

「とよとみひでよし・豐臣秀吉」の項を參照されたい。

きびのまきび
吉備眞備

名號 眞吉備にも作る。世に吉備大臣といふ。

系統 吉備津彥命の裔で、本姓は下道朝臣で、世々吉備に住んだ。父は右衞士少尉吉備國勝である。

事蹟 元正天皇の靈龜二年八月、二十四歲の時に遣唐留學生に選ばれ、聖養老元年三月、遣唐押使多治比縣守・大使大伴山守・副使藤原馬養らに伴はれて入唐した。留學生安倍仲麻呂の入唐も此の時である。眞備は在唐十八年、聖武天皇の天平六年十月、遣唐使多治比廣成の歸國するのに從ひ、僧玄昉らと薩州を發したが、颶風の爲に四隻は相失ひ、廣成・眞備・玄昉の船は漂蕩數箇月の後に多禰島（種子島）に着し、聖七年三月、京師に入つた。

眞備は在唐の間、主として經史を研修し、博く衆藝に涉り、唐人に知られた。歸朝の時に唐禮・大衍曆經・大衍曆立成・測影鐵尺・銅律管などを携へ來り、これを朝廷に獻じた。ついで正六位下に叙し、大學助に任じ、累進して從五位上に陞り、右衞士督に轉じた。天平十二年、太宰少貳藤原廣嗣は、玄昉・眞備を朝廷の二姦臣と見做し、これを除くを名として兵を擧げたが、間もなく誅に伏した。當時、右衞士督であつた眞備は、聖武天皇の恩寵を蒙り、やゝ政治に參與したものと見える。孝謙天皇の皇太子であられた時には、東宮學士となつて禮記・漢書を講じ、恩寵が甚だ渥かつた。後に左京大夫に遷り、天平勝寶のはじめ從四位上に進んだ。

眞備は孝謙天皇の天平勝寶二年正月、俄に貶せられて筑前守となり、改めて肥前守に轉じた。四年閏三月、遣唐大使藤原清河が唐に使するに及び、眞備は大伴古麻呂と共に、同副使となつて入唐し、六年正月に歸朝した。僧鑒眞の來朝も此の時である。尤も海上暴風の爲に、眞備の乘船は紀伊に漂着し、清河及び阿部仲麻呂の乘船は安南に漂流した。眞備は歸朝してから太宰少貳に任じ、八年六月、建議して始めて筑前に怡土城を築き、後に西海道節度使に進んだ。同年に召されて京師に歸り、造東大寺長官に任ぜられたが、病の爲に事を視なかつた。

淳仁天皇の天平寶字八年九月、惠美押勝の亂には、軍事を畫策して殊功があり、從三位に叙し、參議に拜し、中衞大將を兼ね、稱德天皇の天平神護元年に正三位となり、二年に中納言となり、俄に大納言となり、ついで右大臣に拜し、正二位に叙せられた。四年八月、稱德天皇が崩ぜられ、未だ皇嗣が定まらなかつたので、眞備は文屋淨三を立てようと圖つたが、其の議が行はれず、左大臣藤原永手・右大辨藤原百川らが急に光仁天皇を擁立するに及び、眞備は上表して職を辭し、寶龜六年十月、八十二歲で歿した。

眞備は卑賤に身を起し、一代にして大臣に進んだが、これは當時異數といふべきである。蓋し學識及び人物の非凡であつた爲であらう。併し惠美押勝・僧道鏡の專權を匡濟せず、恬然として朝貢に列したのは、識者の非難を招いた點である。學者としての眞備の功績は、釋奠の禮を定めた事が其の一つである。當時、大學に於ける釋奠の儀式は、未だ完備して居なかつたが、眞備は支那のそれを視察して歸り、禮典に稽へて器物を作つたので、禮客が始めて整つて來た。眞備は更に大寶律令の不備な點を發見し、其の中の二十四條を刪正したが、桓武天皇の延曆年中から、眞備の刪正したものを用ひる樣になつた。眞備の著には私教類聚三十八條がある。

きむらしげなり
木村重成

名號 長門守と稱する。

系統 木村重茲の子で、母は右京大夫局である。重茲は重高にも作り、右京大夫局は宮內卿局にも作る。

事蹟 父重茲が罪を得て自殺した時、重成は乳母に抱かれて近江に匿れ、僅かに逃れることが出來た。長じて豐臣秀頼に仕へ、長門守と稱した。

慶長十九年、京都方廣寺の鐘銘「國家家康」の文字が德川家康の怒を招き、開眼供養式の停止となり、秀頼は嚴しく詰責されたが、片桐且元の調停も功を奏せず、淀君は大野治長と結び、遂に秀頼に勸めて兵を擧げさせた。時に重成は眞田幸村・後藤基次と同じく、一方の將となり、德川方の上杉景勝・佐竹義宣と奮戰して、頗る軍功をたてた。家康は陷れ難きを察し、十二月に和を結んだが、これを大阪冬の陣といふ。和議締結の際には、重成は秀頼の命を率じ、使者として家康を軍營に訪ふたが擧止が端麗で、進退に度があり、德川方の諸將は皆これを稱した。

然るに聖元和元年、和議條件の埋壕を實行するに當つて紛議が起り、豐臣方の諸將は再び兵を擧げた。家康父子はまた來攻したが、時に重成は、兵四千七百を率ゐて若江に出で、藤堂高虎の前軍藤堂高七らと戰つて之を破り、藤七を捕へ、勝に乘じて玉越門の堤に迫つた。偶々井伊直孝は高安から道明寺に赴かうとしたが、重成の旗標を望見し、これに向つて進擊し

た。重成は手兵を率ゐて縱横に奮戰し、鋭鋒當る可らず、ために直孝の兵は屢々風靡したが、併し遂に利あらず、從兵はみな潰れた。けれども重成は必死を期して退かず、馬を馳せて直孝の本陣を突いた。時に直孝の部將庵原助左衞門は、十文字の鑓で重成の幌を穿つたので、重成は落馬して水田に倒れた。よつて安藤長三郎は重成の首を斬つた。時に年二十一歳である。五月八日に至り、大阪城は陷り、秀頼母子は自殺したが、これを大阪夏の陣といふ。

重成は容貌が秀麗で、沈勇で、軍事に長じた。若江の戰には戰死を豫期し、伽羅を燒いて頭髪に薰じたが、家康が首實檢をなした時にも、尙ほ香氣が馥郁として居たので、家康は其の用意を感稱し、また深く重成の死を惜んだ。

ぎやうき 行基

系統 姓は高志氏で、百濟國王の後胤といふ。

事蹟 和泉大鳥郡の人で、十五歳の時に出家し、大和の藥師寺に居つた。天資鋭敏で、新羅の僧慧基に從つて、瑜伽論・唯識論を學び、僧義淵にも教を受けた。二十四歳の時、德光法師に從つて具足戒を受けた。行基は常に諸方を周遊して衆生を教化したが、僧侶も民衆も彼を慕つて追從した。行基が來るといふ報が傳はると、附近の民衆は家を空にして集り、爭つて行基を禮拜するのを常としたが、行基は其の人の器量に應じて化導した。また多くの弟子を率ゐて周遊し、險難の地に行くと、橋を架け、堤防を築き、道路を修め、また耕墾に盡力したが、行基の起工する時には、民衆が爭ひ集つて工事を助けたので、日ならずして成就した。民衆は後世に至るまで其の利益を深つた。また畿内に四十九の寺院を建てたが、諸州に建立したものも多い。

これよりさき、行基は私に僧を度した爲に獄に投ぜられたが、後に赦された。聖武天皇は深く行基に歸依され、厚く敬重された。天皇が東大寺を造營された時には、行基は多くの弟子を率ゐて衆庶を勸誘した。天平十七年、聖武天皇は大僧正の位を授け、併せて四百人の出家を施された。これが本朝に於ける大僧正の始めとする。天平勝寶元年二月、菅原寺の東南院で入寂した。年八十歳。行基は時に觸れて靈異神驗が多かつたので、時人は行基菩薩といつた。

きよくていばきん 曲亭馬琴

名號 姓を瀧澤といひ、名を興邦といひ、後に解と改めた。通稱を瑣吉といひ、號を曲亭馬琴といひ、著作堂・簑笠漁隱・玄同陳人・蟹甲子・烏水・亭々亭・山梁眞淵などの別號がある。

系統 瀧澤興藏の末子である。

事蹟 父興藏は川越松平侯の支族松平信成に仕へ、其の家老であつたが、旨に忤ふ事があつて浪士となり、江戸に來て深川に住居し、間もなく歿した。馬琴は明和四年六月九日深川に生れたが、父が歿したので、兄の興旨に寄り、母の手に育てられた。

幼時から稗史小說を好み、十一二歳の頃には、印行の淨瑠璃は大抵閲讀したといふ。十二三歳の頃には武家奉公に出たけれども、其の驅使に堪へず、遂に逃れて旗本戸田大學頭の徒士となつた。けれども永續せず、爾來、屢々家を代へて仕へたけれども、意に滿たなかつたので、遂に仕官を斷念し、或は山本宗洪の門に入つて醫業を學び、或は龜田鵬齋の從僕となつて儒道を修め、或は石川五老を訪れて狂歌を學び、橘千蔭について書道を學んだけれども、皆目的を達しないで中止した。

そこで始めて小說家を志し、山東京傳に師事し、寛政二年の冬、處女作「廿日餘四十兩盡用而二分狂言」を出して世に行はれた。ついで書肆蔦屋重三郎の家に寄寓して著作をなし、其の名が漸く世に知られて來た。偶々蔦屋の叔父(新吉原の引手茶屋)は馬琴を愛し、其の女に配しようとしたが、馬琴は自重して應じなかつた。ついで飯田町の下駄屋の寡婦に入聟し、著述の傍ら手習師匠となり、また奇應丸・神女湯などの藥を製賣して利殖の道を圖つた。併し他姓を冒す事を好まなかつたから、其の女に養嗣して家を讓り、自分は本姓瀧澤に復し、專ら筆硯に親しんだ。

(曲亭馬琴)

寛政九年、山東京傳が罪を得て筆を收めてから、當時の文學界の覇權は馬琴の手に移り、其の著は益々世に行はれた。文化二年、椿說弓張月を、四年、三七全傳南柯夢を出すに及び、名聲が頗る高くなつた。十一年に至り、南總里見八犬傳を上梓したが、一篇出づる毎に洛陽の紙價を高め、老若男女は競つて之を求めたが、天保十二年に至つて成つた。馬琴は之を完成する爲に二十年の歲月を要したが、行文が妙で、結構が奇で、當代の傑作と稱せられた。

これよりさき、子の琴嶺(興繼)は松前侯の醫官となつて居たが、天保五年、馬琴に先立つて歿したので、藏書一切を賣つて、琴嶺の子興邦の爲に御家人の株を買ひ與へた。馬琴は琴嶺の歿する前年、卽ち天保四年の秋、右眼の明を失ひ、天保十年、また左眼の明を失ひ、全く盲目となつたけれども、八犬傳・美少年錄、其の他の續稿の完了に至らないものがあり、中途にして筆を絶つに忍びず、また書肆の請が切であつたから、琴嶺の妻みちに口授し、辛苦して之を大成し、嘉永元年十一月六日、八十二歳で歿した。江戸小石川茗荷谷深光寺に葬る。

馬琴は資性剛毅で、世俗に阿らなかつた。併し時々言行が一致しなかつたので、交友を絶つことがあり、隨つて人物上の毀譽が交々到り、一時師事した山東京傳及び其の弟京山、畫家歌川豐國らとも遂に協はない樣になつた。而して其の學問は博洽で、筆鋒は健で、且つ其の小說は一定の主義を有し、必ず勸善懲惡の意を寓し、他の作者の樣に淫奔輕浮に陷らなかつたのは、馬琴の自負する所であつた。

著書には南總里見八犬傳・椿說弓張月・近世說美少年錄・三七全傳南柯夢・夢想兵衞胡蝶物語・俊寛島物語・朝夷巡島記・開卷驚奇俠客傳・玄同放言・燕石雜志・簑笠雨談など無慮數百種がある。

きよはらのたけのり 清原武則

系統 光方の子であると稱するけれども、詳かでない。出羽山北俘囚の長である。

事蹟 後冷泉天皇の朝、源頼義は、安倍貞任と累年交戰したが、容易に勝つことが出來なかつた。故に頼義は出羽に使を遣り、俘囚長清原光頼及び弟武則を諭して己れの味方にしようとした。珍寶を以て誘つたけれども、光頼は容易に決しなかつた。頼義が屢々誘つたので、康平五年七月、武則は子弟及び部下一萬餘人を率ゐて來援し、陸奥國栗原郡營岡に會した。頼義は大いに喜び、武則及び

其の子武貞、甥の橘貞頼、貞頼の弟頼貞に兵を分つて隊將とした。

既にして貞任は衣川關に據り、精兵を率ゐて來襲したので、頼義と力を協せて、迎へ擊つて大いに之を敗つた。貞任が鳥海柵に據り、退いて厨川柵を保つたので、これを追擊し、火を敵營に放ち、肉迫して戰ひ、遂に貞任を討滅した。康平六年、武則は戰功によつて從五位上鎮守府將軍に補せられた。清原氏が盛大になつたのはこれからである。「みなもとのよしいへ・源義家」、「あべのさだたふ・安倍貞任」の項を參照されたい。

きよはらのたけひら
清原武衡

名號 將軍三郎と稱する。

系統 鎮守府將軍清原武則の子で、清原武貞の弟である。

事蹟 武貞の子眞衡が、或る事で異母弟家衡及び藤原清衡と隙を生じた時、武衡は家衡・清衡及び吉彦秀武らと相結んで眞衡と爭ひ、陸奥國が大いに亂れた。

時に源義家は陸奥守兼鎮守將軍であつたから、眞衡を援助し、堀河天皇の寛治元年九月、兵數萬を率ゐて、武衡の徒を金澤柵に攻めた。武衡は固守して奮戰に努め、屢々義家の軍を惱ました。

既にして清衡・秀武は義家に降つたので、義家は其等の兵を合せ、且つ秀武の勸めにより、持久の策を定め、長圍の陣を張つた。柵の中は固より糧食に乏しかつたが、日を逐ふて益々窮迫した。よつて武衡は新羅三郎義光に就いて降を乞ふたけれども、義家は許さなかつた。

十一月に至り、家衡は自ら柵を燒いて逃れ、武衡は池水の中に匿れ、草で面を覆ふて居たが、遂に捕へられて斬られた。これを後三年の役といふ。「みなもとのよしいへ・源義家」の項を參照されたい。

きよしなか
吉良義央

名號 上野介と稱し、法名を靈性寺實山相公大居士といふ。

系統 世々幕府に仕へて、高家の首班となつた。因に幕府は名族の裔孫の國を失つた者を招いて江戸に置き、爵位を貴くして儀禮を掌らせたが、これを高家といふ。義央は永年當職に在つて朝儀に與り、公式の禮節典故に精通熟練し、其の右に出る者がなかつたので、名門大家の人々もみな曲折して義央に教を受けた。故に多くの賄賂を貪り、其の家は巨萬の富を重ねたといふ。

元祿十四年三月、勅使東下に際し、幕府は播磨赤穗城主淺野長矩・伊豫吉田城主伊達宗春に其の接待を命じ、義央と共に事に當らせたが、長矩は剛直で賄賂を行はず、義央の意を迎へなかつたので、義央は深く之を含み、單に儀禮の指導をしない許りでなく、三月十四日、勅使辭見の日に當り、衆中で長矩を侮辱したので、長矩は憤恨の情に堪へず、義央が白木書院の廊下で留守居番の梶川與惣兵衛頼照と立話して居る時、後方から「宿意あり」と叫び、小刀で斬り附けた。義央が驚いて振り向く處を、再び刀を回して其の額を斬つた。頼照が長矩を抱き留めたので、義央は大友義孝に扶けられて去り、ついで暇を賜はつて平川門から退出した。

長矩は其の夜に自盡を命ぜられたけれども、義央は罪がないので許され、刀傷治療の命を拜したが、傷は淺くて早く癒えたけれども、同月二十六日に至り、遂に職を辭することにした。爾來、深く淺野家の遺臣の復讐を恐れ、日夜警戒を加へたが、元祿十五年十二月十四日の夜、大石良雄以下四十六義士の襲擊に遇ひ、遂に首を斬られた。牛込區柔士八幡町萬昌院に葬る。「あさのながのり・淺野長矩」

「おほいしよしを・大石良雄」の項を參照されたい。

きりすと
基督

名號 基督教の祖イエスをいふ。基督といふのは、膏を注がれた者で、つまり洗禮を受けた者の意である。

系統 父をヨセフといひ、母をマリヤ（聖母）といふ。

事蹟 西紀前四年（我が垂仁天皇の二十六年）に、ユダヤのイエルサレムの附近のベテレヘムに生れ、三十歳の時、豫言者ヨハネによつて洗禮を受け、ユダヤ教の信者となつた。當時、ユダヤ人の間には、「天から神の子が天降つて我々を救濟して與れる」といふ信仰があつたが、基督は、「我こそは其の神の子である」といふ大自覺に達し、爾來、諸方を巡つて神の國の福音を說き、ユダヤ教の偏狹な教義及び儀式を打破して博愛を唱へ、自ら神の子として愛の教を實現し、廣く世人を救濟しようと努めた。其の爲に忽ち多くの信者を得たが、傳道約三年の後、ユダヤ教徒に惡まれ、また教世主と自稱したので、羅馬の官吏は之を以てユダヤの獨立を企てる者と誤解し、遂に磔刑に處したが、時に西紀三二年（チベリウス帝の世・我が垂仁天皇の六一年）である。

基督の言行は新約全書に載せてある。就中、「山上の垂訓」と稱するものは最も有名で、其の中には「われ汝等に告げん。惡に敵すること勿れ。人若し汝の右の頰を打たば、左の頰をも回らして之に向けよ。汝を訟へて下衣を取らんとする者には、上衣をもまた取らせよ」とあり、また「何故に衣の事を思ひわづらふや、野の百合花は如何にしてそだつかを思へ、つとめず、つむがざるなり、われ汝等に告げん。ソロモンの榮華の時だにも、其の裝ひ、此の花の一つにも若かざりき。神は今日野に在りて明日爐に投げ入れらるゝ草をも斯く裝はせ給へば、況して汝等をや」とある。基督は常に斯樣な卑近の例によつて其の道を說いた。また「汝の隣人を慈みて、汝の敵を愛せよ」とある樣に、博愛の精神が基督教の生命で、此の精神を以て天國にある唯一の神（基督は其の神の子であり、また其の神でもある）を信ずる事によつて、人々は永遠の幸福を受け得られると說くのである。

基督の歿後、使徒セントヨペートル・セントヨポールらは、基督の遺教を率じて、重なる迫害にも屈せず、四方に傳道したので、基督教は漸く羅馬領内に弘まつたが、舊來の諸宗教と相容れず、特に皇帝禁拜を拒んだから、大いに羅馬政府の迫害を受けた。併しコンスタンチン大帝が基督教を尊重するに及び、信者は益々增加し、四世紀の初葉（我が仁德天皇の世）には、羅馬の國教となつた。斯くて十一世紀の中頃には希臘教と羅馬教とに分れ、更に十六世紀の初葉に、新に新教が起り、以前の舊教と分れたが、此の舊教が西紀一五四九年（天文十八年）にフランシスヨザビエルによつて我が國に傳へられたのである。「ザビエル・Francis-Xavier」の項を參照されたい。

きんぎよくきん
金玉均

事蹟 韓國時代に於ける朝鮮獨立黨の領袖である。明治十五年七月、大院君一派の暴徒が、我が軍人を殺し、我が公使館を燒いた時、我が政府は遣使して其の不法を責め、且つ償金と謝罪使とを我に送らせた。此の時、金玉均は朴泳孝と共に謝罪使として來朝したが、滯在中に日本の文化を視察し、我が朝野の名士及び列國公使と交際して大いに得る所があり、歸國の後に同志と謀り、進歩主義を採用して大いに國政を改め、日

本に頼つて國家の獨立を維持しようとした。之を獨立黨といふ。

金玉均・朴泳孝らの獨立黨に對抗して、清國に頼つて國家を保持しようとする保守派があつたが、之を事大黨といふ。明治十七年、金玉均・朴泳孝らは急に起つて事大黨の大臣閔泳翊を傷けたので、事大黨は清兵の援をかりて獨立黨を破り、我が公使館を燒いて數多の官民を殺傷したので、十八年、我が國は朝鮮と京城條約を結んで謝罪させ、清國と天津條約を結んで事なきを得た。併し金玉均・朴泳孝らは、朝鮮に身を容るゝ餘地なく、相率ゐて我が國に亡命し、辭に時機の至るのを待つた。

朝鮮政府は我が政府に對し、亡命者の交附を請うたが、我が政府が聽かなかつたので、屢々刺客を派して殺させようとした。明治二十七年の春、朝鮮政府は刺客李逸植を我が東京に派遣して之を謀らせたが、李逸植は久しく我が國に滞在した朝鮮人洪鍾宇に命じて殺させようとした。洪鍾宇は金玉均を欺いて上海に誘ひ、同年三月二十七日、上海の客舍東和洋行に投宿し、此の夜、隙を窺つて金玉均を短銃で暗殺した。金玉均の從者日本人和田某は、其の屍を收めて日本に歸らうとしたが、上海官憲は之を奪ひ、軍艦威遠に載せて朝鮮に護送した。朝鮮政府は洪鍾宇を重職に任じ、金玉均の死屍を刑し、其の四肢を寸斷して全國各道に乘て、狗豚の喰ふに委せ、頭と胴とを楊華津頭に梟し、榜して「大逆不道金玉均之屍」と記した。於是、日本人の清國を惡む情が益々甚だしく、朝鮮人中にも自國政府の處置を暴なりとして憤る者があつた。金玉均を保護した我が國の有志者は憤慨おく能はず、其の遺骨を運んで青山墓地に埋葬した。大正元年十二月、金玉均の嗣子金英鎭(牙山郡守)は母と計り、「亡父の宿志成りて、八道の民、日本帝國の仁政を謳歌する今日、如何にもして、其の墓を朝鮮に褻き、以て亡靈を安んぜばや」と、青山の遺骨を移して牙山郡邑内に改葬した。

きんじやうてんのう
今上天皇

名號 御名を裕仁といひ、御諱號を迪宮といふ。

系統 大正天皇の第一皇子で、御母は皇后九條節子である。第百二十四代の天皇である。

事蹟 明治三十四年四月二十九日に御降誕あり、間もなく伯爵川村鐵太郎が御養育の命を蒙り同伯爵邸に御預り申した。四十一年四月十一日、學習院初等科に御入學になり、大正三年四月、同初等科を御卒業遊ばされ、爾來、新設の東宮御學問所で御修學になり、五年十一月三日、御年十六歳にして立太子の禮を擧げさせられた。八年五月七日、御年十八歳にして御成年式を擧げさせられ、十年二月二十八日、東宮御學問所を御修業遊ばされた。

大正十年、閑院宮載仁親王及び伯爵珍田捨己外十五名の供奉員を伴はせられ、香取を御召艦とし、鹿島を供奉艦とし、三月三日、横濱を發して歐洲諸國御巡遊の途につかせられた。而して先づ多年交誼の深い英國を訪はせられたが、倫敦の新聞デーリー＝メール紙は四月二十日の社說に於て、「日出づる國の皇太子殿下が、鵬程萬里を了へさせられ、百花燎爛の五月上旬を期して、愈々英國に御上陸あらせらる。我が英國民は、東洋の英國たる日本の皇太子殿下を迎ふるに當り、宜しく熱誠を以てすべし。日英兩國の友誼促進上、殿下今囘の御來遊は、極めて有意義なもので、衷心より兩國將來の爲に慶賀せざるを得ない」と記した。更に佛・白・蘭・伊などの國々を訪はせられ、各國の文化及び世界大戰後の世相を御視察になり、一路平安、同年九月三日、横濱に還啓遊ばされた。

時に大正天皇は御病久しく、大政を御親裁遊ばされる事が出來なかつたので、内外多事の秋に當り、攝政の御重任に當らせられた。時に大正十年十一月二十五日で、御年二十一歳である。皇室典範第五章第十九條第二項には、「天皇久しきに亘るの故障に由り、大政を親らすること能はざるときは、皇族會議及樞密顧問の議を經て攝政を置く」とあり、第十三條には、「天皇及皇太子は滿十八歳を以て成年とす」とある。十年十一月二十五日に宣布された大正天皇の大詔には、「朕、久しきに亘るの疾患に由り、大政を親らすること能はざるを以て、皇族會議及樞密顧問の議を經て皇太子裕仁親王を攝政に任ず、玆に之を宣布す」とあつて、皇太子攝政の事が定まつたのである。十三年一月二十六日、久邇宮良子女王殿下と御成婚遊ばされた。

大正天皇は蒲柳の質を以て松柏の御心を抱かせられた。御幼年時代から屢々重症に罹らせられ、御踐祚以來内外多事に亘らせられ、終始宸襟を勞させ給ふこと少からず、糖尿病の御傾向出で、時に挫骨神經痛を發せられ、攝政御任命の前後には御腦力が減退し、御發語に御障害出で、其の後病勢一進一退し、腦貧血症の御發作あり、大正十五年八月十日、葉山に御轉地遊ばされ、やがて氣管支加答兒御併發遊ばされ、全國民の赤誠こめた御平癒祈願も其の甲斐なく、十二月二十五日、聖壽四十八歳で神去り給ふたので、裕仁親王は皇室典範の定むる所により、葉山御用邸で直ちに踐祚し、年號を昭和と改められた。昭和といふのは、「百姓昭明、萬邦協和」に因むものである。

今上天皇は、昭和元年十二月二十七日、東京に還幸あらせられ、二十八日、宮中正殿に文武百官を召して朝見の儀を行はせられ、かたじけなき勅語を賜はつた。其の勅語の中には、「今や世局は正に會通の運に際し、人文は恰も更張の期に膺る、則ち我が國の國是は、日に進むにあり、日に新にするにあり、而して博く中外の史に徵し、審に得失の迹に鑒み、進むや其の序に循ひ、新にするや其の中を執る、是れ深く心を用ふへき所なり、夫れ浮華を斥け、實實を尚ひ、模擬を戒め、創造を勗め、日進以て會通の運に乘し、日新以て更張の期を啓き、人心惟れ同しく、民風惟れ和し、汎く一視同仁の化を宣へ、永く四海同胞の誼を敦くせん」とある。

昭和二年一月、先帝に「大正天皇」の御追號を奉り、二月に御大葬の儀を擧げさせられた。大正天皇の御神靈は、崩御後四十五日間殯宮にゐましたが、二月七日、靈柩を東京府南多摩郡横山村の多摩陵に移御し、閑院宮御親筆の御陵誌を奉安し、御盛土をなし、神嚴・靈默の中に御大葬を營ませられた。

大正天皇の諒闇の終るをまち、昭和三年十一月十日、京都の皇宮で即位の大禮を擧げさせられた。古代は踐祚と即位との別はなかつたが、桓武天皇が光仁天皇の譲を受けて踐祚されて以來、先帝の譲によつて踐祚し給ふ場合と、先帝の崩御によつて踐祚し給ふ場合とを生じたが、皇室典範が制定されてからは、後者の場合のみとなつた。即位といふのは、天皇が皇位繼承の事を百司萬民に告げさせ給ふ儀式で、其の大禮は、(一)賢所大前の儀と、(二)紫宸殿の御儀とに大別される。賢所は天照大神の御靈代なる御鏡を祀らせ給ふ所で、此の御鏡は即位式の時に限り、たゞ一度だけ京都皇宮の奉興殿に奉安される。天皇は十日午前八時半から、此の賢所の大前で御告文を奏せられたが、此の時、内掌典は大前の神鈴を九十九度引鳴らした。紫宸殿の御儀は午後に行はれた。即ち天皇は高御座に、皇后は御帳臺に着座されると、黒色の袍に黄金作りの太刀を佩いた内閣總

理大臣田中義一は北面して侍立した。時に午後二時四十五分で、天皇は立御し給ひ、内大臣の捧ぐる勅語を取つて、玉音朗かに下された。其の勅語中には、「朕、内は則ち教化を醇厚にし、愈民心の和會を致し、益國運の隆昌を進めむことを念ひ、外は卽ち國交を親善にし、永く世界の平和を保ち、普く人類の福祉を益さむことを冀ふ、爾有衆、其れ心を協へ力を戮せ、私を忘れ公に奉し、以て朕か志を弼成し、朕をして祖宗作述の遺烈を揚け、以て祖宗神靈の降鑒に對ふることを得しめよ」とある。ついで義一は臣民を代表して壽詞を奏上し、參列の諸員と共に萬歲を三唱し奉つたが、時に午後三時で、門外の儀仗兵は轟殷たる喇叭を奏し、百一發の皇禮砲が轟いた。此の御大禮の總經費は一千六百七十萬圓である。

これよりさき、昭和二年九月二十一日には、普通選擧の精神が愈々擴充され、滿二十五歲以上の帝國臣民たる男子には、すべて選擧權があり、三十歲以上の男子には被選擧權があることになつた。

今上天皇の御代になつてから、對外關係上如何なる事件が起つたかといふに、昭和二年六月、米國は日・英兩國を瑞西のゼネバに招き、第二次的海軍軍備縮少會議を開いて、補助艦の制限を協定しようとした。我が國からは海軍大將齋藤實を首席全權として列席せしめ、これが成立に努めしめたが、英・米の意見が一致しなかつた爲に、遂に不調の止むなきに至つた。ついで昭和五年一月、日・英・米・佛・伊の五大國は、倫敦に會して第三次的海軍軍備縮少會議を開いた。我が國からは若槻禮次郎が首席全權として派遣され、補助艦の制限について協議したが、結局我が國は英・米兩國の保有量に對する六割九分の比率を以て決定した。

滿洲は我が國の接壤地帶として國防上重要な所である。然るに露西亞は不法な手段によつて滿洲南下を企てたので、我が國は十萬の同胞と二十億の國費を犧牲にして之を排擊し、極東の平和を確保した。其の後、我が國は更に二十億圓の投資をなし、滿洲の開發に努力をつゞけ、今日の繁昌を致した。然るに張學良を主領とする滿洲軍閥は、良民に重稅を課して之を苦しめ、また屢々我が國の特殊權益を侵害した。偶々昭和六年九月、張學良軍が奉天郊外で我が南滿洲鐵道を破壞するに及び、我が滿洲派遣軍は猛然として膺懲の軍を起すに至つた。また我が政府は、我が軍事行動の正當な所以を中外に宣言して、兵匪を討伐して滿洲の治安に當つた。此の間、國際聯盟は屢々米國と共に我に抗議をよせたが、時を經るに伴れて我が正當な立場を理解するに至つた。

斯かる時に當り、滿洲には獨立建設の氣運が漸く熟した。兵匪の慘禍から救はれた滿蒙三千萬の民衆は、樂土の建設に努力を進めた。昭和七年三月一日、國號を滿洲國と稱し、年號を大同と呼び、都を新京（長春）に定め、清朝の宣統廢帝溥儀を奉じて、建國式を擧げた。

時に我が國は眞先に滿洲國の獨立を認め、東洋平和を强固にしようと欲した。然るに國際聯盟は、正當な我が國の行動を認めなかつたので、昭和八年三月、我が國は斷然國際聯盟を脫退した。時に今上天皇は詔書を下附され、我が國の進むべき道をお示しになつたが、其の詔書の中には、「大義を宇內に顯揚する」とある。

我が國と中華民國との協調は、極東平和に深い關係があるが、中華民國政府の惡辣な排日運動（排日貨・邦人毆打事件）は、上海の我が居留民を少からず憤慨させて居たが、昭和七年一月の民國日報社の不敬記事事件及び僧侶殺生事件は、我が居留民の多年の隱忍自重を破つて、重大な事件を惹き起すに至つた。乃ち我が政府は、居

留民保護を目的とし、其の正當な理由を中外に表明して上海に出兵し、近郊の兵賊を打ち拂つて治安を恢復した。斯くて支那は我が國の手により、世界平和を目標とする國際外交に對して猛省すべき機會が與へられる事になつた。「たいしやうてんのう・大正天皇」の項を參照されたい。

きんばらめいぜん
金原明善

事蹟 靜岡縣の人である。天保三年、天龍川に沿つた和田村に生れたが、長じて勤儉力行し、廣く公益事業に盡瘁し、また地方の產業を興した。中にも天龍川の治水工事には、自家の產を傾け、三十二年の長歲月を費して遂に成功した。後に植林事業に成功し、また金原銀行を開いて、利益を社會事業に投じた。晩年、勳三等に敍せられ、瑞寶章を賜はつたが、大正十二年、九十二歲の高齡で歿した。

明善は終生勤儉力行し、己を忘れて人の爲に圖つた。また相應の資產を有し、獨力で銀行を經營する程であつたが、常に質素粗食に甘んじ、專心業務に勵んで倦まなかつた。また如何なる物でも粗末にせず、使用の出來るまで利用した。

（金原明善）

たとへ新聞紙一枚でも粗末にせず、途に落ちて居ると拾つて歸り、文字のない處で狀袋を貼り、印刷の所では手習をした。而して常に、「物に親切な人は、人にも親切である。物を大切にする者は、必ず人を大切にする。夜具や下駄は物を言はぬが、若し言語がいへたら、不平をいふに違ひない。物に對して感謝するのは、感謝生活の基礎になるから、誰人でも左樣な心持をもち續けるのが至當ではないか」と言つた程であるから、同時に、感謝生活をなす人であつた。一足二十錢の朴歯の下駄を買ふと、晴雨にかゝはらず、それを三年も穿き通した。歯がちびると入れ替へ、鼻緒が痛むと繼ぎ替へ、穿けるだけ穿き通して、療治の出來ない樣になつた時、其の下駄を綺麗に洗つて、自分の縁にあげ、宛然人に物言ふ樣に、「さて、お前にも長々世話になつたが、もうお前も働けないから、これで長の暇をあげる。どうか其の心算で老後を安樂にして呉れ」といつて、庭樹の下へ埋めてやつた。萬事が其の通りで、手拭の端が擦れると、中央から切つて兩端を繼ぎ合せて利用し、使へなくなると雑巾に下して使ひ、更に役立たなくなると、「お前にも長々お世話になつた」とお禮をいつて埋めた。また蒲團を出入れする時には、「昨夜はお前のお蔭で寒い目にも遇はずに濟んだ。若しお前が居て呉れなかつたならば、俺は風邪に罹つたであらうが、そんな事も無く健康で居られるのは、お前の賜物である。今夜も厄介になるからどうか宜敷くお願する」といつた。

きんめいてんのう
欽明天皇

名號 天國排廣開土（あめくにおしはるひろにはの）天皇（すめらみこと）と稱する。

系統 繼體天皇の第三皇子で、宣化天皇の御弟である。御母は仁賢天皇の皇女で、手白香（たしらか）皇后といふ。第二十九代の天皇である。

事蹟 三十一歲で卽位し、都を大和國磯城島に遷し、金刺宮に住まれた。天皇の十三年十月、百濟の聖明王は、其の臣怒唎斯致（ぬりすち）を遣はし、金銅釋迦佛像一軀と、幡蓋・經論とを獻じ、且つ上表して

盛んに佛の功德を述べた。天皇は大いに喜び、怒唎斯致に向つて、「朕は未だ曾て斯樣な微妙な法を聞いたことがない。併し朕は自ら其の信否を決することが出來ない」と詔された。また群臣に向つて、「西蕃の献じた佛は相貌が端嚴である。禮拜すべきかどうか」を問はれた。時に大臣蘇我稻目は「西蕃諸國は皆これを崇敬して居る。我が國のみ禮拜しないのは宜しくない」と奏上したが、大連物部尾輿及び中臣鎌子は、「我が國では昔から神祇を崇拜して居る。今改めて蕃神を禮拜したならば、恐らく國神の怒に觸れるであらう」と奏上し、兩々相對して議決しなかつた。故に天皇は佛像を稻目に與へ、試みに禮拜させられた。稻目は大いに喜び、これを小墾田の家に祀り、向原の家を捨して寺とし、向原寺と稱した。これが本邦佛寺の始めである。然るに諸國に疫病が流行し、人民が多く死んだので、物部尾輿・中臣鎌子は、これを以て奉佛の崇となし、早く佛像を捨てるがよいと奏上した。よつて天皇は有司に勅して、佛像を難波の堀江に投じ、且つ火を放つて向原寺を燒かせられた。併し將來に於ける佛教興隆の源は、實に此の時に發して居る。當時朝鮮では新羅が任那を討つて日本府を滅した事件などがあつた。天皇は治世三十二年にして崩ぜられた。聖壽六十三。檜隈坂合の陵に葬る。

く

くうかい 空海

名號 空海は幼名を眞魚といひ、諡號を弘法大師といふ。

系統 父は佐伯田公で、母は阿刀氏で、本邦に於ける眞言宗の開祖である。

事蹟 讃岐の多度津の人で光仁天皇の寶龜五年六月十五日に生れた。幼にして儒を學び、十八歲の時に京師に出で、大學に入つて明經道を修めたが、遂に志を佛道に傾け、二十歲の時に和泉國槇尾山で出家して如空と號した。これから奈良の大安寺に投じて三論を受學し、桓武天皇の延曆十四年に東大寺で具足戒を受けて空海と改めた。既にして四方を修行し、更に大和國高市郡久米の道場に住き、神龜天平の頃に無長三藏の持つて來た大毘盧舍那經を披閲したが、それを了解することが出來なかつたので、始めて入唐求法の志を起した。

（空海）

延曆二十三年、遣唐使藤原葛野麻呂に從ひ、最澄と共に入唐した。時に三十一歲である。先づ長安に行き、眞言宗を青龍寺の惠果和尙に學び、兩部曼荼羅祕密法を授かり、兼ねて般若三藏から梵語を傳へてもらつた。唐に在る事二年、平城天皇の大同元年に內典（佛書）・外典（儒書）などの書類數百部を齎らして歸朝した。

嵯峨天皇の弘仁元年、空海は高雄山神護寺に住し、上表して高雄寺で仁王經の大法を修し、國家鎭護の祈禱をなした。これから空海の學德は世に知られ、諸大寺の學僧が來て、敎を受ける者が多くなつた。嵯峨天皇は學を好まれたので、空海が詩文・書畫に長じて居るのを愛せられ、屢々宮中に召して、方外の淸談を試み、韋卑の別を忘れられたといふ。

空海は閑靜の地に道場を起さうとし、弘仁七年、紀伊の高野山上を選び、七月、勅許を得て寺院を建て、數年の後に成就したが、これが金剛峯寺である。十四年には朝廷から國家鎭護の道場として東寺を賜ひ、後には之に敎王護國寺の勅號を賜はつたので、本宗の根本道場となした。仁明天皇の朝には、空海の爲に眞言院を宮中に建てられた。間もなく高野山に隱棲したが、承和二年三月二十一日、六十二歲で入寂した。醍醐天皇は延喜二十一年十月に弘法大師の諡號を賜はつた。

空海は、淳和天皇の天長五年に京都に綜藝種智院を創立した。其の敎科は佛典を主とし、傍ら儒學をも授けた。其の敎師としては僧・俗を並び用ひたが、就學者の數も頗る多かつたといふ。當時、唐では學問が大いに開け、坊には閭塾があり、縣には鄕學があつたが、日本には京師に大學あるのみで、其の下に立つ學校がなかつた。空海は唐の制度を見て歸り、閭塾にならつて此の學校を開いたといふから、他の貴族學校とは其の趣を異にし、平民の子弟をも敎育したので、當時の一異彩であつた。

空海が詩文を能くし、書道に秀でて居たことは、何人も知る所である。嵯峨天皇・橘逸勢・空海を三筆といふ。水鏡には、「さてまた應天門の額を書かせ給ひしに、上の圓なる點を忘れ給ひて、門にうちて後、見つけ給ひて、驚きて筆をぬらして投げ上げ給ひしかば、その所につきにき。見る人、手を拍ちあざむ事限り無く侍りき」とある。空海の傳へた書道の流派を大師流といふ。世傳によれば、平假名を以て空海の作だといふが、これは確でない。一說によれば、空海は當時世に行はれた平假名を集めて以呂波歌を作つたといふ。著書も多く、佛書には三敎指歸・卽身成佛義・十住心論・般若心經秘鍵など數種があり、書道には篆隸萬象義があり、詩文を集めたもの性靈集といふ。

（空海の筆蹟）

曾て空海は東海道を巡錫し、弘仁十一年には下野の二荒山に登つて補陀勝道の遺跡を訪ひ、既にして高野山に歸り、また讃岐に下つて萬農池開鑿のことに携はつた。この池は今の讃岐國仲多度郡神野村館野の山中にある。萬農は眞野と通ずる。周圍が二里餘で、金藏寺川の水源である。空海の穿つてから年を經て形を失つたが、現在の池は寬永三年に再び掘つたものである。空海が着く諸國をめぐつて佛敎を弘め、道を開き橋を架け、世道人心を開發した功績は決して尠少でない。

く

クールベー Courbet

事蹟 十九世紀に於ける佛蘭西の寫實派の畫家である。西紀一八一九年（我が仁孝天皇の文政二年）に生れたが、畫家となつて徹底的な寫實主義を以て終始した人である。彼の寫實主義は、彼の唯物觀に基づいて居り、彼が好んで下層社會の勞働者の生活を描いたのも、彼の唯物觀から來て居る。佛蘭西の繪畫は、此のクールベーあたりから大いに近代的になつて來たが、彼の風景畫などは、印象派の先驅をなしたものと見てよい。遺作中では石割・オルナンの埋葬などが人口に膾炙して居る。歿したのは一八七八年（明治十一年）である。

く

くげう 公曉

名號 幼名を壽哉といひ、薙髮して公曉といふ。

系統 源頼家の第二子で、母は賀茂六郎重長（源爲朝の孫）の女である。

事蹟 土御門天皇の元久元

年七月、父頼家が弑せられた時、善哉は年僅に四歳であつたが、祖母政子は其の幼孤なのを憐み、鶴ヶ岡八幡宮の別當尊曉の門弟とした。ついで政子の邸で著袴式を擧げ、建永元年十月、政子の命で源實朝の養子と爲し、始めて營中に入れた。建暦元年九月、定曉僧都を師とし、薙髪して名を公曉と改め、定曉に從つて京都に上り、やがて園城寺に入り、明王院の僧公胤に從つて業を受け、建保五年六月鎌倉に下り、政子の命によつて鶴ヶ岡八幡宮の別當に補任せられた。

順德天皇の承久元年正月二十七日の夜、實朝は右大臣に拜せられた拜賀の禮を鶴ヶ岡八幡宮で行つた。公曉は實朝及び北條義時を殺して、父の仇を報じようと謀り、また將軍にならうといふ意志があつたが、遂に此の夜、社前の石階で實朝を刺殺した。公曉は三浦義村に援を求めようとしたが、義村はこれを北條義時に告げた。義時は政子と謀り、義村に殺害せよと命じたので、義村は長尾定景を遣つて公曉を殺させ、其の首を幕府に送つたが、時に公曉は年十九であつた。

一說に據れば、公曉が實朝を殺したのは、源氏の正統を斷ち、自ら權を專らにせんとする北條氏の奸計で、卽ち義時は人を使ひ、公曉を敎唆して實朝を殺させ、其の罪として公曉を殺し、世を欺いたものであるといふが、併し確な證據はない。承久記に「今、思ひ合すれば、別當阿闍梨（公曉）、將軍（實朝）を討ち奉らん爲めに、三年が間、窺ひ給ふと雖も、終に本望を遂げ給はず、此の拜賀の時節を、天の與へと悅びて思し立つ」とあるのを見ると、義時の敎唆を待たずとも、此の事が起る樣になつたか、熟考すべき疑案である。要するに公曉も殺意があり、義時も人を使つて敎唆し、相俟つて此の事件が起つたものと思はれる。「みなもとのさねとも・源實朝」の項を參照されたい。

草壁皇子

くさかべのわうじ

名號 日並知皇子ともいひ追號を長岡天皇・岡宮御宇天皇ともいふ。

系統 天武天皇の第一皇子で、御母は蒐野讃良皇后（持統天皇）である。

事蹟 天智天皇の元年、大津宮で誕生された。天智天皇崩御の翌年、壬申の亂が起つた時には、天武天皇に從つて吉野を出發し、伊勢（桑名）・美濃（不破）に赴かれた。九年二月、天武天皇の皇太子となり、爾來、母后と共に勅を奉じて萬機を攝せられたが、十三年に淨廣壹に進まれた。既にして天武天皇が崩ぜられ、母后が卽位されたが、これが持統天皇で、皇子は遂に卽位されず、持統天皇の三年四月に至り、御年二十八歲で薨ぜられた。眞弓丘に葬る。

草壁皇子は阿閉皇女を妃とし、文武天皇・元正天皇を產まれた。故に文武天皇の慶雲四年四月に至り、草壁皇子の忌日を國忌とし、また淳仁天皇の天平寶字二年八月に至り、追尊して岡宮御宇天皇と稱せられた。

楠木正成

くすのきまさしげ

名號 小字を多聞丸といふ。

系統 左大臣橘諸兄の後裔で、父を楠木正康といふ。

事蹟 元弘元年八月、北條高時の兵が西上したので、後醍醐天皇は神器を奉じ、藤原藤房を隨へて、密に笠置寺に行幸され、勅を近國に下して勤王の兵を募られた。應ずる者が少く、天皇は憂慮されたが、時に河內の楠木正成は兵五百を率ゐて之に應じ、天皇の召によつて笠置の行在所に至り、「賊軍强しと雖も、謀を以てせば

打破る事難からず。されど勝敗は軍の習なれば、偶々敗るゝ事ありとも、御心を惱まし給ふ可らず、正成一人生きてありと聞召さば、御運は遂に開かる可しと思召し給へ」と奏し、九月、赤坂に城いて大義を唱へた。近國の幕軍が來攻したけれども、容易に陷らなかつたので、鎌倉の將大佛貞直は兵三十萬を率ゐて來攻した。正成が奇計を以て屢々これを敗つたので、幕軍は遂に驕ふ可らざるを知り、遠くから城を圍んで糧道を絕つた。時に城中は糧が殆んど盡き、支へる事が出來なくなつたので、正成は城を燒いて金剛山に逃れた。よつて北條仲時の臣湯淺定佛は赤坂城を守つた。

元弘二年の夏、正成は赤坂城を改め落し、官軍は大いに振つたが、ついで金剛山に還り、千早に城いて之に據つた。三年の春、幕軍は悉く千早に集合し、力を盡して攻めたが、正成が險に據り、策を施して拒ぎ戰つたので、幕軍は容易に拔くことが出來ず、持久の計をなした。卽ち正成は藁人數十を排列して敵を誘ひ、或は火炬を擲げ、或は油を灌いで、敵の櫓橋を燒き、絕えず奇計を回らして善戰した。偶々近郡の民兵は護良親王の令旨を奉じて、敵の糧道を絕つたので、困つて逃亡する者が相繼ぎ、遂に圍を解いて去つた。

此の間に勤王の諸將が蜂起した。時に後醍醐天皇は隱岐に在り、勤王の諸將の蜂起を聞き、元弘三年閏二月、六條忠顯を從へて伯耆に逃れ、名和長年を頼つて船上山の行宮に遷られた。鎌倉の將足利高氏（尊氏）が歸順し、五月、赤松則村・六條忠顯と協力して六波羅を陷れ、新田義貞は鎌倉を攻略して北條氏を滅ぼした。六月、天皇は京都に還幸されたが、時に楠木正成は七千騎を率ゐ、兵庫に至つて奉迎し、其の前驅となつて京都に入つた。やがて建武の中興が成り、正成は功を以て檢非違使左衞門尉兼河內守を授けられ、攝津・河內・和泉の守護となり、河內太夫判官と稱し、ついで記錄所寄人となつた。

斯くて鎌倉幕府は倒れ、政權は朝廷に復したが、併し長く幕府の政治になれ、建武中興を喜ばない武士も尠少でなかつた。殊に尊氏は武家政治再興の大望を抱き、是等の武士をなつけ、義貞と護良親王とを嫌つて居た。親王は夙に其の野心を看破され、尊氏を除かうと謀られたので、尊氏は天皇の寵姬藤原廉子と結び、親王を讒奏して鎌倉に幽閉した。當時、尊氏の弟足利直義は相模守となり、皇子成良親王を奉じ、鎌倉に居て東國を治めて居たが、建武二年七月、北條高時の子北條時行は、父の遺志をつぎ、鎌倉を恢復しようとし、兵を信濃に擧げて鎌倉を襲つた。時に直義は防ぐことが出來ず、人を遣つて護良親王を弑し、成良親王を奉じて西走した。

尊氏は之を機として時行征討を請ひ、勅許を待たずに東下し、時行を打ち破つたが、間もなく鎌倉に據つて叛し、自ら征夷大將軍と稱し、義貞を除くを名として兵を進めたが、建武中興に不平を抱く將士の從ふ者が多かつた。天皇は大いに怒り、義貞及び北畠顯家に勅して、尊氏を討たせられた。時に顯家は陸奥守となり、皇子義良親王を奉じて陸奥を治めて居た。顯家は未だ到着しない中に、義貞は弟脇屋義助と東進して、竹下（駿河）・箱根（相模）に戰つて敗退したので、尊氏・直義は之を追つて西上した。偶々播磨の赤松則村も尊氏に應じ、相共に東西から京都を犯した。時に延元元年である。正月、天皇は之を避けて比叡山に幸されたが、やがて顯家は義良親王と陸奥から來り、正成・義貞・長年と協力し、賊軍を糺河原に破つて京都を恢復し、尊氏兄弟は身を以て逃れ、西航して九州に渡つた。斯くて天皇は再び京都に還幸された。

尊氏は九州に入り、菊池武敏を

筑前の多々良濱に破り、直義と共に九州・四國・中國の新設を率ゐ、延元元年四月、捲土重來の勢を以て海陸兩道から東進した。時に義貞は賊黨赤松則村を播磨の白旗城に攻めて居たが、尊氏兄弟の東上するを聞き、これを兵庫に迎へ討つことにした。賊勢が頗る盛んであつたから、天皇は正成に勅して義貞を援けさせられた。時に正成は勝利の期し難いことを知り、京都を發して櫻井驛に至り、子正行を河内に歸し、且つ戒めて、「今日の役、天下安危の決する所なり。我れ必ず生還せず。我れ死せば、天下は足利氏に歸するや必せり。我が族黨、一人の存するあらば、則ち率ゐて以て金剛山の舊址を守り、身を以て國に殉せよ。汝の我れに報ふる所以、これより大なるは莫し」といつた。正成は進んで兵庫に至り、兵七百を以て湊川に陣し、以て尊氏の陸軍に當り、義貞は和田岬に屯して、以て直義の水軍を拒がうとした。既にして尊氏の先鋒細川定禪は、舟師を率ゐて紺邊に上陸しようとしたので、義貞はこれと戰つたが、やがて尊氏の全軍が兵庫に來た。時に正成はこれを望見し、弟正季に向つて、「我が軍隔絶し、賊前後に滿つ。また智計の施すべきなし」といひ、卽ち直義の陣に突擊し、殆んど直義を捕へようとしたが、尊氏はこれを見て、兵六千を遣つて軍後を斷つた。正成は奮戰數回に及んだが、衆寡敵せず、士卒は殆んど戰死し、自分も十餘創を蒙り、退いて民家に入り、正季を顧みて、「今日死を九泉に送る。吾子何處にか魂を託せんと欲するか」と問ふと、正季は笑つて、「願はくは七生人間に生れて賊徒を滅さん」と答へた。乃ち正成は怡然として相互に交刺して死んだ。時に延元元年五月で、年四十三歳であつた。

後醍醐天皇は痛く追悼され、正三位左近衛中將を贈られた。明治天皇の世に至り、深く其の忠節を嘉みし、更に從一位を追贈された。

神戸の湊川神社は、其の戰死の地であつて、境内にある德川光圀建設の碑には「嗚呼忠臣楠子之墓」と記しとある。

くすのきまさすゑ
楠木正季

系統 楠木正康の子で、楠木正成の弟である。

事蹟 河内の人で、兄正成と共に勤王の兵を起し、相援けて各地に轉戰した。延元元年五月、足利尊氏・足利直義が九州・四國・中國の新設を率ゐ、海陸兩道から東進した時、正成と共に湊川に陣した。尊氏の全軍が兵庫に集合したのを見て、正成は正季に向ひ、「我が軍は隔絶し、敵は前後に滿つ。また智計の施すべきなし」といひ、先づ前面の敵を破り、次に背面の敵に當る計を立てたが、正季も之に贊成し、七百騎を率ゐて直義の陣に討ち入り、將に直義を捕へようとしたが、偶々尊氏が六千餘騎を遣つて軍後を絶つたので、奮戰したけれども衆寡敵せず、僅か七十三騎となり、且つ身に數創を蒙つたので、正成と共に民家に還れて盡きようとした。時に正成は正季を顧みて、「今日死を九泉に送る。吾子、何處にか魂を託せんと欲するか」と。正季は笑つて、「願はくは七生人間に生れて賊徒を滅さん」と答へた。正成は怡然として、「罪業深き惡念なれども、我が考へもまた然り、さらば同じく生を替へて、この本懷を達せん」といひ、互に交刺して絶命した。

くすのきまさつら
楠木正行

系統 楠木正成の長子で、楠木正時・楠木正儀の兄である。

事蹟 延元元年四月、父正成が湊川に出征する時、正行は僅か十一歳であつた。正成は櫻井驛で正行を戒めて、「今日の役、天下安危の決する所なり。我れ必ず生還せず。我れ死せば、天下は足利氏に歸するや必せり。我が族黨、一人の存するあらば、則ち率ゐて以て金剛山の舊址を守り、身を以て國に殉せよ。汝の我れに報ふる所以、これより大なるは莫し」と言つた。正行は父の遺訓を奉じ、常に仇を報ずることを祈念し、遊戲の際にも群童を仆して敵を斬る眞似をなし、竹馬に乘つて足利尊氏を追ふ眞似をなし、長じて檢非違使となり、左衞門尉となり、河内守を兼ね、常に南朝の爲に盡した。

延元元年十二月、後醍醐天皇が花山院を出て吉野に遷幸されたので、正行は和田正朝と車駕を護つて吉野に入つた。四年八月、後醍醐天皇崩じ、十月、後村上天皇が卽位されてからは、屢々兵を攝津の住吉附近に出して、敵軍と挑戰した。

正平二年、官軍は河内の東條に據つて四方を經略したが、八月、正行は兵を率ゐて紀伊に入り、隅田城を攻略したので、熊野の地は概ね南朝に屬し、また攝津・和泉の兵もこれに應じ、官軍は大いに奮つた。尊氏は細川顯氏を遣つて正行を攻めさせたが、九月、正行の爲に破られたので、十月、更に山名時氏を遣つて正行に當らせた。十一月、正行は時氏の軍を攝津の瓜生野（現今の大阪市の南方）に破り、轉じて顯氏を天王寺に破つたので、官軍は大いに振ひ、將に京都に迫らうとする勢であつた。

時に尊氏はこれを憂へ、高師直及び其の弟高師泰に兵六萬を授けて正行を攻めさせた。正平三年正月、師直は和泉の堺浦に陣し、師泰は河内の佐々良に屯した。正行は血戰して勝敗を決しようとし、弟楠木正時・和田賢秀らと死を誓ひ、一族百四十餘人を率ひて吉野の行宮に行き、天皇に拜謁して暇を請うた。時に天皇は御簾を高く捲かせて、龍顏麗はしく諸卒を照覽あり、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つ事を得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤りを慰する條、累代の武功返す〳〵も神妙なり。大敵、いま勢を盡して向ふなれば、今度の合戰は天下の安否なるべし。進退度に當り、反化機に乘ずる事は、勇士の心とする處なれば、今度の合戰、手を下すべきに非ずと雖も、進むべきを知りて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕、汝を以て股肱とす。慎みて命を全うすべし」と仰せられた。ついで正行は後醍醐天皇の陵に詣で、同盟の姓氏を如意輪堂の壁板に題し、其の末に「かへらじとかねて思へば梓弓、なき數にいる名をぞとゞむる」といふ和歌を記し、各自の髪を截つて佛殿に納めて出發した。天皇は四條隆資を遣つて正行を援けしめられた。

やがて師直は兵を河内に進め、伊駒山南麓・飯森山・外山・四條畷の四處に分配し、自分は餘軍を率ゐて後方に控へた。隆資は兵三千を率ゐて、陽に飯森山に向ふ形勢を示して敵を牽制し、正行は兵三千を率ゐて四條畷から進んだ。飯森山の敵はこれを望み、兵を分遣して邀擊したので、正行は先鋒を遣つて之を敗り、後軍を遣つて四條畷の敵と戰はせた。ところが飯森山・伊駒山南麓の敵兵が進擊して、正行の後軍を破つた。正行はこれを顧みる暇がなく、兵三百を以て師直の軍中に突入し、其の幕下に迫つた。

時に上山高元は僞つて師直と稱し、陣を冐して戰死した。敵所が全く同じであつたから、正行は大いに喜び、首を空中に擲つて手に承けたが、やがて僞物である事を知り、地に投じて更に奮戰した。

此の日、戰ふこと、凡そ三十餘合、正行の從卒は殆ど盡きた。乃ち殘兵五十餘人を率ゐて、僞つて逃走する眞似をなして師直を誘つた。敵はこれを覺り、支兵三百を遣つて追擊した。正行は五十餘級を斬り、再び進んで師直の陣に迫

つた。併し正行兄弟は身に數節を受け、士卒も重傷して戰ふことが出來なかつた。正行は、「吾事畢れり、賊の捕虜となる勿れ」と叫び、正時と交刺して斃れた。時に二十三歳である。

今の別格官幣社四條畷神社は正行を主神とし、正時・和田賢秀を合祀したものである。

くすのきまさとき
楠木正時

系統 楠木正成の次子である。楠木正行の弟で、楠木正儀の兄である。

事蹟 父正成の湊川戰死後兄正行と共に勤王に盡した。正平三年正月、足利尊氏の將高師直及び高師泰は、兵六萬を率ゐて來攻し、和泉の堺浦及び河内の佐々良に陣した。正時は正行に從ひ、一族百四十餘人と共に吉野の行宮に至り、龍顏を拜して暇を告げ、ついで後醍醐天皇の陵に詣で、河内の四條畷に赴き、正行と共に兵三千を以て師直と戰ひ、更に手兵三百を率ゐて師直の幕下に迫つた。此の日、戰ふこと三十餘合、兵は殆んど盡きた。更に殘兵五十餘名を集めて奮戰し、師直に近づいて之を敗らうとした。

時に須々木四郎といふ強弓の達人が、狙ひ寄つて散々に射つた。正時は眉間を射られ、正行は左右の膝口三箇所、右の頰、左の目尻を射られ、また士卒の死する者も多かつたので、正行は「吾事畢れり、敵の捕虜となる勿れ」と叫び、正時と交刺して北枕に伏し、自餘の三十二人も皆これに殉した。

正時は正行と共に、別格官幣社四條畷神社に合祀されて居る。「くすのきまさつら・楠木正行」の項を參照されたい。

くびらい
忽必烈

名號 元の世祖といふ。

系統 成吉思汗（鐵木眞）の孫で、拖雷（睿宗）の子である。蒙哥の弟であつて、旭烈兀の兄である。

事蹟 蒙古人は外蒙古のオノン河・ケルレン河の上流地方に住して、遼・金に屬したが、鐵木眞といふ英傑が出でて、其の部長となり、内蒙古・外蒙古を併せてオノン河畔で大汗の位に即き、成吉思汗（强盛な君主の義）と號した。これを蒙古の太祖とする。時に西紀一二〇六年（我が土御門天皇の建永元年）である。其の後、成吉思汗は西夏を攻め降し、金を伐ち、中央亞細亞を平げ、また其の別軍は歐羅巴に入り、阿羅思（露西亞）の諸侯を擊破した。

（忽必烈）

成吉思汗の歿後、第三子の窩濶臺（太宗）が大汗の位に即いたが、窩濶臺は金を伐ち、宋と協力してこれを滅ぼした。時に西紀一二三四年（我が四條天皇の文暦元年）である。更に拔都を元帥とし、大軍を發して歐羅巴を侵略させた。拔都は阿羅思を蹂躪して、歐羅巴の中部に進み、一軍はポーランドから獨逸の東南部に入り、到る處に敵を破り、全歐洲を恐怖させたが、窩濶臺が歿したので東歸し、拔都は獨り留つて欽察汗國を建設した。首府を薩來といひ、裏海に流入するボルガ河の下流にある。

窩濶臺の歿後、長子の貴由（定宗）が大汗の位に即き、三年にして歿し、拖雷の子蒙哥（憲宗）が大汗の位に即いた。蒙哥は弟旭烈兀を遣つて亞細亞を征伐させた。旭烈兀は波斯地方から小亞細亞を平げて、其の地に伊兒汗國を建設した。首府はタブリースといひ、波斯の西北部にある。

蒙哥の歿後、其の弟の忽必烈（世祖）は開平（多倫諾爾）で大汗の位に即いたが、時に西紀一二六〇年（我が亀山天皇の文應元年）である。四年の後に都を燕京（北京）に遷し、更に七年を經て國號を元と稱した。忽必烈は大擧して宋を伐ち、宋の忠臣文天祥を捕へて燕京に送致して殺し、遂に宋を滅ぼした。

日本は唐の末に遣唐使を罷めてから、宋の世には通聘が全く絶え、僧徒・商人の時々往來するに過ぎなかつたが、元の忽必烈は、日本を招徠しようとし、其の事を高麗の元宗に命じて、國書を遣つたけれども、鎌倉の執權北條時宗は、其の文の無禮なのを怒つて答へなかつた。其の後、忽必烈は趙良弼を遣使したけれども、太宰府から逐ひ還されたので、西紀一二七四年（我が亀山天皇の文永十一年）に至り、高麗の兵二萬餘人を遣つ

（元の最大領域）

て對馬・壹岐に寇し、明年、更に杜世忠らを遣使したが、北條時宗は是等の使者を斬り、西海の邊備を嚴にした。斯くて西紀一二八一年（我が後宇多天皇の弘安四年）に至り、蒙古・高麗の軍に、水驟に長じた江南の軍を加へて、十四萬餘人を以て筑紫に寇し、我が將士に拒がれて、連に利を失つた折柄、暴風が起つて、四千餘艘の軍艦は枯葉の樣に吹き擺かれ、大將范文虎らは大敗して遁げ還つた。

忽必烈は日本征伐に失敗したけども、元の武威は、これが爲に挫けたのではない。宋を滅ぼした勢に乘じて、益々兵力を南支那に集中し、雲南・緬甸・占城・安南・南海の諸邦を征服した。斯くて蒙古の領地は、窩濶臺・蒙哥の時に、西亞細亞・東歐羅巴に廣がつたが、忽必烈の時に至り、東南亞細亞の諸國・諸島まで、其の威風に靡いた。

斯樣に蒙古の領土が歐亞大陸に跨つたのと、蒙古人が交通の便を圖つたのとにより、東西の交通は大いに開け、海陸の二路から、外國人の來往する者が頗る多かつた。就中、伊太利人マルコ＝ポーロは忽必烈に仕へ、歸國の後、東方見聞錄を著して、始めて日本を歐羅巴人に紹介した。「ほうでうときむね・北條時宗」「マルコ＝ポーロ・Marco-Polo」の項を參照されたい。

くまがいなほざね
熊谷直實

名號 通稱を二郎といひ、法名を蓮生といふ。

系統 鎭守府將軍平貞盛の後裔である。父を平直貞といふ。

事蹟 幼にして父を失ひ、兄の直正と共に、鯖の夫の久下直光に養育された。曾て武藏國熊谷鄕に互熊があり、鄕民は大いに苦み、相約して熊を殺し得た者を黨長にする旨を觸れ出したので、直實は山に入つて互熊を殺し、私黨の旗頭となり、熊谷を以て氏とした。時に十六歳である。

直實は、性格が慷慨剛直であつ

た。曾て直光に代つて京都に番直した時、同輩が代人だと言つて輕侮したので、直實は大いに憤り、直光には默つて、平知盛に仕へ、其の爲に直光から所領を奪はれた。既にして直實は歸郷し、大庭景親と共に源頼朝を石橋山に破つた。後には頼朝に降り、頼朝が佐竹秀義を攻めた時には、平山季重と共に軍に從ひ、先登して殊功があつた。頼朝は大いに之を賞し、「日本第一の剛者なり」といひ、直光の奪つた地を復し、世々地頭に任じた。

壽永三年、源義經に從つて源義仲を宇治に攻め、また一ノ谷で善戰し、藤太兼助・平敦盛を捕へた。殊に敦盛を討取つた物語は、相傳へて士林の佳話となつて居る。卽ち平家は一ノ谷の敗後、海に航して逃れたが、敦盛は獨り後れて海に入り、從兄平知盛の船に向つて馳せた。時に直實はこれを呼び止め、大聲に名乘つて鬪を求めたので、敦盛は馬首を廻して水邊に至り、直實と組んで馬から墜ちた。直實は其の上に跨り、膝で鎧の袖を抑へ、刀を拔いて首を刎ねようとしたが、敦盛の妙齡麗容を見て、これを殺すに忍びなかつた。敦盛は、「戰に出づる、固より生還を期せず。汝、速に我れを殺せ」といつたので、遂に首を刎ねた。始め直實は、曉の刻に城門に向つたが、樓上に笛の聲が聞えたので、「平家の公達、風流かくの如し。我れ何ぞ相殺すに忍びん」と言つて嘆じた。然るに敦盛の腰に笛を挿んだのを見て、「先に聞く所は、卽ちこれならん」と、首を義經に請ひ、笛と共に平經盛（敦盛の父）に送つたといふ。

曾て頼朝が鶴岡で流鏑馬を見た時、直實に命じて的を樹てさせたが、直實は憤つて、「射る者は騎馬し、樹つる者は步す。優劣あるに似たり。臣敢て命を奉ぜず」と言つたので、頼朝は諦して、「器を擇みて、事に從はしむるのみ。固より優劣を別つの意に非ず。且つ的を樹つるは賤役に非ず、新日吉祭御幸の日、此の役を勤めし者は、龍口本所の衆なり。今其の故實を存す。汝拒む勿れ」と言つた。併し直實が從はなかつたので、頼朝は怒つて其の邑を削つた。

後鳥羽天皇の建久三年、久下直光と地界を爭ひ、遂に鎌倉に訴へた。頼朝は親しく之を裁決し、難詰數回に及んだ。口の訥な直實はよく辯ずる事が出來ず、大いに怒つて、「梶原景時、直光に當援し、巧言先に入り、臣を以て曲とす。證する所の文書、用ふる所無し」と言ひ、これを庭に投じ、刀を拔いて髮を斷ち、遂に家に歸らず、馬を馳せて京都に向つた。頼朝が人を遣つて止めたけれども、止めることが出來ず、遂に黑谷の僧源空の弟子となり、名を改めて蓮生といつた。數年の後、鎌倉に遊んで頼朝に謁し、兵法武藝を談じたが、傍聽の人々は皆感嘆した。頼朝は切にこれを留めたけれども、聽かないで京都に歸つた。土御門天皇の承元二年九月十四日に歿した。自ら死期を知り、子直家に告げたので、直家が急いで行くと、果して其の言の通りであつた。

くまざはばんざん
熊澤蕃山

名號 名を伯繼といひ、字を了介といひ 蕃山・自遊軒などの號がある。通稱を次郎八といひ、後に助右衞門と改めた。

系統 本姓は野尻氏で、藤兵衞一利の子である。外祖父熊澤守久に養はれて其の姓を冒した。

事蹟 元和五年に生れた。寛永十七年、板倉重昌の推薦により、祿七百石を以て備前岡山藩主池田光政に仕へた。光政は頻りに獎奉を加へ、大いに用ひようとしたが、蕃山は學未熟の故を以て固辭し、許可を得て遊學の志を立て、近江國淵原に蟄居し、專ら書典を研究し、二十二歳の時に始めて四書集註を讀み、粗々文義に通じ、二十四歳の時に中江藤樹に就き、道を問ひ疑を質し、孝經・大學・中庸に通じ、受業一年に達しない中に桐原に歸つた。

時に池田光政は精勵治を圖り、深く蕃山の用ふべきを知り、再び招聘しようと欲し、屢々京極高通に因つて旨を諭した。よつて蕃山は再び出仕したが、時に二十七歳である。光政は大いに喜び、祿三千石を賜ひ、國政に參與させたが、巨室令家、相率ゐて其の命を聞き、國中善く治つた。卽ち蕃山は德を布き、惠を流し、貧を賑はし、困を救ひ、勾査を擺め、賭博を禁じ、淫祠を毀ち、節義を表し、其の聖教を明にし、以て異端を闢き、武備を嚴にし、以て不虞を戒むるなど、諸新政は海內の耳目を驚かした。太宰春臺が湯淺常山に與へた書には、「夫れ烈公は、不出世の英主、熊澤子を得て、而して任ずるに國政を以てす、明良の遇、實に千載の一時なり」とある。

而して蕃山は屢々光政に從つて江戸に往來した。蕃山の名聲を聞く者は、競つて訪問し、貴紳・閣老も蕃山を上客として優禮したので、名聲が頓に高くなつた。將軍德川家光も、召見しようと思つたが、未だ果さないで歿した。

蕃山は備前にあつて重用され、畫策する所が頗る多く、治績の見るべきものがあつたけれども、政を親ることが漸く久しく、同列の士中には之を妬む者があり、殊に治水・新田に關し、藩老の津田と議が合はず、互に確執を生じ、屢々其の短を暴揚し、讒言もまた起つた。明曆二年、偶々光政に從つて和氣郡木谷に狩し、過つて崖から墜ちて四肢を傷けた。或は落馬ともいふ。蕃山はこれから稍々道世の志を絕し、間もなく職を辭し、萬治元年、京都に寓することになつた。

京都では公卿大夫の學行を慕ひ蕃山に師事して道を問ふ者が甚だ多く、名聲が一世に高かつた。時に牧野親成は讒を信じて猜忌し、流言もまた行はれた。よつて寛文七年の春芳野山に隱居し、ついで山城の鹿背山に遷れた。九年、酒井忠清・板倉重矩の旨により、蕃山は明石に移され、明石侯松平信之に監せられる事になつたが、信之は蕃山を師として禮遇した。延寶七年、信之が大和郡山に轉封するに及び、蕃山も移つて郡山の矢田山に居つた。貞享四年八月、信之が下總古河に轉封するに及び、蕃山も信之に從つて古河に移り、同年十月、將軍德川綱吉の旨に忤ひ、遂に古河の頼政廓に幽閉されたが、元祿四年八月、七十三歳で歿した。

蕃山幽閉の原因には諸說があるが、(一)宋學に反對して陽明學を主張したこと、(二)在京中公卿に親昵したこと、(三)才學の爲に人に妬まれたことなどを遠因とし、(四)蕃山の政論草稿（大學或問であるといふ）を、門人中の旗士が幕府に呈した爲に、遂に其の忌憚に觸れたのを近因とし、遂に幽閉されたのであるといふ。

くりたさだのじよう
栗田定之丞

名號 幼名を仁助といふ。

系統 高橋內藏右衞門勝定の三男である。後に栗田家を繼いだ。

事蹟 明和四年、羽後の秋田城下に生れた。十七歳の時に始めて藩に仕へ、寛政九年、二十三歳の時に砂取役・林取立役を仰付かつた。秋田藩では風砂の害を防ぐ爲に斯種の役目があつたが、定之丞は坊風林を完成し、風砂の害を防ぐ爲に日夜苦心した。藩の命を受けて、海濱に松苗を植ゑる事を村民に謀つたけれども、村民は海風の强い砂地には見込がないと言つて從はなかつたので、定之丞は私費を投じて、山本郡大內田村に數萬本の柳を植付けた。翌年の春になると、柳は砂の底に埋れて

見る影もなかつた。定之丞は一時の失敗に屈せず、更に工夫を重ね、五六百間もある海岸一面に木の枝を挿し列ね、其の枝に一々古草鞋を結びつけ、其の後方の風の當らない處に、柳と胡頽子とを植付けたが、此の方法は立派に成功し、翌年の春になると、青々と生長したので、毎年、此の方法で柳と胡頽子を移植した。斯くて大内田村の海濱には、四五年の間に絲の松が生え繁り、風砂の害を防ぐことが出來た。定之丞は山本郡から河邊郡に移り、新屋・中村・濱田の三村民に松の防風林を仕立てる事を勸め、從來の方法を說明したが、村人は海風の強い砂地には見込がないといつて從はなかつた。よつて從來の方法により、新屋村の海濱に植付けて成功するに及び、中村・濱田の二村民も定之丞に植林を請うに至つた。斯くて文化年間には、毎年十月から十二月の間に胡頽子を植ゑ、次いで柳を植ゑ、翌年の春から夏にかけて松の苗木を移植した。

定之丞は防風林の仕立に七年の歲月を費し、植付けた苗木は三百萬株を超えたが、前後十七年間の苦心は立派に報いられて、其の恩惠を受けて居る民衆は甚だ多い。文政十年、六十一歲で歿したが、土地の人々は其の德を慕ひ、大内田・新屋の兩邑には、栗田神社を建てゝ其の靈を祀つて居る。

くりばやしじへゑ
栗林次兵衞

事蹟 筑後國生葉郡夏梅村の庄屋である。久留米の東なる筑後川流域地方には、肥沃な大平野がありながら、河底が深く、水流が急な爲に、今から二百六十年前までは、灌漑の便がなく、此の沃土も荒廢した雜草・雜木の地で、居民も飢餓に苦しむ有樣であつたから、久留米藩でも免稅同樣に取扱つて居た。

寛文三年、大旱魃が續いた爲に、農民は全く饑渴に陷り、家を捨てて他鄕に流浪する者が續出した。時に栗林次兵衞は、同郡淸宗村庄屋木松平右衞門・同郡高田村庄屋山下助左衞門・同郡今竹村庄屋重富平左衞門・同郡菅村庄屋猪山作之丞らと謀り、農民の困窮を根本的に救濟する爲には、筑後川の急流を斷ち、大石・長野に堰を開き、溝を通じて水利・灌漑の便をはかる外に道はないと考へ、誓詞を作り血判を押し、生命を賭して素志の貫徹を誓つた。

偶々郡奉行高村權内が巡視し、山下助左衞門の許に宿したので、五人の庄屋は權内に面談し、心願の筋を述べて、賛成助力を得て、開鑿事業に關する設計書を作り、吉井の大庄屋田代彌三左衞門の許に内意を申し出た。此の計畫を聞いた近隣の庄屋も加盟を請うた。同盟十三箇村の庄屋は願書に連署し、詳細な設計書及び圖面を添へ、大庄屋の奥書を乞ひ、郡奉行の手を經て、公式に久留米藩に出願したが、時に寛文三年の秋である。

久留米藩主有馬賴利は、英明で仁政を行ひ、地方救濟の爲に努力して居たが、併し筑後川を堰止めて石門を設け、二里餘の水道を鑿つことは、未曾有の大工事で、到底百姓の手では成功覺束ないと考へられた爲に、容易に許可が下らなかつた。のみならず、此の計畫の水路に當る村々の庄屋は、藩府に上書して、洪水の際の患を說いたので、藩府の許可は遲延するのみであつた。

五庄屋は此の形勢を見て、熱烈に哀訴懇願したが、かねて五庄屋の意氣に感じて居る郡奉行高村權内は、郡内が二派に別れて爭ふを遺憾とし、同郡原口村に出張し、願主たる十三箇村の庄屋と、之に反對する庄屋とを一時に召喚し、其の對審を行つたが、五庄屋の請願條件が正當であつたので、郡奉行は自分の名義を以て、手强く藩府に請求したので、寛文三年十二月、愈々許可される事になつた。

よつて五庄屋は郡奉行に向ひ、「若し此の工事が不成功に終つたならば、五名の者は工事場で磔刑に處せられても苦しからず」と誓つた。

寛文四年正月、愈々大石・長野の堰渠開鑿工事が始められ、藩府からは丹羽賴母重次が工事監督として派遣された。重次は郡奉行高村權内・國友彦太夫・下奉行青沼市左衞門・足立小兵衞・穴生權左衞門・穴生六太夫以下鐵砲衆三十餘名を從へ、大石村に逗留して工事を監督した。人夫は生葉・竹野・山本の三郡から繰出し、更に願村からは自費の人夫を出し、人夫の賄料及び諸入費は、一切願村たる十三箇村の庄屋で處理する事にした。五庄屋は晝夜詰切りで工事を督勵し、郡奉行は五人分の磔刑道具を持ち出して衆を奬勵した。農民は口々に「庄屋樣を殺すこと勿れ」と、老若男女を問はず、日夜奮勵したので、大工事は意外に早く進み、翌年三月中旬には大堰を築く事になつた。而して更に筑後川の南岸大石村に開閉自由な一大水門を作り、そこから長野村まで二十七町三十間の大溝渠を掘り更に各村への分流を計畫し、水門を開けば、河水は滔々として溝渠を流れ、歡呼の聲が山野を動かすに至つた。五庄屋の心中を察すべきである。

此の大工事成功の爲に、生葉郡に七十餘町歩、竹野郡に五町六畝歩の新田が開かれた。寛文五年正月には、更に擴張工事に着手されたが、四月には藩主有馬氏が出張して偉功を賞した。斯くて從來の瘠地は勿ち肥沃の田地となり。寛文十二年には生葉・竹野・山本の三郡を通じて一千數百町歩の良田が出來た。五庄屋は此の大工事の成功によつて神の樣に敬はれた。百七十年後の今日に於ては、灌漑總段別二千百五十三町歩に及んで居るといふ。久留米藩は永く其の偉功を賞し、五庄屋の子孫をも優遇した。明治四十四年、明治天皇は五庄屋に從五位を追贈された。

くるはらりやうざう
來原良藏

「いとうひろふみ・伊藤博文」の項を參照されたい。

グレー
Gray

事蹟 十八世紀（アン女王時代）に於ける英吉利の文豪である。西紀一七一六年（我が中御門天皇の享保元年）に生れ、一七七一年（我が後櫻町天皇の明和八年）に歿したが、彼と同時代の文豪にデフォー・フィールヂング・ゴルドスミスらがあり、彼等は荒唐不稽の傳說を排斥して、人生世態の實相を眞寫することに努めた。隨つて市民日常の生活、若くは新敎僧侶の家庭狀態の如きは、彼等の競つて描寫した好材料であつたが、グレーの如きも、やはり同じ時代基調を帶びて居た。

グレース＝ダーリング
Grace Daring

傳略 グレースは英國のフアーン群島の燈臺守の娘である。或る年の九月、暴風雨の時に父と共に一艘の難波船を救助したが、これは昔あつた事である。グレースは自分の昔の家に近い墓地に葬られて居る。此の氣高い少女を表彰する爲に碑が建てゝあるが、それは一婦人が右手に短劍の權を握つて休息して居る姿を石に刻んだものである。今日では一の物語となつて居る。

くろだきよたか
黑田清隆

事蹟 薩州藩士である。明治元年、幕府方の松平容保が會津若松城に籠り、奥羽・越後の諸藩と結んで官軍に反抗するに及び、

官軍は白河口・越後口から會津に迫つたが、清隆は、越後口總督高倉永祐の參謀となつて戰功があつた。ついで榎本武揚・大鳥圭介が五稜郭に據るに及び、二年三月、清隆は山田顯義と共に諸藩の兵を率ゐて之を討ち、五月に蝦夷地を平定した。

明治政府が北海道の開拓をなすに及び、清隆は其の事業に當り、三年五月、開拓次官に任ぜられ、專ら樺太の事を管し、八月から樺太を巡視し、十月には海外に航し、諸國の開拓情況を視察し、四年六月に米國から歸り、開拓使廳の長官となり、北海道に屯田兵を置いて國防と開拓とに當り、また樺太の開拓に當つた。而して政府に建議し、「樺太の地たる沍寒磽确にして、これを領有するも、國家に利なきを以て、これが開拓に要する費を移して、北海道の經營に用ふるに如かず」といつたので、政府は此の建議に贊し、七年八月、駐露公使榎本武揚に命じ、露國政府と交渉させ、八年五月、樺太と千島とを交換するに至つた。

明治八年九月、我が雲揚艦が清國牛莊に赴く途中、偶々水を江華島に求めたが、守兵が俄然發砲したので、我が軍は之に應戰して砲臺を陷れた。清隆は特命全權辨理大臣となり、井上馨と共に朝鮮に赴き、同國政府に其の不法を責め、兼ねて修好を議したが、翌九年二月、朝鮮は其の無禮を謝し、且つ修好條約十二箇條を結び、釜山の外に仁川・元山の二港を開いた。

明治十年、西南の役が起るに及び、四月、清隆は征討參軍となり、長崎から肥後に航し、八代に上陸して賊背を衝いたので、早く熊本城の危急を救ふ事が出來た。

明治十八年十二月に組織された伊藤内閣の時には農商務大臣となり、二十一年四月には自ら總理大臣となつて内閣を組織したが、二十五年八月に組織された伊藤内閣の時には農商務大臣となり、臨時に總理大臣を兼ねた事もある。後に樞密顧問官となつたが、功によつて伯爵を授けられ、明治三十三年八月、六十一歳で歿した。

くろだきよてる
黑田清輝

系統 子爵黑田清綱の子である。

事蹟 慶應二年、鹿兒島に生れたが、明治十七年、法律研究の爲に渡歐し、約十年間佛蘭西に滯在したが、其の間に繪畫研究に轉換し、親しくラファエル＝コランに就いて印象主義の畫法を習得し、日本人として初めてサロンに入選し、明治二十六年七月に歸朝した。二十七年には山本芳翠の畫室を一般研究所として開放したので、清輝が其の主任となつて子弟を教養した。二十八年、第四回勸業博覽會に出陳した朝妝と題する婦人裸體畫は、滯佛中の作品であつたが、忽ち世の物議を惹起し、時の新聞紙には、「猥褻見るに堪へず」と書いたが、然るに新思想を抱く人々は、これに對して藝術の神聖を論じ、美の極致であると主張し、賛否兩論が一世の視聽を動かした。二十九年七月、東京美術學校に西洋畫科が新設されてからは、其の教授に任ぜられて子弟を教養した。同年九月、久米桂一郎・岩村透・安藤仲太郎以下の同志と謀り、白馬會と呼ぶ洋畫團體を組織し、年々展覽會を開催し、印象派の作風を鼓吹した。四十年、文部省主催美術展覽會の創設せらるゝに及び、第二部西洋畫の審査委員に擧げられ、大正十一年には帝國美術院長に任じた。また貴族院議員に選ばれたが、十三年、五十九歳で歿した。

クロパトキン
Kropatokin

事蹟 露西亞皇帝ニコラス二世の頃の將軍である。陸軍大臣となり、明治三十七八年戰役開始

間に極東視察に來り、日本に來遊し、露國宮廷に對して平和の商議を主張したが、用ひられず、やがて日露兩國が開戰するに際しては、露西亞軍の總司令官となつて滿洲に出征し、更に第一滿洲軍司令官となつた。

明治三十七年（西紀一九〇四年）二月對露宣戰布告があり、（一）陸軍大將黑木爲禎は第一軍を率ゐ、三月に鎭南浦に上陸し、進んで鴨綠江を渡り、九連城・鳳凰城を占領した。（二）陸軍大將奥保鞏は第二軍を率ゐ、四月に鹽大澳に上陸し、普蘭店・貔子窩・金州・南山を略して北進し、六月に得利子の敵を破つた。（三）陸軍中將川村景明は第十師團を率ゐ、五月に大孤山に上陸し、第一・二軍の間を連絡して北進した。（四）乃木大將は第三軍を組織して旅順に向ひ、（五）陸軍大將野津道貫も第四軍を組織し、拓木城を陷れて北進した。（六）陸軍大將大山巖は、六月二十二日に滿洲軍總司令官の命を受けて諸軍を統べ、連戰連勝、兵氣が頗る揚つた。

クロパトキンは露軍の形勢の日に悪いのを見て、我が軍を逆擊する策を定め、大いに兵備を修め、我が軍と遼陽に戰つたが、激戰數日、遂に支ふることが出來ず、九月四日に遼陽を棄てゝ北走した。ついで十月に入り、兵を整へて再び來襲したが、我が軍の爲に擊退されて奉天に至り、更に本國からの援兵を合せて南下し、また沙河附近の戰に大敗した。

沙河會戰後は、寒氣が強くなつた爲に、日露軍は渾河を隔てゝ對陣した。クロパトキンは六十萬の兵を整へ、我が第三軍の北進前に南下して、連戰の恥を雪がうとする策を講じた。然るに我が軍は、これを奉天に包圍全滅させる策に出で、第一軍は敵の右翼から進み、第二・四軍は敵の左翼及び正面から進み、第三軍は迂回して敵の後方を脅かし、全軍四十萬が三面から總攻擊を開始したので、明治三十八年（西紀一九〇五年）三月十日、遂にクロパトキンは大敗して北走した。この奉天會戰に於ては、露軍の捕虜四萬餘、遺棄死體二萬六千、負傷者九萬に達した。

クロパトキンは、斯樣に日露戰爭に於ては大敗したが、大正三年（西紀一九一四年）に世界大戰が起るに及び、東部戰線に出征して戰功を樹てた。併し露西亞革命の爲にニコラス二世が退位するに至つたので、クロパトキンも田舍に退き、大正十四年（西紀一九二五年）に歿した。

くわかたけいさい
鍬形蕙齋

名號 通稱を鍬形三治郎といひ。號を蕙齋・杉阜といふ。北尾重政とも稱した。

事蹟 北尾重政に浮世繪を學び、青本類の挿繪を描いたが、後には狩野派の畫風を慕ひ、また光琳派の筆意を體得し、更に谷文晁に學んで畫風を改めた。特に淡彩色の略畫に長じ、題材を人物・鳥獸に採り、輕妙滑脫に描成したが、繪本で最も行はれたものには都の錦・諸畫苑・諸職畫鏡・諸職雛形繪手本・江戸賞景及び種々の略畫式があり、外に日本全圖を作つて非凡の畫才を發揮して居る。寛政八年の秋から青本類に筆を絕ち、畫風が一變するに至つたが、後年には紹眞と改名し、細井侯のお抱繪師となつた。蕙齋は人と爲り磊落で、また好古癖があり、彼の太田南畝・屋代弘賢・中村伊庵・狩谷棭齋らと親交した。蕙齋は始め江戸小網町に住み、後に玉ケ池に轉じたが、文化七年三月二十一日に歿した。年齡は詳かでない。門人に北尾美丸（花隨齋）があり、二世重政を名乘つた。

けいくわうゐんせいじゅん
慶光院清順

系統 清和源氏山本義定の裔義里の女で、伊勢國度會郡宇治町慶光院の尼僧である。

事蹟 慶光院は禪宗臨濟宗の尼寺である。初祖を守悅といひ、十八歳の時に尼僧となつたが、戰國時代の事とて、伊勢神宮の神領は武士に押領され、殿舍は朽損して居たので、守悅はこれを見て慨歎し、諸國に勸進して造營した。二世を智珪といひ、三世は卽ち清順である。

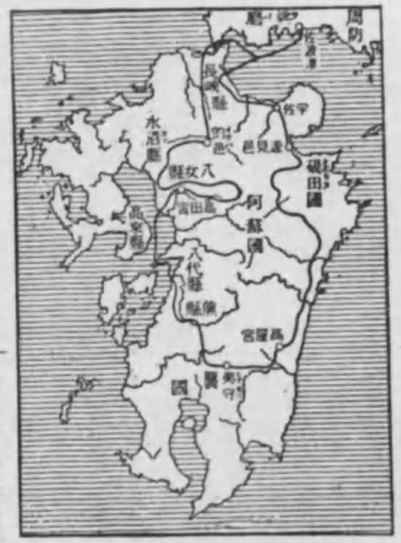
清順は智珪の弟子で、宇治畑町の樽天堂の穀屋に宿し、守悅の遺志を繼ぎ、神宮復興を企て、天文十八年、諸國に勸進して宇治橋を造替した。二十年、後奈良天皇は其の功を賞して倫旨を下し、居室に慶光院の號を聽され、上人號を賜はつた。ついで外宮の長官松本備彥に設き、諸國に勸化し、淺井・朝倉・武田・北條・齋藤・尼子らの諸豪族からも賽金を得て、正親町天皇の永祿六年九月、外宮の正遷宮をも行はうと企てたが、永祿九年四月、病を以て宇治に寂した。明治十八年十一月、明治天皇は神宮御參拜の際、特旨を以て清順に從三位を贈られた。

けいかうてんのう
景行天皇

名號 御名を大足彥尊といふ。大足彥忍代別天皇とも稱する。

系統 垂仁天皇の第三皇子で、御母を日葉酢媛命といふ。第十二代の天皇である。

事蹟 纒向の日代宮で卽位された。十二年に九州の熊襲が叛いたので、天皇は親征して日向に六年ほど駐られ、十七年には肥筑の地方を巡視し、十九年に始めて歸京された。二十七年には熊襲が再び叛いたので、日本武尊をやつて、これを平定させられた。同二十七年には、武内宿禰をやつて北陸及び東北諸國を巡視させられた。五十三年には、天皇が親しく東國を巡幸されたが、ついで御諸別王を遣つて、其の地方を治めさせられた。また甲斐・上毛野・那須・吉備・穴門・阿武・葦分などの諸國に、新に國造を封ぜられ、地方政治に盡された。晩年には近江國高穴穗宮に移られ、六十年十一月十四日に崩御された。聖壽百六歳である。大和國磯城郡柳本村盡谷山邊道上陵に葬る。



（景行天皇西征順路圖）

けいたいてんのう
繼體天皇

名號 御名を男大迹といふ

また彥太尊とも稱する。

系統 應神天皇五世の孫である。御父は彥主人王で、御母は垂仁天皇七世の孫振媛である。

事蹟 武烈天皇の崩後、皇嗣がなかつたので、大連大伴金村は相議して、男大迹王を迎へる事に決した。王は越前の高向邑に居られたが、群臣に迎へられて河內の樟葉宮に移り、金村の獻ずる神器を受取つて卽位されたが、これが繼體天皇である。金村及び物部麁鹿火・巨勢男人らが政治に參與した。

卽位の五年十月、都を山城の筒城に遷されたが、六年十二月、金村は百濟の請を入れ、任那の四縣を百濟に割與したので、任那は我を怨み、朝鮮半島が愈々亂れた。十二年三月、また都を山城の乙訓に遷されたが、十六年には樂人司馬達等が來歸して、大和の坂田原に堂を建て、佛像を安置して禮拜した。朝鮮半島では、日本府の威令の及ばないのを機として、新羅は再び任那を侵略したので、二十年六月、近江毛野を派遣されたが、途中、筑紫の國造磐井は新羅と結んで之を防害した。よつて二十二年十一月に、麁鹿火を別軍として派遣し、磐井を討たしめられた。斯くて毛野は兵を率ゐて渡鮮したが成功せず、半島は愈々多事となつた。天皇は二十年九月に、更に都を磐余玉穗宮に遷されたが、二十五年二月、聖壽八十二歳で崩ぜられた。崩年には異說がある。天皇は韓土の多事な時代に在位し、心を民政に注ぎ、農桑を奬勵し、治績の見るべきものがあつた。攝津國三島村三島藍野陵に葬る。

けいちゆう
契冲

名號 本姓を下川といひ、字を空心といふ。

系統 下川元全の子である。

事蹟 寬永十七年、攝津國の尼ケ崎に生れた。五歳の時、母から百人一首の和歌を口授されたが、旬日で能く記憶したといふ。十一歳の時、同國の妙法寺に入り、丰定密師に就いて學び、十三歳の時、薙髮して高野山に登り、東室院左學頭快賢に謁し、熱心に其の教を受け、五部灌頂詳可兩部大阿闍梨の位を授けられた。

寬文二年、檀越の請により、攝津生玉曼荼羅院に住んだが、其の城市に隣接するを厭ひ、驛間に二首の和歌を題して志を寓し、飄然として四方を周遊し、後に和泉國久井里の幽奇な山水を愛し、こゝに滯留すること數年に及んだ。

契冲は三藏・悉曇に精通し、諸宗章疏を窺ひ、また十三經史・文選・白氏文集の類を涉獵した。名が漸く聞え、學ぶ者が日に多くなつたので、攝津國池田川の側に屛居し、日本紀以下の國史・舊記を讀み、專ら倭歌を好み、博く歌書を採つた。延寶八年、丰定密師は入寂するに際し、遺命して契冲を住持にした。契冲は好まなかつたけれども、老母が在つたので、已むを得ず此の地に住み、妙法寺の傍に一室を構へ、母を移して孝養した。

時に德川光圀は、萬葉集の善註のないのを遺憾に思つて居たが、遙に契冲の聲名を聞き、招聘して其の事を託しようとした。固辭して赴かなかつたけれども、而も光圀の志に感じ、萬葉代匠記二十卷・總釋二卷を作つて獻じたが、光圀は契冲の卓見を嘉し、白金千兩絹三十匹を贈與した。ついで古今餘材抄を著したが、光圀はこれを見て、一度面會したいと希望したが、契冲は辭して從はなかつた。

旣にして母が歿したので、院を退いて難波の高津に卜居し、室を圓珠庵といひ、俗客を謝絕して清修自適した。光圀は粢資を施して書信を通じたが、元祿十四年正月二十五日、六十二歳で入寂した。圓珠庵の後方に葬る。明治二十二年二月、國學中興の功を追賞し、

金百圓を圓珠庵住持上田昭遍に賜ひ、二十四年十二月、更に正四位を追贈された。契冲の著書には萬葉集代匠記・萬葉總釋・古今集餘材抄・百人一首改觀抄・勝地吐懷編・勢語臆斷・源注拾遺・和字正濫鈔・厚顔抄・漫吟集・河社などがある。

げんしやうてんのう
元正天皇

名號 初名を飯高といひ、後に氷高と改められた。諡を日本根子高瑞淨足姫尊といふ。

系統 天武天皇の御孫である。草壁皇子の皇女で、御母は元明天皇である。文武天皇の御姉で、第四十四代の天皇である。

事蹟 白鳳十年に降誕された。和銅八年九月、元明天皇の譲を受けて即位し、此の年を以て靈龜元年と改元し、三年十一月にまた養老と改元された。先に文武天皇の朝に制定された大寶律令は、尚ほ修正の必要があつたから、養老二年、元正天皇は藤原不比等らに命じて刊修させ、律十卷十二篇、令十卷三十篇とされたが、これを養老刊修の律令と稱する。律は罪を判決する刑法で、令は政務に關する種々の制度・規則である。また天皇は舍人親王（天武天皇の皇子）及び太安麻呂に命じ、漢文で日本書紀を撰ばせられたが、養老四年五月に成就した。これは神代から持統天皇の朝に至る迄の史書で、紀三十卷と系圖一卷とから成つて居るが、系圖一卷は佚して傳はらない。天皇は在位九年で、聖武天皇に讓位し、天平二十年四月二十一日、聖壽六十八歲で崩ぜられた。大和國添上郡奈良市大字奈良坂奈保山西陵に葬る。

ゲンスボロー
Gainsborough

事蹟 十八世紀に於ける英國の畫家である。西紀一七二七年（我が中御門天皇の享保十二年）に、サッフォークの田舍町に生れた。十五歲の時に倫敦に出で、畫道の修業に從つたが、森野・小川に聞繞された故鄕の風光を忘れ難く、十八歲の時に歸鄕し、翌年、妻を迎へて居をイプスウッチに定め、畫家としての生涯を始めた。彼はレイノルヅと相並んで時代を風靡し、殊に肖像畫を以て、所謂英國派を開き、才氣に任せて颯爽たる健筆を揮つた。彼は故鄕の風光を愛し、多くの風景畫をも描き、後進の畫家に良影響を與へたが、人物畫の方が優れて居た。遺作としてはシドン夫人像などがある。歿したのは一七八八年（我が光格天皇の天明八年）である。

げんそうてんのう
顯宗天皇

名號 御名を弘計王といふ。また來目稚子・袁祁之石巢別命とも稱する。

系統 履中天皇の御孫である。市邊押磐皇子の皇子で、御母は饒臣の女荑媛である。第二十三代の天皇である。

事蹟 雄略天皇が市邊押磐皇子を殺されたので、弘計王は兄の億計王（仁賢天皇）と共に遁れて、播磨國明石郡縮見屯倉首忍海部細目の家に隱れられた。清寧天皇の二年正月、播磨國司伊昧來目部小楯が此の地を巡視し、細目の家に宿した時、弘計王は酒宴の席で起つて舞ひ、市邊押磐皇子の子である由を歌つた。小楯は驚いて清寧天皇に報じたが、天皇には皇子がなかつたので、大いに喜んで二王を迎へ、億計王を皇太子とされた。天皇の崩後、億計王は弘計王の功績を稱へて天位を勸め、兄弟相讓つて即位されなかつたので、皇姉飯豐姫が暫く政を攝せられた。而して億計王は固辭して從はなかつたので、遂に弘計王が即位された。これが顯宗天皇で、大和近津明日香八釣宮で政を執られた。天皇は久しく民間に在つて、百姓の疾苦を知られたので、深く心を民政に留め、孤寡を賑恤し、譜役を省かれ、數年を經ない中に百姓が殷富となつたが、併し在位僅に三年に過ぎず、聖壽三十八歲で崩ぜられた。大和國北葛城郡下田村大字北今市傍岳磐坏丘の南陵に葬る。

げんみやうてんのう
元明天皇

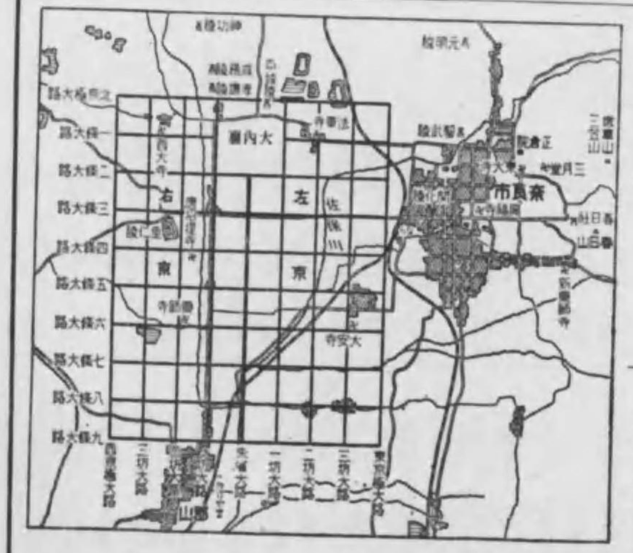
名號 御名を阿閉皇女といふ。諡して日本根子天津御代豐國成姫天皇といふ。

系統 天智天皇の第四皇女で、御母は蘇我石川麻呂の女蘇我嬪である。草壁皇太子の妃となり、文武天皇・元正天皇を生まれた。第四十三代の天皇である。

事蹟 慶雲四年六月、文武天皇が崩ぜられ、皇子（聖武天皇）が未だ幼少であられたから、遺詔によつて即位された。はじめ藤原宮に在り、和銅元年に平城（奈良）遷都の策を決し、九月造平城宮司を置き、稍々經營が出來たので、三年三月に遷幸された。平城京はこれであつて、爾來、光仁天皇に至る七代七十餘年の都となつたのである。

（和銅開珎）

これより先、武藏國から和銅を獻じ、また諸國からも時々銅を出した。天皇は大いに喜ばれ、元を改めて和銅と稱し、銅錢を鑄造させられたが、これを和銅開珎といふ。和銅四年太安麻呂に詔して、稗田阿禮の記誦する古傳を撰錄させられたが、五年の後に成つた。これを古事記といふ。和銅六年には諸國に命じて、國々の山川・地味・產物・傳說などを記して上らせられた。これを風土記といひ、我が國地理書の始である。今日に殘存して居るのは常陸・出雲・播磨・肥前・豐後の五風土記である。



（平城京圖）

和銅七年に位を皇女元正天皇に讓り、養老五年の十二月四日に崩ぜられた。聖壽六十一。大和國奈良阪奈保山東陵に葬る。

けんれいもんゐん
建禮門院

名號 平德子といひ法名を眞如覺といふ。

系統 平淸盛の二女で、母は贈左大臣時信の女平時子である。後白河天皇の妻子となる。

事蹟 承安元年十二月二日從三位に叙せられ、同二十六日高

倉天皇の女御となり、同二年二月十日中宮に進んだ。時に年十六歳である。治承二年十一月、言仁親王を生み奉つたが、これが安德天皇である。養和元年十一月二十五日、建禮門院の號を賜はつた。壽永二年七月、平宗盛に擁せられて西海に赴き、壇浦に敗れて入水し、源義經の兵に鈎されて捕へられ、義經の船に送致され、文治元年四月に歸京して吉田に着き、其の夜直ちに出家し、建保元年十二月十三日、五十九歳で薨ぜられた。山城國愛宕郡大原村の大原西陵に葬る。「にゐのあま・二位尼」の項を參照されたい。

こ・かう・くわう

ごいちでうてんのう
後一條天皇

名號　御名を敦成（あつひら）といふ。

系統　一條天皇の第二皇子で、御母は藤原道長の女で、上東門院彰子である。第六十八代の天皇である。

事蹟　長和五年二月、藤原道長の盡力によつて卽位された。時に御年九歳である。左大臣道長は外戚の故を以て政權を握り、專恣が益々甚だしくなつたが、寛仁元年、攝政を子頼通に讓り、己は太政大臣となつた。頼通は寛仁三年に關白となつたが、刀伊の入寇と平忠常の反とは、此の朝に起つたので、頼通の職にある時であつた。天皇は在位二十年、曾て大江擧周に學ばれ、頗る文藻があり、また人民を慰められた。長元九年四月十七日、聖壽二十九歳で崩ぜられた。京都市上京區吉田町善提樹院陵に葬る。

こいでだいすけ
小出大助

事蹟　寛政年代に於ける德川幕府の臣である。職務に精勤した爲に隱役から出世し、代官・郡代となり、到る處に善政を行ひ、住民中には大助の德を慕ひ、祠を建てゝ祀るに至つた。斯くて昇進して江戸城二の丸の留守居役になつたが、大助の妻ゑちは、貞性貞淑で、よく夫に仕へ、舅姑を大切にし、子女の教養に盡力し、禮節儉素を守つて家政を整へた。大助が多年劇職を完ふしたのは、妻の内助の功が大である。

こいでつばら
小出粲

事蹟　石見國濱田藩士松田三郎兵衛の四男で、天保二年八月江戸に生れ、少壯より學藝を勵み、特に寶藏院流槍術の皆傳を受けた。二十歳にして小出家の養子となり、後に藩邸の家令となつた。明治十年、宮内省文學御用掛となり、二十四年、吉野京都行幸に供奉し、ついで御歌所主事となり、多少新味ある自由輕快な和歌をよんだ。四十一年、七十六歳で歿した。

かうあんてんのう
孝安天皇

名號　御名を日本足彦國押人（やまとたらしひこくにおしひと）尊といふ。

系統　孝昭天皇の第二皇子で、御母を世襲足媛（よたらしひめ）といふ。第六代の天皇である。

事蹟　孝昭天皇の三十九年に降誕され、六十八年正月に皇太子となり、八十三年八月に天皇の喪にあひ、翌元年正月に卽位された。此の年の八月に、先帝の皇后を尊んで皇太后と稱せられた。皇太后と稱する事の初めである。二年十月、都を大和國葛城上郡室地（むろのち）に遷し、秋津島宮で政を執られたが、在位百二年、聖壽百三十七歳で崩ぜられた。玉手丘上陵（たまてのをかのうへの）に葬る。

くわうかくてんのう
光格天皇

名號　御名を兼仁といひ、祐宮と稱する。

系統　東山天皇の曾孫閑院宮典仁親王の第六王子である。御母は成子内親王である。第百十九代の天皇である。

事蹟　安永八年十一月九日後桃園天皇の崩御に際し、未だ儲位が定らなかつたが、關白九條尚實は、遺詔を奉じて兼仁を迎立した。翌九年十二月四日に卽位されたが、これが光格天皇で、時に御年十歳である。

天明八年正月、京都に大火があり、寺社・邸第・民屋の類燒が殆ど二十萬に及び、皇居もまた炎上したので、天皇は聖護院に遷御し、以て假皇居とされた。時に將軍德川家齊は尊王の志があり、老中松平定信を皇居造營の總督とし、諸大名を役して日夜工事を急ぎ、寛政二年に落成したが、其の結構は悉く古制に則り、宏壯輪奐を極めた。天皇は叡感淺からず、宸筆の御製を家齊に賜はり、厚く賞せられた。

其の御製は、「遠慕周文囿、不レ羨

（光格天皇）

漢武臺、舊章一是率、新樂本非レ催、百工忽告レ諫、整駕自レ東回、拭レ目九重裏、九重實美哉、兩殿應二現短一、四門總崔嵬、燕雀繞レ簷集、櫻橘挾レ階栽、豈其爲二逸豫一、講レ禮共徘徊、委レ佩群僚會、將レ幣九州來、素心既已定、起臥感二鹽梅一、欣然歌思勤、乙夜萬言裁」といふ詩である。

天皇は在位三十七年で、文化十四年三月二十二日、仁孝天皇に讓り、櫻町殿に遷御され、天保十一年十一月十五日、聖壽七十歳で崩ぜられた。京都後月輪陵に葬る。

ゴーガン
Gauguin

事蹟　ポール＝ゴーガンは十九世紀に於ける佛蘭西後期印象派の畫家である。西紀一八四八年（我が孝明天皇の嘉永元年）に生れた。元來、巴里の銀行家で、傍ら印象派の美術を研究して居たが、後には印象派に慊らず、「印象主義者は、目に見える處のみを探して、思想の神祕的中心を探さないから、科學的理性に陷るのだ。純粹に科學的で、全然驕奢で、そして純粹に物質的な藝術には、思想は存在しない」といひ、新しい精神的領域を展開し、精神的裝飾美の表現に力めた。後には南太平洋の樂園といはれて居るタヒチ島に渡つて、新しい土地を開拓した。彼の繪には、土人を題材にして描いたものが多く、色彩も豐富で、原始的な、夢想的な點がある。後の美術批評家は、セザンヌ・ゴーガン・ゴッホを後期印象派の三大巨匠といふ。

くわうきよくてんのう
皇極天皇

名號　御名を寶皇女といふ。天豐財重日足姫天皇とも稱する。重祚して齊明天皇といふ。

系統　敏達天皇の曾孫である。御父は茅渟王で、御母は吉備女王である。第三十五代の天皇である。

事蹟　最初、用明天皇の孫高向王に嫁して漢皇子を生み、後に舒明天皇の皇后となられた。舒明天皇の崩後、中大兄皇子（天智）・大海人皇子（天武）が幼少であ

られたから、卽位して第三十五代の天皇となり、小墾田宮に居し、後に飛鳥板蓋宮に遷られた。時に大臣蘇我蝦夷及び蘇我入鹿が政權を專らにし、其の威權は朝野を風靡した。中大兄皇子・中臣鎌足はこれを慨し、四年六月、三韓貢進の日に、大極殿で入鹿を誅し、蝦夷もまた誅に伏した。四年六月十四日、位を孝德天皇に讓られたが、孝德天皇の崩後、重祚して齊明天皇となられた。「さいめいてんのう・齊明天皇」の項を參照されたい。

かうけんてんのう　孝謙天皇

名號　御名を阿閉（阿倍）といひ、法名を法基尼といひ、高野姫尊・高野天皇とも稱する。

系統　聖武天皇の第二皇女で、御母は光明皇后である。第四十六代の天皇である。

事蹟　天平二十一年七月に卽位された。天皇は藤原仲麻呂（不比等の孫）を信任し、在位十年、仲麻呂の勸めにより、天平寶字二年に位を淳仁天皇に讓り、薙髮して尼となり、自ら太上天皇（上皇をいふ）となつて政を執られた。其の後、上皇は仲麻呂を寵し、姓名を惠美押勝と賜はつた。押勝は頗る專恣を極めたが、僧道鏡が用ひらるゝに及び、之を怨んで叛を謀り、藤原豐成の爲に征せられた。

ついで上皇は淳仁天皇を廢して淡路に遷し、自ら重祚して第十八代稱德天皇となられた。天皇は厚く道鏡を信任し、太政大臣禪師に任ぜられたが、遂に法王の位を賜はり、恣に政を執り行ふ樣になつた。時に太宰主神習宜阿曾麻呂は道鏡に媚び、宇佐八幡の神託と稱し「道鏡をして皇位に卽かしめたまはゞ天平泰平ならん」と奏上した。よつて天皇は和氣清麻呂を宇佐に遣はし、更に神託を受けさせられた。清麻呂は宇佐から歸還し、「我が國は、開闢以來君臣の分定まれり。未だ臣を以て君とせることあらず。天日嗣は必ず皇緒を立てよ。無道の者は速に除くべし」と奏上した。道鏡は大いに怒り、清麻呂の名を別部穢麻呂と改め、官を奪つて大隅に流した。併し清麻呂の爲に道鏡の非望が挫け、我が國體は全きを得た。稱德天皇は在位五年、神護景雲四年八月四日、聖壽五十三歲で崩ぜられた。大和國生駒郡平城村高野陵に葬る。「わけのきよまろ・和氣清麻呂」、「だうきやう・道鏡」の項を參照されたい。

かうげんてんのう　孝元天皇

名號　御名を大日本根子彥國牽尊といふ。

系統　孝靈天皇の皇子である。御母は磯城縣主大目の女細媛である。第八代の天皇である。

事蹟　孝靈天皇の十八年に降誕され、三十六年正月に皇太子となられた。時に御年十九歲である。七十六年二月に父天皇の喪にあひ、元年正月に卽位し、四年三月（この三月は正月の誤であらうといふ說がある）に都を大和國高市郡の輕地に遷し、堺原宮で政を執られたが、在位五十七年、聖壽百十六歲で崩ぜられた。劒池島上陵に葬る。

くわうかうてんのう　光孝天皇

名號　御名を時康といひ、また小松帝とも稱する。

系統　仁明天皇の第三皇子で、御母は藤原總繼の女澤子である。

事蹟　天長七年に降誕され承和の始めに親王となり、十三年には四品に叙し、嘉祥元年正月には常陸太守となり、累進して一品式部卿になられた。元慶八年二月、陽成天皇の御病あり、太政大臣藤原基經に推されて、同月二十三日大極殿で卽位された。時に御年五十五歲である。六月に詔を發して、「百官の奏事は、先づ太政大臣基經に諮禀し、而して後に奏聞せよ」と仰せられた。此の時、未だ關白の名はなかつたけれども、基經は事實上の關白となつた。我が國に於ける關白の起源はこゝにある。

天皇は幼時から聰明で、好んで經史を讀まれたが、長じて容止が閑雅で、謙恭寬仁で、最も人事に長ぜられた。夙に廢儀曠典を復興する御志があり、卽位後屢々外廷で事を親裁ひ、御體卜及び芹川野遊獵、郡司詮儀を復興された。在位三年、仁和三年八月二十六日、聖壽五十八歲で崩ぜられた。山城國葛野郡花園村後田邑陵（小松山陵）に葬る。

くわうごんゐん　光嚴院

名號　御名を量仁といひ、法名を勝光智・無瓶といふ。

系統　後伏見天皇の第三皇子である。御母は左大臣藤原公衡の女で、廣義門院藤原寧子である。所謂北朝の初院である。

事蹟　後醍醐天皇の太子となられたが、元弘二年八月、天皇が笠置に遷幸されたので、九月、北條高時は量仁親王を擁立して天皇と稱した。これが光嚴院である。三年五月、高時が誅せられたので、後醍醐天皇は船上山から京都に入り、詔して光嚴院を廢せられた。光嚴院は後に薙髮して禪を修め、丹波の山中に常勝寺を創建し、僧侶と共に修行されたが、後村上天皇の正平十九年七月七日、五十二歲で崩ぜられた。丹波國北桑田郡山國村山國陵に葬る。

こうし　孔子

名號　名を丘といひ、字を仲尼といふ。

事蹟　西紀前五五二年（我が敏靖天皇の三十年）、魯の昌平鄉に生れた。昌平鄉は今の山東省曲阜縣の地である。當時、周の國勢は衰へ、諸侯の威權が盛んであつたが、孔子は三十歲にして學成るに及び、仁道を唱へ、堯舜を祖述し、禮樂を起して、周初の盛世を恢復しようとし、五十歲の頃、先づ魯に仕へて用ひられず、去つて齊・鄭・陳・蔡・宋の諸國に往つたけれども、また志を得ず、ついで魯に歸つて子弟を敎育し、易を傳へ、書經・詩經を整修し、春秋を作り、西紀前四七九年（我が懿德天皇の三十二年）の四月、七十三歲で歿した。門弟は三千人の多きに達したが、其の中で最も優れたのは顏淵・曾參・有若らの七十二人である。論語は曾參・有若が孔子及び其の高弟の言行を集錄したもので、此の大聖人の面影を窺ふことが出來る。孔子の敎は仁を本とするもので、これを儒敎といふ。其の後、孟子が出て此の敎を弘め、遂に儒敎は支那の政治・敎育の本となつた。

（孔子）

こうしうぜん　洪秀全

事蹟　支那の清朝時代に起つた長髮賊の巨頭である。廣東直花縣の人であるが、始め吏を志し、廣東で試に應じたけれども合格せず、失望して病を得たが、病中に上帝の默示を受け、妖魔を退け、民衆を救濟すべき使命を託せられたといひ、自ら基督の次弟であると稱して基督敎を說いた。其の最初の信徒に憑雲山といふ者が在り、廣西桂平縣紫荊山で上帝會を組織したので、洪秀全は此の

會を根據として、漸く勢力を張つた。

此の頃、宗教的色彩を有する叛賊が諸方に起り、殊に廣西地方は其の巣窟であつたが、清朝は上帝會にも糺彈の手を延ばした。於是、西紀一八五〇年六月（宣宗の道光三十年・我が孝明天皇の嘉永三年）洪秀全らは廣西省桂平縣金田村で始めて亂を起し、其の徒に髪を蓄へしめ、清の辮髪の風を除いた。元來、滿洲族の出である清の風俗では、男子は頭の周圍の毛髪を剃去し、中央に丸く之を存置し、辮んで後に垂れたが、これを辮髪といひ、漢族の嫌ふ所であつた。然るに洪秀全は、清朝に對して亂を起したので、清の風俗である辮髪を廢し、髪を長く延ばして結んだので、世に之を長髪賊といつた。

西紀一八五一年、洪秀全は自ら太平王（後に天王）と稱し、八月には進んで永安（廣西桂林道蒙山縣）を陷れ、國を太平天國と號し、進んで湖南に入り、翌年七月長沙を圍んだが、城が固くて陷らず、轉じて鄂州を取り、一八五三年一月には武昌を陷れ、更に楊子江を下り、同年三月に南京を陷れ、城地を固めて天京と改め、こゝを都と定めた。

南京占取の後、長髪賊は更に北上し、直ちに北京を衝かうとし、西紀一八五三年五月、安徽から河南に入り、轉じて山西を侵し、直隸に出て天津に迫つたが、官軍の爲に擊退されて志を達し得なかつた。これよりさき、宣宗に繼いで立つた文宗は、曾國藩に命じて長髪賊を鎮定させたが、曾國藩の弟曾國荃、部下の李鴻章、蒙古科爾沁の親王僧格林らは功があつた。斯くて一八六〇年からは米人ワルド（Ward 華爾特）が官軍を援け、また一八六三年からは英人ゴルドン（Gordon 戈登）が官軍を援けたので、長髪賊は各地に敗れ、退いて南京を死守し、食糧が盡きて人肉を食ふに至つたが、翌一八六四五月、洪秀全は毒を仰いで死し、三朝（宣宗・文宗・穆宗）十五年に亘る大亂が平定した。長髪賊の亂は、實に清朝に於ける最大の叛亂で、其の跳躍する所は十七省に及び、陷落した城地は六百餘城と稱せられて居る。

かうせうてんのう　孝昭天皇

名號　御名を觀松彦香殖稻尊といふ。

系統　懿德天皇の皇子で、御母は息石耳命の女天豐津媛命である。第五代の天皇である。

事蹟　懿德天皇の五年に降誕され、二十二年二月に皇太子となられた。三十四年九月に懿德天皇が崩ぜられたので、翌年の十月に天皇を葬り、翌元年正月に即位された。都を大和國葛城郡掖上に遷し、池心宮で政を執られたが、在位八十三年、聖壽百十四歲で崩ぜられた。掖上の博多山上陵に葬る。

こうせん　勾踐

系統　允常の子である。

事蹟　支那春秋時代の越王である。父王允常が吳王闔閭に破られて死んだので、勾踐は闔閭と戰つて父の仇を報いた。然るに闔閭の子夫差は、父の仇を報いようとし、三年の後、勾踐を會稽山（浙江省）に降した。よつて勾踐は范蠡を擧用して上將軍となし、苦心慘憺して會稽の恥を雪がうとし、夫差が北上して諸侯を黃池（河南省邱縣）に會するに及び、虛に乘じて吳を伐つた。夫差は急に南に歸つて越を防ぎ、後兩軍は屢々相戰つたが、勾踐は姑蘇城を圍んで夫差を殺し、遂に吳を滅ぼした。時に西紀前四七三年（我が孝昭天皇の三年）である。於是、勾踐は兵を率ゐて北上し、齊晉の諸侯と徐州に會し、周の元王の命を受けて霸者となつた。因に范蠡は勾踐を援けて復讐を謀り、遂に吳を滅ぼしたが、後に越を去つて齊に赴き、商人となつて陶朱公と稱し、大富豪となつたといふ。

ごうだてんのう　後宇多天皇

名號　御名を世仁といひ、法諱を金剛性といふ。

系統　龜山天皇の第二皇子である。御母は左大臣藤原實雄の女で、京極院佶子である。第九十一代の天皇である。

事蹟　文永五年六月に親王となり、八月に皇太子となり、十一年三月に即位されたが、これが後宇多天皇である。龜山上皇は院で政を執られたが、弘安四年蒙古入寇の際は、上皇は親ら石清水八幡宮に詣で、春日・日吉の兩社に行幸し、勅使を伊勢神宮に遣はし、宸筆の願文を捧げ、御身を以て國難に代へんことを祈られた。

後宇多天皇は在位十三年で、弘安十年十月に位を伏見天皇（後深草上皇の皇子熙仁親王）に讓り、嵯峨の大覺寺に居られたので、其の御子孫を大覺寺統といふ。伏見天皇は讓位後京都の持明院に居られたので、其の御子孫を持明院統といふ。

（後宇多天皇）

後宇多上皇は、德治二年に出家して法皇となり、常磐井殿で院政を執られた。法皇は夙に學問を好み、宏豐博識で、政體に練達し、佛典の奧義を極め、後三條天皇以後に於ける賢君の稱呼がある。外易花山院師信・乳夫吉田定房・萬里小路宣房らを任用して仁政を行ひ、また宣房の建議によつて文殿の聽訟に親臨され、定房を鎌倉に遣つて太政十條を協議された。院政五箇年の後、政を天皇に還し、元亨四年六月二十五日、聖壽五十八歲で崩ぜられた。山城國葛野郡嵯峨村大字上嵯峨の蓮華峯寺陵に葬る。「ふしみてんのう・伏見天皇」の項を參照されたい。

かうだろはん　幸田露伴

事蹟　名を成行といひ、慶應三年、江戸に生れた。夙に文學に志し、江戸文學から出發して、新しい傑作を出した。特に風流佛・五重塔の二作で名聲を博し、尾崎紅葉と相對して、明治文壇の明星と呼ばれ、小說の外に韻文・隨筆・考證などに達し、また博學で佛書に通じ、文學博士となつた。曾ては新聞記者をして居た事もあり、また京都帝國大學に教鞭を執つたこともある。小說・論文・隨筆・史傳などの著が多い。

かうとくてんのう　孝德天皇

名號　御名を輕といふ。また天萬豐日天尊とも稱する。

系統　御父は茅渟王で、御母は吉備姫女王である。第三十六代の天皇である。

事蹟　即位の後、始めて年號を立てゝ大化といひ、都を攝津の長柄に遷し、豐崎宮に居られた。我が國の上古には、朝廷の大官（大臣・大連など）や地方の豪族などが、土地・人民を私有し、また其の官職（臣・連・國造・縣主）は所謂世襲で、代々これを子孫に傳へてから、其の氏族は勢を增し、